カオス レギオン

聖戦魔軍篇

冲方 丁



富士見ファンタジア文庫

イラスト 結賀さとる

カオス レギオン
聖戦魔軍篇

銀髪の男の腕に抱かれ、女はまるで眠っているように見えた。

その胸から流れ出る血は、すでに勢いを失っている。

男は凄(すさ)まじい形相(ぎょうそう)でこちら——赤髪の男が手にした聖咎の剣(インドルガンツイア)を見つめた。血に濡(ぬ)れた剣は、二人を戻れない未来へと誘(いざな)ってゆくのだった……。

天界と堕界(だかい)を分かつ混沌(カオス)の大地、アルカーナ大陸。その地で、赤髪の黒印騎士(シュワルツ・リッター)ジークはある男を追っていた。名をドラクロワ。かつて理想を掲(かか)げ合い、共に戦った友。だが、今は倒すべき相手。二人の間に一体何が？　その決着とは？

一途(いちず)ゆえに切ない者たちの戦いが今始まる！　消せない絆(きずな)を賭けた、大軍勢バトル・ファンタジー!!　招け、《軍勢(レギオン)》!!!


聖戦魔軍篇
カオスレギオン
CHAOS LEGION
「黒印騎士団のジーク・ヴァールハイトだ。聖王と賢老院に呼ばれて来た」


「理想は失われていない。
外典のもたらす死の雷を受けよ……
真実をみせてやる……ジーク」


「大丈夫。どんなに傷ついても、私が癒してあげるから」

カオス レギオン

聖戦魔軍篇

893

冲方 丁

富士見ファンタジア文庫

136-1

口絵・本文イラスト　結賀さとる

目次

聖印歴

聖印歴〇〇一年	聖クレマチス一世、最初の聖印をアルカーナ大陸にもたらす。
聖印歴〇〇八年	聖クレマチス一世、死去。二百八十種の聖印を伝承された聖七師族により、聖オヴェリア教団が発足。
聖印歴〇二八年	聖クレマチスが設計したクレア大聖堂の、最後の塔が完成。
聖印歴〇二九年	聖オヴェリア教団を中心に聖法庁が開始。聖クレマチス一世を初代「聖王」とし、クレア大聖堂を抱く聖都ロタールを首長都市とする。
聖印歴一六五年	聖法庁の法律「大聖法典」をアルカーナ大陸全土に施行。
聖印歴一六七年	アルカーナ大陸全土の街道の整備が終了。
聖印歴一七〇年	アルカーナ大陸の六大穀倉地帯を結ぶ大道路の整備が終了。その全てが聖都ロタールにつながる。税制が統一され、聖法庁が名実ともに大陸の統治者に。
⋮	
聖印歴七九四年	聖法庁への大規模な叛乱がアルカーナ大陸全土に広がる。
聖印歴七九五年	聖法庁の「聖王」制度が事実上廃止される……

Prologue　聖史。思い出、そして始まり

友と呼ぶには、遠すぎた。
生まれも育ちも違った。考え方や感じ方さえ別だった。

聖印暦七七〇年　ラクロワ聖堂の後継者、ヴィクトール・ドラクロワ生誕す。

だがそいつといるだけで、喜びは倍になった。哀しみは半分になった。
互いに喜び合い、そして哀しみを分かち合った。

聖印暦七七一年　大陸北方の辺境都市にてジーク生誕す。

「主、汚れし霊に問いたもう。——汝の名は何か」

聖典の一節——黒印騎士団（シュワルツ・リッター）の由来とともに、肩（かた）に、ひやりとした感触（かんしょく）が来た。剣（けん）が当てられたのだ。儀礼用（ぎれいよう）の剣ではない。戦場のための剣——新たに与（あた）えられた自分の剣だ。

「彼、答えていわく——」

朗々（ろうろう）とした声がそこで区切られた。答えは、叙任（じょにん）される側が口にする段取（だんど）りなのだ。

それが、騎士（きし）となる叙任式での、最後の儀式だった。

ひざまずいた姿勢（しせい）で顔だけ上げると、剣を手にした銀髪（ヴァイスハーリッヒ）の貴公子の眩（まぶ）しい微笑（びしょう）が見えた。

友と呼ぶには、あまりに地位も名誉（めいよ）も違う、その男に向かって、

「〝軍団（レギオン）〟——我（われ）ら、大勢なるがゆえに」

赤髪（ロッターリッヒ）の兵士は、言った。

聖印暦七七二年　大陸北方で聖法庁に対する叛乱が起こり、七つの辺境都市が滅亡（めつぼう）す。
ジーク、流民（るみん）の手により救われ、都市を出る。

「ジーク・ヴァールハイトに、黒印騎士団（シュワルツ・リッター）の称号（しょうごう）を与える！」

銀髪の貴公子が声高（こわだか）に告げた。叙任式の主賓（しゅひん）である聖王と、軍団長（バタール）たち、そして、ただ一人の女性（じょせい）参列者から、静かだがはっきりとした承認（しょうにん）の拍手（はくしゅ）が送られる。

剣が、ひざまずく赤髪の兵士の肩から離れた。
今や騎士となったその手に、冷たく重々しい聖銀細工の剣の柄が、握らされる。
聖咎の剣――殺人を聖なる罪として許し、聖法庁の敵を独断で誅殺する権利と義務とを与える剣だ。それを授けられた者は、聖法庁の中でも数えるほどしかいない。
今や騎士となった赤髪の若者が立ち上がり、作法通り、その剣を構えてみせると、あまり多くもないはずの参列者達の間で、大きな拍手が起こる。が――
「俺の剣は、ずっと前からお前のものだ。こんな大げさな剣でなくても……ドラクロワ」
赤髪の騎士の口からは、不満げな呟きが零れ、銀髪の貴公子を苦笑させた。
「今この時、お前という軍団が真に誕生したのだ。ただ一人にして万軍たる、〈招く者〉が。少しは格好をつけろ、ジークよ。そら、シーラに笑われるぞ」
言われて目をやると、唯一の女性参列者が、手を叩きながら冴えるような微笑を送ってきている。それでも、憮然としたままでいる赤髪の騎士の傍らで、
「俺達三人で、変えるぞ」
銀髪の貴公子が、悠然と呟いた。
「俺達三人が、世界を変えるんだ」

聖印暦七七三年　ラクロワ聖堂、叛乱鎮圧の功績により、新たに北方の領地を獲得
滅亡した辺境都市からの流民の一部が、グノー峡谷に定住す。

「いいか。争いを無くすためには、敵をも救わねばならないのだ」
そんな途方もないことを、至って平然と口にするこの男は、いったい何者なのか——
痺れるような衝撃と感動が、その瞬間、一人の剣奴の運命を、変えた。
「私の名は、ヴィクトール・ドラクロワ」
男が、手を差し伸べてきた。貴族であれば触れるのも嫌うはずの、剣奴の自分に。
「私にはお前が必要なのだ。たった一人で万軍に匹敵する〈招く者〉の才能を持つ者が」

聖印暦七八四年六月　ラクロワ聖堂後継者ヴィクトール・ドラクロワ、聖騎士候補生
として初陣す——時に十五歳。
聖印暦七八四年七月　グノー峡谷のジーク、剣奴として初陣す——時に十四歳。
「全ての人々が王となるのだ」
その男は、言った。

「私が聖王の座を欲するとすれば、それを棄てるためだ。分かるか、ジーク」
「棄てるために、手に入れるのか……？　ドラクロワ？」
「そうだ。人々は、空白の王座を見ることで、自分こそが、自分の人生の王であることを悟るだろう。支配の時代は去り、独立と調停の時代が始まるのだ」
「争いを無くす、みなが王になる……。お前の理想は、本当に贅沢だな」
茶化すように言うと、男は屈託のない笑みを浮かべ、鷹揚にうなずいてみせた。

聖印暦七八六年二月　ヴィクトール・ドラクロワ、正式に聖堂騎士団員となる。
その配下に剣士ジークの名が見られる。

生まれも育ちも関係ない。理想という名の絆が全て——そう信じるだけでよかった。
一人の女性が、死の亀裂を走らせるまでは。

聖印暦七八六年十二月　〈銀の乙女〉のシーラ・リヴィエール、救護士長に就任。

目覚めると、女がいた。胸に、聖性を力とする〈銀の乙女〉の紋章をかけている。

負傷者用の幕舎に置かれた獣油ランプが、女の白い滑らかな頰に、夕焼けのような茜色の影を帯びさせていた。濡れたように艶めく蜂蜜色の髪から漂う、戦場にはおよそ無縁そうな甘やかな香りが、ジークの鼻腔をくすぐった。

身を起こすと、女の細い白花石細工のような手が、そっと肩に当てられた。

「私は、シーラ・リヴィエール」

女は、柔らかな力で、ジークを再び横たえさせると、

「休んで。〈癒す者〉としての私の仕事を、無にしないで。本当にひどい傷だったのよ」

一生忘れられそうもない、輝くような微笑みで、言った。

聖印暦七八八年一月　ドラクロワ、枢機武卿に就任。聖法軍の最大勢力となる。

「聖法庁が真に調停者となるには、今までのように武力で支配するだけでは駄目だ」

「枢機武卿になったばかりで、そんなことを言うやつはお前くらいだよ、ドラクロワ」

「なに、枢機武卿として当然の心構えさ。いいか、ジーク。争いを無くすためには……」

「――敵をも救う、だろう。お前の理想では、最後には剣も軍も要らなくなるな」

「その通りだ」

「お前は、王座を棄てるために、王座を手に入れるんだろう――聖王の座を」
「その通りだ、ジーク」
「なら……俺も、いつか剣を棄てるために、剣を振るうよ」
こんな事を平然と口に出来るようになった自分を、この男に見て欲しい気持ちで言った。
男は微笑してうなずき、その引き締まった腕が、心地よい暖かさで、肩に回された。

聖印暦七八八年四月　ジーク、黒印騎士団に就任。〈戦場の真理〉の称号を得る。

「英雄はいつでも多くの死者を後に棄てていく。だからせめて俺が葬ってやりたいんだ」
「その心が、お前を最強の〈招く者〉にしているのだ……ジーク。そのお前の優しさが」

聖印暦七八九年四月　大陸北方のラクロワ領周辺にて反聖法庁の勢力が連合す。

「私、いつも仲間外れみたい」
シーラが、笑いながら、いたずらっぽく言う。
「貴方達、本当に仲が良いんだもの。私が入れる隙間は、少しも無いのよ」

途端に、ジークもドラクロワも、本気で困ったように顔を見合わせ、黙ってしまった。
その様子に、シーラが、またくすくす声に出して笑った。

聖印暦七九〇年十一月　ドラクロワの指揮する兵団が、大陸北部にて大敗を喫す。

「謀られた——聖法庁の師族どもに……！」
かつて見たことのない悲痛な表情が、男の顔を覆い尽くしていた。
「私が愚かだった……。そのせいで、失ったのだ……十万の兵と、理想への階段を」
その言葉に、ジークの全身に火がついたような怒りが吹き荒れた。
「兵が死んだから理想が死ぬのか！」
咄嗟に、上官であり親友である男の胸ぐらをつかみ、叫んでいた。
「俺が軍団だ！　俺がまだ生きている！　お前の最強の軍団がまだ生きている！」
叫びながら、その目に涙が溢れ、ふきこぼれた。
「俺に命じろ！　理想のために戦えと、俺に命じろ！　ドラクロワ！」

聖印暦七九〇年十一月　反聖法庁勢力、撃滅さる。ドラクロワ、戦場となったラクロワ領は壊滅的な打撃をこうむる。兵と領土の大半を失う。

「聖法庁には、何か秘密がある。それが、理想を妨げ、押し潰そうとしている……」

そのとき、兵も領土も失った男の身に、灼熱のような怒りがみなぎり、

「敵だ……聖七師族も、聖法軍も……いや、聖法庁そのものが、敵なのだ！」

聞く者を総毛立たせる、深淵から響くような憎念の声が迸っていた。

聖印暦七九一年二月　クレア大聖堂にて、一部の者が、秘儀を濫用す。シーラ・リヴィエール、クレア大聖堂にて絶命。

聖印暦七九一年十一月　ドラクロワ、聖王にのみ閲覧が許された〈外典イザーク書〉を盗み出し、逃走す。ジーク、共犯の疑いで投獄される。

ドラクロワの腕に抱かれたシーラは、まるで眠っているように見えた。

しかしその胸から流れ出る血は勢いを失い、既に鼓動が止まっていることを告げている。

ドラクロワが、ゆっくりとこちらを向いた。

凄まじい形相で、ジークの手にした聖咎の剣を見つめた。
途端に、血に濡れた剣が、ジークの手の中で、耐え難い重さを生じさせた。
咄嗟に剣を握りしめ、その重さに堪えようとする自分が、悲しかった。
剣を棄てられない自分の手が、ひどく哀れだった。

聖印暦七九二年一月　ジーク、釈放される。
同年同月　　　　　　ジーク、逃亡したドラクロワ追討の勅命を受け旅立つ……

「理想は死んじゃいない……」
降りしきる雨の中、剣を手に、独り、ジークは呟いた。
「そうだろう……ドラクロワ」
その問いに答えるべき相手は、血と雨の煙の向こうに、姿を消していた。

第一章　堕界の使徒

「世に争いを起こさせる最も簡単な方法を知っているか、ジーク」

その男は、言った。

「固い絆に、亀裂を走らせることだ。人と人が争うのは、絆を失ったから……そうでなければ、争い合うことが、彼らにとって最後の絆だからだ」

1　聖印暦七九四年十二月一日——聖都ロタール

霧雨が、八重の城壁に囲まれた巨大な城塞都市を、銀のヴェールのように覆っている。
冬の雨期の明け始め、英霊祭が始まるこの日、あちこちで祈りが響く聖都ロタールは、聖法庁の総本山として威光を放つというより、柔らかな雨の中、静かに瞑想するようだ。
だが、そんな穏やかさを、退屈と感じてうんざりするものもいるようで、
「あー、やだやだやだ。辛気臭い雰囲気と雨ばっかの天気と暗い祈りの声って、つくづく

あたしの好みじゃないのよねー」
立ちこめる霧雨を吹き飛ばすように、明るくわめくものがいた。
「全部、揃ってるな」
ぼそっと、低い男の声がそれに応じる。
「アリスハートは、雨が嫌いなのよね」
少女が、くすくす笑って言った。
「そうよぉ。雨の滴が羽にまとわりついて、飛びにくいったら、もぉ」
明るくわめくものが、少女の肩にふわっと舞い降りる。掌ほどの大きさの、女性形をした、妖精だ。金髪金瞳、真っ白いドレスの背で震える羽の翅脈も、金に淡く輝いている。
「聖都の中心っていうから、どんな賑やかな所かと思ってたのにぃ」
「この中に入らせてもらえるだけでも、ありがたいことなのよ、アリスハート」
巨大な城壁を振り返って、少女が言う。都市を守る八つの城壁の中でも、最も奥にあるもの――聖都の中枢、聖王の所在地として知られるクレア大聖堂を、守護する壁であった。
その壁の門をくぐれるのは、それこそ聖法庁の中核に関わる者達だけである。けれども、そんな仰々しい城壁も、天空こそ故郷とうたうアリスハートには、無縁のようだ。
「ねえ、お祭りは？　来るときに、街で大勢の人が準備してたよぉ、ノヴィアぁ」

「遊びに来たわけじゃないのよ。ジーク様のお仕事で来てるんだから」
少女が、淡く澄んだ紫の目を細めて笑う。溌剌と束ねた栗色の髪についた水滴を払い、これから向かう聖堂に敬意を示すように、青い法衣の裾を整え、男の後を追って歩く。胸に、聖性を力とする〈銀の乙女〉の紋章を飾り、手には白木細工の短杖を握っている。杖は、聖印を刻まれた青玉のついた、聖道女の証したる宝杖であった。
聖堂に入ると、二人の門衛が、呆気に取られたように、この三人組を、見た。
特に、先頭の男の風貌に、門衛達が、揃って唖然となっている。
美貌と言っていい顔立ちを、男はしていた。その顔を、燃え立つような赤い髪が魅しく飾り、しなやかな肢体にまとうのは、ボロボロの白外套に、黒革の鎧、赤籠手と、実に殺伐とした戦闘衣裳である。それだけでもこの聖堂には似つかわしくない。その上更に、男が肩に担ぐ物に、門衛達の目が集まった。なんとそれは巨大な銀色の――
「……シャベルだ」
門衛の一人が、ぽかんと呟いた。
「黒印騎士団のジーク・ヴァールハイトだ。聖王と賢老院に呼ばれて来た」
男が、低く鋭い声で、無造作に告げるや、
「ジーク……〈戦場の真理〉？」

聖法軍でも高位の称号を意味する名に、門衛達が目をみはった。ジークが、シャベルの歯をくるりと回し、そこに刻まれた聖印を見せた。途端、門衛達は、咄嗟に姿勢を正し、おそらく生涯初めてであろう行為をした。シャベルに向かって、敬礼したのである。

「見慣れると分からなくなるけど……やっぱり、こいつの格好、変なんだねぇ」

アリスハートがしみじみ言う。門衛達がその小さな存在に気づいて、ぎょっとなった。

クレア大聖堂に、人間以外のものがやって来るなど、聞いたこともないからだ。

「お前も、変な目で見られてるぞ」

ジークが言う。ノヴィアが笑い、アリスハートが本気で怒ったようにわめいた。

「可憐な妖精の姿に驚いただけっ！　狼男と一緒にすんなぁっ！」

狼男とは、ジークの目が鋭すぎて狼みたい、というのでアリスハートが付けた渾名だ。

戦場に暮らす者特有の、怜悧で淡々としたその目が、繊細でさえあるジークの面立ちと、苛烈な戦場装束という、不釣り合いな二つの要素を橋渡しするようでもある。

「後ろの方々は……」

招聘者リストにジークの名を見いだした衛兵が、困惑を押し殺した顔で訊いてくるのへ、

「俺の従士だ」

「その妖精もですか？」

「従士じゃないが、偵察や伝令や、家事手伝いに使える」
「ははぁ……」
「そこっ、うなずかないっ！　あたしは単にノヴィアの友達で、戦ったり罠を張ったり逃げたりとかそういうのとは無縁の、好奇心旺盛なただの妖精っ！」
　わめき散らすアリスハートと、うろたえる衛兵達をよそに、ジークは、
「お前達は、控えの間で待っていろ」
　ノヴィアに言って、さっさと一人、慣れた足取りで聖堂の回廊を進んでいった。
　高位の聖職者や貴族たちが、歩みくるジークの姿にぎょっとして立ちすくむ様子に、
「あいつの方が、絶対、変」
　アリスハートが断言した。ノヴィアは穏やかに微笑んで、
「一度、お洒落な正装姿のジーク様も見てみたいな。きっと似合うもの」
「怖いもの見たさってやつねぇ」
　アリスハートは自分の言葉に、うんうん、とうなずき、
「でもさぁ、その格好でも、きっとシャベル担いでるよぉ、あの男」
　二人して、くすくす、いたずらっぽく笑いながら、客間に入ってゆく。
　客間に控える各領国の大使や、聖堂の管理者、正装の軍人などが、少女と妖精の二人づ

れに呆気に取られた顔になる。が、二人はむろん、彼らの視線を黙殺している。
ノヴィアは、部屋のソファに座るなり、両手で宝杖を握り、淡やかに澄んだ紫の瞳を、一心に部屋の壁へ向けた。その様子を察したアリスハートが、
「ノヴィアったらぁ、また、のぞき見しちゃってぇ」
他の者たちには何の事だか分からないことを言った。ノヴィアはちょっと頬を膨らませ、
「のぞきじゃないわ。従士として、主人の安全を確認する義務があるの」
「こんな場所で、どんな危険があるのさぁ」
「えっと……ほら、たとえば、ジーク様、お腹空いてないかなぁ……とか」
「どんな危険よ、それ。一緒につれてって欲しかったんなら、そう言えばいいのに」
「だって……聖王様の前までつれてってなんて、そんな我が儘言えないもの。いいの。ジーク様だって、私が力を使えば、すぐに気づくもの。のぞきじゃないもん」
その目は、何かを追うように動き、明らかに壁以外の何かをその視覚にとらえている。
「透視の力を使いすぎると、もう何も見たくなくなるくらい疲れるって言ってたのにさ」
「これも、万里眼を使いこなす修行なの」
ノヴィアは、穏やかそうな愛らしい面立ちに似合わず、案外、強情な素振りで言い、
「それに、疲れたら、この杖が、聖性を回復させてくれるもの」

杖の宝玉を、額(ひたい)に当ててみせる。宝杖(バストー)は、ジークの従士となってから半年後に、聖法(せいほう)庁(ちょう)の下部組織(そしき)である〈銀の乙女(おとめ)〉から正式に聖道女として認(みと)められ、授(さず)けられたものだ。

その宝杖(バストー)を握(にぎ)りしめるノヴィアの気持ちは、アリスハートには痛(いた)いほど分かっている。

一年前まで――ジークと出会うまで、ノヴィアは盲目(もうもく)だった。母から受け継(つ)いだ力が使いこなせず、目が見えなくなり、闇(やみ)の中をさまよっていたのである。そのノヴィアに光を与(あた)えたのがジークだ。ノヴィアにとってジークは太陽に等しい。ジークを見ることは、眩(まぶ)しい太陽を見上げて光の恩恵(おんけい)に感謝(かんしゃ)するのと同じなのだ。確(たし)かにのぞきではなかった。

「まぁノヴィアの場合、のぞくってよりも、見守ってるわけだからねぇ……」

アリスハートはそう納得(なっとく)しつつ、退屈(たいくつ)しのぎに客間を舞(ま)い飛び、辺境(へんきょう)に住まう妖精(ファー)など見たこともない聖法庁の高貴な客達を、大いに驚かせるのだった。

ジークは、王座(おうざ)の間に入り、ひざまずいていた。

大きな広間の壁を、聖法庁の始まりの神話を描(えが)いた壁画(へきが)が、飾(かざ)っている。

あるとき聖クレマチスが、神から聖印(ハイリヒ)を授かったのが、聖印暦の始まりである。

以後、様々な聖印(ハイリヒ)の力によって、不毛な荒野(こうや)だったアルカーナ大陸は、豊饒(ほうじょう)の地へと変わった。そしてその収穫(しゅうかく)を狙(ねら)って襲(おそ)いかかる蛮族(ばんぞく)を、聖クレマチスが聖印(ハイリヒ)を授けた九百人

の戦士が撃退したのであった。九百人の戦士は、死後も英霊となって聖法庁を守護しているという。人々は彼らを称え、豊穣と収穫を祝うため、毎年、英霊祭を行うのだ。
「初代聖王クレマチスから、天界の聖印二百種、堕界の聖印八十種を授けられた聖七師族が聖オヴェリア教団を作り……やがて、聖法庁が発足してから、七百年……」
王座にいる者の声が、広間に響く。聖王クレマチス十三世、当年七十二歳。いまだ矍鑠とした痩身、薄い水色の目を持つ細面に、聖王にしか伝授されない数々の秘儀を背負う、理知と慈悲の風格が漂っている。
「聖法庁の歴史において……かつて、このような事態は、幾らでもあった」
聖王の言葉に、広間に佇む十数人の、賢老院の老人達が、賛同の光を目にやどす。その、聖法庁の伝統と未来を支える老人達の一人が、ひざまずくジークに、言った。
「秘儀の力に狂う者が、何度となく聖法庁に争いと流血を招いたことは、歴史をひもとくまでもなく、この聖都を牢獄のように囲む八つもの城壁を見れば明らかである」
ジークは、片膝を屈し、頭を垂れている。騎士が剣をそうするようにシャベルを作法通り脇に置き、相手の威光に怖じける風もなく彫像のごとき静けさで床を見つめる様は、話に耳を傾けつつも、同時に深い瞑想の中にあるようだった。
「ヴィクトール・ドラクロワもまた、秘儀の力に狂った者の一人だ」

老人の重々しい断言にも、ジークは、ぴくりとも動かず、感情らしきものをまるで見せようとしない。そのジークに、他の老人達が、口々に言葉を発した。
「我らには、聖印の秘儀の力が正しく民衆に幸福をもたらすよう管理する義務がある」
「そのため聖道士、聖道女の位階を厳しく定め、力を持つ者達を統率しているのだ」
「なのに、資格も無ければ責任感も無い一般衆生に、聖印のもたらす力を、見境無く授けて回るドラクロワの行いは、それこそ狂気の極みといってよい」
「その狂気ゆえに、今、大陸各地で、陰謀と争乱が渦巻いていることは、そなたの三年に亘るドラクロワ追跡の報告にも、明らかである」
「かの者が、聖都に流血をもたらすのは時間の問題……」
「躊躇はならん。一刻も早く、かの者を誅殺せよ」
それらの言葉の後で、ふと、聖王が声を重くして、
「デュハンが、陥ちた」
そこで初めて、ぴくりとジークの背が反応した。空気さえ動かさぬ滑らかさで顔を上げ、幾千万の敵と相対してきた目を、聖法庁の最大権力者に向ける。歴史も政治も意義はなく、その称号通り、戦場の真理にのみ心動かされる者の目で、ジークは聖王の言葉を待った。
「明らかにドラクロワの手によってだ。あの歴史的な古都を陥落させても、軍略的には、

さして意味が無い……が、我らは二つの点でこの事態を憂慮する。一つは、ドラクロワが、デュハンを守護していた聖法軍の兵団を撃滅するだけの兵力を持つに至ったということ。今一つは、これが、伝統を破壊し、聖法庁の権威を脅かす行いであること……」

「伝統を破壊するためだけに、兵を動かす男ではありません」

淡々とジークが口にした。果たして聖法庁が始まってより十三代目の聖王はうなずき、

「ドラクロワの真の目的を探って参れ。可能であれば即、誅殺し、かの者が盗み出した外典イザーク書を取り戻すのだ。黒印騎士団ジーク・ヴァールハイトへの勅命である」

ジークが再び頭を垂れかけたとき、ふと、聖王が顔を巡らせ、あらぬ方を見た。

「ふむ……。そなたの従士、〈銀の乙女〉か。……名は、なんという？」

「ノヴィア・エルダーシャです」

「ほう、〈見守る者〉の称号を得ておるか。万里眼の使い手は、大陸でも数えるほどしかおらぬが……ふむ、透視の力以外に、他の力も帯びておるようだな」

聖王のおもてに、初めて、小さく微笑が浮いていた。

「見えぬはずの相手に見つめ返されて驚いておる……若いが、優秀な使い手だ」

賢老院も事態を理解したらしく、咎めるような視線が、一斉にジークに降り注がれる。

「恐らく主の身を心配しての行いであろう。一度目は咎めぬ。二度目からは許さぬ」

聖王の言葉に、ジークはさして悪びれた風もなく、淡々と頭を垂れた。
「ど、どしたの？」
あっ、と驚きの声とともに立ち上がったノヴィアに、アリスハートが慌てて訊いた。
「見られちゃった……。どうしようアリスハート。ジーク様、怒るかなぁ」
さっそく泣きそうになってノヴィアが説明すると、アリスハートは感心して、
「へぇえ。聖王様って、やっぱり聖王っていうくらいだから、何でも出来るのねぇ」
「そういう問題じゃないわよ。あ……ジーク様が戻ってくる。早く対策を立てなきゃ」
「対策って……素直に謝んなよぉ。偉い人をのぞき見したら、怒られるわよぉ、普通」
「のぞきじゃないもんっ。……そうよ。ジーク様は、きっと私が見ること、分かってらしたわ。それなのに事前に止めなかったジーク様が悪い！」
「ちょ、ちょっと、ノヴィア、それじゃ、責任転嫁も甚だしいってばぁ」
「分かってるわよ、そんなこと。ああ、こんなことで従士をやめさせられたら、どうしよう。そうなったら、野垂れ死んじゃうって叫んですがるのも手かしら」
「んなこと言ってる時点で野垂れ死ぬようなたまと違うわよ。ほんと狼男と旅するようになってから、ふてぶてしくなっちゃって。素直で純情だったノヴィアが懐かしいわ

……」

冗談半分、親心半分で嘆くアリスハートに、ふいにノヴィアが目を輝かせた。

「そうよアリスハート、それよ！」

は……？　と、アリスハートが呆気に取られるのをよそに、その宝杖を握りしめるや、

「頑張るのよ、ノヴィアちゃん！」

ノヴィアは、自分で自分に激励の声を放っている。かと思いきや、

「はいっ、頑張ります！」

更に自分で応える様子に、周囲の客達が、ますます奇異な目を向けてくるのだった。

そんな二人の掛け合いが、伝統ある聖堂の客間で繰り広げられている頃——

「ジーク・ヴァールハイト……所詮は、飼い主に置いて行かれた、哀れな飼い犬か……」

ジークが退室した途端、賢老院の一人が、遠慮のないことを言っていた。

「消えた飼い主を追うには適しているかもしれんが、最後の最後で、再び、元の飼い主に懐く可能性は、否定出来ぬな……」

「だが、ドラクロワの幻惑と罠を食い破り、追跡出来ているのはあの男だけだ。主を失った犬ならば、主に代わって命令を与えれば良い。喜んで従うのが猟犬の宿命よ」

「現在、聖法庁でただ一人の〈招く者〉とはいえ、もともとドラクロワめが飼っていた男

……嚙み合わせたところで、我らには何の損失も無い」
「それにたとえ元の飼い主に懐いたとしても、一介の兵士に、軍略を左右する力も無かろうて。だいたい、なんだ、あのシャベルは。貰い聖印を、あのような物に刻むとは」
「戦死者を埋葬するのが、優先任務だとぬかしおるそうだ。そんな者に〈戦場の真理〉の称号を与えた事自体、そもそも間違っておるのだ。ドラクロワめが……」
ジークの事を口の端にかける賢老院の様子を、聖王が、静かに眺めている。
その聖王の傍らに、ふと、上品な細面の老人が立ち、声を潜めて言った。
「私は、あのジークという男が恐ろしゅうございます。かつてドラクロワのもとで聖法庁最強の軍団と呼ばれた男……再びドラクロワの配下とならぬ保証はあるのでしょうか」
だが聖王は、静かに老人を見やって、言った。
「全ては、神の導き……黒き騎士が我らを裏切っても、ドラクロワ自身が彼を拒むであろう。かつての友ゆえ、その亀裂は深い……もはや争い合う事が、彼らの最後の絆なのだ」
ジークに、迷いはなかった。聖王や賢老院が権力の高みから自分を駒のように扱っていることは手に取るように分かったが、気にもしていない。むしろ彼らがジークの力を恐れるあまり、背後から攻撃してくる心配がない分、安心していられた。

ジークの立場はそれほど微妙だった。黒印騎士団として、聖法庁に害なす者を独断で裁く権利を与えられている一方、その栄誉を与えたのが、聖法庁の重要な秘儀を盗んで逃げた、ドラクロワという男なのである。ジークはその男の側近であり、親友だった。
そして今、改めてその男の追討の任を受け、ジークは毅然として大聖堂の回廊を戻った。
なぜこんな事態になったのか、その答えを今度こそ見つけに行くために。
もう三年も、その男を追い続けていた。今では全てが、遥か以前――ジークが、銀貨数枚で、戦場に売られた時から、始まっていたのだとさえ思うようになっていた。
かつてジークは戦災孤児として、人間の命以外、売るものの無いような貧しい里で育った。里で剣の技を叩き込まれ、十四歳で、剣奴として、とある兵団に売られたのである。
初陣で、生まれて初めて人を斬った時の怖さを、ジークはまだ覚えている。
斬るのが怖かったのではない。怖かったから、斬ったのだ。初陣で、無我夢中になって五人斬った。そして殺した相手の名前すら知らない事に、呆然となった。自分も同じように名もない存在として殺されるのを想像して涙が止まらなかった。
生き残ることが全てだった。戦場へ駆け込み、生きて帰る。そのために人の命を奪う。
その耐え難い矛盾を、他の兵達は「敵を斬る」という考え方で克服した。だが、ジークだけ、いつまでも「人を斬る」という考え方から、抜け出せないでいた。

死者の声が聞こえるのだ。それがジークに備わった、特殊な才能だった。戦場の無数の死者がジークに語りかけてくるとき、彼らは敵ではなく「人」だった。

ジークが初めて死者の声を聞いたのは、戦場に出る前——十二歳の時だ。相手は、里の同い年の友達だった。その友達は、剣の才能があったが運には恵まれず、病死した。

ジークにとっては、最も心許せる友達だった。彼は、なかなか剣が上達しないジークに、よく剣のこつを教えてくれた。二人で、共に助け合い、生き残ろうと、誓い合った。

彼は最期に、病床で、自分が使っていた剣をジークに渡し——その晩、息絶えた。

心が砕けそうな哀しみと心細さを味わいながら、ジークは、彼の分も生き残ろうと決め、彼の剣を使って、修練に励んだ。そして彼が葬られてからしばらく経った、ある日——

どこからともなく彼の声が聞こえてきたのだ。それは明確な声というより、彼の思いが直接、伝わってくるような不思議な感覚だった。怖くは無かった。彼が自分に語りかけてくれている心強さと喜びだけがあった。彼の魂はジークに様々な剣のこつを教えてくれた。まるで彼が実際に役立てられなかった剣の才を、全てジークに受け渡すかのように。

ジークは夢中で彼の声を聞き、みるみる剣の腕を上達させた。やがて戦場への旅立ちが近づいたある日——最初に聞こえたのと同じ唐突さで、彼の声は聞こえなくなった。

ジークの剣の腕が、いつの間にか彼の生前の才能を、上回っていたのだ。それで、彼が

安心して自分のもとを去り、天に還った——そう、ジークは静かな思いで納得した。
ジークは、彼の墓に形見の剣を埋め、彼に別れを告げ——戦場へ旅立っていった。
以来、ジークにとって、死者の声は、とても大切で有り難いものだった。戦場で遭遇した無数の死者の声は、どれも怨みに満ちていたが、ジークは彼らの声を真剣に聞いた。
彼らが最初に伝えるのは、名だった。彼らが最も安らぐのは、墓に彼らの名が刻まれるときだ。戦死者の埋葬は少年兵の仕事で、みな嫌がったが、ジークは率先して敵味方を問わず、多くの兵を葬った。一方で彼らもジークに大切なものを与えてくれた。戦場の地形や、敵の情報、戦況の変化——そうしたことがらをジークに教え、自分達の代わりに戦い、怨みを晴らしてくれ、あるいはただ生き残ってくれ、と訴えかけてきた。
そうした死者の智恵と思いを背負い、幾つもの戦場を生き延びた。やがて一年が過ぎる頃、ジークの「死の力」が噂になった。死神が取り憑いているとさえ言われた。
そんな噂を、ある時、戦場に視察に来た貴族や上官達が聞きつけ、ジークを呼び寄せた。
ジークの、戦場には似合わぬほどに整った顔立ちが、貴族達の目を惹いた。長い、燃えるような赤髪を頭の後ろで束ね、痩せて小柄な身に、そぐわぬほどの長剣を担ぎ、目には少年とは思えぬほどの鋭い光をたたえた、剣奴——それが当時のジークだった。
ジークは彼らの前で、死者の声がどんなものであるか、死者が何を願っているか、死者

が遺した智恵に従って考えれば、戦場の拡大がどれだけ無益か、など、淡々と話した。
返って来たのは、爆笑の渦だった。
貴族達は、ちっぽけな剣奴の話など、てんから信じてなかったのだ。全ては冗談として受け取られ、物笑いの種にされた。ジークはかつて味わった事のない屈辱と、死者を冒瀆する彼らへの怒りに震えながら、黙って立ちすくんでいた。——その場でただ一人、笑いもせず、真剣な眼差しで、ジークを見つめる青年に、気づかぬまま。
その青年の存在を、ジークが知ったのは、出番の終わった道化のように退席させられた日の、夜のことだ。長い銀髪に、白皙たる顔立ち。静かで強靭な理知を、氷のように澄んだ瞳にやどし、聖印の秘儀を身につけた聖騎兵の紋章を胸に抱く。——そういう、剣奴として戦場に売られたジークとは育ちも地位も違う、考え方や感じ方さえ別種の存在だった。
だが青年は、兵舎に入ってくるなり、いきなり熱のこもった声で、言った。
「私には、お前の才能が必要だ、ジーク」
怒りに震えながら毛布にくるまっていたジークには、またもや貴族が自分を馬鹿にしに来たとしか思えない。もう我慢出来なかった。自分と多くの死者を馬鹿にした事を、後悔させてやらねば気が済まない。怒りに任せて剣を抜き放つや、貴族達の前では出なかった悔し涙が、一気に溢れ出ていた。

だが青年は、剣を突きつけられながら、いきなり微笑んだ。目はあくまで真剣で、相手の思いを全て受け入れるような、見事なまでの微笑に、ジークは思わず見惚れてしまった。

はっと我に返って剣を下げ、慌てて涙を拭った。いったい何の才能かと問うと、

「――〈招く者〉」

青年が微笑の顔で告げた。まるで意味の分からぬ言葉だった。だがまさしくその一言こそ、ジークのその後の人生の始まりを告げるものだったのである。

「ジーク様っ、ご無事だったんですねっ！」

客間に入るなり、ノヴィアの涙まじりの歓声がジークを出迎えた。ジークは、かすかに眉をひそめ、宙に浮かぶアリスハートを見た。アリスハートも引きつったような笑みで、

「い、いやぁ、心配したよぉ、狼男ぉ……」

「私、ジーク様が無事に帰って来れるよう、お祈りしておりました。いざとなればいつでも力ずくでお助け出来るよう、準備万端整えていたところです」

ジークは、肩に担いだシャベルの柄を、こつこつと指で叩き、ふと、周囲を見やった。

「俺は、違う」

ジークを、力任せの直訴に来た無頼者と勘違いし、身構える衛兵達と、後ずさる客達に



向かって、淡々と告げた。
「私、もう純真無垢に純情な思いでジーク様を見守っておりました。決して悪気が……」
ジークは、そこで、ゆっくりとノヴィアに目を戻した。その真っ直ぐ相手を射るような眼差しに、途端にノヴィアが口ごもる。アリスハートも、思わず宙で身を固くした。
「聖王の顔を見たのは、初めてか？」
「……え？　あ……、はい」
「どう思う？」
「え……。あの……真面目で穏やかそうな人ですが、言ってることと考えてることが、全然違いそうな人だなって思いました。あんまり信用しない方が良さそうです」
なんとも――賢老院の面々に匹敵するほどに、遠慮のない口振りだった。
あまりに不敬な言葉に、思わず肩をいからせて目を吊り上げる衛兵達に、
「子供の言うことだ」
淡々と、ジークが声をかけて強引に宥め、
「だが……お前がそう見たのなら、恐らく、そうなんだろう」
肩を下ろしかけた衛兵達が、また目を剝くようなことを言う。
ノヴィアは、ちょっと面食らったようになって、

「あの、ジーク様、もしかして……私の感想が聞きたくて、わざと、見るよう、釘を刺さずにいたんですか」
「それが、〈見守る者〉としての、お前の役目だ」
「聖王様が、お気づきになって怒ることも、分かってらしたんですか」
「別に、それほど怒っていなかった」
完全に一枚上手を取って、平然とするジークに、ノヴィアはもはや言葉も無い。
一方、他の者達には、二人が何を言っているのかさっぱり分からない。もはや奇異を通り越して、異様なものでも見るような目で見送られながら、一行は部屋を後にし、
「やっぱり、裏の裏を読まなきゃ、駄目ね……修行が足りないわ」
「ああ……こうしてノヴィアが、どんどん変な方向に成長していくのよぉ」
ノヴィアの呟きに、アリスハートが、冗談よりも本気の割合が高そうな顔で、慨嘆した。

2　聖印暦七九二年十一月三日の記憶――ドラクロワ逃亡

「えっ、お祭りに行っていいのっ!?」
「出発は明日だ。それまで、自由にしていい」

アリスハートが喜びに目を輝かせる一方、ノヴィアはジークの表情をうかがうように、
「ジーク様は、どうされるんですか」
「俺は、用事がある。暗くなる前に、宿に戻れ」
「はい……ジーク様」
ノヴィアは、ジークの背が、雑踏の中に消えてからも、しばらく見守っていたが、
「私にだって……一人で、誰にも見られないでいたい時くらい、あるもの」
自分に言い聞かせるように呟き、ジークに向けていた視覚をそっと外した。

霧雨の下、聖都の内部にある小高い丘をゆくジークの脳裏を、追憶がよぎっていた。
〈招く者〉――それが、かつて、一人の青年が、自分に告げた言葉だった。当時は意味不明の言葉で、やはりからかわれているのかと思っていると、青年がこう訊いてきた。
「お前は、何のために戦っている？」
ジークは、ぽかんとなった。咄嗟に、色々な答えが駆け巡った。生き延びるため、金のため、いつか解放されて里に帰るため、死者の怨みを晴らすため……。だが一言で表現出来ず、戸惑ったように剣の柄を握りしめていると、青年がその剣を見やって、
「お前は、ずいぶんと人を斬るそうだな、ジーク」

ずばりと言った。ジークの中で反発が湧いた。何が悪い。それが仕事だ。そうしなければ生き残れなかった。憎くて斬ってきたわけじゃない。他にどうすれば良かったんだ……

「私も、大勢、斃してきた」

青年のその一言で、奇妙に怒りが消え、ずしりとした重みが、ジークの胸に生じていた。

青年もまた、ジークと似た葛藤を抱いているのだ。それが、たった一言で伝わってきた。

「お前は、お前と同じ境遇の者を、一人でも少なくしたいのだろう……」

図星だった。青年は、ジークの心を見抜いていた。ジークが敵を斬れば、それだけ里に金が払われる。金があれば里の孤児が、剣奴として売られる事もない。剣奴を一人でも少なくするためなら、どんな罪でも背負える、何千人でも斬れる……

「だが敵にも、お前と同じ剣奴がいる」

またもや図星だった。同じ境遇の者は、一目見れば分かる。だが互いに殺さねば殺される。同い年の兵を斬ることほど恐ろしく、辛いことはない。それでも自分は……

「剣が全てだと思うなジーク。そもそも、剣で何もかも解決するわけがないのだ」

青年は凄まじい事を言った。戦場で剣を全てと思わねば、何を頼ればいいのか。剣奴にとって、剣とは神だ。信仰の中心だ。その信仰を、青年は粉々に砕こうとしている。

思わず、ジークは剣を握る手に力を込めていた。単純な怒りとはまた違うレベルで、何

としてもこの青年を斬らねばならないのではないかという思いが湧いていた。だが——

「お前は敵味方を問わず、戦死者を葬るのだろう……。そんな兵は、他にはいない。お前になら、分かるはずだ。剣にのみ頼る限り、味方しか救えない。それが真理だ。いいか、ジーク。争いを無くすためには、敵をも救わねばならないのだ」

その言葉は、まさしく衝撃だった。敵をも救う——夢のような言葉が、その瞬間、ジークという剣奴の、剣が全てという信仰を打ち砕き、その運命を一変させていた。

「剣が全てではない。理想が全てだ。お前は、理想のために剣を握るべきだ、ジーク。今はまだ敵も味方も、私もお前も、手に、剣を握ったままだ。だが心まで剣を握るな。まず心に剣を手放させろ。そして、いつか、その手もまた、剣を手放す日が来ると、信じろ」

青年の苛烈な言葉とともに、ジークは「剣」という信仰が、たったこれだけの時間で、完全に失われたことを悟った。心細さと力強さが同時に湧き起こり、ジークはいつしか声を上げて泣いていた。初陣で斬った兵の名が口をついて零れ、自分が殺してきた者達の名が一人一人、呟かれた。大勢の死者の名を、祈るように唱えた。そして最後に、

「私の名は、ヴィクトール・ドラクロワ」

まるでジークの祈りを完成させるように、青年が、名乗った。

「お前が必要なのだ。たった一人で万軍に匹敵する、〈招く者〉の才能を持つ者が」

ジークは、青年の言葉を、もっと聞きたかった。青年が何者か、知りたかった。
「私は、理想を実現したい。この世から争いを無くし、みなが平等に暮らせるように」
そしてジークはそのときから、青年とともに長い道のりを歩き始めることとなった。
理想の実現という道を。ドラクロワが、ジークの敵となった、今でも――

クレア大聖堂が見晴らせる丘に、小さな聖堂があり、その裏手に、墓標が並んでいる。
ジークは、その墓の一つに静かな目を向け、佇んだ。異様な墓だった。墓石が砕け、土はくぼみ、まるでその下にあったものが、そっくり抜き取られたようにも見える。
「聖法庁の連中は相変わらずだが……命令は、俺が思っていたことと同じだった」
ジークは、砕けた墓石に向かって囁きかけ、
「俺は、あいつの本当の目的を知るために、あいつを追うよ……シーラ」
ふいに、霧雨が、冷たさを増すのを感じた。すぐに、過去の記憶が、雨をそう感じさせているのだと分かった。三年前のあのとき、雨はもっと激しかった。そして冷たかった。
ジークは、我知らず空を見上げ、霧雨の誘う追憶に、再び身をひたしていった。

剣だ。剣を握れ――

遠のきかけた意識を、その思いが、引き戻していた。
ほとんど本能的に、剣を持つ手に力を込めると、それで、更に意識がはっきりとした。
聖都の中枢を守る壁に背を預けたまま、痛烈な打撃のせいで立ち上がることとさえ出来ない。壁に叩きつけられた時に飛び散った血が、雨に流され、石畳に、赤い川を作っている。
その赤い川に立つ、優美な銀髪の貴公子の姿が、雨と血に曇る視界に、朦朧と映った。
「……古来より、聖法庁は多くの罪を、聖なる行いとして許してきた。お前のその聖咎の剣のように、殺人さえも、公然と許してきたのだ……ジークよ」
降りしきる雨よりも冷ややかな男の声が、耳に届いてくる。
「だが、もはや許されはしない。罪人は、償わねばならん……」
激しい稲光が天を裂き、轟きが天地を震撼とさせた。その一瞬の稲光に、ジークは、男が手にしたものをみとめ、愕然と目を見開いていた。
男は、右手に、剣を握っていた。冬の夜が、刃の形に凝ったような、漆黒の剣である。
だが、ジークに、身動きが取れぬほどの打撃を与えたのは、その剣ではない。男を追って駆けつけたジークに、突如、宙を、黒い稲妻が奔り、凄まじい勢いでジークを跳ね飛ばしたのである。その、黒い稲妻を発したものを、男は、左手に携えていた。
それは、分厚い、古い革張りの装幀をした、一冊の書であった。

――外典イザーク書！

ジークの脳裏を、その名が閃光のように走った。その書こそ、自分達二人にとって、かけがえのない女性が命を落とした理由そのものではないか。そう叫びたかった。なぜそんなものを盗み出したのか。なぜ今更こんなことをしでかすのか。疑念を、肉体が受けた打撃と、精神が受けた衝撃がないまざって、はっきりと言葉に出来ぬまま、

「私の行いの由縁が知りたくば、私を追って来い……ジークよ」

男が、言った。その途端、耐え難い悲哀が込み上げてきた。

俺を置いてゆくつもりなのか。俺に何も事情を教えぬまま、去る気なのか。

「理想は……俺達の理想は……」

やっと、ジークの口をついて出た言葉が、それだった。

「……理想は、真実とともに一度死に、生まれ変わる。お前が葬ったシーラもまた……真の解放を得て、甦る……」

「甦るだと……！」

ジークが愕然となった。そのとき一条の雷光が闇を引き裂き、激しい轟きが起こった。

「追って来い！　なすべき贖罪を教えてやる！　世界の真実を見せてやる、ジーク！」

雷閃の中に、怒りに奮える男の姿が浮かび上がり、そして、闇が全てを閉ざした。

必死に男の名を叫んだが、全てはむなしく、男は、雨と血の煙の向こうに消えていた。
それから、ジークは、剣を杖に、雨に打たれながら、必死の思いで、ここに辿り着いていたのだ。聖都ロタールの中で、彼女が好んで語らいの場とした丘――その片隅で、彼女の肉体は永久の眠りにつき、魂は安寧の中で旅立っていった。――そのはずだった。

シーラ・リヴィエール　聖印暦七七〇年三月生―七九一年二月逝　二十歳

自分が碑銘を彫り、棺を埋め、祈りを捧げた墓だ。それが、墓石は砕け、土は抉られ、棺の消えた暗い虚空が、ぽっかりと地面に空いている。その光景に、息が詰まるほどの衝撃に襲われた。暴かれた墓の前で喘ぎ、剣を握りしめ、雨の降りしきる天を仰いだ。
間もなく、そのジークを、親衛騎士団が捕らえた。ジークは無抵抗だったが、ドラクロワ共犯の疑いから拘束され、無実が認められたのは、長く激しい拷問の後だった。
釈放され、騎士の身分と〈戦場の真理〉の称号、そして聖咎の剣を再び返されたジークは、一つの勅命を与えられた。ヴィクトール・ドラクロワ――聖法庁に叛逆し、重要な秘儀書を盗み出した男の追討である。ジークはただ黙って受けた。勅命としてではなく、
「……あれから三年経った。いまだに、俺はあいつを追い続けている……」

追って来いという、男が残した言葉に応じるためであり、答えを得るために。
「今はもう、一つだけでいい。一つだけ、知りたいんだ……」
霧雨の降りしきる空に向かって、その問いを、囁いた。
「お前の理想は、まだ、生きているのか……ドラクロワ」

3　聖印暦七九四年十二月四日――デュハンへ向かう者達

「右のように思えるが……」
「うーん、あたし、左かなぁ……」
三つに分かれた道の前で、ジークとアリスハートが、それぞれ呟く。
「左の道の先に、街のようなものが見えます」
ノヴィアが言った。木々と山に遮られて見ることの出来ない向こう側のことである。
「チビの方が当たったか……」
「チビって呼ぶなっつのぉっ！　あたしはチビと違うっ、小さいだけっ！」
わめきたてるアリスハートに構わず、ジークは、ノヴィアの指示した道を進んだ。
「万里眼は、まだ使えそうか」

「しばらくは大丈夫ですが……この調子ですと、そのうち疲れが……」

戦乱から避難する人の群とすれ違うたび、嫌な予感はしていた。乗り合い馬車が途絶え、仕方なく徒歩で進んだのだが、道しるべが全て破棄されていたのである。

土地の者が地の利を生かす、戦場での常套手段だったが、不便きわまりない。近郊の領都が滅んだ今、しばらくは復旧の見込みもなく、ノヴィアの透視の力だけが頼りだった。

「馬に乗れば楽なのにぃ。なんで馬車ばかり選ぶのぉ。あんた騎士でしょ、一応ぉ」

「馬が、苦手でな」

「はぁ……確かに、乗馬が趣味って感じじゃないけどぉ。乗るくらいは……」

「乗馬は得意だった」

「……あら。じゃぁ、なんで苦手になったのさ」

「俺じゃない。馬の方が、俺のことを苦手になったんだ。よほど鈍い馬なら別だが」

はぁ……？　とアリスハートが首を傾げる。そのわけは、夕刻に、破壊された砦に入り、明らかとなった。何頭か生き残った馬が、折り重なって戦死した兵のそばで悄然と群れている所へ、ジークが歩み寄ったのだ。馬がびくっとなって一斉にジークを振り返った。ジークが立ち止まる。馬が、蹄を鳴らしながら、じりじりと後退する。そしてジークが僅かに身動きするや、荒くいななきの声を上げ、一頭残らず走り去っていってしまった。

「そういえば、馬は、堕気に敏感だと聞きます……」
ノヴィアが言った。アリスハートは、走り去る馬を呆然と見つめている。ジークが憮然とうなずいた。生命の源でもある天界の聖性を力とするノヴィアに対し、死と混沌をもたらす堕界の堕気を力とするのがジークだった。そして馬は、特に堕気を嫌った。
「馬が苦手な騎士……ねぇ。なんだか奥が深い矛盾だわぁ」
アリスハートがしきりに感心するのをよそにジークとノヴィアが手分けして砦の破損を調べる。野営せずにすむと分かると、さっそくジークはシャベルを手に死者の検分に入り、
「鋭い傷ですね……」
傍らのノヴィアが、死者を見て言った。肉体を鎧ごと、紙のように両断されているのだ。
「よほど、質の高い武器を、大量に揃えたか、それとも……」
呟きつつ、ジークがシャベルを地面に突き立てた。あっという間に穴を掘り下げ、
「みな、来世を信じるルカ派の宗徒だ。体が欠けた状態で埋葬すると、来世でその姿で生まれると信じてる。欠けた部分が無い場合、木や布を手足の形にして埋めるのが作法だ」
ノヴィアは言われた通り、埋葬を手伝った。祈りの言葉を唱えながら、死んだ兵達の斬り飛ばされた手足を探して揃えるのである。アリスハートも、恐る恐る手伝い、
「ノヴィアぁ、よく平気よねぇ」

「誰かがやらなくちゃいけないことだし、埋葬は、ジーク様の大切な仕事だもの」
ノヴィアは凛として言う。ふと、木々の向こうで気配がした。かと思うと、透視するまでもなく、ぞろぞろと馬に乗った兵隊が現れている。砦の生き残りかと思ったが、違った。
「勝手に触るなガキっ。それは俺達が殺した奴らだ！　お前も殺すぞっ！」
いきなり怒鳴られた。どうやら戦死者の遺品を目当てにうろつく盗賊まがいの兵らしい。
ノヴィアは冷ややかに、その十四、五人程度の集団を見返して、
「この人達は、私達が葬ります。兵隊崩れさん達は、お家に帰ってきちんと働くことを近所の子供から学んで下さい」
「そうよぉ、汚い顔並べて盗人猛々しいっての。こういう兵隊って、どうせろくに戦ってないのよねぇ。死体になら勝てるってわけよねぇ。格好だけで情けないったら」
アリスハートも、一緒に言いたい放題に言う。怯えて逃げ出すと思っていた兵隊どもが、呆気に取られた。一人が図星を突かれたように怒りの形相になって、がなった。
「構わねぇ！　この勘違いしたガキも妖精もっ、さらっていたぶっちまえっ！」
ずどん！　そのとき突然、山が揺れるかと思われるほどの凄まじい音が響き渡った。
兵達がぎょっとなって、音のした方を振り向く。そこに、いつの間にか現れたジークが、
「なんだ、こいつらは」

言って、ずぼっとシャベルを地面から引き抜いた。先ほどの音は、そのシャベルを突き立てた音らしいと分かって、兵達がまたぽかんとなった。
「荒らし屋さん達です。ここの兵隊さんを殺したとか、自分達の物だとか言ってます」
ノヴィアが言う。ぎろっ。ジークの凄まじい眼光が、兵達を一瞥し、
「こいつらには、無理だ」
断言した。遺体に見られるような斬撃を振るうことも、そもそも砦を陥とすことも、無理だと言っていた。兵達の一人が、猛然と怒鳴った。
「な、なんだ、てめえこそっ。シャベル担いで偉そうに、墓掘りか、てめえっ」
「その通りだ」
淡々と肯定するジークに、相手が絶句した。
「ノヴィア、蹴散らせ。どうせ軍の尻馬に乗るだけで、ろくに作戦にも従わない奴らだ。捕らえたところで情報を持ってるわけでもない。死者を弔う気持ちもない猿に用は無い」
ノヴィアが、はい、とうなずき、すっと前に出た。一方、ジークはシャベルを肩に担ぎ、さっさと背を向けて去ってゆく。ことごとく意表を突かれ、唖然とする兵達に向かって、
「沢山の矢が……見えます」
ノヴィアが、言った。兵達が眉をひそめ、そして宙に浮かぶものに気づいた。

矢だ。ノヴィアの眼前に、突如、鋭い切っ先を向けた何十本もの矢が現れていたのだ。
あ……と兵達が子供のような声を零した。それほど、異様な光景だった。
ひゅん。空を鋭く裂く音がし、ぎゃあっと悲鳴が起こった。矢が、一人の腕に刺さったのだ。宙に静止していた矢が、一斉に、弓から放たれた速度で兵達に襲いかかった。
「な、なん……なんじゃゃっ、こりゃあっ!?」
矢を受けた兵が悲鳴を上げるのへ、
「幻視の力――」
ノヴィアが、律儀に答えた。それこそ〈見守る者〉たるノヴィアが、透視の力とともにその視覚に宿した、もう一つの力だった。幻視――そこにそれがあるという幻を見ることで具現させる力である。とはいえ何でも具現出来るわけではなく、人や動物など複雑なものは、まだ無理だった。また、火や水など、不定形のものを具現させるのも、多大な集中力を要求される。だが兵達の目には圧倒的な力と映り、たちどころに恐慌にかられ、
「魔女だっ！　化け物だっ！」
涙しながら逃げ去るのへ、ノヴィアは内心、ほっとしていた。ただでさえ、ここに来るまでに透視の力で消耗していたのだ。百本近い矢を一度に見たせいで、どっと疲れがきた。
幻視は、数が多いほど急激に疲労する。これが一本なら自由に軌道を変えて飛ばすことも

出来たが、何十本となると、ろくに狙いもせずに、真っ直ぐ飛ばすことしか出来ない。
ノヴィアは大きく息をつき、目を閉じて宝杖を額に当てた。杖の聖性が疲労を回復させ、
「やーい、ざまぁみろぉ。あっかんべー。ノヴィアすごーい、格好良いーっ」
アリスハートの陽気な声が、杖と一緒に、ノヴィアの疲れを癒してくれるようだった。

しばらく経つと、兵達の体に刺さった矢は消え、矢傷だけが残った。
「話が違うじゃねぇかっ。化け物を使うのは、味方の軍だけじゃなかったのかよっ」
わめきながら川べりで自分の血を洗いながしていた兵が、ふいに顔を上げ、
「おい、誰か来るぞっ。巡礼者どもだっ」
見れば、木々の間を、十人前後の馬上の者達が、やって来るではないか。みな法衣姿で、頭からフードを被っている。密集隊形をとり、腰に剣を帯びているが、鎧兜は着ていない。
「そうまでして、偉くなりたいのかねぇ……」
聖法庁が定める位階を昇るには、巡礼は不可欠だ。そのため戦乱期にも敢えて巡礼する勇気ある集団は、しかし兵達の目には、わざわざ獲物になりに来た馬鹿にしか見えない。
たちまち矢傷の痛みなど吹き飛ぶ気勢が湧いた。これで血湧き肉躍らねば荒くれ者の仲間にはなれない。手に手に武器を持ち、馬を駆り、巡礼者達の前に躍り込んだ。

「おいっ、くそ坊主どもっ。こっから先は、通行料が要るんだよっ」
甲高い恫喝の声に、先頭の巡礼者の男が、顔を上げ、きっぱりと返した。
「お前ら、とても聖法庁の者には見えんぞ。通行料など、払う謂われはなさそうだ」
「状況見て物言えっ。聖法庁の騎士団なんざ、もう一人も残っちゃねぇんだよっ」
だが巡礼者は、平然と仲間達を振り返り、
「ただの無頼者だ。片づけちまおう」
そう言うではないか。それを、兵達ではなく、中央にいる小柄な者が聞き咎めていた。
「待って。殺すの？」
目深に被ったフードの奥からでも、よく通る声だった。巡礼者が顔をしかめた。
「話し合いで済みそうに見えるか？　嫌なら引っ込んでいろ、アーシア」
「……やるわ。数が多いから、私も手伝う」
決然としつつも、どこか愁いをふくんだような、深沈と澄んだ声だった。
その声を聞いた兵達が、下卑た笑いを漏らした。
「女の声だ。女が手伝うとか言ってるぜ。自分で自分の身ぐるみ剝ぐのを手伝うのか」
その兵達の一人に向かって、先頭の巡礼者が、いきなり馬を走らせた。
兵も果敢に剣を抜く。転瞬、巡礼者の剣が迅り、金属を断つ澄んだ音が響いた。構えた

剣ごと、兵の首が両断されたのだ。いきなり仲間を斬り殺された兵達が、ぽかんとし、そして、怒声を上げて殺到した。巡礼者達が、次々に抜剣し、迎え撃つ。
間もなく兵達は、巡礼者達が鎧を着ていない理由を絶望とともに悟った。
法衣だ。一見してただの厚手の布にしか見えぬ法衣は、斬れもせず、叩いても衝撃を吸収し、鎧以上に何の傷も相手に負わせられないのだ。
愕然とする兵達を、突如、轟音が襲った。兵の一人がもんどり打って落馬し、その胸板に、なんと握り拳ほどの穴が空いている。続けざまに爆発音が轟き、兵達の腕が吹き飛び、胸が穿たれた。すぐさま兵達は、この悪夢のごとき現象の元凶を知った。中央の女が、銀の筒のようなものを握り、その筒の口から熱く灼けた何かが放たれ、鎧ごと体を穿つのだ。
「な、なんだっ、なんなんだ、そりゃあっ」
落馬した兵が、涙まじりに喚いた。頭上に、あの銀色の筒を向けられている。
「虚無を生む――銀銃」
女の、澄んだ声が告げた。兵は、訳が分からぬまま、折れた腕を抱えて泣き叫び、
「助けてくれっ、頼むっ、やめてくれっ」
女の挙動に、僅かな迷いが生まれた――刹那、兵の首を、背後から、剣の切っ尖が貫いていた。骨が折れ砕け、赤い飛沫が上がり、泣き喚いていた首がだらんと垂れた。

その凄まじさに息をのむ女を、兵の首を貫いた者が、叱咤した。
「躊躇うな！　情けをかけて、もし後ろから攻撃されたらどうする！　死にたいのか！」
「ごめん、そんなつもりじゃ……」
悔しげに唇を噛みしめる女に、巡礼者が馬を寄せ、粛然と言った。
「情報通り、ドラクロワがデュハンに攻め込んだんだ。やつの居場所が分かっている今が、最後の機会なんだぞ。やつを討つ事には、里の名誉と存続がかかってるんだ。お前だって、それが分かっていて志願したんだろう……盗賊の命乞いなど、気にしてる場合か」
うつむく女に、巡礼者は、息をつくように、幾分か声をやわらげ、
「……情報では、聖王は、影の軍勢をデュハンに向かわせたらしい」
「影の……軍勢――？」
「聖法庁に害なす者を、独断で誅殺する権利を持ち、死の力――堕界の法を操るという……そんな軍勢が動き出せば、俺達がやつを討ち取る機会なんか無くなるだろう。一刻も早く、やつを――同胞の仇を討ち、里の名誉を取り戻さなければならないんだ」
仇、という言葉に、女がかすかに震えた。だがすぐに震えを抑え、屹然と、言った。
「私が先頭で行く。躊躇わないために、そうさせて。風を読めば道なんてすぐに……」
すると巡礼者達が、ちょっと慌てたようになって、女を中央に押し込めてしまった。

「い、いや、分かればいいんだ。アーシアは中心にいて、その武器で、俺達を援護してくれ。その方が俺達も心強いんだ。な、な？」
女は、何かを言いかけたが、言葉にならぬ様子で口を閉ざし、黙ってうなずいた。

4　死の風

翌朝――砦を出てすぐ、遺体の群に出くわしたジークは、
「お前がやったのか？」
ノヴィアに、訊いた。ノヴィアはむろん、思い切りかぶりを振って否定している。
川縁の道を埋め尽くす遺体は、昨日、ノヴィアが追い払ったごろつき兵達であった。
「同士討ちではないな……ドラクロワの軍勢以外に、別の勢力がいるのかもしれん」
そう言いながら、ジークは早速シャベルを手に、地面を選んでいる。
「ちょっと、ねえ、こいつらの墓も作ってあげんのぉ？」
淡々とうなずいてみせるジークに、アリスハートが呆れて肩をすくめた。
「特殊な秘儀を使う者が、いるな」
ジークが、鎧ごと肉体を吹き飛ばされた遺体を見て、言った。

「敵でしょうか、味方でしょうか」

「さあな……。どちらでもないのかもしれん」

あっさりと返す。検分を兼ねつつ死者の宗派を見抜き、信じがたい速度で埋め、どこか
らか墓標となる石を調達して一人一人の名を刻むジークに、アリスハートが不思議そうに、

「ねえ狼男ぉ。もしかして、適当に名前、付けてない？」

「死者の最も強い思いは、自分が誰だったか、ということだ。よく耳を澄ませてみろ」

「えー……なんか、違う世界に入っていきそうだから、いいよぉ」

「修行が足らんな。ノヴィア、お前には聞こえるか」

「無理です。死んだ人の声が聞こえるなんていう地獄耳は、ジーク様だけの特技です」

「いやぁ……ノヴィア、地獄耳って、意味違うって」

間もなく埋葬を終え、すぐに出発している。山間を出て盆地に入ると、空がにわかにざ
わめいた。暗雲が重く垂れ込め、ごうごうと冷たく吹き荒ぶ風に、ジークが目を細める。

「瘴気が強い……近いな」

それと同じ頃――ジーク達よりも盆地を先に進んだ辺りで、轟くような風にまかれ、

「なんて強い瘴気……」

ぞっとするように、呟く者がいた。馬上で法衣のフードを目深に被った、女である。

「いったいこれは、どうしたことだ……」
巡礼者の一人が、異様な天候に顔をしかめる。答えは、間もなく分かった。
暗い草原に、一面、何百という騎士、兵士の遺体が、折り重なって倒れている光景に出くわしていた。砕けた鎧や剣、馬具などが、風に煽られてかちゃかちゃ鳴り、まるで自分達はここにいると生者に呼びかけているようでもある。
「ドラクロワの軍勢に討ち滅ぼされた、聖法軍の軍勢か……」
無数の死者に囲まれ、巡礼者達がさすがに鼻白んだ。
「この風は、死の風だったのか……。怨みの重さで天界に逝けぬ魂が、堕界に堕ちて憎しみの風を呼んでいるのだ。これでは、生半可な祈りでは鎮めようもない」
ふと、女が、僅かにフードを上げ、耳をそばだてるような仕草をした。
「泣いてる……。名前……。自分達の名前を言ってるんだ……死んだ後でも……」
愁然と言う女に、巡礼者達が顔を見合わせた。誰からともなく馬を止め、
「死の風を放置しては、聖道士の名折れ……か」
そう言って、五人が代表して馬から降り、次々に剣を抜き放った。聖印を刻まれた剣だ。天界に属する聖印が、刃の切れ味を増し、鋼を剛くしているのである。更には、刃に堕気を払う力を帯びさせ、その力を、地に降りた彼らは、存分に振るった。

一人が、気合いを込めざま、倒れた死者の胸に、剣を突き立てたのだ。
馬上の女が、びくっと身をすくめた。死んだはずの者が、声なき絶叫を上げた気がした。
五人の巡礼者達が、祈りを唱えながら、次から次へ遺体に剣を突き立ててゆく。女は、死者に剣が突き刺さるたび、まるで自分が貫かれたように身を強張らせ、

「私、こんなつもりじゃ……。他に……他に方法は無いの？」

「どう葬るべきか、相手の宗派さえ分からなければ、これしかないだろう……」

簡葬は……と、女が口元で小さく呟くが、声にならなかった。どんな宗派にも共通する最も簡単な葬送のことで、戦場ではそのやり方で葬ることが多いという。だが聖印を授かったほどの者達が、簡葬を行うなど、それこそ聖道士の名折れだった。

ずどん！　そのとき、大砲の弾でも撃ち込まれたような衝撃が響き渡り、刃を振るっていた五人が跳び上がって驚いた。慌てて、振り返ったそこに、奇妙な三人組がいた。

地面にシャベルを突き立てた、戦闘装束の男がいた。その傍らには、男の背丈の半分にも満たなさそうな小柄な少女がおり、そしてその少女の肩先を、妖精が飛んでいる。

未だかつてこのような取り合わせを見たことがなく、唖然とする巡礼者達を、

「英雄にでもなったつもりか」

男――ジークが、巡礼者達を睨み据えて言った。巡礼者達が、怪訝そうに眉をひそめ、

「英雄……」

女が、意外そうに、呟いた。ちらりと、ジークの視線が、女を向いた。

「屍を踏みにじり、先を急ぐあまり自分達が殺した死者さえ棄て置いてゆく」

巡礼者達の顔が強張った。昨日、あの兵達を皆殺しにしたことを見抜かれたからだ。

「ちょ、ちょっと、ねぇ……いきなり敵同士っぽくなってるけど……いいの？」

「このくらいで敵になっちゃうなら、この人達も、あの兵隊崩れさん達と一緒よ。きっと後ろめたいことがあるのね」

ずけずけとノヴィアが言う。剣を手にした巡礼者の一人が、その言葉に反応した。

「愚弄するかっ。死の風を鎮めてやっているのに、何の文句がある！」

「憎念に満ちた魂どもが、堕気を放って風を呼んでいる」

ジークの言葉に、巡礼者達が、おや、という顔になる。

「分かっているじゃないか。なら、我々の行いを咎めることもないだろう……」

「俺がやる。お前らには無理だ」

巡礼者達が絶句した。侮辱の極みのような言葉だった。たちまち怒声が迸った。

「我々を、聖道士の資格を持つ者と知っての言葉かっ！」

そのとき、轟々たる風が吹き荒れ、草原全体がざわめいた。頭上では暗雲が渦を巻き、

地の堕気が天を冒す、その凄まじさに、巡礼者達がいっとき怒りを忘れた。
「お前らがこの魂どもを怒らせた。お前らがいると余計に堕気が増す」
淡々と言うジークを、巡礼者が毒気を抜かれて見つめた。そこへ、女の声が飛んだ。
「みんな、やめて。その人に任せよう」
巡礼者達が一斉に女を振り返る。女はフードの奥から、澄んだ声だけを現しながら、
「あなたなら、この風を止められる……？」
「俺は、葬士だ」
というのが、ジークの端的な返答だった。すぐそばにいる巡礼者が、
「葬士……？　要するに、墓掘りではないか……」
しげしげと、地面に突き刺さったままのシャベルを眺め、そしてぎょっとなった。
「聖印……！　貴様、聖法庁の者か……！」
ずぽっ。ジークがシャベルを引き抜き、くるりとその柄を回して、聖印を掲げてみせ、
「聖法庁直営、黒印騎士団――ジーク・ヴァールハイト」
淡々と名乗られ、巡礼者達の間に、困惑が生まれた。
「黒印騎士団など、聞いたこともない騎士団名だが……」
「馬にも乗らず、剣も持たないのに、聖法庁の騎士だと……？」

ぶつぶつくさしながらも聖法庁の者と分かっては、武器を向けるわけにもいかない。憮然とした顔で剣を収め、訊かれないのを良いことに誰も自分達の素性を明かさぬまま、
「……では望み通り、ここの死者を任せるとしよう。せいぜい丁重にな」
一人が、馬上から小馬鹿にしたような声を放った。ジークは、そいつの法衣を一瞥し、
「鎧いらずの聖衣……一部の聖堂にしか伝承されていない聖印を記された、特殊な衣か」
何気ない口調で、言った。さっと、そいつの顔が青ざめ、怒りの形相となった。
「博識だな。だが、余計な詮索は無用。我々の邪魔をすれば、容赦なく斬る」
ジークは返答せず、無言のままシャベルを肩に担ぎ、あっさりと背を向けてしまった。
その背に向かって、ちっ、と巡礼者は舌打ちをし、仲間の所へと戻っていった。
「うっわー、険悪う。でも、何事もなくて良かったねぇ」
ふと、アリスハートは、ノヴィアが巡礼者達に目を向けたままなのに気づき、
「どしたの、ノヴィア？」
「あの女……ジーク様のこと、ずっと見てる」
アリスハートが、それがどうしたと首を傾げる。ノヴィアにも分からなかった。ただ、女の顔が、今にも泣き出しそうな哀しみに彩られているのは、透視の力を持つノヴィアだけが知る事だった。あるいは、彼女の周囲にいる者達でさえ、彼女の表情に、気づいてい

ないのかもしれない。そう思って、ぽつんと呟きが零れた。
「あんなに大勢に護られてるのに……まるで、独りぼっちみたい」

5　殺戮の使徒

かつて聖法庁が興って間もない頃の聖堂は、土着の信仰とあいまって寺院と呼ばれた。
寺院都市デュハン――伝統に従い、そう呼ばれる、古都であった。
古い建物や路面に激しい戦いの跡が見られ、人っ子一人いない街並を寂しげな風だけが吹き荒れる中、巡礼者達の一人が、ふと思いついたように呟いていた。
「……黒印騎士団か。まさか、例の軍勢の、斥候か何かではないだろうな」
その声が、馬蹄の響きとともに、無人の街路に、不吉な反響を及ぼし、
「まさか。あのような子連れの墓掘り人が、聖法庁の影の軍団だと言うのか？」
誰かが言うと、他の者達が、嫌な雰囲気を吹き飛ばすように、どっと笑う。
「どうせ、死者を葬るだけが取り柄の男だろうよ。例の軍勢とは、何の関係も――」
その声が尻すぼみに消えた。代わりに、押し殺したような驚愕の声が漏れた。
「なんだ、あれは……」

広場に、何十本もの大きな銀の柱が、石畳を穿って林立しているのだ。
その向こうに、長い階段の上に設けられた寺院への入り口があり、何やら特別な儀式のための方石柱のようにも見える。得体の知れない気分に襲われながらも広場の中央にまで馬を進めると、ふいに、新たなものが、銀色に光る方石柱の陰から、現れていた。
なんと、百は下らぬ数の死体が積み重ねられ、小山を作っていたのである。甲冑姿の戦死者も、市民も、女子供も老人も、ないまぜになって薪のように重ねられており、さすがの巡礼者達が、吐き気を催すほどの無惨さだった。空には暗雲が重く垂れ込め、頭上を、あの草原で吹き荒んでいたのとは比較にならぬほどの堕気の風が、轟々と吹き荒んでいる。
ふと、寺院の入り口に、一人の男が現れた。痩せた身に黒い礼服を着込み、長い柄の槍を握っている。その槍の刃に聖印が刻まれているのに、巡礼者の一人が呆気に取られ、
「聖印を刻まれた武器を持っているとは……そなた、ここの寺院の者か？」
「やぁ、ただの農民ですよ。ドラクロワ様から素質を認められて聖印を授けられてね」
聖印の管理を司る聖法庁の存在を、根底から覆すようなことを、男は言った。
「……農民だとぉ？」
「はい。リンゴ好きですか、みなさん」
「は……？　リンゴ……？」

「他にもパシの実とか、作ってたんです。村全体でね。評判が良くてねぇ。それで昔、聖堂から、作物が良く育つための聖印を授かったんですが……ここの聖堂と貴族がぐるになって、もう村の誰一人ろくに食えないくらいの税を絞られましてねぇ……」

男の言葉は、聖法庁の負の面を表していた。聖印を受け継いだ聖堂の中には、貴族と結託し、様々に民衆を苦しめる者がいるのだ。税を取り立て、土地を奪い、言う事を聞かない村を焼き、農民が苦労して引いた貯水池を奪う。盗賊と変わらぬ所業だったが、聖法庁の定める法律は、聖堂と貴族には甘く、なかなか取り締まられなかった。

「もう奴隷みたいな生活をさせられたんですよ。でも、ドラクロワ様のお陰で……」

男は、ひゅっと空を裂いて槍をかざし、にこやかに微笑んで、言った。

「聖堂と貴族の一族郎党……みんな、今、そこで積み重なってますけどね」

その目は、復讐心を飛び越え、もはや殺戮の喜びに光っている。その男の背後から、待機していたらしい四十人ほどの武装した兵達が、ぞろぞろと現れた。

「あたし達は、ここの留守を任されてるだけでしてね。味方になりたい者には食事と宿を与え、敵になりたい者には、儀式の一部になってもらえとの命令なんです。ま、儀式といっても簡単なものでね、そこの死体と一緒に積み重なって瘴気を呼んでもらうだけです」

巡礼者達が顔をしかめて互いに目を合わせた。みな、無言で剣に手を当てている。一人

が、女を振り返り、どうする、と訊くように顎をしゃくってみせた。
「私も、やる……。あんな小さな子まで……許せない……」
女が、子供の遺体を見て、怒りの声になって言う。次々に、刃の鞘走る音が響いた。
「外道が！　同情すべき身の上とはいえ、女子供まで皆殺しとは！　それだけの手勢で留守を任されているとはよく言った。本陣に連絡する間もなく、叩き潰してくれる！」
兵達が笑った。途端、広場の周囲に、新たに二十名ほどの兵が現れた。全員、弓矢を手にしている。伏兵だった。一斉に矢が放たれ、巡礼者達を狙い撃ちにした。
兵達が、下卑た歓声を上げた。その声が、一転して、唖然とする沈黙に代わった。
巡礼者達の法衣が、ことごとく矢を弾き返し、一本の矢も貫くことが出来なかったのだ。
「貴様らごときの矢が、この聖衣を貫けるか！」
巡礼者の一人が怒声を返す。途端、兵達が雄叫びを上げ、一斉に階段を駆け下りてきた。
「本当、早いわよねぇ……狼男の早業ったら、そのうち世界中が墓で埋まるんじゃやない」
アリスハートが、草原にずらりと並んだ墓標を前に、呆れたように言った。
「そうかもしれん」
真顔で返し、ジークは静かに空を見上げている。

「風が、熄んだな……」

轟々と吹き荒んでいた、暗く冷たい風が、今はほとんど無い。

「お疲れ様です、ジーク様。お昼にしますか？」

ノヴィアが、手荷物を探りながら訊いた。そのとき、一陣の風が吹きつけてきた。

ジークが、素早く風の吹いた方角を振り返った。そのおもてが険しさを帯び、

「昼飯は、もう少し後にしよう、ノヴィア」

目は、草原の向こうに見える、寺院都市デュハンの遠景を、鋭くとらえていた。

「な、なんだっ、なんだあの武器はっ！」

兵達の叫びを、轟音がかき消した。女が馬上から構えた武器が轟音を噴くつど、確実に地に立つ兵の数が減った。巡礼者達が、兵達を次々に斬り倒し、六十名余もいた兵達は、半刻を経ずして壊滅寸前に陥っている。

「お、俺達だけじゃ駄目だ……っ！」

階上の男に助けを求める兵を、巡礼者の一人が斬り屠った。馬を降りるや、勇猛にも階段を駆け上がり、槍を持つ男へ、奮迅の剣撃を送り込む。

剣が、男の槍に呆気なく叩き返された。転瞬、槍が迅り、聖衣の隙間を正確に狙われ、

脚を刺されそうになるのを、階段を転がり落ちるようにしてかわさねばならなかった。
その凄まじい手練に瞠目する巡礼者に、男が、邪悪な笑顔を浮かべて、
「やぁ、別にあたしが強いわけじゃなくてね。この槍がね、ほとんど勝手に動くんです。ただ、この槍をちゃんと握っていられるのは、素質のある者だけでして……」
ふいに、槍の刃に刻まれた聖印が輝きを放ち、槍の穂先が、複雑な動きを見せた。
「とはいえ、単にそれだけじゃ、戦さには、勝てませんのでね……」
男は、ひとりでに動いているらしい槍を、眉をしかめて握りしめている。
巡礼者達は、今や兵達を掃討し終え、階段を駆け上り、
「何……？　あの男、何をしてるの……？」
女が問うや、男の槍の穂先が、聖印の朧ろな輝きを零し、宙に軌跡を現し始めた。やがてその輝きは、より巨きく、複雑な聖印となって空中に刻まれ、
「堕気を呼ぶのはね……堕界から、援軍を呼ぶためなんですよ。この槍を使ってね」
男が言うや、宙の聖印が、光の筋となって弾け、巡礼者達の背後へ飛んだ。
一瞬後——にわかに巨きなものが、音を立てて動き出した。あの方石柱が、次々に展いて脚となり、中から巨大な眼球を持った赤黒い肉塊が現れ、立ち上がったのだ。
それは、八本の鋭い刃のような脚を持つ、馬よりも巨大な、独眼の蜘蛛の群だった。

愕然となって、階下を振り返る巡礼者達に、男がにんまりと笑んで、言った。
「銀脚獣（ファランギ）――堕界の魔獣（パロール）の、一種、だそうですよ」
魔獣どもが、にわかに銀色の津波のごとく殺到してきた。階下にいた数人の巡礼者（ヴィーダール）達が、真っ先に魔獣の群に飲み込まれた。四方から、その刃のような脚に襲われ、剣も矢も弾く聖衣が、瞬く間に引き裂かれ、絶叫さえ無く、魔獣の銀色の津波の中に消え去った。
残された者達が愕然と凍りつく中、女だけが、咄嗟に、階上の男へ武器を構えていた。
にやにや笑う男が、目を丸くした。瞬間、轟音が響き渡り、男はもんどりうって倒れ込んでいる。女の武器から放たれたものが、男の左手首ごと、槍の柄を、吹き飛ばしたのだ。
「い……痛っ、痛ぁっ！」
半分の長さになった槍を右手で握りしめながら、男が、寺院の中へと這いずってゆく。
「あの男を追うの！　あの男が、化け物を操ってるのよ！」
女が叫ぶ。みなが我に返って階段を駆け上がる。だが階上に辿り着く寸前、寺院の入り口を扉が閉ざした。女が、体ごと扉にぶつかった。次々に巡礼者達もぶつかるが、びくともしない。女が、素早く、扉に武器を向けた。その途端――巡礼者の一人が、
「危ないっ！」
女に覆い被さるようにして押し倒していた。女が慌てて身を起こし――悲鳴を上げた。

巡礼者の首が無かった。綺麗に切断された傷口から、大量の血が噴き出している。

瞬く間に魔獣が殺到した。巡礼者達が次々に八つ裂きにされてゆく。ふいに、最後の巡礼者が、震えて動けぬ女を抱え上げ、階段脇から飛び降りた。石畳に着地した途端、女の身が投げ出された。女が転がり起きて、必死に最後の巡礼者の名を呼んだ。

頭上から、仲間の血と体の破片が、ばらばらと降り注いでくる。最後の巡礼者は、魔獣に右足を斬られていた。起きあがれぬまま、必死の形相でアーシアに向かって叫び、

「逃げろっ、アーシア！　生きて、使命を……！」

途端、頭上から、魔獣どもが雪崩れ、その全身を、ずたずたに貫いていた。

女が、高い、悲鳴とも怒号ともつかぬ声を上げ、涙をふり零して、両手の武器を構えた。

轟音が吹き荒れ、魔獣どもの脚を砕き、独眼を吹き飛ばし、そのまま必死に撃ちまくりながら広場の出口へ退くが、銀色の奔流は決して止まらず、たちまち辺りを囲んでゆく。

もはや、あるのは酷たらしい死のみと思われたとき——ふいに魔獣どもが、ぴたりと動きを止めたではないか。そればかりか、なんと、何かに怖じ気たように退いてゆくのだ。

何がどうしたのか分からず、涙を流しながら、立ちすくむ女の背後で、

「銀脚獣か……これほどの数を招き出すとはな」

低い、聞き覚えのある声が、起こった。

「うわぁーっ、なになに、なにこのでかいのっ。うじゃうじゃいるよっ」
更にそこへ、場違いなくらいに明るいわめき声が飛んだかと思うと、
「あの魔獣達を使って、砦を落としたんですね、ジーク様」
信じがたいほどに落ち着き払った、穏やかな声が、あとに続いていた。
女が、涙に濡れた顔を、おずおずと巡らせると、ふいに、シャベルを担いだ男が、その傍らに立った。びくっとなる女を一瞥し、それから、ひしめく魔獣どもの群を眺めて、
「俺がやる。お前には無理だ」
静かな声で、男――ジークは、そう言ったのだった。

6　魔兵招来

頭が痺れ、全てが夢のことに思えた。女は、ただ眼前の光景に見入り、そしてそれが、心に焼き付いて離れぬものとなるのを感じていた。
男が、前に出た。その白外套の背に、美しくも凶々しい、黒い紋章が記されている。
刃の海のような魔獣どもの波が、ざわざわと震えを帯びた。女の仲間を無惨にも皆殺しにした魔獣どもが、たった一人の男の存在に、たじろいでいるのだ。

ずん！　男が石畳を穿ち、シャベルを突き立てた。かちり。シャベルの柄が音を立てて回った。柄を引き抜くや、歯が残り、銀に光る柄が現れる。その柄を右手で握りしめ、抜き放つや、なんとシャベルから、聖印を刻まれた鋭くも妖しい剣が一瞬で現れ、
「……聖咎の剣」
女が、驚愕の呟きを零していた。聖法庁でもごく僅かな者にしか授けられない剣についての知識が、今、目の前で、現実となって存在していた。
戦意をあらわすジークに、魔獣どもが、急に色めき立った。女はふと、なぜ魔獣どもが、それまでたじろいでいたか、分かった気がした。同類だと思ったのだ。ジークのことを。
だがそうではないと知った魔獣どもが怒りに満ちる様に、女が愕然と身をすくませ、
「大丈夫です……ジーク様を信じて。動かないで下さい」
傍らで、誰かが、言った。見ると、少女――ノヴィアの微笑が、あった。
「うわーっ、来る来る！」
アリスハートが叫ぶ。女が、はっと顔を戻した。広場を埋め尽くす銀色の波が押し寄せて来た。だがそのとき女は、自分が、魔獣の群ではなく、不思議なことに、剣を引っ提げ、高々と左手を掲げる、たった一人のジークを見つめていることに、気づいていた。
「ジーク・ヴァールハイトが招く!!」

　ジークが叫ぶや、突如として高く掲げた左手に、白く眩い雷光が走った。そして、

「無念の魂よ！　天刻星の連なりの下、甲魔アロガンスとなりて我が身を護れ！」

雷花の咲き乱れる手を、迫りくる魔獣どもの前で、激しく地面に叩きつけたではないか。
地中から青ざめた稲妻の輝きが幾重にも迸り、轟々たる風が吹き荒れ、先頭の魔獣どもが、衝撃に弾き飛ばされるや、その稲妻の輝きの中から、異形のもの達が躍り出た。

女が、瞠目して見たそれは、形も大きさも人に似たものだった。全身を平たい甲羅に覆われ、甲冑を着たクラゲのようだ。肩から腕の代わりに左右二つずつ巨大な爪が垂れ、

「天秤座の陣！」

　ジークの言下、十数体の甲魔が、一斉に四つの爪を展き、爪の間に、青い輝きが満ちるや、それが防壁となって、魔獣どもの脚を完全に受け弾いたではないか。

　そればかりか、青い輝きが、魔獣どもの脚と全く同じ形と化し、受けた力をそのまま跳ね返すように、刃となって、次々に魔獣どもを貫き倒してゆく。

　銀色の奔流の中で、ジークと、ノヴィア達のいる場所だけが、ぽっかりと空白を作り、

「非業の魂よ！　土刻星の連なりの下、剛魔ダゴンとなりて我が敵の前に立て！」

　更に、ジークが、先ほどのものに層倍する雷光を左手に帯び、地面に叩きつけた。

　ずん！



稲妻がやんだ途端、轟然たる地響きが、広場を、四方から襲っていた。
ずん！
そして、何百何千という数のそれらが、一糸乱れぬ足音を響かせ、街の建物を突き崩して行進し、見渡す限りに現れる様を、女は、信じがたい思いで目の当たりにした。
それらは、実に薄汚れた鉄塊の群に思われた。女の背丈の倍もあり、一見して重装歩兵のようだが、首から直接、獣の口に似たものが生え、がちがちと牙を噛み鳴らしている。
その胸元から、巨大な槍のごとき角が生え出し、地面を揺らして一挙に驀進してきた。
今や魔獣どもの方が逃げ場もなく囲まれていた。剛魔の槍のごとき角に、そこだけ柔らかな独眼を貫かれ、次々に赤い血飛沫を上げ、くずおれてゆく。
「あ、あれは何なの……？　あの男は、いったい……」
「堕界に堕ちた怨みに汚れた魂が……堕気による新しい体を得て、復讐してるんです」
凄まじい激戦の光景に呆然となって問う女に、ノヴィアが、静かに答えて言った。
「ジーク様は、〈招く者〉――堕界の魂を招く、たった一人の、軍団」
甲魔の円陣に護られながら、ジークは一人、怪物同士の激しい戦闘の中を、無造作な足取りで進んだ。階段を上ると、閉ざされた扉の前に立ち、いきなり剣の光芒を迸らせた。

ごとりと、扉の向こうで何かが落ちる音がした。僅かな扉の隙間を、刃が通り抜け、閂を斬り割ったのだ。軋んだ音とともに扉が開き、暗い廊下が現れた。かと思うと、

「——きぃあーっ！」

甲高い気合い声とともに、男が廊下の闇から飛び出し、槍の切っ尖を、信じがたい速度で突き込んできた。すぐさま甲魔が青い輝きの壁を展開し、男を止めるが——

槍は、激しい火花とともに青い輝きを穿ち、甲魔の胸を深々と貫いたではないか。

甲魔が嘆きの声を上げて倒れた。その隙に、男は、ぱっと跳びしさり、面白そうに、甲魔が青黒い液体と化してジークの足下に流れ込み、その影を黒々と染めるのを眺めた。

「もともとね……あたしは、貴方が来ると言われて、ここの留守番をしていたんですよ。黒印騎士団……聖法庁の影の軍団、ジーク・ヴァートルハイトがね、来るってね」

ジークの目が、鋭く、男の槍の刃を、一瞥した。

「堕界の聖印……ドラクロワに、与えられたか」

「選ばれた者としてね——油断して、柄が半分になってしまいましたがね」

柄だけではなかった。男の左手首までもが消失し、血止めが施されている。だが、

「貴方もね、左腕が、使えないんでしょう。聞いてますよ、ドラクロワ様からね」

男が、にやりとして言った。その言葉通り、雷花を帯びたジークの左腕から、血の雫が、

したたっている。何の傷も負っていないはずの腕が、籠手の下で夥しく出血しているのだ。

「堕界の聖印を直接、腕に刻み込んでるんだってね。だから化け物を招いてる間、右手しか使えないんだ。化け物を招く者同士、左手が使えない者同士、決着つけましょうか」

ジークは、甲魔を全て外に残したまま、すっと、廊下に足を踏み入れ、

「俺は、彼らのことを、化け物と思ったことは、一度も無い」

静かに告げ、男に歩み寄った。男が、右手だけで槍を握った不自然な体勢で、甲高い叫びを上げ、それでも、尋常ではない刃風を鳴らし、突き込んできた。それを流れるようにかわし、ジークは歩み寄る歩調をまるで崩さず、刃の光しか見えぬ迅さで剣を振るった。

そのあまりの鮮やかさに、男が、愕然となった。左手が使えない者同士と言ったが、そうではなかった。ジークの剣技は、明らかに右手のみで振るうことを前提としていたのだ。

物凄い火花が散った。ほとんど斬られたかに見えた男が、槍の柄で剣を受けたのである。

ジークが、後退する男を追って、旋風のような剣撃を、男の頸へ、脚へ、胸へと送る。

一方、男はよろめきながら、脂汗を浮かべて槍を握りしめている。剣の技も速さもジークの方が格段に上なのだが、そのくせ一向に男の身に刃が届かないのである。ぴたりと、ジークが足を止めた。男が汗だくになって喘ぐさまを見つめ、小さくうなずいた。

男はただただ、槍を握りしめているだけで、槍が勝手に動いているのである。

「秘儀の槍か……。では、最後まで持っていろ」
言いざま突如、堕気に満ちた風がジークを中心に吹き荒れ、その銀剣に淡い幽然とした白い光が浮かんだ。男が瞠目し、息も絶え絶えに、
「だ、堕気……？　死の風……あんた……そうか、そうだ、体に、堕界の聖印……」
途端、ジークが、それまでの勢いに層倍する、奮迅たる剣を送り込んでいた。
槍は最後まで男を護ったが、男の方が耐えられなかった。耳をつんざくような音を響かせて槍が剣を受け止めるや、男の体が吹っ飛び、剣と壁に挟まれた。刃を止めた槍の下で、肋骨が粉砕され、体は横に折れ曲がったようになり、口から鼻から大量の血が溢れ出す。
「堕、堕界の、使徒……ば、化け物って、思わねぇのは、てめぇが、化け物……」
男は、目蓋を裂かんばかりに目を剝き、ずるずる壁をずり落ち、息絶えた。
ジークは、男の死に顔から、ふと、床に落ちた槍に、目を向けた。
その槍をもたらした、また別の男の存在を、ひどく遠くに、感じていた。
「お前の理想を信じて……。そのために、俺は……この力を……」
呟いた途端、男の面影が浮かんだ。かつて同じように遠くに感じていた頃の面影が。
（騎士様などと呼ぶな、ジークよ。私の名は、ヴィクトール・ドラクロワだ）
出会った当初は、相手を遠く思うからこそ、頑なに近づこうとしなかったジークに、

（戦場を離れた時くらいは、名前で呼んでくれても良いだろう……）
男は、いつでも微笑んで言ってくれた。その男もまた、権力を奪い合う貴族達の中で誰も信用出来ず深い孤独の中にいた事を、今の自分なら察せただろう。だが出会った当初のジークは、むしろ男に遠くにいて欲しかった。自分を導く、絶対的な存在として――
「今度は、俺の方から、お前に歩み寄るよ……ドラクロワ」
そっと剣を振りかざすと、槍の聖印に、激しく突き込んだ。槍の刃全体に亀裂が走り、
（追ってこい――）
刃が砕ける痛烈な音の中に、男が最後に残したその言葉が、熱く、響いていた。

「ジーク様！　魔獣は全部、動きを止めました！」
寺院から甲魔のいる階段際に戻ると、ノヴィアが階段を上りながら声をかけてきた。後ろを、女が一緒についてきている。二人の頭上をアリスハートが舞い飛び、明るくわめく。
「いやあー、凄かったねえ。狼男、はりきりすぎぃー」
ジークが憮然として何かを言おうとしたとき、その表情が、ふいに厳しく引き締まった。
「ジーク様……？」
ノヴィアが、ふとジークの視線を追って、振り返り――そして愕然と凍りついた。

アリスハートも、同じようにして、背後の女を見やり、ぽかんとなった。

「ジーク・ヴァールハイト……」

女が、フードの奥で呟き、右手に握りしめた武器を、ぴたりと、ジークに向けていた。

第二章　聖なる罪のしるし

「確かに私には、傷を癒し、病を癒す力があるわ。そしてそれを誇りにしてる」
その女は、言った。
「でも、心までは癒せない……みんな、傷が癒えても、心は傷ついたまま……」

1　弔いの光

「一つだけ、答えて——」
女は、目深にフードを被ったまま、一切の言い訳を許さぬ鋭さで、言った。
「貴方が死者を葬りたがってたのは、死者をあんな姿にして、利用するためだったの？」
その武器がジークを狙い定め、ノヴィアもアリスハートも、うかつに動けぬ一方、
「風が、熄んだな」
なんとジークは、女の武器など、全く目に入らぬかのように悠然と空を見上げている。

女がフードの奥で目を丸くする。確かに、荒れ狂っていた風が、ぴたりとやんでいた。

その穏やかな大気を、ふと、淡い光が昇り、あっ、とアリスハートが声を上げた。

思わずその声につられて、女が、背後を振り返り、息をのむ。

人間と怪物どもの死体が、折り重なる広場で――剛魔どもが次々に形を失い、がしゃがしゃと呆気ない音を立てて鉄屑と化してゆくや、その崩れゆく身から、ふわりと、淡い光が浮かび、見る間に、無数の光の群となって、昇りゆくではないか。

「ああ……魂が、お空に還っていくねぇ……」

アリスハートが感嘆する。女が呆然となった。甲魔達も周囲で倒れ、瞬く間に溶け崩れて青黒い液体と化し、その身からも聖性を帯びた淡い光が立ち昇る。そうして幾つもの光が雲上の天界へ逝く様子に、女は、いつしか武器を構えることも忘れて見入っていた。

「お前を、護ろうとしていた者達の、魂だ……」

ぽつりと、ジークが言った。女がその意味を悟るのに、一瞬の間があった。

「まさか……みんなの魂を!?」

愕然と叫んで、反射的にまた武器を向けている。自分を護った甲魔達が、実は、魔獣どもに貪り食われた仲間達――あの巡礼者達であったのだと、ジークは、言っていた。

その事実をどう受け止めて良いか分からず、咄嗟に武器を突きつける女に、

「聖性を集め、万物を穿つ虚無の弾丸として撃ち出す、銀銃——」

ジークは、淡々と呟きながら、階段を降り、

「〈銀の乙女〉では、戦う力の無い者が身を護るときだけ使用が許された武器だったな」

その言葉に、硬直したようになる女の横を、無造作に通り過ぎてゆく。

「俺よりも、お前の手で葬られたい者達がいる。その気があるなら、手伝ってもらう」

言って、無防備な背をさらしたまま、階段を下りていってしまった。

「手伝う……」

女が、ぼんやりと呟く。武器を構える女の手に、そっと、ノヴィアが手を重ね、

「ジーク様が怨みに満ちた死者を招くのは、それが唯一、彼らを弔う方法だからです」

穏やかに言いながら、女の手を、ゆっくりと、下げさせていった。

気づけば夕陽が降りてきている。それでも午後中の時間だけで累々たる死者を葬り終えてしまったジークを、女は、フードの奥から呆気に取られた様子で見つめたものだ。

「ジーク様……あの女、まだ進む気でしょうか……」

ノヴィアが、まだフードを被ったまま、仲間達の墓の前に、孤独に佇む女を、思案げに見て言った。女は、今でも旅を諦めていないのだ。仲間達を、寺院の裏の、次の道が始ま

る場所に葬ったことに、その思いが込められていた。
「大聖堂ゆかりの者か……」
ジークはうなずきながら、淡々と、それだけを呟いている。大陸各地に存在する聖堂をまとめるのが、聖都のクレア大聖堂を頂点とした十七の大聖堂である。女は仲間達を、その大聖堂ゆかりの者に特徴的な、長い木の棒を束ねた三本柱の墓標に葬っていたのである。天界と堕界、そして〈狭間の世界〉である現世の、三つの界層を表す標に、弔いの文句を記した布をたなびかせているのは、風が経文を読むと信仰する大陸南部の風習だ。
それらのことがらを淡々と見抜くジークのおもてが、突然、驚愕に強張ったのは、女が、墓標に向かって、初めて聖衣のフードに手をかけ、そっと脱ぎ去ったときであった。
晩秋の朱茉樹の葉色に似た、赤みを帯びた濃い栗色の髪が、滑るように現れた。
歳はノヴィアより四つ五つ上に見え、二十歳を越えたか越えぬか、という辺りだろうか。繊細な目鼻立ちが茜色の陽射しにくっきりと影を浮かべ、すべらかな頬が何かに耐えるように引き締められている。髪と同じ色をした瞳で、墓標を見つめる女の貌に、
「シーラ……」
切迫した呟きを漏らすジークを、ノヴィアが驚いて見上げ、アリスハートがきょとんと、
「シーラ……って？　狼男、あの女の人と知り合いなわけ？」

ジークは答えず、女の横顔を凝視していたが、やがて目を細め、小さくかぶりを振った。
「いや……違う。目の色も髪の色も違う……雰囲気も……まるで違う……」
ジークにしては珍しく、内心をそのまま口に出し、またかぶりを振っている。
ふとそのとき、女が、思ってもみなかった行為に出た。
懐から短剣を取り出すと、もう一方の手で後ろ髪を束ねて握り、刃を当てたのだ。
声をかける間もない。一息に後ろ髪を断ち切った。その一瞬、ジークの目に、女の頬が、むしろ何かを吹っ切ったような、微笑にも似た穏やかさを帯びたように見えていた。
朱茉樹の葉色をした柔らかな髪が墓標に舞い散り、断った髪を風に乗せて死者に手向け、
「さようなら、みんな……。ここから先は、私だけで行くよ」
愁然と、囁いた。それから、短剣を懐に収め、つとジークらを振り返るや、
「みんなを弔ってくれて、ありがとう。私、アーシア・リンスレット」
やけに朗らかに言った。そのうって変わった、勇ましげで快活な口調で、
「事情あって、ある男を追っているの。多分、貴方達と同じ男を。そうでなきゃ貴方達も、こんな所に来ないでしょう？　敵は強い。道は遠い。貴方達の力をもってしても苦難は避けられない。だからこそ互いに知恵と勇気を出し合い、協力し合う事が大事よ」
なんとも、すらすらと言い述べる様に、ノヴィアとアリスハートがぽかんとしていると、

「そこで貴方達に、特別に私の旅に同行させてあげる」
悠然と腰に手を当て、告げるではないか。さすがのアリスハートが唖然として呆れ返り、
「ジーク様……この女……何か不思議な事を言ってますけれど……」
ノヴィアが、眉間に皺を寄せて振り仰ぐ。するとそこに、
「性格も、違う……」
いつも以上に憮然として呟く、ジークの姿が、あった。

「こっちよ。私達の進むべき道は、この方角。そこに、古い遺跡があるはずよ」
アーシアの歩みは明確だった。手に地図を持ち、分かれ道を、迷いなく進むその背後で、
「ジーク様……そっちには、何もないです」
万里眼の使い手たるノヴィアが、こそっと告げている。
「でも、あんなに自信満々だよ、あの人。何か魂胆があるのかな」
アリスハートが言う。ジークは、担いだシャベルの柄で、とんとんと肩を叩きながら、
「……魂胆があるのなら、早い内にそれを見せてもらおう」
呟くように、言った。まずは、アーシアの言う通りにしてみる、というのがジークの考えだった。これは、アーシアが、自信たっぷりに、こう明言したからである。

「ドラクロワの動きは、私達がつかんでいるわ。聖法庁も知らない情報よ」
それはどのような情報で、なぜそんな情報がつかめたのか、とジークが問うと、
「私達はみんな、マグノリア大聖堂ゆかりの者なの」
アーシアが、自分と仲間達の出身をそう告げるのへ、ノヴィアの方が、驚いていた。
マグノリア大聖堂といえば、まさしくノヴィアが属する〈銀の乙女〉の総本山なのだ。
聖性を身にやどす力を持つ女性を、聖道女として養育し派遣する〈銀の乙女〉の、位階を管理する大聖堂であり、ノヴィアの紋章や宝杖も、その大聖堂から授けられたものだ。
「聖クレマチスの弟子の中で唯一の女性マグノリアと、彼女を祖とするマグノリア大聖堂がなければ、聖印は、男だけが扱って良いもの、なんていう風に言われていたはずね」
自分の武器——銀銃に刻まれたマグノリアの紋章を誇らしげに見せながらアーシアが言うと、思わずノヴィアもうなずいていた。〈銀の乙女〉にとって、聖母マグノリアは、初代聖王クレマチスと同じくらい、崇められているのだった。
「〈銀の乙女〉とマグノリア大聖堂は、ドラクロワに関して中立を保っているはずだ」
だがジークはそう指摘すると、アーシアは肩をすくめて、
「マグノリア大聖堂から命令されたわけじゃないわ。私達の自由意志よ。私達みんな、マグノリア大聖堂が持っている里の一つ——ミーメの里の出なの」

途端、ジークが常ならぬ驚愕に息をのんでいた。思わずノヴィアがジークを見たが、
「ミーメの……遊軍か」
ジークは、ただ、アーシアを、そう位置づけただけだった。
「そうよ。正規の軍令も無し。マグノリア大聖堂からは、戦乱の被害が広がるのを防ぐためなら、戦いを許すって言われただけ」
「遊軍のまま、聖法庁の軍に参列せず、単独で戦うつもりだったのか」
「自信があったのよ。私達、ミーメの里の人間が、そう簡単にやられるはずないって」
「ミーメの里は、知っている」
ジークが、ぼつっと言った。単に知っているというよりも複雑な感情のこめられた口調だったが、そのことを察せられたのは、ジークの従士になって長いノヴィアだけである。
「じゃあ、私達の里が、ドラクロワに攻め込まれたのは、知ってる？」
アーシアがふいに厳しい口調になるのへ、ジークはまたもや驚きをこめて、
「ドラクロワが……ミーメを……」
「あの男のせいで、里で大勢死んだわ。何の罪もない子供達まで……。仇を討ちたいの。里の仇、仲間の仇を……。聖法軍に参加したら、自由に行動出来ないし関係ない戦いをさせられてしまう。だから私達、遊軍を選んだのよ。貴方達も似たようなものでしょ？　私

の邪魔をしない限り、貴方達にも情報を分けてあげる。でも……情報の出所は、秘密」
そうしたアーシアの言を、ジークはひとまず、了承したのであったが――
「いや、無いって。お姉さん、こんな所に何も無いって」
アリスハートが大声でわめいた。辺り一面、木々が生い茂っている。
「変だな……。もしかして、木や土に埋まっちゃったのかな。古い遺跡なのよ……」
ずん！　ジークがシャベルを地に突き立て、
「これは、そういう土ではないな。建物があった痕跡はない」
「分かった！　こっちよ！」
「ええっ、ちょっとそっち、道もないって」
「ジーク様……あっちは、崖です。落ちたら死にそうな高さです。……罠でしょうか」
ジークは小さくかぶりを振っただけで、勇敢に突き進むアーシアの後を追っている。
「大丈夫。ここまでの旅だって、最初は私が先頭だったの。仲間に言われてしょうがないから真ん中で護られてたけど、本当は私が一番強かったし、護られる必要なんて……」
そのとき、藪の向こうで、ふいにアーシアの声が消えるや、
「うわーっ、ノヴィア、狼男っ、ちょっと、大変、大変！」
アリスハートの切迫した声と、アーシアの悲鳴じみた声が上がっていた。

ジークとノヴィアがかけつけると、アーシアの姿が無い。そればかりか、木々も無い。晴れ晴れとした空と、遥か下方の谷底に川の流れが見える、崖っぷちであった。

「ノヴィアぁ、ここだよぉっ」

その断崖で、アリスハートが宙を舞いながら叫んでいる。覗き込むと、アーシアが、岩棚に生えた木にしがみつき、転落を免れていた。法衣のマントが枝のあちこちに引っ掛かっているため落ちる心配は無いようだ。だがその代わり、法衣の下の、動きやすさを優先した、ただでさえ手足の付け根があらわな衣服が、一層まくれ返ってはだける姿に、

「……罠か？」

ジークが真面目くさって呟く横で、

「……違うと思います」

ノヴィアがむっつりと咳払いして言った。そこへ、アリスハートが飛んできて、

「あのさぁ……このアーシアって人さぁ、何か魂胆があるっていうよりも……」

「おかしいなぁ、地図だとこっちのはずなのに。分かった、この先！　この先よ！」

見ればアーシア、崖の向こう側を、元気良く指さしている。

「さっき、アーシアさん、最初は、仲間の先頭にいたって言ってましたよね……」

「恐らく、その仲間全員で、中央に抑え込んだのだろう」

「きっと、本人、分かってないんだろうねぇ……自分が、方向音痴だってこと」
珍しくジークとアリスハートの意見が合い、三人揃ってうなずいた。
間もなく、ノヴィアの幻視による縄ばしごをつたって、アーシアが上ってきた。
「みんな、目的地は崖の向こうよ。ところで縄ばしごなんて、どこから……」
ノヴィアが無言で目を閉ざすと、アーシアの手の中で、縄ばしごが忽然と消えている。
ぽかんとなるアーシアのもう一方の手から、ジークが、無造作に地図を抜き取って、
「ずいぶん新しい地図だな……」
一人ごちながら顔を巡らせた。その途端、あ……と目を開いたノヴィアが声を上げ、
「見えます……あっちに……」
「……なるほど。ムルドア聖堂が持つ、聖地の遺跡か」
「え……まさか……ちょっと、それって……」
確かに、それはあった——遠く隔たった、崖の対岸の向こうに。
「ねぇ……私、確かに、縄ばしごで上って来たよね」
釈然としない様子のアーシアを、別の理由で釈然としないジークらが振り返り、しばらくの間、お互い、微動だにせず、見つめ合っていた。

「やっぱり私の思った通りだったわ。みんな、目的地は近いわよ」
アーシア、もはや有頂天である。
「よっぽど目的地の近くに来たことが嬉しいんだねぇ……」
アリスハートがのほほんと、崖とアーシアとを見比べる。
「結果的に合っていたが……旅には向かない性格だな」
ジークはこれまでの行程を地図で確認し、ノヴィアがそれを横からのぞき込んで、
「……なぜ、私達、この山を越えなければならなかったのでしょうか」
「分からん。おそらく、そこに山があったからだろう」
「……あ、ここ、ぐるぐる同じ所を回ってますね。そうじゃないかと思ってたんです」
「それでも少しずつ目的地に近づいている。不思議な能力だな」
「凄いですね。ここ確か、地図に無い道を歩いて来ましたよ」
「ここら辺の勘働きは、猟犬並だが……」
地図をところどころ指さし、言いたい放題に言うジークとノヴィアに、
「あっ、それ、私のっ。私の地図っ」
アーシアが気づいて子供のようにわめきたてた。ジークはひょいひょいとアーシアの手を避け、しばらく地図を眺めていたが、やおら畳むと、無造作に地図をアーシアに渡した。

「もうっ、子供みたいなことしないでよっ」
アーシアが怒って背を向ける。ノヴィアが、ジークにこそっと、
「ジーク様……あの地図、書き写した方が良かったんじゃないですか」
「心配ない。頭に入ってる」
「あの地図、道沿いに幾つも印が付けられていましたが、何でしょうか」
「戦闘の跡を意味する記号だ。破壊された橋の一つ一つが、詳しく記録されていた」
「すごい地図だねぇ。そんな地図持ってたのに、どうして迷うんだろうねぇ」
のほほんとアリスハートが宙を舞う一方、ノヴィアは顔を青ざめさせ、
「ジーク様……そんな正確な地図が書けるのは……」
「この近辺に陣を敷く軍以外に……ない」
「え……それって、どういうこと？　まさか……敵が書いた地図ってこと？」
「ねぇみんなぁ、どうやってこの崖を越えようかぁ」
さすがに方策が思いつかないのか、アーシアが珍しく意見を求めてきた。
「ノヴィア、頼む」
「……頼まれるんじゃないかと思ってました」
何となくむっつりしながら返すノヴィアの傍らで、アリスハートが慌てて、

「ね……ねえ、なんであの女が、敵の地図持ってるの？　やっぱ罠？」
「分からん……。ノヴィア、チビ、常に、周囲に気を付けていろ」
　いつもはチビと呼ばれて怒るアリスハートも、思わず大きくうなずいていた。

2　希望の里

「凄いよ、凄い凄い、本物の橋みたい。凄いよ、これ、ノヴィアちゃん」
「早く渡って下さい！　すっごく疲れるんです！」
　ノヴィアが叱り飛ばすと、橋の上で飛び跳ねていたアーシアが首をすくめて、ジークに向かって、ちろっと舌を出してみせた。その何の不安も恐怖も無い様子に、ジークが、ほう……と感心した。五十歩ほどの距離の断崖を、虹のようにつなぐ幻視の橋を、アーシアが何の躊躇もなく渡れるとは、ジークもノヴィアも思っていなかったのだが、
「あんな小さな子に命を預けちゃって、申し訳ないな。重くないかな、私」
　振り返って呟くアーシアの様子には、単に勇気があるという以上の風情があった。
　やがてノヴィア自身も橋を渡り始めた。背後の見えない部分まで「つながっている」イメージを強く保っているため、渡るそばから橋が背後から消えるというようなことはない

が、さすがに疲労は強く、自分自身が渡り切った途端、大きく息をついて目を閉じた。
「ノヴィアぁ、大丈夫ぅ？　お疲れさまぁ」
アリスハートがいたわる背後で、橋が消えきらず、うっすらと影のように浮かんでいる。
「少し休もう」
ジークの提案に、アーシアも賛成し、昼食となった。
勢い、渡り終えたばかりの断崖を眺めながらの、行楽気分となった。食事は、デュハンを発つ前日に、寺院の調理場でノヴィアが簡単に用意しておいたものである。
包みから次々に現れるのは、いびつな形状をした、元は何の食材であったか判別つかぬ、赤いのやら緑のやらまだらのやら、とても口に入れる物とは思われぬ代物であった。
デュハンを発つ前、初めてそのノヴィアの料理を目の当たりにして仰天したアーシアも、
「ノヴィアちゃんの料理って、見た目は壮絶だけど……」
無造作に口に放り込みながら、にっこり笑って、
「美味しいのよねぇ」
同じく齧り付くアリスハートと、顔を見合わせて感嘆するのだった。
「そのうち……ちゃんと見た目も綺麗に作れるようにします」
ノヴィアが赤面する横で、ジークは、その必要を大して認めぬ様子で黙々と食っている。



「ノヴィアってば、目が見えるようになっても、料理の仕方だけは変わらないのよねぇ」
アリスハートがしみじみ言う。その途端だった。アーシアが驚いた顔になって、
「目が……？　見えなかったの？　あんなに凄い力を持ってるのに……」
「力が使いこなせず、目が見えなくなっていたんです。目が見えるようになったのは……ジーク様の従士になれたお陰なんです」
「……へぇ、私、てっきり、ノヴィアちゃんが凄い力を持ってるから、従士にしたのかと思ってたんだけど……そうじゃないんだ」
アーシアは、まじまじと、ジークの顔を見つめ、
「貴方、良い人ね」
ごほっ、とジークがむせた。
「いやぁ、狼男は、良い人っていうよりも、単に難儀な性格っていうか……」
「ジーク様は、優しいのよ。人を、顔で判断しちゃ駄目よ、アリスハート」
「いや、ノヴィア、あたし別に、顔とか、そういうこと言ってないって」
ノヴィアとアリスハートのやりとりに、アーシアが、くすくす笑って、
「私も昔、力が使いこなせるまで、口が利けなかったんだ」
今度は、ノヴィアとアリスハートが、驚いてアーシアを見やる番だった。

「両親が死んで里に引き取られてから、急に口が利けなくなったの。私の代わりに、いつも兄が話してくれたわ。たった二人の兄妹……私の気持ちを、誰よりも理解してくれる優しい兄だった……けど、ドラクロワが、里に攻め込んできたときに死んだわ」

途端に、アーシアのまなざしが、屹然と険しい光をやどし、

「今でも覚えてる……燃える里を、笑って見てた、あの男の顔……兄の仇の顔。私が今ここにいるのは、あの男の胸に、私が抱いたのと同じ虚無を撃ち込んでやるため……」

ジークが、小さくかぶりを振るのを見て、アーシアは、無言で腰の銀銃に手をあてた。

右手で、腰に吊したままの武器を握りしめながら、左の掌を、天に向ける。

ふいに、アーシアを中心に、風が巻いた。ノヴィアが目を見開き、感嘆した。

「なんて強い聖性……」

風が収束し、アーシアの掌へ吸い込まれるようにして消え、なんと、その掌の上に、それまで無かったはずの、小さな金色をした筒状のものが、現れていたのだった。

「大気の聖性から造り出した、虚無の弾丸。鉄でも岩でも粉々よ。兄が死んで以来、これを造り出せるようになるために、私は、血のにじむような努力をしたわ。もしこれがドラクロワに通じなかったら、その時、貴方に譲る。だから、それまでは、私にやらせて」

「アーシア・リンスレット……〈銀の乙女〉がお前に〈浄める者〉の称号を授けたのは、

聖性を虚無に変え、敵を撃つためではないだろう……」
燃えるような激情を帯びるアーシアの目を、ジークは静かに見返し、言った。
「銀銃が生み出す虚無では、何も浄められはしない……死者も、お前の心も」
まるで、相手の戦いを否定するかのような言い方に、傍らのノヴィアが驚いていた。何の理由もなく、そんな言い方をするジークではないのである。
「じゃあ貴方はなぜドラクロワを追うの？　あの男を殺すためじゃないの？」
「俺は、ドラクロワの目的を明らかにするよう、調査を命じられただけだ」
ジークは、淡々と言って聞かせながら、腰を上げた。
「調査……ね」
アーシアも立ち上がり、不敵なまなざしで、ジークを見据えた。

夕刻であった。崖を渡ってから間もなく、山中にある巡礼者のための小屋をノヴィアが見つけ、ジークら一行の拠点となった。小さな井戸と暖炉以外、何もないような小屋だったが、四隅の柱に刻まれた聖印が老朽化を防ぎ、埃が積もるのを妨げている。
「人間の兵は総勢で二千ほどか。他に、北西の位置に伏兵がいないか確認してくれ」
ジークが言った。床に広げた陣書き用の羊皮紙に、墨片で、敵の陣営を書き込んでいる。

ややあって、ノヴィアが、あらぬ方をじっと見ながら、指示した。
「南と東を、何重にも警戒してますが……北西は無人です」
「そうか……十分だ。ご苦労だった、ノヴィア」
「こっち側は誰もいないんだぁ。そりゃ崖を渡って来るなんて誰も思わないものねぇ」
アリスハートがしみじみ言う。敵陣から二クール（一キロ）ほど離れた、山中の死角にある小屋から一歩も出ず、詳細に書き込まれた敵の陣形にアーシアが感心した。
「こんな所から敵を丸裸にするなんて。貴方達が負ける所なんて想像も出来ないな」
「俺達が一部の戦場で勝利しても、大局的には負けていることがある。その戦場が生まれた理由に従って勝たない限り、あまり意味がない」
「それ……私が知ってる人も、同じことを言ってたわ」
昼間の不敵な表情はどこへやら、アーシアがにっこり笑って、言った。
「フス教父っていうの。定期的に里に来る巡回教父で、みなが尊敬してた人よ」
「……フス。懐かしい名だ」
「知ってるんだぁ。それでね、フス教父が言うには、昔、彼が兵士だったとき、同じ軍に凄く強い剣士がいて、〈赤竜〉と呼ばれていたんですって」
このとき、ジークの目が、切として細められたことに、ノヴィアだけが気づいていた。

「その〈赤竜〉って剣士が、フス教父に言ったそうよ。小さな戦いで勝っても、大きな目で見れば、負けていることもあるって。戦いが起こるのには必ず理由があって、その理由に従って勝たない限り、幾ら勝っても無意味なんだって」
「へぇー、本当に今、狼男が言ったことと、同じだねぇ」
「でしょう？　フス教父は〈赤竜〉のこと、自分の兄弟のことのように話してたわ。その〈赤竜〉って剣士、今じゃ聖騎士なんだって。しかも剣士の前は、銀貨何枚かで戦場に売られた剣奴だったって話よ。凄いと思わない？　フス教父は、よく言ってたわ。人間は持ってる物や境遇が全てじゃない。その人間の物の見方が、人生を決めるんだって」
　その手の話が好きなアリスハートは目を輝かせて聞いていたが、ふと、眉をひそめ、
「どっかで聞いたような……って、それ、もしかして狼男のことじゃ……」
　言い掛けるや、それを遮るように、ジークが口を挟んだ。
「フス教父は、どうしている」
　途端に、アーシアの表情が、また急に翳った。
「遺体も残ってないわ。あの男が攻めてきた時、たまたま里にいて聖堂ごと焼かれたの」
　ジークが小さくうなずいた。アーシアは、寂しげに笑って言った。
「フス教父は、ミーメの里を、希望の里って呼んでたわ。〈赤竜〉みたいに何の血筋も無

く、両親を失った人間にも栄達の機会はある……自分次第で。自分達の力で勝ち取る希望……。ねえ、私達が、マグノリア大聖堂から与えられた役目って、知ってる？」
「……守護者だ」
「やっぱり知ってるんだ。そう、ミーメの里は、みんなで必死に努力して、マグノリア大聖堂ゆかりの遺跡を守る大役を、勝ち取っていたわ。でもドラクロワに簡単に攻め込まれたせいで力の無い存在と見なされてしまった。だから、叙印権を剥奪されて……」
アーシアの軽い笑みがみるみる消え果て、哀しみの表情に覆われてゆくのへ、
「叙印権……って？　なぁに、それ？」
アリスハートが、無邪気に訊いた。この妖精には、明るい声だけで人を慰める力があるらしく、アーシアから完全に笑みが消え果てるのを、見事に防ぐのだった。
「聖印を扱う権利のことよ。能力さえあれば一般の人も聖印を扱えるっていう制度……〈赤竜〉が聖堂騎士団の一員になったときに、新しく作られた制度なんだって」
「へぇー……実力次第ってわけねえ。なんだか大変そうだけど」
「でもやらなくちゃ。このまま何もかも失ったままでいるか、それとも自分達の力で新しく勝ち取るか……。私達には、もう、それしか残っていないのよ……」
アーシアは、アリスハートに向かって言いながら、ほとんどジークに聞かせるために、

口にしているようなものだった。それが、傍らのノヴィアにも分かった。そしてまた、ノヴィアには、ジークがどう思っているかも、分かっていた。
だから、夜が更け、交代で、裏手の井戸へ身を拭いに出た際、
「ノヴィア、今夜、俺一人で行く。恐らく、戦闘になるだろう……」
ジークが、アーシアが小屋を出たのを見計らって告げるのへ、
「そうじゃないかと、思ってました」
ノヴィアは、あっさりと、返したものだった。
アリスハートは、アーシアと一緒に外に出ている。何かあった際に、アリスハートが伝令役になるわけだが、半ば、まだ正体の知れないアーシアの行動を見張るためでもあった。
「お一人で行かれるのは良いですけど、寝て待ってろなんて、言わないで下さいね。ちゃんとこの目で見守ってますから。それと……腕の包帯だけでも、替えさせて下さい」
「頼む」
ぱちりと籠手を外し、ジークが左の袖をまくりあげる。左腕全体に包帯が巻かれ、ところどころ血がにじんでいる。その包帯を、ノヴィアは丁寧にほどきながら、
「アーシアさん、敵ではないようですが……あの地図、どこで手に入れたんでしょう」
「まだ分からん……今晩中には、はっきりするだろう」

「アーシアさんにとって、何か辛い真実が、この戦場にはあるということですね……」
ジークは沈黙したが、ノヴィアにとっては、雄弁な答えを得たに等しかった。
「だから、アーシアさんが気づく前に、葬るつもりなんですね……真実を」
そう言いながら、ノヴィアは、ジークの左腕からすっかり包帯を外し終えている。
「そんなに、似てるんですか……アーシアさん……シーラさんという女に」
綺麗な包帯を荷物から取り出し、最初の一巻きを当て、ぽつっと零すように訊いていた。
「血筋が、どこかでつながっているのかもしれない」
ジークは淡々と答えている。ノヴィアもそれ以上、訊こうとしなかった。シーラという女性について、ノヴィアもあまり聞かされていない。ただ、ジークにとってひどく大事な存在であるらしいことと、何かの理由で命を失ったことは、薄々察せられていたが……。
そのとき、勢いよく小屋の扉が開き、アーシアが小走りに入ってきて、
「寒いっ、寒いけどっ、さっぱりしたぁ」
暖炉の火に当たろうとするのへ、アリスハートが呆れ返って、
「あったり前だよぉ。ねぇ聞いてよノヴィアぁ。アーシアさんったら、この寒いのに、頭から水浴びるんだよぉ。見てるこっちが寒いってぇ……」
言いさし、ジークのあらわな左腕を見て、ぎょっとなった。もう何度も見ているのだが、

一向に慣れないのだ。ジークの左腕全体に、聖印が刻み込まれ、それが赤くおぼろに光を帯びる様が、烙印を思わせ、アリスハートをぞっとさせるのである。
ふと、駆け込んできたアーシアが、ジークの左腕を見つめ、感激したような表情で、
「フス教父が言ってた。〈赤竜〉は、騎士になるとき、腕に聖印を刻まれたって……」
おずおずとジークに近づき、うわずったように口にするアーシアへ、だがジークは、
「俺は、お前が思っているような人物じゃない」
淡々と否定した。更に、低い声で、
「……ミーメが叙印権を剝奪されて良かった。あれは、失敗した制度だった」
そう言い加えた途端、さっと、アーシアが顔を青ざめた。
「良かった……？　し……失敗って、どういうこと？」
ジークは答えず、腕をシャツの袖で隠し、赤く血塗られたような籠手を無言ではめた。
「取り消して！　私達の里を成り立たせてきた制度なのよ！　それを……！」
「……お前のせいじゃない」
アーシアを見もせず、呟くように言って、ジークはシャベルを手に、小屋を出ながら、
「周囲を見回ってくる。……ノヴィア、後を頼む」
「……はい、ジーク様」

「取り消してよっ！　貴方みたいな男っ！　良い人だと思った私が馬鹿だったわっ！」
銀銃を抜きかねない勢いで叫ぶアーシアを、慌てて、アリスハートが宥めるのだった。

3　ムルドア、戦端

「――各地の聖堂が独占する聖印の中には、一般の人間でも扱えるものがある。その聖印を解放すれば、それまで不毛の地だった場所でも作物が穫れるようになる」
かつて、ドラクロワは言った。
「聖印を解放すれば、敵の手にも渡って、敵の勢力が増すんじゃないか、ドラクロワ」
「聖印を独占する限り、敵は敵のままさ、ジーク。聖印を解放し、富を分かち合うことで敵であることをやめる勢力は沢山ある。彼らに、剣の代わりに豊饒の地を与えるんだ」
「聖印を解放するための、叙印権制度……。やってみる価値は、あると思うわ」
あのとき、シーラは、そう言った。そしてジーク自身も、異存は無かった。
それが、あの聖都の丘で語り合った、理想の一つ――三人が語り合ってきた事の中で、最初に実現されたものだった。
「数々の武勲を重ねたことを背景に、いよいよ、聖法庁に我々の理想を問う時が来た」

そう告げるドラクロワの確信に満ちた微笑を、ジークは、今でも覚えている——

「戦場の血と泥の中で見いだし……多くの失敗があり、狂気の沙汰と笑われても……」

風の騒ぐ夜の下——一人、青ざめた月の光を浴び、

「決して見失いはしない理想だったはずだ……ドラクロワ」

崖際で、ひそかな呟きを零すジークの眼下に、ひしめくような軍勢がいた。古い寺院しかない場所に、櫓を建て、壕を掘り、柵を構え、要塞に仕立てている。

ふと、ジークの影が、じわりと、濃さを増した。木々の闇から呻き声が響き出し、目に見えぬもの達が、にわかに唸りをあげて飛び交った。そして——

ジークは、本来、この土地を護っていたはずの聖法庁の騎士団が、敵に混ざっている様子を、はっきりと見て取ったのだった。

「裏切りか……。ムルドア聖堂が、ドラクロワと、手をつないだ……」

ジークの思惑げな呟きの声を、おうおうと嘆くような風の音が、かき消した。

「良いだろう。裏切りによって果てた、非業の者達よ……」

どん！　ジークがシャベルを地に突き立てた。かちり。柄が回り、引き抜いた。新たな銀の柄が現れ、月光を妖しく跳ね返す。その柄を握りしめ、

「弔い合戦だ……存分に荒れ狂え」
剣を抜き放ちざま、柄を置き捨て、にわかに跳躍した。
そのジークの周囲で、堕気に満ちた風が、歓喜の唸りを上げて、吹き荒んでいた。

「いったい何事だ！」
騎士が馬を駆って叫ぶや、兵士の一人がわめいた。
「しゅ……襲撃です！　化け物の群が、我が軍の後方から襲撃してきました！」
「化け物――!?　後ろは崖ではないか。そんなところからそんなものが……」
そのとき、彼らの目の前に、突如として人間の体が、降ってきた。何人もの鎧を着た人間が、玩具のように宙を舞い、地面に叩きつけられて絶命してゆくのだ。
軍の後方で、稲妻が吹き荒れ、唖然とする騎士と兵士の目を打った。
「悲憤の魂よ！　地刻星の連なりの下、巌魔ヘイトレッドとなりて我が敵を払え！」
鋭い叫びとともに、続々と現れ出るのは、実に、手足の太さが、馬の胴ほどもある、巨人のごとき魔兵であった。突き込まれる槍が体に刺さるのも構わず、兵達をつかむと、信じがたい腕力で投げ殺す。その有様に呆然とする騎士に、
「ムルドア聖堂騎士団か……」

赤い髪の男が、銀に光る剣を手に、悠然と歩み寄って来た。
「な……なんだ、貴様っ？」
「黒印騎士団——ジーク・ヴァールハイト」
騎士と兵士が、揃って目を剝くのも構わず、ジークが、訊いた。
「ドラクロワとともに、お前達が、後方からデュハンを挟撃したな？」
騎士が、ごくりと喉を鳴らした。その傍らで、兵士がわめいた。
「お……俺は知らない！　ムルドア聖堂のお偉いさんたちが決めたことだ！」
「いつ頃から、ムルドア聖堂は、ドラクロワと手を結んでいた？」
「わ、分からない。三……三か月くらい前に、俺達にも協力するよう命令が……」
「貴様ぁ！　黙らんかっ！」
騎士が馬上から剣を振るって兵士の口を封じた。頸を切り裂かれた兵士がどっと倒れる。
「貴様が、黒き騎士か！　ドラクロワ様に、その首、献上してくれるわっ！」
その騎士の隣に、ぬっと巌魔が立った。巨大な手に肩をつかまれた騎士は、愕然となってひときわ高い建物を振り向き、絶叫した。
「ド……ドラクロワ様ぁっ！」
助けを求めたか、危険を知らせようとしたか、いずれにせよ、ジークにとって、それ以

上に有益な情報はなかった。ドラクロワの位置を、むざむざ暴露した騎士が、厳魔の手につかまれ、馬ごと宙を舞うのをよそに、ジークは、騎士が呼びかけた建物へ足を運んだ。その足取りは、行く手に集まる軍勢を前にして、いたって悠然としたものであった。

窓辺に立つ一人の男が、戦場を見下ろし、
「来たか……。聖法庁最強の軍団……」
冷ややかに呟いていた。長い銀髪と、白皙の顔に、蒼い月の光を受け、冷たい笑みを浮かべつつも、その目は、どこか相手への、畏敬にも似た感情に細められている。
そのとき、騎士の一人が慌てふためいて、部屋に走り込んで来た。
「周囲を確認しました！　敵は……敵は、ただ一人です！」
男にとっては、当たり前のような報告だった。男は、うなずきもせず、
「増殖器を出せ。全てだ」
冷然と、言った。騎士が、息をのんで棒立ちになる。聖法庁に対する奥の手を、全て使えと言われたのだ。騎士はにわかに顔を引き締め、了解、と叫び、走り去っていった。
「あいつを相手に……どれほど、もつか……」
ひそやかに笑んで、男もまた部屋を出た。戦場の音を背後に聞きつつ廊下を進み、

「……汝の担うは、暗黒き印。其は、さまよえる魂を贄とし、この世ならざる者どもを呼び寄せるなり。この世ならざる者ども、汝に侍り従うべし。其は、混沌の軍勢なり……」
　聖典の一節を唱えながら、いつしか笑みが消え、どこか切々とした表情になっている。
「我が生涯、最愛なる友よ……。その命、新たな理想の礎とさせてもらう」

　ん……と喉を鳴らしながら、アーシアが寝返りを打った。途端、その目がはっと開かれた。飛び起きた。熾火の光が赤く揺れる暖炉の横で、アリスハートが眠りこけている。
　そしてその隣で、ノヴィアが床に座って、あらぬ方角を一心に見つめているではないか。
「あの男……ジークは？」
　アーシアが訊いた。びっくりして振り返るノヴィアが、何か言う間もなく、
「まさか……一人で行ったの!?」
「ち、違います。ジーク様は、単に、敵の様子を探りに……」
　ノヴィアが慌てて言いふくめようとするが、アーシアは目を閉じ、耳に手を当て、
「聞こえる……。風が騒いでる……。戦いの音……」
　呟くや、屹然と目を開き、ノヴィアを見た。ノヴィアは、呆然となって、
「アーシアさん……聞こえるんですか……」

それは、遠く隔たった場所の音を聞くほどの、大気の聖性に対する敏感さであった。
「戦ってる……あの男……ジークが……」
「アーシアさん……ジーク様は……」
「馬鹿にしないでっ！」
振り返って怒鳴るアーシアの目に、みるみる涙がにじんだ。アリスハートが、むにゃむにゃ言いながら目を覚ました。ぺこりとノヴィアが頭を下げた。
「ごめんなさい」
まだ半分寝ているアリスハートが、それにつられて、
「ごちそうさまです」
意味の無いことを言いながら、アーシアに向かって頭を下げている。
「違うわよ、アリスハート」
「あたしもう、お腹一杯だからぁ……」
「ば、馬鹿にしてるっ！　あ、あなた達みんなで……っ！」
アーシアが躍起になって叫ぶ。ようよう目を覚ましたアリスハートが、のんびりと、
「ああ……なんだか、昔のノヴィアみたいだねぇ」
アーシアが目を丸くし、拍子に、涙がきらきら光ってこぼれ落ちるのを見つめながら、

「ノヴィアもよく、狼男が一人で行っちゃうの、怒ってたっけぇ。そういうときは必ず、ノヴィアの料理って、食べられないくらい塩辛くなったのよねぇ……」
「そ、そうだったかしら……。私は覚えてないけど……」
「仕返しするなら、狼男だけにすればいいのに、あたしにはいい迷惑よぉ」
「だって、他に方法がないんだもの……。でもジーク様……結局、どんな味にしても何も言わずに全部食べちゃうから、あんまり仕返しって気分じゃなかったな……」
「って、ノヴィア……しっかり覚えてんじゃん」
「忘れましたっ。今、忘れたのっ」
太平楽なノヴィアとアリスハートのやり取りに、アーシアは、すっかり気勢を挫かれるかたちとなった。ふとそこへ、
「アーシアさん……今から、戦場に行くおつもりですか」
ノヴィアが、真顔になって訊いた。アーシアが、目尻を拭いながら、うなずく。
「では、一つだけ、訊かせて下さい」
「……なに？」
「貴女に、真実を葬る事が、出来ますか？」
アーシアは、意表を衝かれて黙った。どういう意味かと訊き返しかけたが、ノヴィアの

真剣な眼差しを見て、思わず強く唇を引き結んだ。ややあって、きっぱりと、言った。
「出来る」
「即答したよぉ。ノヴィアが同じ事を狼男から訊かれた時は、丸一日かかったのにね」
ぼそぼそ囁くアリスハートに、ノヴィアはちょっとむっとしながらも、
「では私達みんなで行きましょう、アーシアさん」
凜として、言っていた。

「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
叫びざま、ジークが雷花をまとう左手を激しく地面に叩きつけ、
「海刻星の連なりの下、迅魔オウディウムとなりて我が敵に走れ！」
稲妻の輝きから、幾十もの影が、次から次へと現れ、美しい円陣を描き出す。
「蠍座の陣！」
言下、目にも止まらぬ速さで、蠍が一斉に尾を広げるごとく円陣を展き、影が迅った。
影は、ジークの腰ほどの高さしかない魔兵である。細身に長い手足、両手の甲からは、長い三本の真紅の爪が伸びている。その動きはあまりに速く、兵達には、疾風が通り過ぎたとしか思えず、次々に刃のごとき爪で急所を切り裂かれていった。

「木刻星(ユピトール)の連なりの下、尖魔(せんま)マリスとなりて我が敵(てき)を射(い)れ！」
ジークが、更(さら)に雷花をまとう左手を叩きつけるや、今度は、人の姿(すがた)とは思われぬものが、横隊になって躍(おど)り出た。小柄(こがら)な、青い甲羅(こうら)を持つエビ(プリム)のごとき貧相(ひんそう)な体だが、なんとその腹(はら)からは金色の巨大(きょだい)な弩弓(いしゆみ)が生え、小さな手で抱(かか)え持っている。
尖魔の弩弓(いしゆみ)が一斉に唸(うな)りを上げ、握(にぎ)り拳大(こぶしだい)の尖(とが)った鉄片(てっぺん)を撃(う)ち放った。人が弓を構(かま)える速度を遥(はる)かに上回る連続斉射(せいしゃ)に、屋上で矢を構えていた弓兵がばたばたと撃ち倒(たお)された。孔(あな)だらけになった建物へ、ジークが、魔兵を引き連れ、入った。後方では兵達が逃走(とうそう)を始めている。もはや立ちはだかる者とてなく、ジークは建物を進み、中庭に出た。
「今だ！　化け物を放てっ！」
途端(とたん)、テラスで隠(かく)れていた騎士(きし)達が叫ぶや、デュハンで見た魔獣(バロール)——銀脚獣(ファランギ)の群(むれ)が、左右のテラスから、下にいるジークに向かって、滝(たき)のように雪崩(なだ)れ落ちてくるではないか。
「双子座の陣(アムヴリエル)！」
言下、巌魔(がんま)が左右に陣を築(きず)き、魔獣の奔流(ほんりゅう)を食い止めた。前後を尖魔が撃ち払(はら)う。迅魔が跳躍(ちょうやく)し、二階のテラスにいる騎士達へ迅(はし)った。ジークも巌魔の腕力(わんりょく)を借りて宙(ちゅう)を舞(ま)う。テラスに着地しざま、慌(あわ)てて戦斧(せんぷ)を振(ふ)るう騎士を斬(き)り、残りの騎士を迅魔が倒すに任(まか)せ、
「増殖器(ジェネレーター)か……」

テラスの一端に生える、巨大な柱のごときものを、見た。
まるで獣の内臓をそのまま重ねて柱としたようなものが、くねくねとしきりに蠕動しているのだ。台車に載せられているところを見ると、慌てて、ここに持ってきたのだろう。
その肉の柱から、ふいに稲妻が吹き荒れた。ジークが跳びしさって避けると、稲妻から、ジークが招く魔兵と同じように、銀脚獣が、続々と姿を現すではないか。
迅魔が肉の柱を切り裂いた。肉の柱が、甲高い鳴き声を上げ、強い瘴気を噴き出しながら萎れると、魔獣どもも溶け崩れ、青白い火を残し、消えていった。
ジークはその様子を見届け、いったん中庭に降り、魔兵を率いて、建物の反対側に出た。
長い石畳の道の向こうに、壮麗な神殿が、そびえ立っている。道の両側で、幾つかの赤い光がともった。と思うと、次々に赤い光が増え、両側いっぱいに広がってゆく。
無数の魔獣どもの目だった。銀脚獣ではない。二本足で立ち、ジークの背の倍は高く、青黒い肉体に二つの丸い目を赤く爛々と光らせ、手には短剣のごとき鉤爪を生やしている。
「青爪獣か……」
ジークが呟いた途端、白い稲妻が闇を切り裂き、同じ魔獣どもを出現させていった。
なんと二十体以上もの増殖器が、道沿いに並んでいる。凄まじい悪臭が吹き寄せ、ジークが、かっと目を見開き、怒号を放った。

「こんな数の増殖器を一度に使うのか！　土が瘴気に冒され、不毛の地になるのが分かっているはずだ、ドラクロワ！」
ジークの叫びを、嘲笑うかのように、にわかに魔獣が群をなして襲いかかってきた。
巌魔が、魔獣どもをなぎ払う。だが同時にその腕を、魔獣の短剣のごとき爪が切り裂くや、巌魔が呻き声を上げていた。魔獣の爪に裂かれた傷が、青く変色し、腐ってゆく。
魔獣の爪は、先端から青黒い液体がしたたる——毒爪であった。
尖魔が、前方から迫る魔獣どもを撃ち払うが、数が多い上に、後から後から現れてくる。
迅魔が展開して左右の魔獣を次々に切り裂いてゆくが、迅魔の紅い爪が魔獣に食い込み、一瞬でも動きが止まった途端、魔獣が躍りかかり、貪り食ってしまうのだった。
魔兵が、一体また一体と、青黒い泥の海のような魔獣の群に飲み込まれてゆく中、ジークが、その左手に青白い雷花を迸らせ、激しく石畳に手を叩きつけた。
「冥刻星の連なりの下、哭魔プラスフェミーとなりて、我が敵に雪崩れ込め！」
吹き荒れる稲妻から跳ね出たのは、赤い球体に、細長い手足を生やした魔兵であった。
それらが一斉に、ぴょんぴょん跳ねゆく——が何の甲斐もなく、次々と敵の毒爪の餌食となり、容易い獲物と見て躍りかかる魔獣どもに殺到されてしまった。その途端である。哭魔達の身が、かっと光を放った。なんと魔獣どもの群の真ん中で、一斉に自爆したのだ。

百体余の魔獣どもが木っ端微塵になり、残りの魔獣どもが、たじろいだようになるのへ、
「牡牛座の陣！」
ジークの言下、魔兵が突撃陣形をとった。巌魔を先頭に、一丸となって増殖器の一つに向かって突進する。犠牲を恐れず、大軍へと躍り込み撹乱する戦術だった。
魔獣どもにたかられながら、巌魔の一体が、巨大な手で増殖器をつかみ、握り潰した。
どうっ、とその巌魔が倒れるのも構わず、ジークと残りの魔兵は次の増殖器に向かう。
魔獣の群を突っ切り、増殖器を巌魔が叩き潰し、尖魔が撃ち、迅魔が切り裂き、ジークが斬り倒し、一つ一つ破壊してゆく。やがて最後の一つが、ジークの手で真っ二つに斬られると、最後に残っていた魔獣どももまた溶け崩れ、跡形もなく消えたのであった。
そのときには、二百体以上いた魔兵も、僅か二十体余の迅魔を残すばかりとなっている。
ジーク自身、気づけば右腿を、魔獣の爪に引き裂かれている。みるみる脚が血に染まり、強い痺れが走るや、ジークは、その傷口を、雷花をまとう左手で、つかみしめた。
「俺に、堕界の毒が効くものか――ドラクロワ！」
稲妻が脚に走り、傷を焼き、毒を消すと、苦悶の声を噛み殺し、神殿に向かった。
剣だ。剣を握れ――その思いが、ジークを奮い立たせた。強く聖咎の剣を握りしめると、柄が燃えるように熱い気がした。それだけ精神が苛烈な戦いで昂ぶっていた。

左腕は、著しく出血し、歩くたびに脚からも血が零れ、点々と血の痕が残ってゆく。
神殿に辿り着き、踏み入ると、ぽっかりと空いた巨大な洞窟の天井を、無数の、白い石柱が支えている。洞窟の入り口に、直接、建てられた神殿だった。ジークは、闇の彼方に見える、ほのかな光を目指して、迅魔達と進んだ。暗く澄んだ足音が、柱の間に反響しては消えてゆき、ジークは、熱い痛みとともに、追憶が胸中を去来するのを感じていた。

4　真実と幻と

かつて、剣奴だったジークが、ドラクロワから剣士としての身分を与えられ、正式に騎士団の従卒となった時——新たに授かった剣を受け取りながら、ジークは問うたのだ。
お前の理想の果てに、何があるのかと。
「——全ての人々が、王になる」
ドラクロワは、淀みなく答えていた。てっきり、聖王となって、聖法庁の頂点に君臨するのかと思っていたジークは、その言葉の意味を、咄嗟に受け取り損ねた。
全ての人とはどういうことか。まさか、ジークまでもが、王になるというのか。
「聖法庁が全てを支配する時代を終わらせるということだ。地域の独立を認め、全ての

か身分の低い者として不当に扱われている。農民、医者、楽師、建築者、兵士――これらはみな、なぜ職業に正当な地位を与える。

この大陸では、身分に従って蓄えていい富が制限されており、それ以上の富は全て、聖たとえば、貴族にしか許されない「富を蓄える権利」を、民の全員に与えるのだという。

法庁や貴族に差し出さねばならない。それが、身分制度を支えていた。そうした不公平を無くし、「平和と平等」を実現するためにこそ、ドラクロワは、王座を欲するのだという。

「私が聖王の座を欲するとすれば、それを棄てるためだ。分かるか、ジーク」

棄てるために、手に入れる――そんな事を考える男は、ドラクロワくらいだった。

そしてその考え方こそ、真に贅沢でさえあった。富に執着し、貧民から更に税を搾り取ることしか考えていない聖堂や貴族の者に比べて、なんという豊かな心だろうか。

「まぁ……それを実現するためには、兵も糧食も――金も、必要だがな」

ドラクロワはいたずらげに言う。だが、兵も金も、反対勢力を抑える手段であって、目的ではない。自分の勢力を守るために汲々とする他の騎士達には全く無い、高潔さだった。

自分もまた剣を棄てよう。そのときジークは改めて誓っていた。いつか剣を棄てるためにこそ、剣を振るおう。心が剣を手放した次は、この手が剣を放す番だ。

「いずれお前を、騎士にするつもりだ、ジーク。そして共に理想を実現して欲しい」

ドラクロワは、言った。ジークはうなずきながら、そのとき、夢を見ていた。果てしなく、熱く、胸の高鳴る夢を。いつか、ドラクロワが、聖王の座に即いたとき――騎士となったジークが、王となったドラクロワの前に歩み寄り、剣を捧げるのだ。剣を手放すために騎士となった男が、王座を棄てるために王となった男に、忠誠を誓うのだ。

何のために戦うのか？　そう問われれば、こう答えるのだ。

ある男とともに、全てを棄て、みなを王にする――そのために、戦っているのだと。

光は、月光であった。巨大な空洞を抜け、一転して、整然とした祭壇の間となっていた。

天窓から降り注ぐ月光と、それを反射する床が、部屋全体を、幽白く輝かせている。

ジークは、血の痕を残しながら、広間を横切り、祭壇の前で、立ち止まった。

そこに、巨大な壁画が、見る者を圧倒させる精緻さで、描かれているのだ。

天界の神々と、堕界の神々が、激しく戦いを繰り広げ、その下方では、戦いに敗れて落ちゆく両極の神々の屍が積み重なり、新たな大地が、誕生していた。

「我々の世界――〈狭間の世界〉の、天地創造図だ」

ふいに背後から声をかけられ、ジークは、咄嗟に立ちすくんだようになった。

「その絵を見ろ……新たな世界で、生まれたばかりの人間達が、神々を真似て、兄弟同士、

殺し合いをしているのが、分かるだろう」

声の言う通り、そこで、神々に比べてあまりに小さな二人の人間が、剣を手に向かい合っている。そして、その彼らの頭上に、複雑な聖印が、十字状に刻まれていた。

「原罪の聖印――人類最初の殺人が、兄弟同士であったことを表す聖なる罪のしるしだ」

そう囁く背後の人物を、ジークは、ゆっくりと、振り向いた。

十歩ほどの距離を置いた、広間の中央辺りに、一人の男が、佇んでいる。

かつて、自分を見いだし、導き、そして、置き去りにした男――

暗く青ざめたマントと、長い銀髪が、月光を受けて淡く輝き、氷像のごとき白皙の美貌を薄く微笑ませながら、群青の目に凄烈な眼光をたたえて、ジークを見つめていた。

「ドラクロワ……」

ジークが呼ぶと、男は応じるように、その右手をかざした。宙で何かをつかむように動くや、黒い靄が生じ、その靄が一瞬にして、漆黒の剣と化し、男の手に握られた。

二人の男が、剣を手に、無言で見つめ合った。それまで知らずにいた初めての行いに身を震わせながら、人類の始まりにおいて神話の罪を犯そうとする、壁画の兄弟そのもののように――互いに、対峙し合っていた。

「長い間、この原罪の聖印は、効力がはっきりしない、謎の聖印とされていた……だが、隠された謎の答えは、全て、この書に記されていた」
ドラクロワが冷然と囁いた。刹那、ジークが弾かれたように、横に跳んでいる。
マントの裏に隠れたドラクロワの左手から黒い稲妻が迸り、ジークがいた空間をなぎ払ったのだ。迅魔も素早く散開したが、数体が宙で撃たれ、闇色の火花を散らし砕け散った。
「さすがに……三年前とは違うな、ジークよ」
ドラクロワが、左手に携えた一冊の書を、明らかにしながら、言った。
「お前は、どうなんだ、ドラクロワ……。変わったのか……あの頃と……」
ジークが、切として剣を構えた。ドラクロワは、優しげとさえいえる微笑を浮かべ、
「いつの頃だ……ジーク。シーラが、死ぬ前のことを言っているのか」
漆黒の剣を手に、走り込んできた。瞬時に迎え撃たねば、一刀で斬り倒される。そう確信するほどの殺気が、ドラクロワの総身に、みなぎっている。その殺気に引き込まれたように、ジークも、咄嗟に相手に向かって飛び込み、剣尖が、光芒しか見えぬ速さで迅った。
空気を焦がして突き込まれる剣風を、頬に受けんばかりの近さでドラクロワがかわした。
信じがたいしなやかさで、ドラクロワの体が、ジークの懐に入り込んでくる。
ジークが、刃を返し、突き込んだ剣を、そのまま振り下ろした。刃は、ドラクロワの肩

を斬り割った——かに見えた、そのときである。

ドラクロワの姿が、朧ろにかすみ、刃が、その肩をすり抜けたではないか。

——幻術！　ジークの胸中を、閃光のように、その言葉が、走った。

瞬間、ジークの背後に、いつの間に回ったのか、ドラクロワの姿が、いた。

姿を見ずとも、壮烈な殺気を察した。横っ飛びにかわすジークへ、漆黒の稲妻が迸った。

稲妻が背をかすめ、衝撃に床に叩きつけられ、すぐさま転がり起きた拍子に、魔獣にやられた脚の傷から激しく血が噴き出している。傷の痛みに歯を食いしばりながら、ジークは、ドラクロワが優れた剣技を持つだけでなく、幻術の達人であることを思い出していた。

かつて——理想を唱えるドラクロワに、聖堂や貴族の反対派が、何度となく刺客を差し向け、彼らの暗殺から身を守るために、ドラクロワは、幻術を修得したのだ。

その幻術が、今、使われたということは、ドラクロワが、まさしくジークを、敵とみなしていることを意味した。ドラクロワは、決して、味方には幻術を用いなかった。

「なぜだ……ドラクロワ」

そのとき、ドラクロワに向かって、迅魔達が、命令もなく飛びかかった。その真紅の爪は、しかしドラクロワに、かすりもしない。次々にドラクロワの幻影をすり抜け、そして突然、漆黒の稲妻が吹き荒れるや一瞬で全ての迅魔達が、木っ端微塵に打ち砕かれている。

ジークが、目を見開き、歯を食いしばった。剣を握りしめ、血まみれの脚を引きずり、
「そんな書を握りしめて……いったい何を笑っている、ドラクロワ……」
「外典がもたらす死の雷の試練……魔兵ごときに、越えられるものではない」
「……試練だと」
ドラクロワが凄惨な笑みを浮かべた。刹那、書から漆黒の稲妻が奔った。
咄嗟にかわそうとするが、傷の痛みがジークの跳躍力を著しく奪っていた。宙でまともに黒い稲妻を浴びた。目がくらむほどの衝撃とともに、激しく壁画に叩きつけられ、壁画で剣を向け合う兄弟の絵の一方が、ジークの血に染まり──彼らの頭上に刻まれた聖印が、血に濡れ、ふいに、青白い光を帯びていた。その聖印をドラクロワが見つめ、
「原罪の聖印は、凄惨なる戦いの気配によって覚醒する……。多くの強者を、この地で戦わせるため、情報を流したが、結局、辿り着いたのは、お前だけだった……」
「やはり、お前……地図を……マグノリア大聖堂……」
ジークが、苦痛に身を震わせながら、切れ切れに、言葉を発した。
ドラクロワが、冷然と、無言で、それを肯定している。
「お前……、ミーメに、攻め込んだのか……」
「ミーメの里だけではない……この三年、実に多くの土地を訪れ、遺跡を暴いた……」

「なぜ……、ミーメ……里を焼いた……」
「過ちを、焼き払っただけだ。過去の理想を、焼いたのだ」
ジークが、かっと目を見開いた。震える指で剣を握りしめ、ゆっくりと、身を起こした。
「もし、お前が、理想を失い……俺達の戦いの理由を忘れたと言うのなら……俺が、今ここで、お前を、斬る……ドラクロワ」
手にも足にも力が入らず、一歩も進めぬまま、足下に、血だまりが出来上がってゆく。
それでもジークが、悲しみを怒りに変えて立ち、一心に、ドラクロワを見据えるや、
「理想は、失われてはいない……」
ドラクロワが、静かな、語るような声で、言った。
「外典のもたらす死の雷を受けよ……。真実を見せてやる……ジーク」
ドラクロワの言葉とともに、その書が、激しく、闇色の雷花を咲かせた。
そのときであった。にわかに、広間に駆け込む、複数の足音が反響し、
「幻です……！　本物は、祭壇の右側に立っています！」
「兄の、みんなの仇っ！」
二人の女の鋭い声とともに、耳をつんざかんばかりの轟音が立て続けに起こったのだ。
ジークが見つめる前で、ドラクロワの持つ書に咲いていた黒い雷花が、消えた。

それればかりか、ドラクロワ自身の姿までもがかき消え——祭壇の横で、青ざめたマントが翻り、そこにドラクロワが、現れるではないか。更には、漆黒の剣が、黒い靄となって消え、空になった右手が、鮮血を流す胸を撫でた。

「銀銃か……なかなかの聖性だ」

赤く染まった自分の右手を見つめ、ドラクロワが、うっすらと、笑って言った。

ノヴィアとアリスハートが愕然とし、アーシアはそれ以上の驚きに打たれたように、

「その声……まさか、そんな……」

蒼白になり、武器を握りしめた両手が、激しく震え出している。

「その顔立ち……アーシアか」

ドラクロワが口にするや、アーシアの総身が、びくっと戦慄いた。

「〈浄める者〉の称号を受けたミーメの里の期待の子が……怨みで私を追ってきたか」

途端、アーシアは膝まで震え出し、子供が泣くような声で、男の名を、呼んでいた。

「フス教父……」

ノヴィアとアリスハートが、ぽかんとなって、アーシアとドラクロワを見つめた。

ドラクロワは冷たい微笑を浮かべている。つと、血で濡れた右手で自分の顔を覆い隠し、

「フスのときは、声だけは、元のままだったな……」

手をどけたとき、声はそのままに、その顔が、もっと歳のいった、柔和な感じのものになっていた。アーシアが息をのんだ。かと思うと、更に顔を手で覆い、

「ミーメの里を、最後に訪れたときは、こうだったか……」

再び顔をさらすや――アーシアの口から、悲鳴が迸っていた。

ドラクロワの顔が、悪辣な印象の、瞳の色も真紅に輝く、凶暴な顔つきに変じ、

「これならば、私のことを、仇として見やすくなるのではないか」

声までもが、どすの利いた、こもったようなものに、変貌していた。

アーシアが絶叫し、握りしめた武器が轟音を放った。虚無の弾丸は、しかしドラクロワの額に当たる寸前、不可視の手でつかまれたかのように、ぴたりと宙で静止している。

「無駄だ」

悪意そのもののような顔でドラクロワが言う。弾丸が、澄んだ音を立てて床に落ちた。

ドラクロワは、顔をひと撫でして元に戻すと、無表情に、手を、自分の胸にかざした。

すると、胸を抉った血まみれの二つの弾丸が、ひとりでに抜け落ち、手の動きに合わせて、ばらばらと床に転がるではないか。ノヴィアとアリスハートは愕然として動けず、アーシアに至っては弱々しく膝をつき、もはや完全に戦意を失い、呆然と泣いていた。

「いったい、なんで……なんでよぉ……」
ドラクロワが、壁画を振り返り、無造作に歩み寄った。
ジークが、歯を食いしばって剣を掲げた——途端、ふっと、ドラクロワの姿が消え、
「聖櫃を開く鍵……〈三聖印〉の一つ、原罪の聖印が、今、私の手に入る」
ジークの真横に、ドラクロワが現れていた。咄嗟に剣で宙をなぎ払うが、
「三つの聖印が揃い……外典に記された秘儀が現れるその時、お前の命、私がもらう」
今度は背後から声がし、振り返った瞬間、迸った漆黒の稲妻に、弾き飛ばされていた。
ノヴィアが悲鳴を上げ、もんどり打って倒れるジークに駆け寄った。
「死の雷……幾度も受けてなお、命が尽きぬ事を、誇れ……ジーク」
ドラクロワが、書を懐に収め、左手で、胸から流れる血を撫で、壁画の聖印に触れた。
聖印の上で、ジークとドラクロワの血が混じり合い、漆黒の稲妻が乱れ交った。
そして壁から手を離すや、壁の聖印が、光の紋様となって宙に浮かび上がり——激しい音を立てて、ドラクロワの掌中へと、吸い込まれていったのだった。
壁には、もはや、そこに聖印が刻まれていた痕跡さえ、残っていない。
ドラクロワは、苦悶に呻くジークを一瞥し、そして、ちらりとノヴィアを見やった。
「良い目を持った従士だ……これならば、ジークが、辿るべき道を誤ることもあるまい」

呟くや、マントを翻し、ノヴィアでさえ見つけられぬほどの鮮やかさで消え去り、
「なんなの……、なんで……なんでよ……」
重いほどの静けさが残り、アーシアのすすり泣く声が、哀しく尾を引くばかりだった。

5　越えゆく者達

聖都では英霊祭が始まっている。大陸各地から作物を載せた馬車が到着し、英霊達を称えながら街路をねり回る。都市中が大勢の人で賑わう一方、クレア大聖堂はひっそりと静まり、執務室にいる聖王と、傍らに立つ賢老院の老人もまた、いたって静穏だった。
「……我、当地にて駐屯せし軍勢を撃滅し、首謀者の存在を確認するもこれを追えず」
情報官が報告書を読み上げると、老人がしぶい顔で、
「幾千万の軍勢を討とうとも、ドラクロワを取り逃がしては、意味がない……」
情報官は、緊張した顔でうなずき、聖王に歩み寄って書状を差し出した。
「……こちらの書状は、私にも読み上げること、かないませぬゆえ……」
澄み渡る空の色をした聖王の目が、鋭く細められた。書状に、秘事を示す印があったのである。聖王が書状を開くと、情報官が退室し、部屋には聖王とその老人だけになった。

「……ムルドア聖堂が、ドラクロワに協力したそうだ」
聖王が、書状の内容を、短く告げた。老人が、驚きに目をみはって、
「あの聖堂は、聖法庁に対して反抗的でしたな。ドラクロワが上手く利用したのでしょう。理想が全てと言っていた若者が……いつの間に、謀略を巡らすようになったのやら」
驚愕を振り払うため、呆れたような笑みを浮かべる一方、聖王は、厳然と言った。
「……至急、諜報院を使い、黒き騎士ジークに、勅令を届けさせよ」
諜報院とは、聖王直属の情報部隊である。老人は再び驚愕に打たれ、笑みを失った。
「かの黒き騎士に、秘事を託すおつもりですか……？」
「ドラクロワの目的は、〈三聖印〉を、集めることだ」
「〈三聖印〉……？　聖典の詩篇の歌ですか？　三つの聖印が、浄めの神を解き放つという……本当なのかどうかも分からない伝説を歌った歌……」
「そう……そして、伝説の背後には神がいる。黒き騎士が〈三聖印〉について問うてきた。そして、ドラクロワは今や死の雷を乗り越え、外典を手中に収めている」
「死の雷……。真理を知ろうとする者を、試すという……聖典のたとえ話では？」
「そうではない……死の雷は、実在する。死の雷を越えて初めて、外典に記された秘儀を知り、そして、王の試練を受けられる……」

「王の試練……？」
「外典は、王の試練と呼ばれるものをもたらす。聖王だけが受けることの出来る試練を」
「聖王となった者だけが……。だから、王の試練と呼ばれているのですか？」
「そうだ、フォード――我が信頼すべき従弟よ。お前にだけは、教えておこう……」
聖王が、老人を見つめ、言った。
「死の雷を越え、外典の秘儀を知り……そして王の試練を越えて〈三聖印〉を目覚めさせるとき……この世を支配する力が、与えられるのだという……」
「この世を支配する力――!?」
「いまだかつて、どの歴代の聖王も、王の試練を最後まで乗り越えたことはない……」
聖王の声音が、重々しさを増して部屋に響いた。
「ドラクロワが、〈三聖印〉を集めることを……何としても、防がねばならん」

「ご飯だよぉー」
明るく浮き立つようなアリスハートの声が、暮れなずむ丘に佇むジークを呼んだ。
一帯には、無数の墓標が並んでいる。大半が、当地を占拠していた兵の墓だ。
それらの墓の上をすいっと舞い飛ぶアリスハートは、ふと、ジークのそばに一人の馬上

の男がいることに気づいた。一見して行商風のその中年の男は、何かをジークに渡し、ひと言ふた言話すと、すぐに馬を駆って、去っていってしまった。
「ねぇ、今の人、誰ぇー？」
アリスハートがやって来ると、ジークは、やけに重々しい飾りのついた書状を手に、
「諜報院──聖法庁の、密偵だ」
言って、書状に目を走らせた。同封されていた地図を確認し、懐にしまうと、
「次の行き先が決まった。……明日、出立する」
シャベルを肩に担ぎ、戦死者を葬り終えた原を、眺めた。この地での戦いから四日目の夕暮れである。戦いの後、みなでムルドアの僧院に寝泊まりしていた。水洗もあり、寝具も上等で、糧食はたっぷりあった。快適な四日間を過ごし、心身ともに充実していたが、
「行き先が決まったのはいいけど、アーシアさん……どうするんだろう」
道すがら、アリスハートは、ぽつんと言ったものだ。ジークの頭上に舞い降り、
「アーシアさん、ずうっと閉じこもったままだよ。口もきかないし、食べるのも少なくなってくし。フス教父が、フス教父がって、ずっと呟いててさ……大丈夫かなぁ」
言いながら、ジークの燃えるような赤い髪を、ほうぼうで三つ編みにしてゆく。
「狂うかもしれん」

ジークの言葉に、アリスハートは、ぎょっとなってジークの髪を握りしめた。
「ど、どういうことさ、狂うって」
「これまで、多くの戦士が、戦場で心の拠り所を失い、狂い死にしてゆくのを見てきた」
「そんな……そんなのって……ひどいよぉ」
アリスハートが、しょぼんとなってジークの髪を放す。赤い髪が風にほどけてなびき、
「癒せぬ傷……」
ジークが、そっと呟いた。ジークにとって、かけがえのない女性が残した言葉だった。
体の傷は癒せても、心の傷までは癒せない――そう言って、自分の無力さに嘆き、涙を流す女性の姿が、いっとき、ジークの胸中を去来していた。
(何もしてあげられない――私は、この戦場にいる人を誰一人として救えなかった)
ジークは小さくかぶりを振った。そんなことはない――そう言ってやりたかった。少なくとも俺は貴女に救われたのだと。だが言葉にならなかった。あのとき、彼女の嘆きの深さが察せられたからこそ、ドラクロワも自分も、何も言ってやることが出来なかったのだ。
「ジークは、大丈夫なの……？」
アリスハートが頭上から声をかけ、ジークを、追憶から引き戻していた。
ジークは、なんとない違和感に、眉をひそめながら、

「……大丈夫？」

「あの……ドラクロワってやつさ、アーシアさんの武器にやられても、全然効いてなかったじゃん。あいつ、不死身なの？　死なないの？」

「外典が、あいつに力を与えているらしい。聖王からの密書に、そう書かれていた」

「外典って、あの、真っ黒い雷を吐く本のこと？」

「そうだ。外典イザーク書——試練を乗り越えた者に、絶大な力を与えるそうだ」

「試練……？　本が試練を与えるの？」

「そうらしい。死の雷……ドラクロワはそれを乗り越え……外典の力を操っている」

「ねえ……そんなヤツに、勝てるの？」

「前回は負けた」

至極あっさりと、ジークは言う。

「別に……ジークがやらなくても、いいじゃん」

アリスハートが、ぽつりと言葉を零した。そのときふいに、ジークは、先ほど感じた違和感の正体を悟った。アリスハートが、ジークのことを、狼男と呼ばず、

「いつの間に、俺のことを名前で呼ぶようになった？」

訊くと、アリスハートは何となく、もじもじとジークの頭の上で赤い髪をいじりながら、

「あんたが、チビって呼ばなければ、あたしもあんたのこと、狼男って呼ばないよ」

珍しく、ジークの頬に、あるかなしかの、かすかな笑みが浮かんでいた。そして、つと立ち止まり、焼けつくような夕陽に、木々も建物も赤く染まる様を眺め、

「王の試練……死の雷……。その向こうで何を見たんだ……ドラクロワ」

魅入られたように呟くジークに、アリスハートが、ちょっと不安そうになって、

「ねぇ、大丈夫ぅ、ジークったらぁ。ねぇ、こらぁ、狼男ぉっ」

「ああ……大丈夫だ」

「あのさぁ……別に、あんたがあの男を倒さなきゃいけないわけじゃないじゃない。偉い人は命令ばっかり送ってきて、味方なんか一人も来ないじゃない。だから、もう……」

「あいつが、俺を待っている。俺も、あいつの真意を、まだ確かめていない」

「……もし、あんたが死んでしまったら、ノヴィアが、悲しむよ……。あたしだって……悲しいかもしれないよ」

ジークは答えない。アリスハートは、その頭から舞い飛び、声を張り上げた。

「もし、あんたが死んだら、誰が見ても笑っちゃうような、みっともないお墓を作っちゃうよぉっ。それが嫌なら……」

「死ぬ前に、まだ、越えなければならないものがある。あいつに、辿り着くために」

ジークは、静かな目を、遥か彼方に向けたまま、言った。

6　黒衣の天使

「ジーク様……。アーシアさんが……部屋にいないのに気づいて探したら、神殿の方に」
僧院に戻るなり、ノヴィアがあらぬ方を見ながら指さした。ジークは、厳しい顔で、シャベルの柄で、とんとんと肩を叩くと、
「様子を見てくる。お前達は、ここにいろ」
一人、神殿前へ向かった。四日前の戦いでは、大量の増殖器が並んでいた場所である。増殖器の残骸を全て焼き払っても、辺りには首筋に寒気が走るほどの瘴気が満ち、植物は枯れ、土は灰色になって荒れ果てていた。
ジークが来たとき、アーシアは、その淀んだ空気の中に立ち、両手を天に向け、一心に何かを祈っているように見えた。かと思うと、アーシアを中心に、清冽な風が吹いた。冷たく肌に透き通るような冴え冴えとした風が、淀んだ空気を切り裂くように広がり、アーシアの横顔が、かすかな微笑を帯びたとき、辺りは一転して清浄な空気に満ちている。
「〈浄める者〉――これほどの力か……」

ジークは瞠目し、思わず自分の左腕を撫でた。強い聖性の影響で、自身にやどる堕気——特に〈招く者〉としての聖印を刻まれた左腕が、強く疼いているのだ。
「浄めの力を使うのは……なんだか久しぶり」
アーシアが、ジークを振り向いて、言った。
「貴方の言う通りね。銀銃の弾丸を……虚無を、造り出すことばかり考えてた。そのせいで、忘れちゃったみたい……自分の心を、綺麗にする方法を」
自分の衣服の胸元を握りしめながら、アーシアは弱々しい笑みを浮かべ、
「風は浄められても……自分の心は、浄められないまま……胸が、苦しいの」
晩秋の朱茉樹の葉色をした目に、みるみる涙が浮かぶ。夕陽に輝くその悲しい顔に、
「俺が知っている〈銀の乙女〉も……同じようなことを、言っていた」
ジークはふいにまた、死んだはずの女の面影を見いだしながら、呟くように言った。
「傷は癒せても、心は癒せない……シーラ・リヴィエールという女が、言った言葉だ」
「私、その女を知ってる。シーラ……〈癒す者〉。私と同じ年に称号を与えられた〈銀の乙女〉は、みんな知ってるわ。だって、授章式で、私達に紋章を授けてくれた人だもの」
ジークはうなずいた。遠い昔——シーラは、戦場での功績を称えられ、公式の場に、よく引っ張り出されていたものだ。

「とても綺麗な人だったな……私に、〈浄める者〉の称号を与えてくれた人。ねぇ、なんでその人、心は癒せないままだなんて言ったの？」

「……昔、こういうことがあった」

ジークは、ぽつぽつと話し出した。昔、ジークが負傷し、シーラに傷を癒されたときのことだ。他にも負傷者は大勢いて、みな、シーラの癒しの力を求めていた。

だが、中には癒されることを拒む者がいた。そいつは口も利けないほどの重傷だったが、シーラの必死の働きによって命を救われ、戦場に復帰出来るところまで回復した。そしてそいつは、戦場に戻る前の晩、剣を、自分の喉に突き立て、死んでしまっていた。

「自殺……。なんで……？　せっかく生き残ったのに……」

「噂では、仲間に裏切られ、絶望したらしい。そうでなければ、単に、戦場に戻ることが、死ぬことよりも、嫌だったんだろう。戦場では……よくあることだ」

そう告げるジークの耳に、ふいに昔聞いた、鬨の声が甦っていた。剣を振るい、血で血を洗う光景が脳裏をよぎり、かつての出会いの記憶が、一瞬のうちに去来していった。

かつて——ジークが、ドラクロワと出会って間もなく、激戦があった。

かろうじて自軍が勝ったが、敵味方ともに多くの死傷者を出し、ジーク自身も無数の傷

を負い、自陣に戻るなり、意識を失っていた。

再び目覚めると、負傷者用の幕舎の、見慣れた緑色の天幕が見えた。いつものように、生き残った実感を噛みしめていると、ふと、包帯と毛布がやたらと綺麗なのに驚いていた。

いつもなら、使い古しの、ろくでもない物が、使用されるのだ。

そして、傍らに、見たこともないほど澄んだ目をした女がいて、ぎょっとなった。

「私は、シーラ・リヴィエール。救護士として派遣された〈銀の乙女〉です」

ジークの治癒が、彼女が戦場に来て最初の大仕事だった――そう告げる彼女を、ジークは、息をのんで見つめた。翡翠のような日に、長い蜂蜜色の髪。ほっそりとした面立ち、透き通るような白さの頬に、淡やかな優しい微笑を、帯びている。

「休んで。〈癒す者〉としての私の仕事を、無にしないで」

起き上がろうとするジークを、彼女の、折れそうなほど細い手が、不思議な力を込めて押し返していた。シーラが、とてつもない聖性の使い手であることは、すぐに分かった。触れるだけで、傷が癒えるのである。そしてそれ以上に、その手の暖かさが、戦いで荒れていた心を、柔らかく静めるような、不思議な感覚が、あった。そこへ――

「容態はどうだ！　大丈夫か、ジーク、ジーク！」

突然、ドラクロワが、自分もジークと大差の無い、包帯だらけの姿で、駆け込んで来た。

するとシーラが怒った顔で、そっと自分の唇に人差し指を当て、ドラクロワに向かって、
「しーっ」
と、静かにするよう命じた。それだけでドラクロワを黙らせた人間は、後にも先にもシーラただ一人だ。うろたえたようになるドラクロワへ、シーラは微笑し、穏やかに告げた。
「貴方のお友達は、無事よ。兵隊思いの、指揮官さん」
ドラクロワは、ジークに歩み寄り、目が合うと、ほっと安心し、そして怒り出した。
「何度も先に行けと言ったものを。私を担いで敵を突破した挙げ句に、そのザマだ」
「違う。あんたが俺を背負って帰ったりするから、あんたまでそんな目に遭ったんだ」
実際は、互いに肩を担ぎ合い、命からがら帰り着いたのだが、相手が自分のせいで傷を負ったのだと、本気で怒ったように言い合う二人を、シーラが、おかしそうに笑った。
「友達思いなのね、二人とも」
途端に、ジークが、ドラクロワから顔をそむけ、
「ただの上官だ。友達なんかじゃない。余計な事をするから自分まで怪我をするんだよ」
言い放つや、ドラクロワがむっとなって何かを言おうとするのを、シーラが遮り、
「どうして？　友達だと信じて裏切られたら、とても傷つくから？」
恐ろしく率直に訊いてきた。口ごもるジークの肩に触れ、シーラは穏やかに微笑した。



「大丈夫。どんなに傷ついても、私が癒してあげるから」
これにはさすがのジークもドラクロワも唖然となった。だが実際シーラは、派遣されてすぐに多くの兵の心の支えになった。その類い希なる聖性の強さと、そしてその微笑みに、多くの者が救われた。彼女は、兵が失いがちの、優しさと勇気を常に取り戻させてくれた。
「シーラが来なければ、ジークはいつまでも、私に噛みついてばかりだったろう」
そうドラクロワが言えば、ジークも負けじと言い返し、
「シーラがいなければ、ドラクロワの理想を俺一人で全部、聞かなきゃならなかったよ」
そのたびに、シーラは穏やかに微笑を返したものだ。
そして、その不思議な力に満ちた微笑を、崩れ去らせたのが、兵士の自殺であった。
シーラにとっては、自分の聖性を振り絞って癒した兵士である。
そのシーラの思いも誇りも、全てを打ち砕くように、兵士は、自ら命を絶った。
自殺は、聖法庁の教えでは大罪とされ、正当な埋葬を禁じられる。自殺した兵士の遺体は野ざらしにされ、野生の獣の餌にされるのだ。その話を、誰かが、シーラに教えた。
ジークとドラクロワが駆けつけたとき、シーラは、野ざらしにされた遺体のそばで、血の臭いを嗅ぎつけてきた野犬に、必死で石を投げつけ、追い払おうとしていた。
蜂蜜色の髪もくしゃくしゃで、涙でぬれそぼった頬が、幼い子供のようだった。

ジークとドラクロワが、野犬の群を、斬り払い、追い散らした。そして、兵の遺体のそばで泣きながら動こうとしないシーラに、ジークが、言ったのだ。
「あんたは戦場には向かない。故郷に帰って病人や怪我人の相手をしてた方が良い」
シーラが、きっと顔を上げ、涙で濡れた翡翠の目で、ジークを睨んだ。あまりに鋭い眼差しに、ジークが絶句した。次の瞬間、シーラの細い手が、ジークの頬を、思い切り引っぱたいていた。ジークも驚いたが、それ以上に、叩いたシーラ自身が、驚いたように、
「ごめんなさい……」
消えそうな声で、詫びていた。そのか細い声に、ジークは、叩かれた痛みとは、別の痛みを心に感じ、何も言えなくなった。代わりに、ドラクロワが、穏やかに問うた。
「なぜ君は、戦場に来たんだ、シーラ」
シーラは、ジークの頬を叩いた手を、痛々しそうに胸に抱えながら、
「……私の父は、騎士だったわ。どこか知らない戦場で、私と母を置いて、死んでしまった。救護団が間に合わずに死んだって、父の戦友が言ったの。助かる命だったって……」
声が、か細い嗚咽に変わった。ジークとドラクロワが見つめる前で、シーラは、
「助かる命だったのよ……！」
哀しい声で、叫んでいた。それは、シーラの父のことであり、自殺した兵のことでもあ

った。戦場で死ぬ多くの兵の命のことであり、それがシーラの、一番深い思いだった。
「そいつを、葬ろう」
ジークが、ぽつりと、言った。シーラが驚いてジークを見た。ドラクロワは溜息をつき、
「……聖法庁の教義に、反するがな」
呟きつつも、ジークが、自殺兵の墓を密かに掘るのを、手伝った。
兵の名も宗派も、たちどころに見抜くジークに、今度は、シーラが呆然とする番だった。
その後も、傷が癒えたはずの兵達が、ある日突然、自ら命を絶つということは続いた。
そのたびに、ジークは彼らを葬り、ドラクロワもそれを手伝いながら、ぼやいたものだ。
「ばれたら、騎士団長を解任されるどころではないな。聖法庁への裏切り行為だ」
「だったら、やめればいい。俺一人で、こいつらを葬る」
「聖法庁を裏切るよりも、今の私自身の心情を裏切る方が、嫌だよ」
それ以外に、自殺でなくとも、シーラが癒した兵達の中には、一日中うずくまるだけの廃人と化す者や、食事をせず、糧食が豊富であるにもかかわらず餓死する者もいた。
「自殺じゃないわ――殺されたの、彼らは戦場に殺されたのよ。彼らも立派な戦死者よ」
誰かが、自ら命を捨てるたびに、シーラは、そう言い続けた。
「戦場を無くしたい。戦場が憎い……。私は、この戦場と戦いたい……」

この世から戦場を無くす――それが、シーラの胸にやどった、灼熱のような思いだった。
そうして、いつの頃からか、シーラは黒い衣ばかり着るようになった。
あれは、戦死者のために喪に服しているのだ……兵達は、そう噂しあった。そしてこれ以上、一人も死なせたくないという思いを込めて、兵の命を救おうとしているのだ。
戦場に舞い降りた、黒衣の天使――それが、戦場でのシーラの通り名になった。
やがて次の戦いで、ジーク達の陣営が、完全に一帯を占拠したとき――
「貴方達、喜ばないの……？」
シーラが、陥落した砦を、淡々と眺めるドラクロワとジークに、訊いていた。
ドラクロワもジークも、戦いの向こうに理想を見ていた。だから砦一つ陥としたところで、歓喜はしない。理想の実現のための戦場は、まだまだ続くのだ。その理想を、
「私も、聞いていい……？　貴方達が抱いているものに、私も触れていい……？」
まるで少女のような顔で、シーラは、訊いていた。
「理想を求める者に、分け隔ては無いさ」
ドラクロワが快く承諾し、
「女が加わるとは思わなかったよ」
当時十七歳になったばかりのジークは、憮然としながらも、内心では、美しいシーラの

もまた共感し、ともにその戦いに参列したのだった——

参加を喜んでいた。そうしてドラクロワとジークの「平和と平等」という理想に、シーラもまた共感し、ともにその戦いに参列したのだった——

自殺した兵の話に耳を傾けていたアーシアが、突然、苦しげに胸を押さえて膝をついた。素早く歩み寄るジークの腕に、しがみついてきた。嘔吐をこらえるように顔をしかめ、
「胸が苦しくて、むかついて……眠れないの。夢に、私が殺した人達が、出てきて……」
そう言って、すがるような目を、ジークに向けてくる。
「ねえ、ジーク、〈赤竜〉は、貴方の、昔の渾名なんでしょう?」
「……そうだ」
「フス教父は……ドラクロワは……」
ジークが答えようとした途端、アーシアは高い悲鳴を上げて泣きじゃくっていた。
「言わないで! 怖いのよ! 聞かなくちゃと思っても怖くて聞けないの! 心がバラバラになりそうなのよ。ねぇっ、助けてよっ! 私はどうすれば良いのか、言ってよっ!」
アーシアの頬を、涙が、幾筋も流れ落ちた。その細い肩をつかみ、ジークは、
「復讐を忘れ、里に帰れ。ドラクロワは、ミーメの里の……お前の、敵う相手じゃない」
相手の正気を呼び戻すように言った。だがアーシアは、いっそう泣き喚き、目がどんど

んうつろになり、ドラクロワが里を攻めた際に死んだという兄を眼前に見るように、
「兄さん、待って……待って……待って！　殺さないで……殺さないで！」
狂いゆく兵そのものとなるアーシアを、ジークは、哀しい顔で、じっと押さえ続けた。
ひとしきり泣き叫び、倒れるように眠るアーシアを、ジークが僧院の一室に運んだ。
アリスハートが心配そうにアーシアを見つめ、ノヴィアが、ぽつりと、
「この女は、まだ、戦う気でいるのでしょうか」
「強い憎しみが、戦うことを、やめさせてくれないんだろう……」
「でも……憎む相手が、自分が尊敬していた人だったなんて……信じられません」
ノヴィアが、ジークを見た。ドラクロワを、フス教父と、アーシアが呼んだ理由を、問うているのだ。だがジークは、アーシアを見つめたまま、
「こいつのせいじゃない……」
そう呟くばかりだった。部屋を出るジークに、
「アリスハートから、明日、出発と聞きましたが……」
ノヴィアが、質問を変えて言った。アーシアを、どうするのかと言外に訊いていた。
「まだ、葬るべきものが残っている……。出発は、それが終わってからだ」
ジークは、そんな風に言って、ドアを閉めた。

第三章　騎士の夢

「お前は、王座を棄てるために、王座を手に入れるんだろう」
そのとき、ジークは言った。
「なら……俺も、いつか剣を棄てるために、剣を振るうよ」

1　刻まれ子

夜半――。ノヴィアとアリスハートが眠りに就き、ジークが僧院の一室で一人、ベッドに腰掛け、シャベルを磨いていると、ふいに、部屋の外に、気配が起こっていた。
ジークは、特に気にかけもせず、シャベルから剣を抜くと、手入れを始めている。
やがてドアが開き、法衣姿のアーシアが、無言でそこに立った。
「入っていい？」
ジークは、獣油ランプの灯りを受けて火のように輝く刃を黙々と磨き続けながら、うな

ずいた。アーシアは部屋に入り、ドアを閉め、震える声で、言った。
「聞きたいことがあるの……」
ジークはまた無言でうなずいた。だがアーシアは、黙って立ったままジークを見つめている。獣油ランプの火の音だけが静かに響いた。やがて、ジークがぽつりと言った。
「お前は自由だ」
アーシアがはっと目を見開いた。ジークは、磨く対象を、剣から籠手に替えながら、
「ミーメの里の成り立ちなど、お前には関係ない。多くの里が、力を持つ者を集め、育てたことも、今のお前の命には、何の関係もない」
アーシアの身が、戦慄いた。何かに耐えるようにきつく目を閉じ、
「聞かないと……話を聞かないと、私は、もうどこにも進めない。どこにも帰れない」
必死に自分に言い聞かせ、再び目を開き、そろそろと息を吐きながら、法衣をはだけた。
既にベルトを解いた胴衣から、あらわとなった肌を、見せた。
ジークは、静かな顔のまま、アーシアを一瞥し、すぐに、目を籠手に戻した。
「刻まれ子か……」
アーシアの、両腕で隠した胸のふくらみの間から、腹へかけて、ジークの左腕と同じように、聖印が、肉体に直接、刻み込まれているのだ。アーシアは法衣の裾を握りしめ、

「刻まれ子……そんな風に言われたの、初めて。この聖印が、私達みんなの希望のしるしだって……そう言われて……子供達みんな、これを体に刻まれたの」
「昔、口が利けなかったと言っていたな……。精神的な理由もあるだろうが、原因の大半は、その聖印だ。俺も、聖印と体のつながりが出来るまで、まともに歩けなかった」
つながりの試練に敗れれば、確実に死ぬ。だが試練を乗り越えさえすれば、強い力が手に入るし、多くの聖印が自在に操れるようになる――そう、ジークは言った。
「恐怖を与えては、聖印と体がつながりにくくなる。だから何も言わなかったんだろう」
淡々と告げるジークを、アーシアはじっと見つめ、そして、震える声で、訊いた。
「私は……何なの？」
ジークは、籠手を磨く手を止めた。ひどく遠い場所を見るように目を細め、
「叙印権制度は……俺とドラクロワ、そしてシーラの三人で、申請した制度だった」
アーシアが息をのんだ。アーシアにとって里を成り立たせてきた制度であり、その権利を取り戻すために、ドラクロワを討つ旅に出たのだ。だがジークは制度が失敗だと言い、そして今、その制度をもたらした者こそ、ジークでありドラクロワであると言っていた。
「各地の聖堂が、特権として独占する聖印を……俺達は、自由に解放しようと考えた」
聖印を扱う力のある者は一般にも大勢いる。彼らに聖印を解放し、自由に作物を増やし、

病を癒し、建物を建ててもらう。独占と支配の時代は終わり、独立と調停の時代が始まる――そう謳うドラクロワやジークに、シーラの強い働きかけもあって〈銀の乙女〉の総本山たるマグノリア大聖堂が、最初に賛成した。まず農耕や建築にかかわる聖印を広く普及させ、人材の育成に力を貸してくれた一方で――悪夢のような事態が起こったのだった。

「……聖印の力こそが、全ての幸せに通じる……そう解釈した者達が、いた」

マグノリア大聖堂が管理する、多くの戦災孤児のための里に、叙印権制度が与えられたとき――里が、一斉に、少しでも適合する子供達の体に、聖印を刻み始めたのだ。

聖印とのつながりの試練さえ越えれば、孤児達にも輝かしい未来が約束されるし、アーシアのように〈銀の乙女〉の紋章を授けられるほどの者が出れば、里自体が、高い地位を与えられる。中には、自分達で聖印を学び、重い責任を背負うよりも、子供に全てを背負わせた方が、手っ取り早く栄達を得られると考える里さえあった。そのせいで、多くの里で、数多くの子供達が、自分がどういう理屈で死ぬのかも分からず、命を失った。

「フス教父というのは……ドラクロワの偽名の一つだ」

ドラクロワは、ラクロワ聖堂の後継者であり、体面に気を使わねばならず、敵も多かった。それゆえ姿を変え、偽名を使って動く事があった。フス教父というのは、ドラクロワが、叙印権制度が上手く運営されるよう働いたときの、仮の姿なのである。

事実、フス教父の働きによって、各聖堂から猛反発を受けていた叙印権制度は、やがて託印制度と名を変え、改善が重ねられながら各地に定着した。今では、一部の聖印ならば、正当な手順さえ踏めば、聖堂に属さない一般の村人でも、十分に扱えるようになっている。

ただ、子供に聖印を刻み込む習慣は、根強く残り、ジークとドラクロワ、そしてシーラは、そうした行為を止めるために尽力し——最近では、滅多に見られなくなったという。

「フス教父は——ドラクロワは……私達のことを、失敗だと思って、里を焼いたの？」

「単に、マグノリア遺跡を暴くことが、目的だったんだろう。あるいは……里が焼かれたとき、どこかで、緑色の火が見えなかったか？」

アーシアの総身が、ぞくっと震え上がった。

「もし見えたのなら……それは、聖印とのつながりに失敗した者の体が、焼かれるときの火だ。死蠟症……聖印の悪影響で、肉体が蠟と化す、死病だ」

ジークは当時の光景を思い出しながら言った。死蠟症にかかった者は、みな火葬され、墓を作ることを禁じられた。聖印は人に幸福をもたらすものであり、死を招くなどあってはならないからだ。事実を隠すために多くの子供達が焼かれた。その緑色の火を見るたびに、ドラクロワは自分の行いの何が間違っていて何が正しかったのかを、必死に考えた。

シーラは哀しみをたたえた眼差しで、それでも毅然と、緑色の火を見つめていた。

そしてジークは、焼かれた子供達の灰を集め、幾つも、禁じられた墓を掘った――
「ドラクロワは……死蠟症にかかった者達を、焼いたのかもしれん……」
ジークが言った途端、アーシアの口から、悲痛な泣き声が迸った。
「兄さんは病気だった！　動けない兄さんをドラクロワが殺したの！　殺したのよ！」
ジークは、籠手を置き、静かに、アーシアに歩み寄った。
「……多くの死者が、もう何の抵抗も出来ない中で、お前の命は、生き延びた」
言って、アーシアの法衣の襟のボタンを留めてやる。アーシアは涙を流し、大きくしゃくりあげた。かと思うと、突然、右手に何かを引き抜き、ジークの胸に押しつけた。
冷たく固い感触が起こるよりも前に、それが何であるか、ジークには、分かっていた。
「ドラクロワと貴方は……いったい、何なの？　どういう関係なの!?」
銀銃をジークの胸に押し当て、アーシアが、憎しみのこもった声を放った。
「親友だ――」
「敵じゃないの!?」
晩秋の朱茉樹の葉色をした目に、怨みに満ちた涙が溢れ出した。
「ねぇっ、敵なんでしょ!?　あいつを殺すために旅をしてるんでしょう？」
ジークは、アーシアの顔立ちに、死んだ女の面影が重なるのを覚えながら、

「俺は、あいつと共に、理想を抱き、戦っていた……争いを無くし、そして、みなを王にするため……平和と平等の理想のために」

まるでアーシアに自由に撃たせるかのように、目を閉じた。武器を押しつけられた胸の内側で、かつての思いが鮮やかに甦るのを、痛切に感じながら。

2　我らの時代

敘印権制度に始まり、ドラクロワとジーク、そしてシーラは、次々に新しい制度を打ち出していった。聖堂や貴族が独占する権利を解放し、身分にかかわらず公平な世を実現しようとした。また、聖法庁に属さない、蛮族と呼ばれる者達との和解に努力した。

当時、ドラクロワは負け知らずの武功を誇り、その軍団長の筆頭である剣士ジークと〈赤竜〉の武勇は広く噂され、恐れられた。そしてシーラが後陣にいる限り、兵達が安心と勇気を失うことはなかった。彼ら三人こそが、すなわち聖法庁最強の軍団だった。

そしてドラクロワが軍部最高の地位である枢機武卿となったとき——誰もがドラクロワを次代の聖王とみなすようになった。人望も厚く、改革を実現する上で必要な財政と武力の両方を手に入れ、ドラクロワは、名実ともに理想者となろうとしていた。

「富の独占と、武力による支配の時代は終わった」
枢機武卿となった祝賀会で、ドラクロワはジークに断定したものだった。
「独立と調停の時代が始まるのだ。大陸の支配者であることをやめてのち、聖法庁が真に調停者となるには、今までのように武力で支配するだけでは駄目だ」
「枢機武卿になったばかりで、そんなことを言うやつはお前くらいだよ、ドラクロワ」
ジークが呆れて、そして限りない信頼を込めて、からかうと、ドラクロワは笑って、
「なに、枢機武卿として当然の心構えさ。いいか、ジーク。争いを無くすためには……」
「——敵をも救う、だろう。お前の理想では、最後には剣も軍も要らなくなるな」
「その通りだ」
「お前は、王座を棄てるために、王座を手に入れるんだろう」
実際に、王座が目の前にまで近づいた時、ドラクロワが心変わりするのではないかと、ジークは、どこかで不安に思っていたのだ。だからそんなことを訊いた。
だがドラクロワは、ジークの不安など消し飛ばすような笑顔を浮かべ、
「その通りだ、ジーク」
聖王制度を廃止し、合議による平等を実現すると言った。ジークは胸を熱くしながら、
「なら……俺も、いつか剣を棄てるために、剣を振るうよ」

そんな事を言えるようになった自分を、この男に見て欲しい気持ちで、口にしていた。
「私は、お前なら、必ずそうすると信じているよ」
あっさりとドラクロワは言う。その引き締まった腕が、心地よい暖かさで、ジークの肩に回された。ジークは、ドラクロワに少しでも疑いを抱いた事に、気恥ずかしさを覚えた。
かつて抱いた自分の夢が、更に鮮明に心に描かれるのを、ジークはそのとき強く感じていた。ドラクロワが、いつか王座を棄てるために聖王となるとき——ジークは、いつか剣を棄てるために騎士となって、ドラクロワの下にひざまずく。シーラが、その王と騎士を見守る時こそ、理想のための本当の戦いが始まる時だ。そう思って胸を高鳴らせていると、
「実は……既に、申請していることがある」
ドラクロワは、そんなことを言った。何の申請かと思っていると、
「黒印騎士団という騎士団名を知っているか、ジーク」
「いや……」
「何十年も前に、最後の一人が死んで、事実上、存在しない騎士団なんだが……聖法庁に敵対する存在を、独断で倒す事を許された、影の軍勢のことさ」
ドラクロワは、にやっと笑って、肩に回した腕に力をこめたものだった。
「かつて何人もの〈招く者〉が、その騎士団に属していた。お前ならその資格がある」

「俺を騎士にするつもりか!?」
「そうだ、ジーク。騎士は騎士でも、聖騎士だ。お前が聖騎士になるんだぞ。どうだ?」
　どうもこうもなかった。ドラクロワが聖王になるというジークの夢が実現する前に、ジーク自身が、騎士になってしまうわけである。しかも聖騎士ときた。ジークは、拗ねた。
「俺は剣士のままでいい」
「まぁ、待て。お前が黒き騎士となれば、聖砦の剣が授与される。この剣は……」
「要らない。今のままの剣で十分だ。それが折れたら新しいのを作らせる」
　こうなると誰が何と言おうと聞かない。聖砦の剣を持つことは、ジークが、ドラクロワと肩を並べるほどの地位を与えられたに等しい。そうドラクロワが言っても、ジークは頑として拒む。それがジークの悪い癖だった。ジークはドラクロワと対等になることを心のどこかで恐れていた。いつまでも上官として、師として、ドラクロワに、自分を導く存在であって欲しかった。そんなジークの内心を正確に察していたのは、シーラだった。
「本当に、ジークは、臆病なんだから」
　そんな風に、ジークに面と向かって言えるのは、シーラくらいしかいない。
　ジークと言えば、今や戦場では、恐怖と勇猛の代名詞だった。ジークにあやかって、わざわざ髪を赤く染める兵士までいるくらいで、一度、ジークに憧れた少年兵達がみんなで

髪を染め、部隊全員が赤髪になってしまい、ジークを唖然とさせたことがあった。
「勇気を出しなさい、ジーク。ドラクロワは、貴方を、ずっと待ってるんだから」
私ではなく――と、聞こえた気がして、どきりとした。シーラはそんな気配は少しも見せないが、ドラクロワに惹かれているのではないかと、ジークは思っていた。
ドラクロワがシーラを想っていることは、ジークには、手に取るように分かっている。
「お前は、誰かを待ってたりしないのか？」
訊いた途端、やけに心臓が鳴った。確かに自分は臆病だ。そうジークは思った。
「誰か……？」
シーラが微笑んで首を傾げる。全くジークの質問の意図を理解していないというように。
「ドラクロワのことを、シーラは、どう思ってる？」
ジークは、もっと直接的に訊いた。それでもシーラの微笑に変化は無かった。
「強い人よ。意志の強い人……。そして寂しい人。一度、ドラクロワから聞いたことがあったわ。彼がなぜ、理想を抱くようになったのか」
それは、ジークも何度か聞いたことのある話だった。
ドラクロワは十代のはじめに両親を亡くし、周りは財産を奪おうとする敵ばかりだった。
ラクロワ聖堂の後継者――という立場のドラクロワは、心許せる相手として、貴族や聖

職者ではなく、乳母や使用人、聖堂の労働者達と親しくなり――そして裏切られた。
彼らを、敵の貴族どもが金で買収し、聖堂を継承するための証書や紋章を盗ませたのだ。
盗まれた事を悟ったドラクロワは、剣で、それを取り戻した。
当時、十四歳――ドラクロワは、ジークと同じ年齢で人を斬った。証書を盗ませた貴族と聖職者数名を、夜闇に乗じて斬り、彼らの従士を証人として捕らえ、聖法庁に訴え出た。
斬人の咎めも無く、ドラクロワは、証書と紋章を取り返し、聖堂を守り通したのだ。
そして捕らえた従士の口から、ドラクロワの乳母や使用人、聖堂の労働者達の全員が、金をもらい、証書と紋章を探していたことが判明したとき――
ドラクロワは、無言で全員を許した。誰も咎めず、何も言わなかった。
貴族を斬った血まみれの剣を手に帰って来ると、全く普段通りの生活に戻り、聖堂の後継者として、聖騎士になるための修練に没頭したのである。そして、しばらくして、証書と紋章を盗んで貴族に渡した使用人の一人が、罪悪感から、首を吊って死んでしまった。
ドラクロワが彼を丁重に弔うと、やがて乳母が黙って姿を消し、貴族からもらったらしい金が、空っぽの部屋に、残されていた。労働者達も、次々にやめてゆき、十五歳の誕生日の朝――ドラクロワは、最後の使用人の一人が去るのを、黙って見送った。
ドラクロワは独り、自分が十五歳になった事を亡き両親に報告した。そして、去ってい

った者達の名を一人一人唱え、彼らの幸せを心から祈った——寂しさに、泣きながら。
「本当に悪いのは、彼らに金を渡して心を踏みにじった貴族達だ。彼らは何も悪くない」
ドラクロワは、かつてジークに、そう断言したものだ。
「私は、彼らの良心を信じた。その結果、彼らは、私から去って行った。私は彼らを怨んではいない。私が信じた通り、彼らには良心があり、良心の痛みに従って去ったからだ」
そしてドラクロワは、彼らがなぜ、自分を裏切ったのかを考え続けたという。やがて、
「良心を持つだけでは、駄目なのだ。良心に従って生きていける世の中が必要なのだ。私はそんな世の中が欲しい。そして、いつか私から去っていった人達と、再会したい」
聖堂騎士団に聖騎士候補生として入団する際に、そう結論したのだという。親しかった者達が、一人もいなくなるという孤独を味わいながら、そんな結論に達せるドラクロワに、ジークは、呆然となったものだ。
「そのくせ、ドラクロワは、孤独がひと一倍、嫌いなのよ」
シーラは、くすくす笑って、ジークに意味ありげな目を向けた。
「ドラクロワを孤独にしては駄目よ、ジーク。彼は、置き去りにされた悲しさを決して忘れていないわ。彼も分かっているはずよ。使用人達をちゃんと罰していれば、みなが去る事はなかったって。良心を背負わせることは、一つ間違えれば人を殺す事にもなる……」

そして、笑みを消し、目に憂いをたたえ、
「良心や理想は、刃にもなるわ……ドラクロワは、使用人達に、最も残酷な罰を与えたのよ。良心の痛みという罰を。だから、ジーク……ドラクロワには、貴方が必要なの」
「だから……？　なぜ、俺が必要なんだ？」
「貴方が、ドラクロワに理想を諦めさせる事の出来る、唯一の人だから……」
「なぜ、俺がドラクロワに、理想を諦めさせなきゃならないんだ!?」
「もし、理想が、刃となって人を傷つけるようになった時、ドラクロワを止められるのは貴方だけよ——ジーク。ドラクロワも、どこかでそれが分かっているのよ。あの人は、いつでも貴方の反応を見て、自分を確かめているわ……自分の理想が、正しい方に向かっているか、人を傷つけていないか……。あの人は、私をそういう風には見ないわ」
「シーラは、そういう風に、見て欲しいのか？　ドラクロワから？」
ジークは顔を強張らせて訊いた。だが、シーラはほっそりとした顎を左右に振って、
「違うわ、ジーク。私は——」
「シーラ……もし、俺が、お前にとって邪魔なら、俺は……」
いつでも去る。ドラクロワとシーラが互いに想い合うことを邪魔したくは無い。そう言おうとした途端、シーラが、厳しい目をジークに向けた。いつか、戦場から去れと言って、

頰を叩かれたときのように。ジークは口をつぐんでシーラを見つめた。そして改めて、あるいはそのとき初めて、ジークは自分の気持ちを知った。この美しい女を、自分は——
ふいに、シーラは静かな微笑を浮かべ、どこか囁くような声音で、言った。
「貴方は、私が、戦場に来て癒した、最初の人よ……ジーク」
どきりとするジークに、シーラはまたもや翡翠の目を悲しそうに細め、
「なのに貴方は、私に、ありがとうとも言わずに、ドラクロワとばかり話して……」
どうやら本当に恨んでいたらしく、困った顔になるジークをじっと睨んだ。かと思うと、
「そういえば、誰かを、本気で叩いたのも、貴方が、最初で……最後でしょうね」
そういって、また微笑している。ジークは、胸の奥で疼くような思いを抱きながら、途端に、シーラに対して、一番、訊いてはいけないことを訊いたような後悔を覚えていた。
「理想は、貴方達、二人のものよ……ジーク。貴方達二人のどちらが欠けても駄目……」
シーラは言った。ジークは、わけもなく詫びたい気持ちで、うなずいていた。
「私は、貴方達二人を見ているだけで、本当に沢山の勇気を得ているわ……。貴方達となら、非力な私でも、多くの人を助けられると思ったから……」
「シーラ……」
「貴方達二人と出会えて、本当に良かった……。だから、一緒にいさせて欲しいの。もし

貴方達二人の邪魔になるのなら、居なくなるべきなのは、私の方よ……ジーク」
それがシーラの一番の気持ちだった。ジークは、自分が詫びねばならない理由を悟った。
もし、どちらか一人の男を選べと言われれば、黙って姿を消す——そう、シーラは言っていた。ジークとドラクロワの絆に割って入る事など、シーラは考えてもいない。
愛よりも絆が欲しい——それが、シーラの微笑が、訴え続けていた事だった。
シーラは、三人だからこそ、ここまで来れたのだと、ずっと誰かに言って欲しかったのだ。いつからか黒衣に身を包み、じっと自分の無力さに耐えてきたシーラを、ジークは、むしろ強く抱きしめたい思いに駆られ、そしてその気持ちを、胸の奥にしまい込んだ。
「理想は、俺達、三人のものだ……一人でも欠けたら、駄目だ」
シーラは、かすかに目を見開き、そして、本当に嬉しそうに、微笑んだ。
「ありがとう……ジーク」
その眩しい微笑こそ、ジークとドラクロワにとって無くてはならないものだった。
「それで、ジークは、覚悟は出来たの？　騎士になる心の準備は万端かしら？」
シーラが、優しく問うと、途端に、ジークはまた違う理由で目をそらした。
やがて、ぽそぽそと、初めて誰かに、自分の夢を話していた。シーラは黙って、ジークの夢を聞いた。ドラクロワが聖王となり、そして自分が騎士となる——果てしない夢を。

「ドラクロワが聖王になるには、まだまだ時間も功績も必要よ。貴方が騎士になって、彼を聖王の座に押し上げるための力になってあげなさい、ジーク」

シーラが、ジークを宥めるように告げた言葉は、そのまま、ジークの結論となった。

「それにしても……貴方の抱く夢でも、私は、結局、見守っているだけなのかしら」

そう言い添えて笑うシーラに、ジークは気まずく目を伏せたものだった。

黒印騎士団の叙任式の間、ジークは始終、仏頂面をしていた。もともと憮然として感情を表に出さないジークだが、格式ばった場所では、ますますその傾向が顕著になるのだ。

「俺の剣は、ずっと前からお前のものだ。こんな大げさな剣でなくても……」

というのが、聖咎の剣を手にしたジークの第一声であった。

剣を授けたドラクロワは、壇上で共に並んで立ちながら苦笑していた。

「今この時、お前という軍団が真に誕生したのだ。ただ一人にして万軍たる、〈招く者〉が。少しは格好を付けろ、ジークよ。そら、シーラに笑われるぞ」

言われて目をやると、シーラが冴え冴えとした微笑を送ってきている。それでも憮然としたままのジークに、ドラクロワが、言った。

「俺達、三人だ」

珍しく、「私達」ではなく「俺達」と呼んでいた。まるで少年のような口調で。少年――まだ恋も愛も知らぬ頃の気持ちで、ドラクロワは、そう言ったのかもしれなかった。

「俺達三人で、変えるぞ」

ジークは、目を細めてシーラを見つめ、そして傍らのドラクロワを見つめた。何もかもが、眩しく輝くようだった。そのときジークは初めて、地位も育ちも違うこの男が、自分を友として求めている事に強い誇りを抱いていた。そしてまた、二人の男に対して、一人の女が、愛ではなく、絆を求めている事に、心から喜びを覚えていた。

「俺達三人が、世界を変えるんだ」

ドラクロワの言葉に、ジークは、はっきりと、うなずいた。

理想という名の絆が、自分達の全て――そう信じるだけでよかった。夢が実現される喜びと、多くの苦難へ立ち向かう勇気を、ただ噛みしめることが、何より大切だった。

アーシアは、ジークに、銀銃を押しつけたまま、動くことも出来ずにいた。

「撃たないのか」

ぽつりと、ジークが、言った。アーシアが悔しさに眉をしかめた。

「なんで、そんなこと言うの？　貴方が、ドラクロワの味方だから？」

ジークは、ゆっくりと目を開き、かぶりを振った。
「あいつが誰かに憎まれているのなら……俺も、憎まれるべきだ」
「どうしてよ！　あの男が、罪を犯したんでしょ!?　それを赦せっていうの？」
「あいつが犯した罪は、赦されるものではないだろう……。俺も、赦せはしない。だから、あいつの罪を、俺も背負う……かつてあいつと喜びを抱き合ったのと、同じように」
アーシアは目を伏せ、そして、ゆっくりと、武器を下げ、ジークの胸元から外した。
「撃てるわけない……分かってるくせに……貴方を憎めなきゃ撃ったって意味がない」
アーシアは、悔し涙を零しながら、再びジークを見上げた。
「ドラクロワは、すごく偉い人だったんでしょ？　なんで聖法庁の敵になったの？」
武器で撃つ代わりに、言葉の刃を突き込むつもりで訊いた。質問は憎しみの発露だった。
ジークの心に痛みを与える言葉ならば何でも口にする気でいた。それが今のアーシアに出来る、間接的な、ドラクロワへの復讐だった。だがジークはあくまで静かに答えた。
「聖法庁の中で、ドラクロワの朋達を、妨げようとした者がいた……」
「聖法庁の……？　どういうこと？」
「最初は、一部の蛮族が、聖堂を襲った事が、きっかけだった……」

3　夢の亀裂

一部の蛮族が、大挙して、大陸北方のとある聖堂を襲って占拠した。すぐさま近隣の騎士団が鎮圧に向かったが、蛮族は瞬く間に数を増し、一大勢力と化した。戦乱が広がり、ドラクロワの領地であるラクロワ領でも、小競り合いが起こるほどになった。

ドラクロワは当初、彼らとの戦いを避け、話し合いの和解を目指した。だが被害が増大し、一挙に撃滅する方が、むしろ敵味方ともに被害は少ないという見方が優勢となった。

ドラクロワもそれに賛同せざるを得なかった。それだけ蛮族の勢力は、執拗に聖法庁を攻撃し、世の民を苦しめていた。ドラクロワが枢機武卿となって一年半後――大規模な出兵が行われた。聖法庁の名の下に、各地の聖堂から軍勢が集まり、続々と戦場に送られた。

「大兵力を一度に投入して敵に大打撃を与える。同時に、その裏で、和解のための使者を派遣し、調停の準備を進める。短期解決には、それしかない」

というのがドラクロワの結論であり、聖法庁の決断だった。

ジークにとっては黒印騎士団となってから最初の戦いである。新しく与えられた剣、赤籠手、白外套に、黒革の鎧という、真新しい出で立ちで、戦場に駆け寄せ、〈招く者〉の

力を振るい、多くの味方達とともに各地の戦場を制覇した。

大兵力が敵を駆逐し、いっとき叛乱を制圧するかに見えたが、しばらくすると敵は、新たに武器と物資を揃えて再び侵攻を開始している。制圧と侵攻再開が何度も繰り返された。

「この戦場が、どこからどう生まれているのか分からなければ、幾ら勝っても無意味だ」

敵を殲滅して帰還するたびにジークは言った。攻めて来る敵は無数にいるが、その背後で、敵に物資を送り、武器を与え続けている者の姿が、いつまでも見えないのだ。

戦いは長期化し、軍も消耗し、聖法庁の財政も軍に回す余裕が無くなってきた。

ドラクロワは、戦場を指揮し、和解の準備を整え、そして見えない敵を見つけだすという三重苦を、見事にこなした。やがて聖法庁の情報が敵に流れている証拠をつかんだ。

「聖法庁の内部に、叛乱を起こさせている者がいる。戦場を広げている者が」

ドラクロワは言った。敵はそれだけの権力と財力を持ち、人を動かし、書類を操作し、兵を動かせるということであり、そんな者は聖法庁の中でも数えるほどしかいない。

それが誰であるか特定しようとするドラクロワの動きを察知した見えない敵は、突然、その目的を明らかにした。なんとドラクロワの指揮する軍への補給を断ち、ありとあらゆる偽の情報をこちらに流し始めたのだ。ドラクロワは背後から攻撃された。

味方の兵が、糧食を断たれ、偽の情報に惑わされ、各地で全滅していった。そこへ、明

らかに他の聖堂の軍勢と思われる者達が攻めて来た。味方が攻撃して来たのだ。
戦いが長期化し、一年が過ぎたとき――ドラクロワは完全に罠にはまったことを悟った。
「謀られた――聖法庁の者どもに……！」
戦場から呼び戻されたジークに、ドラクロワは、かつてない苦悶の声で告げていた。
「目的は、私だった……。この叛逆自体が、私の力を奪うための演出だったのだ」
蛮族に叛逆を起こさせたのも、物資を補給させたのも、聖法庁の内部の者に違いない。
戦いを長期化させてこちらを消耗させた上で、補給も退路も遮断し、にわかに襲いかかってきたのだ――そう語る間にも、戦場では、何千何万もの兵が、誰にどうして自分達が殺されるのかも分からず、命を失っていた。
「まだ間に合う！　撤退するんだ！」
ジークが猛然と叫んだ。だがドラクロワは、軍図を見つめたまま動かなかった。
既に、敵と味方の両方から、包囲されていることは分かっていた。謀略が察知された今、聖法庁内部の敵は一気にドラクロワの軍を殲滅しに来ている。逃げ場はなかった。
「私が愚かだった……。そのせいで、失ったのだ……十万の兵と、理想への階段を」
その言葉に、ジークの全身に、火がついたような怒りが吹き荒れた。
「兵が死んだから理想が死ぬのか！」

咄嗟に、上官であり親友である男の胸ぐらをつかみ、叫んでいた。自分達はかつて、一兵も持たぬ、騎士と剣奴から、戦いの階段を駆け上がって来た二人ではなかったのか。全てを失っても何度でもやり直せばいい。大事なのは生き残る事だ。一人でも多く、この死地から脱出すべきだ。後陣まで戻れば、シーラがいる。シーラが、自分達のために脱出路を用意してくれている。そう信じて何が悪い。最後の最後まで諦める気はない——

かつて無い勢いで、そうジークはまくし立てた。そして、有無を言わさぬ口調で、

「お前は、ここを脱出しろ、ドラクロワ。お前の背後を、お前の軍が守る」

呆然となるドラクロワを睨み据えた。ドラクロワは、弱々しくかぶりを振った。

「軍は、じきに潰走を始める……。逃げ場も無いまま、包囲が狭まり……」

「俺が軍団だ！　俺がまだ生きている！　お前の最強の軍団がまだ生きている！」

叫びながら、ジークの目に涙が溢れ、ふきこぼれていた。

「お前は逃げろ！　そして俺に命じろ！　理想のために戦えと、俺に命じろ！」

ドラクロワは、見たこともない悲痛な表情を浮かべ、わなわなと震える手でジークの肩に触れ、力無く引き離そうとした。ジークはいっそう力を込めて相手の胸ぐらを引き寄せ、

「ドラクロワ！」

火を吐くように、その名を、叫んでいた。



「……ジークよ。……私の軍団よ」
ドラクロワが、激しく戦慄いた。歯を食いしばり、目を見開いて、
「……ラクロワ聖堂だ。私は、そこを目指す。ここから東の……かつての私の領地に」
そんな所に逃げ込んでどうするのか。何もかも諦めて、せめて自分の領地で死のうと言うのか。怒鳴るジークの手を、ドラクロワはいつしか震えの止まった手でつかんでいた。
「いちかばちかだ……ジーク。もし、それが駄目な場合……私は……」
ドラクロワは、恐怖と哀しみを胸に満たすように、息をのんで、言った。
「私は、お前を犠牲にして——脱出する。それで……それで、いいのか、ジーク」
「そうだ。それでいいんだ、ドラクロワ……」
ドラクロワは、ジークの手を、震えるほど強く握り、自分の胸に押し抱いた。
「死ぬな……ジーク。頼む……」
その言葉が、まるで自分を不死にしたような感覚をジークは得た。ジークははっきりとうなずいた。戦いの烈気を、総身に満ち溢れさせて、ジークは陣幕を出た。
戦線に駆け戻ったジークは、自軍が擁していた砦が陥落したことを知った。砦の兵は全滅し、ジークにあやかって髪を赤く染めた少年兵達が、無惨な姿をさらしていた。

進軍しようとする蛮族と――自分達を裏切った聖法庁の軍勢の前に、ジークは、無言で立ちはだかった。その左腕に、眩い雷花を、咲き乱れさせて。

「黒印騎士団――ジーク・ヴァールハイト」

そう名乗ったとき、そこにはもう死者の声を聞く剣奴はいなかった。〈赤竜〉と呼ばれた赤髪の剣士もいなかった。たった一人の軍団たる〈招く者〉の男が、そこにいた。

怨みの声を放つあらゆる死者の魂が、ジークのもとに集まり、異形の軍勢と化して敵に襲いかかった。ジークは蛮族と聖法軍を区別せず、戦いに荒れ狂った。

味方が生き残っていればラクロワ領に行けと命じ、自分は逆に走り、敵をおびき寄せる。

夜になってもジークは戦い続けた。丈夫な戦闘用の白外套は、一昼夜で裾がずたずたに裂けた。朝陽を、ジークは振りかぶった剣の輝きで知った。無数の敵を斬り屠り、眠りもせず、僅かなパンを千切って食べた。死者の魂があとからあとから集まってジークに破壊と死の力を注ぎ込み、いつしか目も朦朧としてかすみ、声は嗄れ、耳鳴りがやまず、再び夜になると、もはや自分自身も亡者と化して戦っているかのようだった。

二度目の朝陽が上がったとき、もはや相手が武器を持っているかどうかも判断せず殺すようになっていた。何度もドラクロワとシーラの面影が浮かび、生きて帰るという思いと、敵を殲滅するという死者の念とが奇妙に溶け合い、ジークを戦いの修羅と化していた。

三度目の朝陽を、ジークは、腰まで水につかって見た。川の浅瀬に座り込んでいたのだ。異様なことに、川が真っ赤だった。ふと川原の砂利を見た。それまで砂利だと思っていたものは全部、死体だった。赤い川から上がり、よろよろと朝の冷たい風の中を歩いた。歩いても歩いても死体が無くならなかった。歩きながら悪い夢を見ているようだった。

自分が殺した人の群の上に立ち、澄み渡る空を見上げた。ドラクロワやシーラの名を口にしたかったが、声がかすれて言葉にならない。

急に、大声で泣きたくなった。だが何もかも乾いて涙など一滴も零れはしない。

ふいに、行軍の地鳴りが聞こえた。丘の向こうから、敵軍が来ているのだ。

戦えば確実に死ぬだろう。倒れて死んだふりをすれば、見逃してもらえるかもしれない。けれども、それでは、ドラクロワを守る事が出来ないではないか。

ドラクロワが聖王になる前に、自分だけ騎士になってしまったのが、心残りだった。

自分は、幸せだったと思いながら死ねるだろうか。それとも、夢半ばで死んだせいで、自分の魂もまた、戦場にさまようのだろうか。

そんなことを思っていると、ふいに地面が揺れた。敵が間近に迫ったのかと思ったが違った。丘の向こうで、敵もまた突然の地震に驚いて馬を止めているのが見えた。

足の下で、何かが、どくん、と脈動した。地面に、何か巨大なものが広がり、死者の血

を吸って脈動しているのだ。ジークは、ぞっとなって後ずさり、それの上から降りた。
「よく……生きていた――ジーク」
背後から、声とともに、暖かな手が肩を抱いていた。ジークは、呆然となって、ドラクロワを振り返った。なぜ逃げないんだ。そう言おうとしたが声が掠れて出なかった。
「無数の命を吸い……現れるぞ」
ドラクロワが言った。何のことかと思っていると、それがいきなり立ち上がっていた。
「〈刻の竜頭〉の秘儀……私の切り札だ。不完全なまま、使いたくはなかったが……」
それはまるで、神話に出てくる竜のような姿だった。しかも出来損ないの怪竜だ。
皮膚は無く、骨格に赤黒い肉体の断片がはりついており、地響きを上げて歩くたびに猛烈な腐臭と血の臭いのする肉片をまきちらす。全身に赤黒いあぶくを立て、少しずつ、体を作っているようだった。足と腕が出来上がり、長い尾が生え、巨大な爬虫類のごとき顔に、白い目を、でたらめに生やす。その怪物が、敵軍に向かってずしりと歩み出した。敵軍が慌てて矢を放つが、怪物は構わず、巨大な牙を剥き、兵馬を貪り食らった。
怪物の骨格は、〈竜骸〉と呼ばれ、〈招く者〉の聖印とともにラクロワ聖堂に継承されたものだと、ドラクロワは言った。〈招く者〉との関係も定かではなく、どの聖典にも詳細は記されておらず、ただ、聖堂の地下に安置された骨格と、それを発動させる聖印だけが、

口伝とともに継承されたのだという。何もかもが謎の、巨大な怪物だった。
「口伝では……大いなる力によって、人々を浄め滅ぼすものだという……」
ジークは、その怪物から目を離し、ドラクロワを振り返り、掠れた声で、
「味方……味方の軍……」
訊くと、ドラクロワは、無念の顔で、かぶりを振った。
「昨夜、私の所に一人だけ、負傷した味方の兵が辿り着き……裏切り者が、情報を流しているのと告げ……死んだ」
ジークの全身から力が抜けた。味方の軍勢は、各地で皆殺しにされたのだ。逃げ出す事さえ出来ぬまま、何千何万という兵が、共に戦って来た者達が、僅か数日で——
怪物が、ジークの絶望と怒りに感応したかのように凄まじい咆吼を上げた。
敵軍が押し寄せるが、まるで怪物に餌をやっているようなものだった。怪物は人を食らうごとに、どんどん巨大になり、やがて体の一部が、膨らみすぎた風船のように破裂した。
「堕気が膨らみ過ぎている。聖性で宥めるのか？〈招く者〉とは原理が違うのか？」
ドラクロワが呟く。途端、怪物の体のあちこちが破裂した。赤黒い液体とともに、凝縮された堕気が噴き出す。それでも怪物は、大きくなることをやめない。
ドラクロワはいつしか、ジークを担いで、後ずさっていた。

怪物は人を貪り、目の前の空が見えなくなるほどの巨大さになっている。ドラクロワもジークも恐ろしい予感に襲われ、必死に川沿いを下り、怪物から離れようとした。
背後では、幾つも爆発音が轟き、だんだん、その間隔が長くなり、ふと爆発音が聞こえなくなった。ドラクロワとジークが振り返り、息をのんで凍りついた。
怪物は、完全に動きを止めている。その一瞬後、怪物の身から閃光が走った。
同時に、ドラクロワは、ジークを担いだまま、川に飛び込んでいる。
怪物が、膨れ上がった瘴気を凝縮させせ——一挙に爆発したのだ。天を貫く火柱が上がり、爆圧の波が吹き荒れ、敵軍を消し飛ばした。
ドラクロワとジークが、泥まみれになって川を出たとき、辺りは、爆風で真っ平らになっていた。黒い雲が渦巻き、歩いても歩いても焼け野原が続いている。
ドラクロワは丘に立ち、かつての自分の領土を見晴らした。ジークも、それを見た。焼けこげた大地に、火の粉と、黒い灰が舞い飛び、草も木も消えている。
ラクロワ領地は、完全に、不毛の地と化した。かつてドラクロワが十四歳にして守り通したラクロワ聖堂も、粉々に崩れ去り、この世から消えて無くなっていた。

「〈刻の竜頭〉……？　領地を全部、消しちゃう秘儀なんて……。私達の里を……ミーメの里を襲ったのも、もしかしてその秘儀に関係があるの？」

恐る恐る訊くアーシアに、果たしてジークは、うなずいてみせた。

「〈刻の竜頭〉の断片は、各地にある。ドラクロワはその断片を集めているんだろう」

アーシアは、顔をしかめた。自分達は、今の今まで、ドラクロワに襲われた理由さえはっきり分かっていなかったのだ。そのことが無性に腹立たしく、悔しかった。

「それでドラクロワは、どうしたの？　そもそも誰が貴方達を後ろから攻撃したの？」

声を荒らげて訊いた。そうすることでしか、自分の中で荒れ狂う悲憤や憎悪を、宥められなかった。そんなアーシアの心を察しているように、ジークもまた淡々と答えている。

「俺とドラクロワは、シーラが用意してくれた救援隊に助け出された。ドラクロワは聖都に戻って、勢力を挽回しようとしたが、結局、敵にくだるしかなかった」

「敵に降伏したの……？　そんなに強い相手だったの？」

「敵は、強い権力を持った人物だった……王弟――聖王の、弟だ」

アーシアが驚きに目をみはった。

「王弟は、次代の聖王の座を狙っていた。だから、ドラクロワを潰しにかかった。そしてドラクロワは勢力挽回の力にするため、〈刻の竜頭〉の秘儀を完成させようとした……」

そうしてジークは、遠く、過去から現在へと続く、長い話を、静かに語り出した。

4　絆ゆえに

ジークの手には、死戦をくぐり抜けてなお握り続けた聖咎の剣があった。

聖法庁に害なす者を、独断で誅殺する権利を与える剣である。蛮族に情報を流し、味方を攻撃して、ドラクロワの軍を壊滅させた者は、明らかに聖法庁への害悪だった。

ジークは、聖都に戻り、体が回復するや、怒り狂う獣のごとく、その剣を振るった。

自分達を罠に落とした者達を、次々に闇に隠れて、斬り屠っていったのだ。貴族、司祭、軍人など、敵が判明するつど確実に、闇に紛れて斬った。完全な暗殺だった。汚い所業だし、殺した相手を一人も葬らなかった。それほどまでに、ジークは怒りにまみれていた。

その間、ドラクロワやシーラともろくに会わなかった。ドラクロワは勢力挽回に奔走し、シーラは〈銀の乙女〉にドラクロワの後ろ盾になるよう働きかけていた。互いに顔を合わせる余裕が無かったし、それ以上にジークは、戦死した兵の敵討ちに完全に没頭していた。

やがて黒幕の正体を知った時、さすがのジークも愕然となった。聖王の、歳の離れた弟——王弟が、ドラクロワを罠にはめるため、聖法庁全体を使って暗躍したのだ。

もし王弟がそれを名目に、ドラクロワと衝突することになる。今のドラクロワに勝ち目はない。また、正式に訴えたとしてもドラクロワの勢力が弱い限り、王弟に全てもみ消されてしまうだけだ。どちらにしても負ける戦いをすることになる。

かといってこのままでは確実にドラクロワは、聖都の中で無力化させられる。ジークは迷い、考えた末に、ただ一人の人間に、相談することを決意した。

相手は、ドラクロワではなかった。シーラでさえなかった。

聖王、その人であった。ジークは、聖王の前にひざまずき、王弟が、どれほど聖法庁に害をなす行為をしているかを説明し、王弟を斬る許可を、求めたのである。

これは、ジークの賭けだった。ジークの調べでは、聖王と王弟の兄弟は、反発しあっていた。聖王は、自分の弟に、無理やり王座を奪われるのではないかと警戒していたのだ。

聖王は、肉親を斬る許可をすぐには出さず、沈黙し、やがて条件を出した。

王弟を斬ることを許し、更には、聖王が向こう二年間、ドラクロワと衝突しないことを約束する。その代わり――ジークは聖咎の剣を返上し、ドラクロワの下から黙って去る。

王弟と、ドラクロワの右腕であるジークが、同時に消えてくれれば、聖王は今の地位を守りやすくなる。またドラクロワも、二年の猶予があれば、勢力を回復出来るだろう。

そういう妥協案だった。ジークは、凍りつき、やがて、毒を飲む覚悟で、その条件を呑

んだ。そしてその日の内に、聖王と、秘密裏に証書を交わした。
なぜ、そんな決意をしたか。ジーク自身にも、その時はそれが最も正しいと思ったから、としか言えない。あるいは戦場で大敗を喫し、暗殺に奔走したことで、ジークの戦士の誇りが傷ついていたのだろう。自分は、理想を抱くには、あまりに血にまみれすぎた。むしろドラクロワの下から去った方が良い。そんな風にさえ思っていた。
ジークは、ドラクロワとシーラへの置き手紙とともに、聖王との証書を、自分達三人にしか分からない、いざというときの連絡用の場所に、隠した。
剣を手に、夜の闇に飛び出しながら――これが、最後だと思った。最後の汚れ仕事であり、そして、自分の人生の最後でもあることが分かっていた。聖咎の剣を返上すれば、これまでの暗殺の根拠を失い、自分が殺した者達の類縁から復讐を受けることになる。
聖都を一歩離れた途端、ジークは孤立無援のまま、彼らと戦わねばならない。どこまで生き残れるか分からなかった。無惨に殺されることになっても、それはそれでよかった。なるべく敵を、ドラクロワから引き離すことが出来れば、それでいい。
ジークは、王弟の館に忍び込み、寝室のテラスに身を隠し、相手を待った。
剣を抱き、夜風に吹かれながら、これまでのことを、静かな気持ちで思い返していた。
ドラクロワと出会わなければ、剣奴として終わっていた。死者の魂を招く力を手に入れ

ることも、理想を抱くこともなかった。シーラと出会わなければ、自分はドラクロワにちゃんと近づけなかった。いつまでもドラクロワに——誰かに、心許すことはなかった。

自分が消えた後で、ドラクロワとシーラが結ばれるのを想像し、やけに幸せな気分になった。自分に理想を教えてくれた男と、自分がただ一人愛した女が結ばれるのだ。何という甘美な想像だろう。自分が生きた証しを、全て、丸ごと二人に託すような気分だった。

「俺には無理だった。最後まで、剣を棄てられなかったよ……ドラクロワ」

そっと呟いたとき、寝室に、気配が起こった。ジークは物音一つ立てず、寝室に入ってきた者の姿を確認した。五十過ぎの男だった。計算高そうな顔をしており、どんな卑怯な裏切りでも眉一つ動かさず、むしろ目の奥に喜びを光らせて行うだろう男だった。

ジークは、静かにテラスから入った。風が吹き、カーテンが煽られる。男が、こちらを振り返った瞬間、ジークの剣が、風さえ音も無く切り裂き、男の頸へと迅った。

そこで信じがたいことが起こった。男が、凄まじい俊敏さで後方に跳び、ジークの剣を避けたのだ。剣の切っ先が、男の頬を切ったが、命には届いていない。

「やはり来たか——ジーク」

男が、にやりと笑んで言った。そして、右手を翻すや、黒い靄が宙に生じていた。

すぐさま第二撃を送り込んでいたジークは、愕然となってそれを見た。

黒い靄は、聖性と堕気が交じり合ったものだ。それが鋼よりも強靭な、漆黒の剣と化し、男の手に握られた。そんな高度な業を、一瞬で出来る者を、ジークは一人しか知らない。
その剣が、ジークの剣を烈しく弾き返した。ジークは、驚愕に震えながら退いた。
先ほど切った男の頬から血は流れず、見る間に皮膚がほころび、銀に光る仮面と化した。
男の姿が変貌し、背が伸び、肩幅が広がり、長い銀髪が、夜の中に妖しく輝いた。
白く滑らかな手が、仮面を外した。〈惑いの面〉――別人と化す、幻術の道具である。
男が、深い群青の瞳に、苛烈な眼光をたたえて、ジークを、見た。
「ドラクロワ……」
ジークは、愕然と男の名を、呼んだ。にわかに、ドラクロワが剣を振るった。途端――ジークの鋭敏な感覚でさえ全く惑わしていた幻術が解け、なんと寝室に、槍を手にした衛兵達が、ぞろりと立っているではないか。たちまち槍に囲まれ、ジークは呆然となり、
「なぜだ……ドラクロワ」
ドラクロワが答える前に、部屋に、王弟が入って来ていた。するとドラクロワが信じがたい行為に出た。なんと、王弟の前で、ひざまずいたのである。
「さすが、ドラクロワ……見事に、わしへの忠誠を示したというわけか。聖法庁を騒がせていた暗殺者も、これでようやく消える。やっと、安らげる……」

王弟が、面白そうに言った。刹那、ジークが言葉にならぬ叫びを上げて槍を切り払い、王弟に向かって跳んでいた。転瞬、ドラクロワが影のように走り込み、ジークの剣を打ち弾いた。ジークは、あまりに衝撃的な出来事に、かつて離したことのない剣の柄を、ものの見事に、手から弾き飛ばされた。

聖谷の剣が部屋の壁に突き刺さり、凝然と凍りつくジークの喉に、ドラクロワの剣が、ぴたりと当てられた。ジークは、自分を見るドラクロワの眼差しの、あまりの苛烈さに、もはや身動きさえ出来ずにいた。

そうして、ジークは、左腕の〈招く者〉の聖印を封じる処置を施され、投獄された。

「ドラクロワが、敵を守ったの……？　なぜ……？　自分の身を守るため……？」

アーシアが呆然と呟いた。聖法庁の中の権力争いの複雑さを、アーシアは生まれて初めて聞かされていたのだ。だがジークは、小さくかぶりを振って、深甚と沈む声で、

「ドラクロワが守ろうとしたのは……俺だった」

そう言った。そしてアーシアに半ば背を向けたまま、再び語り出していた。

暗い牢の中で、ジークは悪夢にうなされた。かつての戦いで、自分が殺した者達が大地

を埋め尽くし、血の川で溺れる夢だ。そこへあの怪物が現れ、人を食らい、全てを焼き尽くす壊滅の炎が吹き荒れる中、ドラクロワが烈しい眼差しで自分を睨み据えている……。
はっと目が覚めたとき、鉄格子の向こうで、シーラが不安そうにこちらを見ていた。
ジークはのろのろと身を起こし、鉄格子と向かい合った壁にもたれながら、言った。
「ドラクロワは……俺を、売ったのか？　俺達を罠にはめた、あの男に……」
「ドラクロワは、ただ、貴方が去って行くのを、止めたかっただけよ、ジーク」
シーラは、泣いた。まるで、彼女が癒した兵士が、自殺してしまった時のように。
「なぜ……私達を置いて、一人で行ってしまおうなんて思ったの……ジーク？」
「そうすることが、正しいと思ったんだ」
だが、シーラを見ていると、何もかもが間違いではなかったかと思われるのだ。
「確かに、聖王は、貴方の行為の正当性を、認めているわ……。でも、それは、私達の絆を壊す事よ。貴方は、もう、私達と、一緒にいたくはないの？」
ジークは、弱々しくかぶりを振った。シーラは、嗚咽を噛み殺して、
「ドラクロワが、貴方をここから出そうとしないの。ドラクロワは、ここから出せば、貴方が去っていってしまうんじゃないかと思ってるのよ。貴方を引き止めるために、こんな風に牢に入れるなんて……情けない」

シーラは鉄格子を握りしめ、こらえきれずに、激しく泣いた。悲しい声が、牢に反響してジークの耳を灼き、胸の奥にひどく焦げつくような後悔を覚えさせた。

「許してくれ……シーラ。何が間違っていたのか教えてくれ」

いつしか、ジークも泣いていた。赤い血の川につかり、自分が殺した死者の群の上に立ったときから今まで、泣きたくても泣けなかった涙が、溢れ出していた。

シーラが、鉄格子の間から、精一杯、腕を伸ばしてきた。

「貴方はただ、傷ついていたのよ……ジーク。戦いで心が傷ついていたのよ……」

ジークは、おずおずと近寄り、シーラの前で、ひざまずいた。祈るように垂れた頭を、シーラが、鉄格子越しに、胸に抱いた。癒しの聖性が感じられ、荒れ果てていた心が柔らかく解きほぐされるようだった。

「一言でいい……相談して。黙って去って行くなんて……それだけはしないで」

ジークは、何度もうなずいた。うつむいた頬を、涙が幾筋も零れて落ちていった。

「ドラクロワも、きっと、すぐに貴方を出してくれるわ……休みなさい、ジーク」

ジークは、しかし、いつまでも牢から出されなかった。シーラが一日に何度も牢を訪れては、ドラクロワの様子を教えてくれた。

ドラクロワは勢力回復まで、王弟の傘下に入り、従順を装うつもりらしかった。

ジークの剣はどうなったのかと訊くと、ドラクロワが預かっているという。
牢に入ってから五日後になって、初めて、ドラクロワが来た。
「理想を思い出したか、ジーク」
鋭く、ドラクロワは言った。ジークは、牢の中に立ち、じっと相手を見返し、言った。
「忘れたことはない」
「ならば、生きろ。剣に頼ったまま、死のうとするな。お前だけは、それをするな」
ドラクロワは、ジークが全ての敵を引きつけて聖都を去ろうとしていたことを正確に見抜いていた。そしてそのことを怒るように、静かだが、苛烈な眼差しでジークを見据えた。
「すまない……」
ジークが詫びると、ドラクロワは懐からジークの置き手紙を取り出し、無造作に、廊下の明かりにくべた。松明の火が、手紙を焼き、いっとき、二人の顔を、赤く照らし出した。
ジークとドラクロワは、その火の明かりの中で、無言で見つめ合った。
「私の不甲斐なさが、全ての原因だ。私の無力さが、お前を迷わせたのだ」
今度は、ドラクロワが、逆に詫びるように、言った。
「だがじきに力が手に入る。〈刻の竜頭〉の秘儀――今の勢力を挽回するための力が」
ジークは咄嗟に、顎を強く左右に振った。毎夜、あの怪物が夢に出て、うなされるのだ。

「あれは、この世に存在してはいけないものだ。あんなものを使うな、ドラクロワ」
「あれは、この世の原理を、解き明かすものだ。生と死、肉体と魂を支配する力だ──」
ジークは思わず目を見開いた。神にでもなるつもりか。そう言いたかった。
「恐れるな、ジーク。かつて聖クレマチスが、神から聖印を授かったのは、彼が、神を恐れず受け入れたからだ。支配の力を、人の解放のために手に入れるのだ」
ドラクロワもまた、理想を忘れることなどない男だ。だが、胸が騒いだ。まるでドラクロワが、これまでとは、かけ離れた場所で理想を語ろうとしているように思われた。
「〈刻の竜頭〉の秘儀の詳細は、外典にしか載っていないらしい」
「……外典？」
「聖王にしか閲覧が許されぬ、秘儀中の秘儀が記された、重大な書だ。〈刻の竜頭〉の秘儀は、聖法庁の原理にも、かかわるものなのだ」
ジークはふと気づいた。ドラクロワは、そうした知識を、王弟から得たに違いない。どのような屈従の態度で聞き出したかは、想像もしたくなかったが──
「お前は、あの秘儀を完成させるために、王弟の傘下に入ったのか」
果たしてドラクロワは、屈辱を隠した、冷たく無表情な顔で、うなずいた。
「勢力回復のためにも、そうする必要があった。また、聖法庁の秘密を、暴くためにも」

「秘密――?」

「聖法庁には、何か秘密がある。それが、理想を妨げ、押し潰そうとしている……」

そのとき突然、兵も領地も失い、屈従に耐えるドラクロワの身に、怒りがみなぎった。

「王弟は、私達を罠に陥れたのは、神の囁きに従ったからだと言った……」

「神……?」

「霊神アズライールだ」

ジークが目をみはった。それは、聖法庁に関わる者ならば誰もが知る神の名だった。

かつて聖クレマチスに聖印を授けた神こそ、アズライールなのである。聖印を授け、荒野だったアルカーナ大陸に富をもたらした神。そしてまた世が乱れたとき、全てを浄化して滅ぼすという。まさしく、生と死の原理として、豊穣と滅亡を司る神だった。

「その神の囁きが聞こえることが、聖王となる資格なのだという……そして、神に生贄を捧げて初めて、聖王として認められるというのだ。だから王弟は、我々の軍を罠に落とし……戦争による死者を、神への、生贄として捧げた」

「生贄だと……」

「神にとって、大陸に豊穣をもたらすことは、たとえば、我々が、畑に種をまくことと同じなのだ。そして実りを迎えたとき、収穫物を刈り取るように、我々の命を刈り取り、魂

を食う……そのための最も効率の良い方法が、戦争なのだ。そして再び、畑に種をまくように、豊穣をもたらす……この大陸の歴史は、その繰り返しなのだそうだ」

まさか——!? 叫びたかったが、言葉にならなかった。

「本当かどうか分からぬ……神話だ。だが実際に、王弟は、聖王になるため、これまでわざと多くの戦死者を出させるよう争いを生み出したという。だから争いを無くし、王座を廃止するような真似は、神に逆らうことだと……聖法庁の原理を、無にする行いだと」

ジークは、無意識にかぶりを振った。あまりに馬鹿げた話に、言葉を失っていた。

「世に争いを起こさせる最も簡単な方法を知っているか、ジーク。固い絆に、亀裂を走らせることだ。人と人が争うのは、絆を失ったからか……そうでなければ、争い合うことが彼らにとって最後の絆だからだ。そう王弟は言った。それが神の法だと……そんな狂った法に従って、聖王と王弟は、互いに争い合い、そしてまた争いを生み出すのだと……。そして聖法庁には、そんな馬鹿げた神話以上に何かもっと秘密がある。そしてその秘密にもとづき、聖王どもが、神の名の下に理想を否定するのならば——私は、神を滅ぼす」

「神を滅ぼす? 本当に存在するかも分からない神を?」

「神は、いる」

低い、呟くような声で、ドラクロワは告げた。

「私にも聞こえるのだ。〈刻の竜頭〉を使ったときから、神の囁きが聞こえ始めたのだ」
ジークは、得体の知れない戦慄に、ぞっとなった。狂ってる。そう叫びたかった。そんな狂った神話に飲み込まれた状態で、理想を語るのかと。だがそのとき、
「ようやく分かってきたのだ、ジーク。見えなかった、敵の存在が」
「敵……？」
「そう。敵だ……各地の聖堂も、聖法軍も……いや、聖法庁そのものが、敵なのだ！」
ドラクロワは、聞く者を総毛立たせる、深淵から響くような憎念の声を迸らせていた。
「私は全てを暴き──滅ぼす。その力を手に入れるまで、そこで待っていろ、ジーク」
そうしてジークの知らぬ領域へと去るかのように身を引き、牢から離れた。
「待て──ドラクロワ！　シーラには話したのか！　シーラは何と言ってるんだ！」
ジークが鉄格子に駆け寄り、叫んだ。
「まるで私まで去っていくようだと……お前の置き手紙を読んだときのようだと言った」
途端に、ジークの胸に、かつて体験したことがないほどの悲痛が湧いていた。
「ドラクロワ……俺のせいなのか。俺が……最初に、出て行こうとしたから……」
「もし、私がお前だったら、きっと、お前と同じことをしただろう。シーラも、そうだ。互いに、相手のために、自分を犠牲にすることが出来る……それが、絆だからだ」

ジークは、鉄格子に阻まれてドラクロワの顔が見えぬまま、その声だけを聞いた。
「だが、その犠牲を止めることもまた、絆ゆえだ。だから私はお前を牢に入れた。ジークよ……シーラは絆を求めている。絆が失われるとき、彼女もまた去って行くだろう……」
長い沈黙があった。
「理想も絆も、失わせはしない。どんなことをしてでも……」
それを最後に、ドラクロワの足音が遠ざかっていった。

5　狂える神話

「絆……。そんなに強い絆があったのに……。どうして敵に……」
「死んではならない者が、死んだ……」
燃え上がるランプの火を見つめながら、ジークは、そう答えていた。
「シーラ・リヴィエール……」
アーシアが、その名を、ジークの背に向かって放った。
「彼女は、〈銀の乙女〉では、病死ということになってるわ。本当は、違うのね。彼女は、なぜ死んだの？　彼女の死と、今のドラクロワと、どう関係があるの？」

アーシア自身、さすがにジークに過去を聞くことに、引け目を感じていた。しかしそれでも、質問を止められない。今ここで話を聞くことでしか、自分の心を保てなかった。
「私は、兄をドラクロワに殺されたわ。仲間を殺されたわ」
そう口にした途端、アーシアの目に、また、涙が溢れ出した。
「私……ドラクロワに、心まで殺されたわ」
ドラクロワが、自分が尊敬していた相手──フス教父だったことを、言っていた。
「彼女はなぜ死んだの？　なぜ、貴方はあの男を追うの？　お願いだから答えてよ！」
復讐の思いも、敗北や裏切りの痛みも、全て声に変えて吐き出すように、叫んでいた。
「シーラは、死んだんじゃない。殺されたんだ」
背を向けたまま、ジークは言った。完全に感情を抑えつけた、淡々とした声音だった。
「俺が──殺した。俺の剣が、シーラを、殺した」
アーシアが、衝撃に、息をのんだ。涙で濡れた目が、強い驚愕に、見開かれてゆく。
ふいに、ジークの体が、震えだしていた。
「ジーク!?」
ジークは、膝まで震え、歯を食いしばってテーブルに手をつきながら、
「心配ない……あの時のことを思い出そうとすると、いつも、こうなる」

すぐに震えは止まったが、ひどい頭痛と目眩に襲われ、低く呻き声が零れだしていた。
アーシアが悄然と立ちつくす前で、やがてジークは静かに息をつき、虚空を見た。
「話そう……。全てを、葬るために」
そうして、長い間、誰にも——ノヴィアやアリスハートにさえ言わずに、胸に秘めていた過去の出来事を、静かに、話し出したのだった。

牢に入れられてから、十日から先は、日を数える気がしなくなっていた。
ジークは暗い牢の中に、延々と閉ざされ続けた。シーラが何とか解放するよう頑張ってくれたが、ドラクロワが、決してジークを、牢から出させなかったのだ。
「じきに全てが分かる……だから、その時まで、待てと、それしか言わないの」
シーラが、鉄格子の向こうで申し訳なさそうに眉をしかめる。ジークはかぶりを振って、
「ドラクロワは、相変わらず、王弟と一緒にいるのか」
シーラが無言で唇を噛んだ。それだけで、ジークには想像がついた。まるで王弟の、従僕か、使用人のように扱われているのだろう。傘下に入ったドラクロワの忠誠を確かめるために——そしてまた、王弟の、個人的な楽しみのために。
胸が悪くなったが、どうしようもない。王弟が、聖王になる日も近いと、もっぱらの噂

だった。ジークと聖王が交わした証書が、聖王に、肉親殺しという汚名を着せ、その権威を失墜させる名目になったからだ。王弟の得意満面な顔が目に浮かぶようだった。
「自分を責めないで、ジーク……。ドラクロワはもともと、王弟の傘下に降るしかないと、覚悟を決めていたのよ。むしろ貴方が、その口実を作ってくれたと言ってたわ」
「ドラクロワは……何をするつもりなんだ」
「王弟の下で、色々な秘儀を学んでいるらしいわ」
そう簡単に、王弟が、ドラクロワに秘儀を教えるわけがなかった。何か裏がある。だがそう思っても、ドラクロワの傍らに立ち、騎士として守ることさえ出来ない。
「……ジーク。以前、なぜドラクロワが貴方を必要としているか、話したわね」
ジークは、うなずいた。理想を諦めさせる事の出来る、唯一の存在――ドラクロワにとって、ジークは、自分を正確に映し出してくれる、鏡のような存在なのだと。
「私、ドラクロワが、あれほど意志の強い男だとは思わなかった。どんな屈辱にだって、平気で耐えているの。強すぎる意志……それが、私には恐ろしくなる。今のドラクロワだったら、理想のために、貴方や私でさえ平気で殺すかもしれない。あの男は、心を犠牲にし始めてる……。貴方が、命を犠牲にしようとしたように」
「心を犠牲に……」

「あの男は、聖法庁を滅ぼすと言ったわ」
ジークはうなずいた。それがどういうことか、ジークもシートラもよく分かっていた。
「ドラクロワ自身が、そうしてはいけないと、言っていたことよ……聖法庁が滅べば、聖印の秘儀を奪い合う争いが、アルカーナ大陸全土に起こる……」
「争いの中で、もし多くの聖印が失われれば、大陸は、もとの荒野に戻る。そうなれば僅かな耕地を巡って、もっとひどい争いが起こる……ドラクロワが、俺に言ったことだ」
そうした争乱を未然に防ぐためにも、聖印を管理する聖法庁は必要な存在だった。大事なのは、聖印を平等に、平和に使用することであって、無秩序の中に放り出すことではない。それは、叙印権制度の失敗からも、既に学んでいることだ――
「でもドラクロワは、新たな神を誕生させ、新しい秩序を創造すればいいと言ったわ。聖印を授けた、かつての神に支配されている限り、争いは無くならないって」
途方もない考えであり、また空恐ろしい言葉でもあった。かつてジークがドラクロワから聞き、そして惹かれた理想からは、かけ離れたものだった。
「もちろんドラクロワは、王弟の前では、聖法庁に対して従順な態度を見せているわ。でも、私には、その態度が……ひどく冷酷なもののように、感じられるのよ」
「〈刻の竜頭〉の秘儀……」

胸の熱さを、そろそろと吐き出すように、呟いた。最後の大敗から、全てが狂ってゆき、そして今、その狂いの中心にあるのが、その秘儀の名だった。
ふと、シーラが、鉄格子の間から手を伸ばし、ジークの左腕に触れてきた。
「お願い。ドラクロワを止めて――ジーク」
悲しい顔で言った。ジークは、全く自然に、シーラの細い手に、自分の手を重ねていた。
それが、ジークが自分からシーラに触れた、最初で――最後の瞬間だった。
その瞬間、ジークは、一つの決意を得ていた。この後、何年にも亙って、ジークの胸にやどり続けることとなった、決意を。
「俺が、あいつを止めるよ……シーラ」
ジークが王弟を殺し、自分の命を犠牲にして独りで出ていこうとしたのを、ドラクロワが止めたように。今度はジークが、心を犠牲にして、狂った神話に呑まれようとするドラクロワを、止めるのだ。三人の、絆のために――そう、ジークは固く誓った。
ジークは、牢を出る決意をした。そのために、聖咎の剣を取り戻す。それさえあれば、今の聖王が、ジークの正当性を認めているのだから、ジークが牢にいなければならない理由は無くなる。だが剣の在処は分からず、牢に入ってから二か月近くが経っていた。聖王

は日に日に立場を追われ、王弟に、王座を渡す日は近いとされた。
「王弟は……聖王になったら、貴方を、死刑にすると言ってるわ」
シーラが、青ざめた顔で言った。ドラクロワにもそれが止められるかどうか分からない。
ドラクロワのためであれば、自分が死刑になっても構わない——とは、ジークは、もう言わなかった。ドラクロワが、狂った神話に呑み込まれ、自分の心を犠牲にして、本来の理想とはかけ離れた目的に走るのを止めるまでは、何としても生き残らねばならなかった。
そしてついに、王弟が、公然と、聖王にしか触れることが許されない秘儀を、閲覧することが決まった。事実上、聖王が、王座を渡すことが決定的となった事態だった。
そしてまた、ドラクロワが、真の目的を果たす、絶好の機会でもあった。
もはや猶予は無かった。ジークは、剣が無いまま、牢を脱することを決めた。
そのジークを、意外なことに、聖王が助けた。聖王は、王弟の秘儀の閲覧を、むしろ、めでたいこととして祝い、その恩赦として、多数の犯罪者を放免したのだ。目的は、ジークを牢から出すことである。王弟やドラクロワにも手が出せないほどの巧妙さだった。聖王もまた王座を守るために、出来ることは全てするつもりなのだ。ジークを助け、王弟やドラクロワにけしかけることは、その一つに過ぎない。だがジークには天恵だった。
王弟が、秘儀の閲覧のためクレア大聖堂に入った瞬間、牢の扉が次々に開かれ、ジーク

は二か月ぶりに黒印騎士団の武装を身につけ、〈招く者〉の力を解放された。犯罪者達が釈放されて浮かれ騒ぐのをよそに、ジークはシーラとともにクレア大聖堂へ向かった。

一方、王弟は、ドラクロワとともに、二人だけで、クレア大聖堂に入り、秘儀の閲覧のために、聖櫃の間と呼ばれる、地下の広間へ降りていった。

聖王は、その間、あくまで祝賀として、様々な策を講じている。クレア大聖堂に、ジークがすんなり入れたのも、聖王が「祝い」として、門を開け放させていたからだ。

ジークとシーラは、大聖堂に入るなり妨害に遭っている。王弟の配下の騎士達が、ジークが現れ次第、斬るよう命じられていたのだ。ジークは彼らを剣無しで打ち倒し、ついでに、剣を奪っている。そうして、ひそかに聖櫃の間へと降りながら、

「ドラクロワが本気で、聖法庁を滅ぼすつもりなら……あの秘儀を、使うかもしれない」

「〈刻の竜頭〉――貴方が、最後の戦いで見た、秘儀ね……」

ジークはうなずいた。もしあの爆発が起これば、聖都は、今日限りで消滅する。

それとも、閲覧する秘儀を奪って逃げるのだろうか。外典と呼ばれるものを奪って。

ドラクロワが何をする気でいるにせよ、ジークはそれを力ずくで止めるつもりだった。

やがて、聖櫃の間への回廊に入った、そのとき――目に見えぬものが、怒濤のように押し寄せて来た。何かが爆発した衝撃かと思ったが違った。それは、凄まじい瘴気であった。

聖性でも堕気でもない——その中間で歪み、腐った空気が、瘴気である。体の動きを鈍らせ、思考を混乱させる、無味無臭の空気が、暴風となって吹き荒れたのだ。
ジークが呻いた。視界が歪み、意識がもうろうとしてくる。すぐそばのシーラの姿が、いきなり得体の知れない怪物に見え、剣を振るいそうになって慌てて耐えた。
シーラが壁に手をついた。類い希なる聖性の使い手であるはずのシーラが、にわかに動けなくなるほどの、強烈な瘴気であった。
「行って、早く!」
シーラが悲鳴のような声を放った。瘴気は戦場でもしばしば発生する。ジークの方が慣れていた。ジークはうなずき、回廊の向こうにある広間へ向かった。
途中、王弟の配下らしい者達が、互いに剣を突き立て合って、死んでいた。瘴気に心を冒され、互いの姿が、怪物にでも見えたのだろう。
間もなく、広間に到着したジークは、異様な光景を目の当たりにしていた。
黒い稲妻が乱れ交う中、一冊の書を手に、耳障りな笑い声を上げる、王弟がいた。
そして——その傍らでドラクロワが膝をつき、苦痛に満ちた声を上げているではないか。
「ドラクロワ!」
ジークが叫ぶ。ドラクロワは両手で顔を覆ったまま答えない。王弟がにたりと笑った。

「こやつは、骨の髄まで瘴気に冒された。わしの代わりに、外典を開いてな……。外典は、聖性と堕気の狭間の書……それゆえ瘴気がひとりでに満ちるのだ。外典を開く上で最も厄介なのが、この瘴気だ。だから、この男をつれてきて、身代わりにしたのだ」

ジークが無言で走り寄る。その目の前で、漆黒の稲妻が迸り、空を灼いて、ジークを凝然と立ちすくませた。王弟がにたにた笑んだ。その手の書から、稲妻が放たれたのだ。

「この男はもはや手遅れだ。大人しく、わしが外典を開き、真に、聖クレマチスの後継者となるところを見ておるがいい」

ふいに、空を灼く稲妻が、王弟の腕に、奔った。王弟が、高い悲鳴を上げた。腕が焼けただれ、書物を放り出していた。書物は、そのまま宙を浮き、激しく稲妻を迸らせた。

「な……なぜ、外典イザーク書が、わしを拒むのだ。多くの生贄を捧げたわしを……」

王弟は、宙に浮く書物へ、無事な方の手を、懸命に伸ばしている。

そこへ、ふいに、ゆらりと、ドラクロワが、起き上がった。

ジークが、はっと目を見開く前で、ドラクロワの手が、しずしずと書物に伸びる。

書物もまた、ゆっくりと、ドラクロワの手へと、舞い降りてゆく。

王弟が、言葉にならぬ呻き声を発した。

「瘴気は、聖性と堕気が混ざり合って、腐敗したもの……強い聖性と堕気を、同時に用い

れば、防ぐことが出来る……」
ドラクロワの、囁くような声が、激しい稲妻の轟きの中に聞こえた。
黒い稲妻が、ドラクロワの身にも奔った。マントが裂け、血がしぶく。だが、ドラクロワは、爛々と光る目に歓喜をあらわし、体を稲妻に裂かれてなお、書物を掌に受けた。
ジークが、咄嗟に駆け寄り、剣を一閃させた。ドラクロワの手の書物を、斬ろうとしたのだ。ドラクロワの右手が、銀に光る剣をあらわし、ジークの剣を激しく打ち弾いていた。
ジークが目をみはった。その剣こそ、取り戻そうとしていた聖咎の剣であったからだ。
「邪魔をするな……ジーク。真実は、もう、すぐ近くにあるのだ」
ドラクロワの、ひどく暗く澄んだ声音に、ジークは、総毛立つのを覚えた。
瘴気が、ドラクロワの体に溢れ、目が、異様な輝きを放っている。
息をのむジークに、ドラクロワが、すうっと、口元に冷たい笑みを浮かばせ、
「恐れるな……受け入れろ。心を消せ……ジーク」
心を消す、というその言葉が、ジークの胸中に、かっと熱いものを生んだ。心を犠牲にしようとするドラクロワを、止めるのだ——決然とその思いが湧いた。
「やめろっ、ドラクロワ！　そんなものはなくても理想は実現出来るはずだ！」
叫びながら、剣を振るった。ドラクロワの手から剣を叩き落とすつもりだった。

だが鉄剣が、聖咎の剣に勝てるわけが無い。打ち合うや、たちまち剣を斬り砕かれた。
ドラクロワの斬撃が来た。腕の一つは平気で斬り飛ばす気でいるのが分かった。
ジークが、ぎりぎりで剣を避けると、そこへ突然、王弟が、ドラクロワの足に、憎悪のしたたる顔で、しがみついてきた。一瞬、ドラクロワの動きが止まった。すかさずジークが砕かれた剣で、相手の銀剣の柄頭を打ち払う。ドラクロワの手から剣が離れ、床に落ちると同時に――黒い稲妻が王弟に襲いかかっていた。
王弟は絶叫し、黒焦げになって吹き飛んだ。ジークは転がって聖咎の剣を取り戻し、跳ね起きざま、剣を突き込んだ。さすがのドラクロワが、咄嗟に対処出来ぬほどの俊敏さだった。剣尖が深々とドラクロワの左手を貫き、その手から書物が離れ、宙に浮いた。
ドラクロワが、唸り声を上げて、手を、剣から引き抜いた――そのとき、強烈な瘴気が吹き荒れ、ジークを凄まじい頭痛が襲った。目がかすみ、意識がもうろうとする。
ドラクロワが、ぶつかってきた。もんどり打って倒れ、自分が剣を握っているのかどうかも、はっきりしない意識に、ドラクロワの爛々と光る目だけが、はっきり見えていた。
ジークは、ドラクロワを跳ね飛ばし、起き上がった。無我夢中で動いた。黒い稲妻が、体のあちこちを灼いたが、その痛みさえ、意識に届かなくなっていた。
突然――ジークの眼前に何かが現れ、ドラクロワの姿を隠した。

いったい、それが何なのか、一瞬、分からなかった。
気づけば、柔らかな、蜂蜜色の髪が、視界いっぱいに、広がっている。
「お願い……」
一瞬の静寂の中、二人の男の間に、悲しいシーラの声だけが、聞こえた。
──なんだ!? ジークは戦慄した。何か恐ろしい過ちを犯したときの、すくみ上がるような感覚に襲われたのだ。刹那──何かが、輝いていた。
とてつもない聖性が生じ、そのあまりの強さに、目が、光を見たと錯覚したのだ。
聖性が、たちまち二人の男から瘴気を吹き払い──にわかに辺りを黒い稲妻が吹き荒れ、目も耳も塞ぎ、男の姿も、女の姿も隠し、ジークの腕を、背を、胸を、稲妻が灼き、激しい痛みが走った。そして聖性と瘴気の激しいせめぎ合いの中で、ジークは意識を揺さぶられ、気が遠くなり、気づけば、床に倒れ伏し、痛みと恐怖におののいていたのだった。
辺りには静寂が降り、砕けた壁や天井から、ぱらぱらと破片が落ちている。
ジークが、ゆっくりと顔を上げると、目の前に、床に落ちた剣の柄が、あった。
その、銀に光る、聖砕の剣の柄へ、ジークは震える手を伸ばした。剣を握ると、途端に安心した。それほど、心が、何かの衝撃に怯えきり、頼りになるものを探していたのだ。
剣を手に立ち上がったとき──ふと、何かが、床で跳ねた。

赤い雫だ。それが、自分の剣の刃を滑り落ちてゆき、床に零れ落ちて、跳ねたのだ。
ジークが、再び、剣の柄に目を当てたとき、それは銀の色をしていなかった。
真っ赤だった。聖印を刻まれた鍔元が、夥しい赤い色に、染まっているのだ。
赤い雫が、とめどなく柄に流れ落ち、みるみるそれを握る手も濡らしてゆく。
ジークは慌てて銀の色を探し、鍔から目を上げ、刃の腹を見た。どこまでも赤かった。
更に上を見た。剣身を染め上げる鮮やかな赤さに、頭を殴られたような衝撃を受けた。
ふいに、手の中で、剣が重みを増したような感覚があった。実際は、手の力の方が、どんどん抜けていっているのだが、ジークには、剣が重くなってゆくとしか思えなかった。
重みに耐えられず剣が下がってゆき、かつん、と音を立てて、剣尖が、床を打った。
そして、ふと、ジークは、剣尖の向こうで、うずくまる男の姿を、見た。
ドラクロワが、うつむき、ひざまずいた姿で、両腕に、一人の女を抱いている。
途端に、お願い――という、あの声が、ジークの脳裏に、甦った。
「何をだ……シーラ。何を願うというんだ……」
ドラクロワに抱かれたシーラに向かって、ジークは、そう声をかけていた。
シーラは、答えなかった。
目を閉じ、天に顔を向けたまま、まるで、静かに眠っているように見えた。

だがシーラの胸から流れ出る血は勢いを失い、既に鼓動が止まったことを告げている。
それが何を意味するのか――咄嗟にジークの心は、事態を理解することを拒んだ。
ドラクロワが、ゆっくりと、顔を上げ、ジークを見た。
その腕も膝も、そして床も、真っ赤に濡れ、ドラクロワは、愛する女の血に染まりながら、凄まじい形相でジークを見つめ、そしてジークが手にした聖咎の剣を、睨み据えた。
途端に、血に濡れた剣がジークの手の中で重みを増し、耐え難いほどの重さになった。
手が、反射的に柄を握りしめ、その重さに耐えようとするのが分かった。
おののく心を保つために、どこまでも剣に頼ろうとしている自分が、悲しかった。
剣を棄てられない自分の手が、ひどく哀れだった。

6　夢の葬送――そして

「その後で、すぐ、聖王の配下の者が、ドラクロワを捕らえた」
ジークは、低い、淡々とした声音で、そう告げた。
「秘儀の閲覧に乗じて、秘儀を濫用した罪――という理屈だ。聖王としては、王弟とドラクロワの、二つの敵が、一緒に潰れてくれた形になった」

今度は、牢に入れられたのはドラクロワの方だった。聖王は、ジークに、自分の直属になるよう話を持ちかけた。ドラクロワの処遇をたてにされ、ジークはそれを拒めなかった。
たった一日で、完全に、ジークとドラクロワの立場が、逆転していたのだ。
アーシアは、目を見開いて、ジークの話に聞き入っている。
「そして俺が……シーラを葬った」
そう、ジークは言った。

シーラの葬送は、華々しいものだった。〈銀の乙女〉の高位の者や様々な者達から、続々と弔辞が届き、埋葬されてからも、その墓前に、花は増え続けた。
シーラに癒されたことのある兵士達はみな、剣や鎧にシーラの名を刻んで、シーラの死を悼み、あるいは黒衣の天使にちなんで、黒い布を、剣や腕に巻いたりした。
これほど人に愛され、惜しまれた者の葬儀を、ジークは、かつて見たことが無かった。
僅かな時間だけ、ドラクロワも葬送に立つことを許された。棺の蓋が閉められ、丘へ運ばれてゆく様子へ、手足を鎖でつながれたドラクロワが、鋭く光る目を向け続けていた。
葬儀の後、ジークは半ば強引に、聖王から、ドラクロワとの面会の許可をもらった。
ジークは、鉄格子越しに、暗い牢の中で、冷厳と座るドラクロワを見た。

少なからぬ衝撃があった。ドラクロワの眼差しは、かつてないほどの苛烈な意志に光り、そのくせ、感情を完全に抑制した、穏やかとさえいえる様子をみせていたのだ。
「俺が聞いた、シーラの最後の言葉は、お願い——という一言だった」
ジークが言うと、ドラクロワはひっそりとうなずいてみせた。
「私が聞いた、シーラの最後の言葉も、それと同じだったよ、ジーク。ただ単に我々を止めるためだけでなく……それこそ多くの願いを込めた言葉だろう」
ドラクロワの言葉に、ジークも、そっとうなずいた。
「瘴気に冒された私達を止めようとして、シーラは、お前に殺されたのだ……ジーク」
あまりに、低く穏やかな声で言われたせいで、ジークは、抵抗する気持ちもなく、うなずいていた。だが自分が殺したという実感は、まるで無かった。シーラの身を剣が貫いた瞬間を、ジークは、完全に覚えていなかった。そして、その実感が無いということが、無性に悲しく、辛かった。叫びだしたくなるほど切なかった。
「もう一度、理想を目指そう……何度でも」
叫ぶ代わりに、そう言いすがった。それしか、自分には残されていなかった。
「すぐに、お前をここから出す。俺にどうすれば良いか言ってくれ。俺はお前を聖王にする。理想のために一生を捧げる。お前のためなら何でもする」

「外典だ――」
　ドラクロワが、牢の闇に翳る微笑で、言った。ジークは息をのんだ。
「それ以外に望むものは無い。私をここから出す必要も無い。いずれ、扉は開かれる……試練を乗り越えたときに。外典が示す真実に……じきに辿り着く」
「外典とは……いったい、何だ、ドラクロワ」
　いっそ全て否定したい気持ちをこらえ、ジークは、そう問うていた。
「聖クレマチスが、生涯の最後に、自ら、神の恩恵から逃れて記した、秘儀書だ」
「神の恩恵から逃れて……？」
「霊神アズライールの囁きを、拒んだということだ。聖クレマチスは、神の意志ではなく、自分の意志で、聖法庁の真実を、外典の前半部分に記した。そして……神を超えるために〈刻の竜頭〉の秘儀を作りだし、その詳細を、外典の後半部分に記した」
「聖クレマチスが!?」
「だが彼は　志　半ばで死に、秘儀の断片が、各地の聖堂や遺跡に残された……。聖クレマチスの大いなる遺志をやどした外典……それを真に受け継いだ者は、まだ、いない」
「聖クレマチスの遺志を受け継ぐなら……どうして聖法庁を滅ぼさねばならないんだ」
「いずれ分かる……。お前も、シーラも、いずれ分かる時が来る」

シーラは死んだ——そう言おうとしたとき、ドラクロワが、すうっと目を細め、

「シーラは、甦る……」

深い闇の深淵から響くような、執念の声を放った。ジークはぞっと総毛立った。

「もう一度言う……私を、ここから出す必要はない。ジークよ、お前は、今の内に、聖王と親密になり、自分の立場を強くしておけばいい……。来るべき時のために……」

そう言って、ドラクロワは、闇にうずくまり、一切の言葉を絶った。

ジークは、かつてシーラが感じたであろう、得体の知れない恐怖をドラクロワに感じ、鉄格子から息をのんで退いていた。ドラクロワは、あくまで理性的で、冷徹で、それゆえに恐ろしかった。怒り狂うか、泣き喚いてくれた方が、よっぽど気が楽だった。

ジークは、わななきながら、牢を後にした。その後、聖王からことあるごとに任務を受けた。聖王は純粋に、聖法庁にとって害ある敵を倒すよう命じただけだ。ジークは淡々と感情を見せず、任務をこなした。そして、ひんぱんにドラクロワに面会に行った。

ドラクロワの様子は、一変していた。まるで目に見えない拷問でも受けているかのように、呻き、のたうち、苦悶の声を上げるのだ。何ごとかと問うても、ドラクロワはじっと無言で苦痛に耐えるばかりで、ジークはただ悄然と、鉄格子を握りしめるしかなかった。

やがて、ジークの立場が、ドラクロワ直属から、聖王直属へと移されることになった。

ジークがそのことを告げると、ドラクロワは苦痛に呻きながら、
「それでいい……お前は出来る限り自由に動けるようにならねばならない」
かすかな笑みさえ浮かべて、言ったものだった。
「来るべき時のために……何者にも妨げられぬ立場を手に入れろ……ジーク」
ジークは間もなく、聖王直属になった。実際、そうする以外になかった。ドラクロワの処遇を決めるのは聖王である。ジークは、聖王に、ドラクロワという人質を握られていた。
シーラの墓には、相変わらず誰かが花を置き、ドラクロワは、いつしか苦悶を逃れ、静かに牢に座るようになっていた。そして、ジークの地位が、聖王直属の黒印騎士団として確かなものとなり、聖法庁の中でも、異質な特権を持つ存在となった、ある日――ジークは、ドラクロワに面会に行き、そこで、牢番が皆殺しになっているのを発見していた。
ドラクロワが、脱走したのだ。ジークは、すぐさまドラクロワを追った。折しも、冬の雨期の真っ只中であった。激しい雨の中、ジークは咄嗟にクレア大聖堂に向かった。そして、予想通り、そこで、外典を奪ったドラクロワに追いすがり――
逆に、あの黒い稲妻に打たれ、身動きとれぬほどの打撃を受けたのであった。
「私の行いの由縁が知りたくば、私を追って来い……ジークよ」
ドラクロワはそう言い残し、シーラが死んでから九か月後のその日、血と雨の向こうに

消えた。そしてジークは以後、三年に亘って、ドラクロワを追い続けているのだった。
ジークは静かに語り終え、じっとランプの火を見つめた。
「話してくれて、ありがとう……。辛い話なのに……ありがとう」
アーシアが、言った。後から後から涙が零れた。涙と一緒に、自分の中で狂うしかなかった何かが、綺麗に消えていった。これでドラクロワへの憎しみが消えたわけではない。憎しみは永遠に残る。だがそれでもう、自分が狂うことは無いという実感があった。
「貴方はまだ……信じてるの？　もう一度、絆を取り戻せると……」
アーシアが問うと、ジークは静かに振り向き、そして、はっきりと、うなずいた。
「ドラクロワは、聖法庁を滅ぼして、何か恐ろしいことをしようとしてるんでしょう？」
「俺が、あいつを止める」
（――お願い）
愛ではなく絆を求めた女が、遺した言葉とともに、
「俺はまだ、借りを返してない。絆を棄てて出て行こうとした俺を止めてくれた、ドラクロワへの借りを……。俺は、あいつを止めなければならない」
そう告げる言葉が、静かに燃えるランプの灯の音とともに、空気に溶けていった。

「話は以上だ――。出発は明日だ、早く寝ろ」
アーシアは、自分が言われたのかと思ったが、なんとジークはドアの方を向いている。
ドアが開かれ、ノヴィアとアリスハートが入って来るのへ、アーシアが目を丸くした。
「申し訳ありません……。アーシアさんが武器を出すのを見て、心配になって来たんですが……つい、そのまま、話を聞いてしまって……」
ノヴィアが顔をあからめてうつむき、その傍らでアリスハートが実に、あっけらかんと、
「いやぁ狼男も、色々あるのねぇ。全然、話してくれないんだもんねぇ」
「話すと、頭痛がする」
ジークは真面目な顔で言った。かつて受けた、瘴気の後遺症らしい。
「関係無いってぇ。狼男はぁ。頭が痛くなくたって、いっつも石みたいに何にも話さないんだから、たまーに全部話すと、気分良くなるんじゃないのぉ」
アリスハートが明るくわめくのへ、ジークが、ふむ……と思案げな呟きを返す。
「明日、出発って、言ったわね。私も、一緒に行くわ」
アーシアが、敢然と涙を拭い、言った。真摯な目をジークに向け、
「貴方が、本当にドラクロワを止められるかどうか、見届けたい。……ドラクロワの罪を背負うのなら、それくらい、させてくれても良いでしょう？」

ジークは、静かにアーシアを見つめた。やがて、鋭い眼差しで、

「一つだけ条件がある」

「条件——？」

「そうだ。それが守れそうになければ、お前を同行させることは出来ない」

ジークの厳しい声に、アーシアは、気圧されながらも唇を引き結び、うなずいた。

「俺に、お前の墓を掘らせるな」

アーシアは目を見開いた。そしてそれこそ、実はジークが誰に対しても、心の底から願っているのだということが、無言のうちに察せられた。

「ミーメの里の誇りに賭けて」

アーシアは、銀銃を握りしめたままの右手を、静かに胸に当てて、誓った。

「あの、もう一つ、よろしいでしょうか」

ノヴィアが手を上げて、口を挟んだ。ジークとアーシアが揃ってノヴィアを見る。

「今度、その武器をジーク様に向けたら、私が、追い出します」

ぴしりと言った。アーシアはちょっと気まずそうに、うなずいてみせた。そこへ、

「旅は、賑やかな方が良いものねぇ」

アリスハートが、明るくアーシアを歓迎した。

第四章　王の試練

「だから、ジーク……ドラクロワには、貴方が必要なの」
その女は、言った。
「貴方が、ドラクロワに理想を諦めさせる事の出来る、唯一の人だから……」

1　戦いの重さは

ごうごうと烈風の吹き荒ぶ、切り立った断崖であった。僅かな足場を探して進みながら、
「好い風ねぇ」
アーシアがにこやかに言った。すぐ後ろを、ジークが、シャベルを片手に岩壁に張りつくように進み、ノヴィアが続く。アリスハートは、こんな強風に身をさらせば、どこに飛ばされるか分かったものではなく、ノヴィアの法衣の胸元で震えていた。
「ここここ、怖いよぉ、怖いよぉぉぉお」

「ノヴィア……本当にこの先にあるのか」
「はい……ジーク様。信じられませんが……この先に見えます」
当初、ジークらは、聖王から渡された地図通りに進んでいた。だが間もなくアーシアが強硬に、あっちに道がある、こっちを行った方が良いと主張するようになり、試しに従ってみたところ、実際に地元の人間しか知らないような抜け道があったのである。
「風に、道を訊いているのか……」
ジークは感心した。アーシアは、大気の聖性に対する鋭敏さで風の行方を知り、道筋を察するのだ。ムルドアでさんざん迷ったのは、強い堕気が、その感覚を混乱させたからだろう。戦乱で道しるべが失われた状況下で、これほど助かる力は無い。ノヴィアが万里眼を使いすぎて疲労することもなかった。ただ、勢い、先導するようになったアーシアは、
「まぁ、私の旅に、貴方達がついてくるようなものね」
そんなことを呟いて、ノヴィアやアリスハートのひんしゅくを買っている。
そしてそのうち野生の獣しか知りそうもない直線的な近道を抜けるようになった。道など整備しようも無い峻厳たる山を真っ直ぐに越え、川を渡り、邪魔な樹木など銀銃の一撃で伐倒し、そして今、野生の山羊でも尻込みしそうな断崖を踏破せんとしていたのである。
「どうやら敵はいないようね。目的地は近いわ。それにしても、気持ち良い風ねぇ」

敵の兵がこんな所を哨戒するわけがない。代わりに遭難の危険は増大する一方だった。
ジークもノヴィアも呆れたが、かといって、この断崖に心から恐怖するわけでもなく、
「確かに、この風はこの風で、気持ち良いものかもしれんな……」
「お昼をご用意したいんですが……歩きながら食べるのも、たまにはいいでしょうか」
「みんなぁ、なんでこんなところ進めるのよぉ……こんなの狂ってる、狂ってるぅう」
アリスハートだけが、いまだにノヴィアの胸元で泣き言をもらすが、
「あ……すごーい見てぇ、鷹が飛んでるよぉ。こんなところにも生き物がいるんだぁ」
そこはそれ、楽しむところは楽しむのであった。

ムルドアから徒歩で三日はかかるはずのクスカ聖騎士団の砦に、その日の夕刻には接近していた。アーシア、直行の賜物である。
砦から西に行けば、クスカ大聖堂がある。それが、今回の目的地だった。
なだらかな山道を下ると、巨きな湖が現れた。赤く夕陽が射す中、透き通るような湖畔をぐるりと巡り、対岸の砦を目指す。そのうち、ふいにちょっとした異変に出会っていた。
「うわぁ！　綺麗な鳥ぃ！」
アリスハートがわめいた。湖に、大きな一羽の白鳥が泳いでいたのだ。その優美な姿に

アーシアとノヴィアが揃って溜息を零し、ジークも思わず目を細めた——そのとき。
ばさり、と音を立て、白く夕陽を切り裂くように、にわかに鳥が、翼を広げていた。
その姿を目の当たりにし、思わず、みな足を止めている。
翼が、双つあったのだ。左右に二つずつ——四つの翼が、白鳥の身から伸び、宙にはためいたのだ。白鳥が、淡く飛沫を跳ね、飛翔した。たちまちその姿が見えなくなり、
「四つあったよ、翼が、四つっ！　すごーい、精霊かなっ」
アリスハートがわめき散らし、アーシアもノヴィアも互いに目を合わせている。
「精霊には、招かれた土地を離れる事は出来ない。恐らく、エインセルだろう……」
鳥の行方を見やってジークが言う。エインセル——元は自分自身という意味で、この世に招かれたものが、招かれた理由を忘れ、あるいは拒み、自由意志を持ったものを、そう呼ぶのである。どこへ行くかも、どこから来たかも忘れ、さまよう、幽明の存在だった。
みな、深甚として不思議な感動を覚えながら、鳥が消えた彼方を、振り仰いでいた。

「うっわぁー……ひっどいねー、これぇ」
アリスハートが遠慮のない声を上げた。砦の、門全体が打ち砕かれ、櫓と共に崩れ果てているのだ。衛兵所も厩も叩き壊され、激しい戦闘を、生々しく物語っている。

ノヴィアとアリスハートは、井戸と竈が無事かどうかを確認しに行き、ジークとアーシアは、砦の破壊を調べた。裏門を出た途端、ひしめくように墓標が並んでおり、

「道理で、死体が一つも無いわけね……」

アーシアが呆れたように言う傍らで、ジークが、ひときわ大きな石碑を見つけていた。

希赦の石碑――滅多に見られないが、戦場で、死んだ敵兵を埋めるとき、相手を殺した罪の赦しを希うしるしを刻みつけた石碑だった。

「ただ詫びているわけではないな。恐らく、裏切りだろう……」

ムルドアと同じように、ドラクロワに共鳴して聖法庁から離反した者達が、同じ砦の仲間達を殺したのだ。砦の破壊が、外側に少なく、内側に多いことが、それを証明していた。

そのとき――にわかに、風が唸りを上げた。木々の葉が嘆くような音を立ててざわめく。

突然、ジークが苦悶の声を漏らし、どっと膝をついた。

「ジーク……!?」

アーシアが、凝然と立ちすくんだ。目に見えぬ堕気の固まりが、ジークの身に流れ込み、その影が、じわりと暗く濃さを増したのを、目の当たりにしたからだった。

「弔われてなお、赦せぬ者達よ……その憎念、俺が引き受けよう」

言うや、堕気の固まりが、歓喜して怒濤のごとくジークに流れ込んでゆく。

間もなく、風は静まった。アーシアは総毛立ち、咄嗟に、ジークから後ずさっていた。
「堕気を、あんなに強い堕気を、そんな……全部、受け入れるなんて……」
ジークは、シャベルを杖にして立ち上がり、淡々と、右手で額に浮いた汗を拭っている。
左手から、血が一筋、零れ落ちていた。左腕に刻まれた聖印が出血しているのだ。
その様子を、同じく聖印を体に刻まれたアーシアが敏感に察し、驚きに目をみはった。
「聖印が、自分から、もっと深く、腕に刻まれようとしてるんだ……貴方と一つになろうとして。そんなの……ミーメの里でも見たことない」
いつしかアーシアの声が、得体の知れない感動に震えていた。そして、思わず、
「もし私が死んだら、今みたいに、受け入れてくれる？　私の魂も、招いてくれる？」
そんなことを、訊いていた。
「どんな敵とでも戦える姿にしてくれる？　戦うことしか考えなくてすむ自分に……」
「もう一度、そんな質問をしたら、お前を聖法庁に引き渡し、里に帰らせる」
冷淡なジークの返答に、アーシアは、傷ついた表情をあらわにして息をのんだ。
「戦いは、命を捨てるためのものじゃない」
鋭い声音に、アーシアが、びくっとなる。そして、条件のことを思い出していた。墓を掘らせるなという条件を。アーシアは唇を噛んだ。だが一方で納得出来ずにもいた。

互いに命を失わせるのが戦いではないか。命を捨てる覚悟がなければ戦いなど出来るはずがない。なぜその覚悟を抱かせてくれないのか。そういう顔でジークを見つめた。
「お前は、戦いの重さを知らない。優れた聖性の使い手であるせいで、命を奪うことを軽く見過ぎている。だから、自分の命も、軽いままだ。そんな者を魔兵には出来ない」
まるで心臓に冷たい刃が潜り込むような言葉だった。アーシアは愕然となって動けず、気づけば手も足も震えていた。悔し涙が溢れそうになって、慌ててこらえた。
「いや、ちょっと狼男ぉ。それって言い過ぎよぉ」
唐突に、明るい声がした。アーシアが目を丸くして、宙を見上げる。
するとそこに、金の羽を震わせて宙に浮かぶアリスハートが、ぴしっとジークを指さし、
「アーシアさんのこと思って言ってんだろうけどさあ。兵隊に向かって喋ってるんじゃないんだから、他に言い方ってもんがあるでしょぉ。可哀想じゃないのよぉ」
たしなめるように、言うではないか。ジークは、それには応じず、
「食事の用意は出来そうなのか」
「井戸も竈も無事だってノヴィアが言ってたから、それを伝えに来たんだけどさ」
「……私も、手伝う。厨房にいるのね、ノヴィアちゃん？」
アーシアが、気丈な笑みで言う。アリスハートが気遣わしげに、うん、とうなずくと、

アーシアは身を翻し、逃げるように、砦の方へ去っていった。
「もぉ、狼男は、いつも無口なくせに、急に、びしばし言うんだからぁ。怨まれるよぉ」
「アーシアは、戦う力を持ち、強力な武器を手にした。命の重さを知る必要がある」
淡々とジークが返す。命の重さを知らねば、力の重さに頼るだけになる。平気で弱者に力を向けるようになり、誰かの犠牲を当然と思うようになる——それが自分の命さえ投げ出す者の心であり、命を失う覚悟を持つ心とは次元が違うものだった。
「アーシアが、命の重さを知らないまま力に頼れば、お前やノヴィアにも、危険が及ぶ」
そう言われて、さすがのアリスハートも、うーんと唸った。
「要するに、アーシアさんが自分の命を軽く見てるのが、いけないのね」
ジークがうなずくのを見て、ふと、アリスハートが、訊いた。
「ドラクロワって人も、そうなのかな。だから平気でひどいことが出来るのかな」
ジークは、すぐには答えなかった。夕陽に赤く染まる湖へ目を向け、かつて、罠に落ち、大敗を喫したときのことを思い出していた。戦場で、自分が殺した者の血が流れ込み、真っ赤になった川に、腰までつかっていたときのことを。あのときジークはあまりに無我夢中で人を斬りすぎた。その結果、自分の命さえ投げ捨てる方向へと、心が傾いたのだ。
そして暗殺に走り、自分の命を犠牲にし、絆を崩そうとした。ジークにとって、出来る

ことならば過去に戻って全てをやり直したくなるほど、苦く辛い経験だった。
「自分の命をどうするか……それが人の自由意志だ。エインセルのように、招かれたものでさえ、時として、自分の存在理由よりも、自由意志の方を求めることがある」
そして人は、その自由意志で、自分の命を棄てることさえ出来る。だが本当にそうする必要があることなど、滅多に無い――ジークはそう言った。
「多くの場合、命を棄てること自体が、間違いだ」
ジークは、己自身の後悔を噛みしめるように告げた。そして、静かな声音で、
「ドラクロワは……命の価値が、届かないところへ、行こうとしている……」
そう、答えた。アリスハートには意味が分からなかったが、ジークがドラクロワを必死に止めたがっている気持ちだけは、よく分かった。アーシアが自棄になって命を放り出し、力を振りかざすようになるのを防ぎたい気持ちも。
「狼男って……本当は、誰にも死んで欲しくないのねぇ。墓掘りだからかな。それとも逆かな。死んで欲しくないっていう気持ちが強かったせいで、墓掘りになったのかな」
ジークにも分からなかった。しいて言えば、その両方だった。
「狼男、本当はノヴィアもアーシアさんも、つれて来たく無かった？」
アリスハートがぽつんと訊いた。いくらノヴィアやアーシアが自分の意志で旅している

とはいえ、二人を戦いから守ることは、ジークの心を重くしているのではないか——
「助けられているのは俺も同じだ」
だがジークは、あっさりと言う。ちらりとアリスハートに目を向け、
「……お前にもな、チビ」
「もぉっ、チビって言うなってのっ！……って、あたし？　何かしてるっけ？」
「そういうところが助かる」
「……そういうところって、ねぇ、どういうところよぉ」
「そういうところだ」
それしか言わず、ジークはシャベルを担ぎ、無造作な足取りで、砦へ入ってゆく。
その隣で宙を舞いながら、アリスハートは釈然としない顔で、首を傾げている。

砦の厨房では、てきぱきとノヴィアがアーシアに指示を飛ばし、
「この野菜を刻んで、鍋に入れて下さい。それが終わったら、砦に残っていたパンを切って下さい。火は私が見てますから大丈夫です」
「うん、分かった」
「干し肉はそのままだと美味しくないので、こちらに漬けておいて後で料理します」

「うん、触らないようにする」
「竈の火が残っていて良かったです。あ、そこ、熱くなりますので気を付けて下さい」
この小柄な少女の、何とも威風堂々とした指示に、アーシアは、すっかり従っている。
アーシアは無心になって野菜を刻み、パンを切った。そのうち、ふとジークの言葉が頭をよぎった。命が軽い――だから魔兵になど出来ない。何もそこまで言わなくても良いではないか。自分の必死さへの返答がそれか。そう思って、悔しさに顔をしかめた。
途端に、刃が、指先を浅く切った。痛みに慌てて手を上げると、人差し指の腹から、薄く血が零れてくる。この痛みも血も軽いというのか。自分の痛み、自分の血だ。自分の思い、自分の怖さ、自分の苦しさだ。それをとやかく言うより、せめて安心させてくれても良いではないか。もし死んでも、魂を招き出し、ドラクロワと戦う力にする――そう言ってくれるだけで、自分は安心して戦える。気持ちが楽になる。なのに――
「血止めの薬です」
ふいに、ノヴィアが、横合いからアーシアの手を取り、言った。小瓶から塗り薬を出して、アーシアの傷口に塗る。薬が傷にしみたが、いっそそれが心地よかった。
「ありがとう……ノヴィアちゃん」
「塩とコショウの瓶、どちらが良いですか」

「……瓶？」
「すっきりしますよ。ジーク様に何か言われたのでしたら、どうぞ」
ノヴィアが、にっこり笑って言った。アーシアが、やっと理解した。鍋の中に、瓶の中身をぶちまけろと言うのである。さすがのアーシアが唖然となった。
「大丈夫です。私達の食べる分は、別にしますから」
なんとそんな事まで言う。アーシアは呆れるような空恐ろしいような気分になった。
「ジーク様に、仕返しするんでしたら、これが一番です。後は、包帯でしょうか」
「包帯……？」
「御自分では上手に巻けないので、放っておくと、とても困ってしまうんです」
む……と、折しもそのときジークが別室で声を漏らしていた。手から包帯の束が落ち、点々と床に転がる。アリスハートが、ひょいと飛んでいってそれを抱え、
「なるほどねぇ、こういうところで、助かるってわけねぇ」
一人で合点して呟きながら、ジークの手に渡してやる。ジークは、左腕の聖印に沿って、もぞもぞと巻き直すが、肘までゆかぬうちに、包帯が折れ、絡まり、上手くいかない。どうにも不器用なのである。料理にいそしむノヴィアに遠慮したわけだが、包帯一つで悪戦



苦闘する様子を、アリスハートは、むしろ感心しながら、眺めている。
「あんた、本当に、そういうの苦手ねぇ。ねぇ狼男ぉ、ちょうちょう結び、出来るぅ？」
ぬ……と悶い表情になるジークに、
「ま、得意不得意ってあるものね。気にしない、気にしない。あたしは出来るけどっ」
大いばりのアリスハートなのだった。

「ノヴィアちゃん……貴女、ジークの従士よね」
「はい。ジーク様は優しい方ですから。甘えさせてくれますので、遠慮は要りません」
にっこりと可憐な少女が言うのだから、かえって恐ろしいものがあった。
アーシアは、塩の瓶を手に、鍋の前で立ちすくんだ。瓶の蓋は、むろん開いている。
そしてふと、甘えさせてくれる、という言葉にはっとなった。確かにジークならば無言で食べるだろうという気がした。ではなぜ自分にああまで厳しい言葉を告げたのか。
結局、甘えていたのだ。ジークに。そしてその甘えがアーシア自身に危険を及ばさない限り、ジークは無言で許容しただろう。だがひとたび甘える気持ちが、アーシア自身を害するとき、ジークはすぐさま苛烈なほどの厳しさでそれを止めてくれる――
ずきん、と切った指が痛んだ。それまでとはまるで違う痛みだった。ジークがこれまで

経験してきた痛みはこんなものではないのだと思った。だからどこまでも人を許せるし、そしてまた厳しいのだ。涙が零れそうになって慌ててこらえた。そしてその拍子に——

アーシアは、瓶ごと鍋に落としてしまった。さすがのノヴィアが、目を丸くして、

「すごい……。瓶を丸ごと入れるなんて、私も考えつきませんでした」

「あ、いや、これは……」

「どうですか、すっきりしましたか？　まだ入れます？」

にこやかなノヴィアの表情に、アーシアは、なんとも気を呑まれ、そして笑った。

「かなわないなぁ」

自分よりも四つも歳が下の少女に、すっかり先導されていた。気づけばジークに対する悔しさが綺麗に溶けて消えている。アーシアは笑って、

「私が、食べるわ、これ」

塩の瓶ごと、ぐつぐつ煮立つ鍋の中身を見て、言った。悔しさが消えたのだから、そうするのはアーシアにとって当然だった。するとまた、ノヴィアがにっこりと笑って、

「ただの小麦粉です。塩ではありません」

言ったものだった。アーシアは、唖然となり、

「アーシアさんだったら、自分で食べると言い出すと思って、中身を変えたんです」

完全に一枚上手を取られて、声に出して笑っていた。さすがはジークの従士だと思った。
やがて日も暮れ、山際の低い位置で、大きな月が、紅い輝きを湖畔に映し出している。
砦の食堂は、惨憺たる戦闘の跡で使い物にならず、アリスハートの、
「すごーい、綺麗なお月様ぁ……」
という一言で、食事の場所が決まった。水辺に火を焚き、月影に浴しての夕食である。
アーシアとノヴィアが楽しげに語らいながら、ときおり黙々と食うジークを見て笑みをこらえた。ジークの左腕の包帯が、でたらめに縄で縛ったような有様だからだ。結び目が幾つもあり、分厚く巻きすぎて、これでは籠手がはめられない。
「なんか、ああしてると……小さい子供みたいに見えるんだけど」
「私も時々、そんな風に感じるんです。普段は、そんなこと無いんですけど……」
ひそひそと意見を交わし合うアーシアとノヴィアに、アリスハートが混ざって、
「ねぇねぇ、今度、狼男が寝てるときに、髪を三つ編みにしちゃおうよ。きっと自分じゃほどけずに、そのまんま敵と戦うよ」
途端に、三人が、どっと笑った。一方、ジークは、三人が仲良くしている分には、まるで気にした様子もなく、紅い月光に澄み渡る湖面を、一人で静かに眺めている。

ふいに、そのジークが、目をみはった。アリスハートがあっと声を上げ、アーシアもノヴィアもつられて湖を見る。

あの大きな白鳥が、天から、ひっそりと音もなく、湖に舞い降りてきていたのだ。

浮き上がるような純白さで四つの翼をひるがえし、幽然と水面に降り立つではないか。水に沈むことなく舞い跳ねる鳥の姿に、その場にいる誰もが息をのんで目をこらし、

「湖に、何かあるのか……？」

ジークが、いち早くそれに気づいた。鳥が水に身をひたさないのは、水面の下に何かがあるせいなのだ。ふいに、鳥が、ジークを見た。その黒い瞳に、ジークがはっとなった。

「俺達に、伝えているのか……。そこに、あるものを……」

ジークが立った。左腕の包帯を、右手で一気に引き千切り、素早く傍らに置いていた籠手をはめる。いったいこの男のどこが不器用なのか、まるで分からなくなる即応の態度で、

「――敵だ！」

ぽかんとする三人に、鋭く告げた。鳥が、再び飛翔した。その姿が月に重なり、空高く舞い上がってゆく一方、にわかに水面が揺らいだ。水中で、稲妻にも似た光が咲き乱れたかと思うと、湖面のあちこちに、ゆらりと、緑色に光るものが、現れ出たのである。

アリスハートが悲鳴を上げてノヴィアの首にしがみついた。異形のものどもが、湖面か

らぬっと頭を突き出し、一匹また一匹と、溢れるように上がって来るのへ、
「緑棘獣か……」
ジークが、言った。裸の人間に見えるが、全身を緑の鱗で覆われている。目蓋のない丸い眼に、魚とも人ともつかぬ顔。ひょろりと長い腕と、丸い拳に、鋭い棘を生やしている。
その魔獣の一匹が、腕を鞭のように振るってきた。十歩は離れた、まさかの距離だ。ジークが素早くかわすや、棘だらけの拳が地面を一撃し、ごっそりと土を抉り飛ばしている。
堅固な砦の門を、粉々に打ち砕いたものこそ、この魔獣どもに違いなかった。
「魔獣を招き出し、離反に応じない者達を皆殺しにしたか……」
ずん！　ジークが地面にシャベルを突き立てた。その背後で銀銃を抜くアーシアに、
「アーシア——お前に見せてやる。戦うことが全てとなった、修羅の魂を」
言うや、魔獣どもが、湿った足音を立てて殺到し、その腕を振るって来た。
「ジーク・ヴァールハイトが解き放つ！」
刹那、ジークの左手から放たれる雷花が、シャ、ャ、ャ、ャ、ャベルそのものに走っていた。
「水刻星の連なりの下、凄魔ギルトとなりて、我が敵に見せしめよ！」
シャベルが水銀のように溶け、飛散した。現れた剣をつかむジークの周囲で、水銀の輝きが、銀の鱗を持つ魔兵と化し、両手に双剣を握り、迫る魔獣どもの腕を斬り払った。

「山羊座(ハナエル)の陣！」
ジークの言下、扇状に散開し、魔獣どもへ迫るのは、十体余りの、人の形をしたトカゲのごとき魔兵であった。目も鼻もなく、突き出した口に牙を剝き、両手の剣で魔獣どもを斬り屠ってゆく。全身を魔獣どもの返り血でずぶ濡れにしながら雄叫びを上げ、血の雨に酔うがごとき凶暴な剣の乱舞をみせる凄魔達の姿に、アーシアが呆然とすくみ上がる。
「俺の、かつての仲間達だ。お前もこうなりたいなら、その魂、俺が引き受けてやる」
淡々と告げるジークの背後で、アーシアは瞠目したまま凍りついていた。銀銃(ヘイリン)を握る手が固まったように動かず、ついで震え出し、敵に向けることさえままならなくなっていた。
「ノヴィア！　水中に、魔獣(バロール)を招き出しているものがあるはずだ！　俺も魔兵も、水に対しては何も出来ん。お前が狙え！」
その言葉通り、凄魔達も、水の中へは入ろうとしない。大地を通して死者の魂を招くジークにとって、水中は、その力が唯一及ばぬ領域だった。
アリスハートが肩先ではらはらと見守る中、ノヴィアは一心に水底を見つめ、やがて、
「見えました……ジーク様。何ですか、あのぐにゃぐにゃした気持ち悪いもの」
「増殖器(ジェネレーター)――堕界への扉を開く、生きた鍵だ。それさえ討てば魔獣は全て消える」
「分かりました……矢を……矢を見ます」

ノヴィアは、透視と幻視の力を併用するべく、更にその視覚に精神を集中させ、金色に輝く矢を出現させた。かと思うと、矢が、更に太く長くなった。切っ尖が幾重にも刃を増し、巨大な槍のごとき武器と化すや――にわかに、金の閃光が、夜気を裂いて迅り抜けた。

魔獣も凄魔も、じぐざぐに避け、鋭く湖面に飛び込み、水中でも複雑な飛来を見せるや、突如、湖全体を震わせるような、心に直接響く魔性のものの金切り声が響き渡った。

「串刺しにしました……。何か、うねうね、ぐねぐね……ううう、気持ち悪いよう」

ノヴィアが嫌悪と疲労で目を閉じ、座り込んで宝杖を額に当て、回復に努める。

魔獣どもが、どろりと緑色の液体と化し、消えてゆく。ジークが左腕をひと振りすると、凄魔達もまた、水銀の輝きと化して集まり、元のシャベルとなって地面に突き立った。

「……私、それが、貴方の昔の仲間だって、言われた途端……怖くなって……」

シャベルを手に取るジークに、アーシアが、震える手に武器を握りしめ、

「私……何も出来なかった。重くて……銀銃が、急に、重くなって……」

「それがその武器の、本当の重さだ」

命の重さ、戦いの重さだとジークは言った。アーシアの顔が、苦しげに歪んだ。歯を食いしばるが手の震えは止まらず、悔し涙が溢れた。ノヴィアもアリスハートも咄嗟にかける言葉が無く、うつむくアーシアを、湖面を渡る風の音だけが、寂しく慰めていた。

2　霧の谷

　どこかで鐘の音がする。辺りは乳白色の深い靄に包まれ、何も見えない。
（――祈りなさい）
　懐かしい声がした。アーシアはふと、靄の向こうで子供達の声がするのに気づいた。
（最初に、ミーメの里に、連れて来られたときだ……）
　戦乱で焼け出された子供達の不安そうな声だった。幼いアーシアは兄にしがみつき、兄は大丈夫だと何度も言ってくれた。その実、兄も心細さに震えていた。戦乱で両親が死に、たった二人の兄妹だけが残された。その事実がどうしても受け入れられず、頑なに誰とも話そうとしない二人に、里の長老が、優しい微笑みで言ったのだ。祈りなさい――と。あなた達が祈ってやらなければ、誰があなた達の両親を、天国に送ってあげられるだろう。
　その言葉で、兄妹は長老に少しずつ心を開いていった。数年後、長老が病死した夜、アーシアと兄は、長老の魂のために、二人して朝まで祈り続けたものだ。
　アーシアが子供達の声の方へ進むと、鐘の音がにわかに大きくなり、胸の奥で動悸がはぜ、気づけば平らな地面ではなく長い階段を駆け上がっている。ふいに、どこからともな

く兄の声が聞こえた。全身が蠟のように固くなった兄が、懸命に喉を震わせ、

（殺してくれ……アーシア）

アーシアを、じっと乾いた目で見つめ告げたときの声だ。そのときアーシアは泣きじゃくってかぶりを振り、その後も、ひたすら兄が生きてくれることを毎晩祈り続けた。

だが——階段を上りきったアーシアは、兄があの男に首をつかまれて持ち上げられているのを目の当たりにした。愕然とするアーシアに、兄は目だけ向け、唇にかすかな別れの微笑みを浮かべた。その蠟のような首が、折れ砕けた。兄の首と体が別々に床に落ち、瞬く間に緑色の炎を上げて燃え上がるや、兄の顔も体もみるみる溶け崩れていった——

アーシアは、自分の悲鳴で目を覚ました。胸の奥で激しい鼓動を感じながら辺りを見回す。砦の宿泊所だった。まだ明け方だ。しかし再び目を閉じる気にはなれなかった。

砦を出ると湖面から立ち上る靄が辺りを覆っている。咄嗟に悪夢を思い出しかけ、慌ててかぶりを振った。湖に歩み寄り、冷たく透き通った水をすくって顔を洗いながら、

「なんだか、泣いてばかり……」

湖面に映る自分の顔の、むくんだような目元を見て、溜息をついた。

ふと、手が震えた。肩や膝や足まで、がたがたと震えだす。昨夜の凄魔の姿が鮮やかに

思い出され、胸の奥から得体の知れない恐怖が込み上げてきた。
「逃げたくない……逃げたくない……」
水辺に手をつき、必死に歯を食いしばった。胸の奥に、魔兵の姿をうち消すように、兄の姿が浮かんだ。兄は、動けぬまま、抵抗も出来ぬまま、自分の命に絶望したまま、無惨にも首をへし折られ、死んだのだ。そして、緑色の炎となって消えたのだ。
自分が修羅になっても構わない。自分の心の中の虚無をあの男に叩き込み、自分がどれほど傷つき、絶望したか、思い知らせてやりたかった。
だがその思いとは裏腹に、恐怖が這い登ってくる。修羅として荒れ狂うことの恐ろしさを、昨夜の凄魔に思い知らされていた。兄を思う気持ちなど瞬く間に消え失せ、自分がどういう人間であったかも忘れ、見境のない怨みだけを持ち続けることになるのだ。
一方で、アーシアは、死んだ仲間達のことを思った。彼らは里を信じ、アーシアを信じ、信念のもとで魔兵として招かれた。だがもはやアーシアには里も信じられなかった。かつて〈銀の乙女〉から紋章を授かったときは本当に嬉しかった。みなが喜んでくれた。まさか自分が紋章を得られるとは思わなかったし、得たからには里のために頑張ろうと思った。
だがそんな自分も結局、里の地位を上げるための存在に過ぎなかったのではないか——
気づけば武器の重さも知らずに多くの命を奪っていた。殺した相手は盗賊や兵だけ、と

いうのは言い訳だ。人間は人間だ。自分は人殺しだ。そんな自分の何を信じればいいのか。
恐怖と情けなさと罪悪感がいっぺんに襲いかかり、ひざまずいて震えているうち、ふと、水面に自分が起こしたのとは違う波紋が起こっていた。驚いて顔を上げると、なんと、あの四翼の白鳥が、すぐ目の前の水面に佇み、こちらを見ているではないか。
その姿は全く水に映らず、逆に、鳥の黒い宝石のような目は、アーシアの顔を、くっきりと映し出している。よく見れば、嘴や足までもが真っ白だ。その嘴で、優しくアーシアの髪を撫でてきた。甘やかな薫りが鳥の身から漂い、アーシアの心を奇妙に宥めてゆく。
アーシアが、そっと鳥の首を撫でた。鳥は逃げない。優しくアーシアにすりよってくる。
この鳥は、自分を慰めに来てくれたのだろうか。そんな思いが湧いたとき、ふと、柔らかな鳥の首に、金属の感触があるのに気づいた。小さな首飾りに、十字型の紋章が揺れているのだ。何気なく、その紋章に触れようとすると——ふわりと、鳥が身を離した。
大事な物に触ろうとしてしまったらしい。アーシアは立ち上がりながら、目で詫びた。
鳥は、しばらくこちらを見ていたが、やがて夢幻のように四翼を広げ、舞い上がった。
鳥の姿が頭上に消えたとき、いつの間にか、アーシアの体の震えが止まっていた。
「エインセル……。なんで、私のところに……」
呟きながらも、あの鳥に対する感謝が湧いていた。あの鳥は、癒しを必要とする者のも

とへ舞い降りるのだという気がした。それが、あの鳥に触れたアーシアの実感だった。
アーシアは鳥の甘やかな薫りを思い出し、そして自然と決意が湧くのを覚えた。
自分自身をもう一度取り戻す。さまよってもいい。新しい意志を見つけるのだ。
そのために、見届けたかった。ジークの旅を。そして出来ればジーク達と――
「仲間になりたい……」
呟きながら、ジーク達がまだ眠っているだろう砦を振り返り、
「別に断るつもりは無い」
悠然とシャベルを担いで立つジークの姿に、ぎょっとなった。
「い……いつからいたの!?」
「あの鳥が現れる前からだ」
「な、なんで黙って立ってるのよっ。声ぐらいかけたって良いじゃない！」
「何事も無さそうなら、戻って寝直すつもりだった」
「何事もって……」
アーシアが口ごもる。湖に身を投げるとでも思ったのか。そんな馬鹿な。そう言い返したかったが、実際あの鳥が現れなければ、どうしていたか分からなかった。
心配してくれたのか――そう訊こうとしたが、わけもなく顔に血がのぼって言葉にならら

ない。昨日はさんざん言いたい放題に言ったくせに。そう思うと頭にくるやら、やけに嬉しいやらで、訳が分からなくなって、怒ったようにわめいていた。

「何事も無いに決まってるわ。貴方に心配されるようなことは何も無いわよ」

「それならいい。出発は日が昇ってからだ。先導を頼む」

ジークは淡々と言って、呆気なく、砦に戻っていく。

頼む、という言葉が、アーシアの中でやけに熱く残った。ジークは旅の先導者として、自分を認めてくれているのだ。妙に嬉しかった。かつての仲間達でさえ、自分を真ん中に押し込めていたのに。彼らは自分を大事にはしてくれたが、心を察してはくれなかった。だが今は——ジークの指示で役割を与えられていることに、死んで招かれるなどというのとは比較にならない安心感を得ていた。

「一番の近道を教えるから、ちゃんとついてきなさいよね」

アーシアが大声を出した。ジークは一つうなずき返し、砦に入っていった。

砦を出てからどれほど時間が経ったか、分からなくなっていた。陽を遮る深い霧が、谷の険しい岩道を覆っているせいである。

「風の様子からして、一年中、霧が出てるみたいね、ここ……」

先導しているアーシアが言った。視界が悪く、さすがに足取りが鈍い。
「こんな場所に……巡礼路の跡があります」
ノヴィアが、道の跡が真っ直ぐ霧の向こうへ続いているのを見つけていた。
「はぁー……昔の人は、こんな荒れた場所にも、一生懸命、来てたんだねぇ……」
「いや……違う」
ジークが、言った。かつてここは豊饒の地だったが、聖堂の者達が、特権を巡って争い、破壊的な秘儀を用いた末に、ついに誰も使いこなせぬほどの力が吹き荒れ、木も生えず鳥も獣も近寄らぬ死の谷と化したという。聖王からの書状に付された資料の知識だった。
「ひっどい話いー。人だけ死んでりゃいいのに、木も鳥も獣も道連れなんてさぁー」
アリスハートがわめく一方、アーシアとノヴィアが同時にジークを見やった。
「その破壊的な秘儀って……」
息をのんで言うアーシアに、ジークは小さくうなずき返した。
「〈刻の竜頭〉の秘儀――」
聖王からの書状には、まさしく、その秘儀の名が記されていたのである。
ふと、あちこちで音が聞こえた。アーシアが最初にそれに気づき、眉をひそめてジークを見やった。ジークは素早く察して、ノヴィアに目配せし、

「アリスハート、いらっしゃい」

ノヴィアがすぐにアリスハートを差し招く。アリスハートは、何やら不穏な気配にごくっと唾を飲み込み、慌ててノヴィアの法衣の胸元に隠れ込んだ。

かさかさと何かが霧の向こうで蠢いた。やがて道が折れ、曲がり角に差し掛かった途端、それが来た。岩縁のすぐ下に張り付いていたものが、いきなり躍り上がって来たのだ。

ほぼ同時に、アーシアが、両手に銀銃を抜いて、それに向かって、撃ちまくっている。音を頼りに相手の位置を探るアーシアが、敵の奇襲を完全に制する形になった。

巨大な蟹に似た化け物が、甲羅を岩そっくりに化けさせ、周囲に同化していたのだ。

蟹の化け物は、全身に虚無の弾丸を受け、岩縁ごと穴だらけになり、動かなくなった。粉々に砕けたその殻が、すうっと色を失い、真っ白になるのへ、

「白殻獣か――」

ジークがシャベルを地に激しく突き立て、剣を抜き放つ。

「ノヴィア、増殖器を探せ！　アーシア、前面を牽制しろ！」

周囲で次々に魔獣の群が身を起こすのへ、ジークが雷花を咲かせる左手を、地面に叩きつけた。稲妻が吹き荒れる中、剛魔の軍勢が招き出され、胸に槍のごとき角を生やして円陣を組み、魔獣の群と激しく衝突した。

頭上で、ぴーっと甲高い鳴き声が響いた。赤い翼を持つ巨大な鳥の群が現れたのだ。その胴に、なんと第二の顎が牙を剥き、翼よりもひときわ赤い舌を垂らしている。

「赤顎鳥――」

ジークが天を仰ぎ、魔獣の姿をみとめ、地面に手を叩きつけた。

麗魔――体は女性だがその頭部も手足も鋭い刃の束という魔兵が現れた。それらが宙に浮き、手足の刃を四方に飛ばし、アーシアの武器とともに赤顎鳥を貫いてゆく。

ノヴィアが、金色の矢を幻視させた。金色の軌跡が霧の中を迅り、岩場の向こうで甲高い悲鳴が起こる。白殻獣の姿が溶け崩れた。だが全てではない。辺りにひしめく五分の一程度が消えただけだ。ノヴィアは更に周囲を見回し、

「ううっ、気持ち悪いよう……。頑張れ私っ、頑張れノヴィアっ」

あちこちにある増殖器の気味悪さに涙目になりながら、

「はいっ、頑張りますっ！」

必死に自分で自分に応え、次々に新たな矢を幻視し、増殖器を破壊してゆく。

辺りには濃い瘴気が漂い始めていた。ぴーっと赤顎鳥の本来の口が鳴くとともに、大気に目に見えぬ瘴気が広がり、急に空気が水のように重くなってゆくのである。

「瘴気に冒されて動けなくなる前に、二手に分かれ、増殖器を全滅させる」

ジークが厳しく言って、雷花を帯びる手を地面に叩きつけた。巨人のごとき巌魔を招き出し、剛魔と麗魔を残して、別働隊となって動き出している。

アーシアには、声を発する余裕も無い。銀銃の重みに、歯を食いしばって耐えて撃ち続けている。ふと、妙な事に気づいた。撃てば撃つほど、瘴気が濃密になってゆくのだ。咄嗟に武器を撃ち放つのをやめた。赤顎鳥が迫り、慌ててまた撃った。途端、全てが分かった。自分が大気から聖性を奪って虚無の弾丸にしているせいで、余計に辺りに瘴気が蔓延するのだ。かといって、ここで武器を使うことをやめれば一気に襲いかかられる。

アーシアは深い暗闇に落ち込むような感覚に襲われた。いったい自分の名前は何だったか。アーシア・リンスレット――〈浄める者〉の称号を持つ〈銀の乙女〉ではないか。それが今や自分から大気を汚し、自滅するように窮地に陥っていた。

ただの自滅ではない。傍らのノヴィアもまた瘴気で疲労し、意識がもうろうとし始めている。幻視の矢を放つが、的を外し、悲痛な表情になりながら新たな矢を宙に具現させる。

貴女が悪いのではない――アーシアはそう言おうとしたが声にならなかった。

ふいに、アーシアの武器の弾丸が、両手とも空になった。大気から聖性を集めようとして、咄嗟にためらったのだ。そしてその瞬間、白殻獣の一頭が横合いから迫り、尖った岩のような腕の一撃を横腹へ食らって転倒した。鎧いらずの聖衣がなければ即死していた衝

撃であった。目が眩み、倒れ伏すアーシアに、白殻獣が腕をふりかざした。
ノヴィアが、決然と、アーシアの前に立ち、金の矢が白殻獣の固い甲羅を貫いた。
だが白殻獣は止まらず、そこへ左右から剛魔が突進し、ようやくに貫き砕くのだった。
「大丈夫、アーシアさんってば！　ねえっ、生きてるっ⁉」
ノヴィアの胸元でアリスハートがわめいた。アーシアは悲愴な顔で起き上がり、
「私……私のせいで……」
必死に言うが、ノヴィアとアリスハートには意味が通じず、
「真ん中に入って下さい！　前に出ないで！」
ノヴィアがアーシアの身を案じて放った言葉が、逆にアーシアを傷つけた。
ようやく自分の意志で立てそうだったのだ。せっかくジークという男に認められたのだ。
それなのに――どうしようもなく陣の中央に退きながら、アーシアは耐え難い苦しみに襲われた。虚無の弾丸では何も浄められはしない――そんなジークの言葉が思い出された。
大声で泣き叫びたかった。そしてそうする代わりに、咄嗟に右手の銀銃を握りしめ、前へ足を戻していた。大気の聖性を奪えないのなら、それ以外の所から集めればいい。
自分の中から。自分自身の聖性を弾丸に変えてやる。決然とその発想が湧いた。これまで、大気という無尽蔵に思えていた聖性の源を力にすることで非常な勇気を得ていたのだ。

だがそれさえ甘えだった。ノヴィアでさえ、自分自身の聖性を振り絞っているのに、なぜ自分はそうしないのか。自分を守ってくれるものからさえ離れろ――アーシアは鋭く自分に命じた。それが前へ出るということだった。
「私がやる!」
喊声を上げ、ノヴィアの脇から一気に前へ出た。右手の銀銃を、空のまま、撃った。
轟音とともに、大気が震え、頭上で化け物鳥どもが、ぎゃっと悲鳴を上げた。それまで赤く火花を散らせていた弾丸が、白殻獣の殻を貫き、青く澄んだ火花を噴き上げていた。
なんと一撃で白殻獣の体が四散し、ノヴィアとアリスハートが、揃って瞠目した。
更に左手の銀銃を、天に向かってかざした。まるで狙いもせず、渾身の聖性を込めて撃ち放った。青い光が真っ直ぐ天を貫き、激しい音が大気に響き渡る。そしてにわかに弾丸の軌跡を中心に、澄んだ風が巻いて一挙に瘴気を消し飛ばすではないか。
ひるんだようになる魔獣どもを、麗魔と剛魔が、押し返してゆく。
アーシアを激しい疲労が襲ったが、一方で込み上げるような充実感が湧き、
「これが、あなた達の、本当の使い方だったんだ……」
両手の銀銃に向かって呟いた。武器が、アーシア自身の聖性を何倍にも高め、息吹きさせたのだ。それが、自分以外の何かに頼る限り決して顕れない、この武器の素顔だった。

途端に、すっと手の中に武器の重みが溶け、今初めて手と武器とが一体となった気がした。
「すごーい。風が綺麗になってるぅ」
アリスハートが、ノヴィアの胸元から出てきて感嘆した。
「〈浄める者〉……」
ノヴィアが、天を見上げて呟いた。穿たれた霧の隙間から、かすかな陽光が届いていた。
そうしてノヴィアもまた決然と周囲を見据え、幻視の矢を現した。今度こそ確実に一つ一つ増殖器を破壊してゆく。やがて魔獣の姿は消え、辺りには静寂が戻った。
「ねえ、狼男は……？　なんで戻って来ないの？」
剛魔と麗魔の群に、おっかなびっくりしながらアリスハートが訊いた。途端、魔兵達の群の、ごうごうたる叫びが上がり、
「わわわっ、な、なに？　どうしたの……？」
突如として移動し始める魔兵達に、アーシアも唖然となる。ノヴィアが辺りを見回し、
「ジーク様が――魔獣の群……いえ、違う……なに、あれ……。ジーク様！」
咄嗟に宝杖を握りしめ、魔兵達の後を追って走り出している。アーシアがすぐさま追う。
開けた岩場に出た。そこでジークが、魔兵を率いて、蠢く何かと対峙していた。

「退がっていろ！」
ジークが僅かに振り向き、烈声を放った。アーシアとノヴィアがすくんだように足を止め、アリスハートが、ぎょっとなって霧の向こうを指さした。
「うわっ、うわっ、なにあれっ。何か、いっぱい混ざってるっ」
なんとそこで、白殻獣やら見知らぬ魔獣やらが、激しく稲妻を放つ増殖器を中心に、お互いの体を溶け合わせて、一つの巨大な魔獣と化し、躍り立つではないか。
地響きを上げて四つの足を踏み鳴らし、天地を震撼とさせるがごとき咆吼を上げ、
「ででで……でっっかーいっ！　なに、なに、なんなのこれーっ！」
アリスハートが叫びながらその巨大な魔獣を仰ぎ見た。尖った口は、鳥とも獣ともつかず、口の両端に、左右にがちがち噛み鳴らす巨きな牙が交差して生えている。褐色の岩のような体は人に似て、いびつな手足で地を這う、巨人のようであった。
「黄牙獣か——」
ジークが魔獣の正体を確かめるや、雷花をまとう左手を地面に叩きつけた。全てを弾き返す盾となる甲魔が次々に躍り出て、何体かが、背後のアーシアとノヴィアを守る。
咆吼を上げる巨大な一頭の黄牙獣へ、剛魔、麗魔、巌魔、甲魔の四種の魔兵が迫った。
それまで、常に圧倒的多数との軍団戦を繰り広げてきた魔兵が、このとき、一つの敵へ

の包囲を開始したのであった。麗魔が空中から鋭い刃の雨を降らせて牽制し、甲魔が相手の退路を塞ぐように展開する。そして剛魔と厳魔が、左右から押し包む。魔兵達が黄牙獣を見事に包囲し、剛魔の胸の槍が突き込まれ、厳魔の巨大な拳が振り下ろされた。

「すっごーい。一匹だけなんて、すぐに……」

アリスハートの声が尻すぼみに消えた。全身を魔兵にたかられた黄牙獣が、ぬっと天に向かって腕を伸ばし——鋼のような爪を持つ手を、地面に叩きつけたのだ。地面が揺らぐほどの衝撃が生じ、なんとその手から烈風が吹き荒れ、魔兵達を引き裂いたのだった。

愕然とするアーシア達の前で甲魔達が烈風を受け止めた。青い輝きに弾き返すが、何体かが力を受け返しきれず、衝撃に身を裂かれ、嘆きの声を上げて倒れる。

それでも衝撃の半ばは黄牙獣自身に跳ね返り、咆吼とともに、どうっと倒れ込んだ。

その隙にジークは、左右に展開していた陣形を立て直し、

「魚座の陣！」

号令一下、魔兵達が横隊を作り、一列に突進していった。それぞれ一撃を与えるや、黄牙獣の爪と牙を避けて左右にかわし、幾重にも何度でも波状攻撃を繰り返す。ジークも一刀、また一刀と浴びせ打ち、少しずつ相手の体力を奪ってゆく。押し寄せる魔兵の波に延々とさらされる黄牙獣も、地響きを上げて魔兵達を踏み潰し、その手から烈風を放って

魔兵達を弾き飛ばして抵抗した。これまで軍勢同士の戦いは何度も見てきたノヴィアとアリスハートだが、たった一体を相手に、これほど総掛かりになるのは初めての光景だった。
ふいに、アーシアが、武器を握りしめ、意を決したように甲魔の前へ出た。
「ちょ、ちょっと……アーシアさんってば！」
アリスハートがわめく一方、ノヴィアは無言のうちに、幻視の矢を宙に現している。
アーシアもノヴィアも、ただ甲魔の後ろに隠れたままでいる気などまるで無かった。
波状攻撃を繰り返すジークの傍らに、ひょいとアーシアの姿が並ぶや、
「一撃を与えたら、すぐに退け。相手の攻撃を避け、小さな一撃を繰り返し与え続ける」
ジークもまた、当然のごとく、戦術を告げている。アーシアがうなずき、二人同時に、魔獣に向かって走り込んだ。両脇を、魔兵が併走する。咆吼を上げる黄牙獣に各自の攻撃を加え、反撃を避け、次の波が打ち寄せる隙に、味方の最後尾に戻り、また突進する。
絶え間なく相手に打撃を与え続けるうち、宙を、金色の輝きが迅った。ノヴィアの幻視の矢が、複雑な軌道を見せて黄牙獣の腕をかいくぐり、その頭部に突き刺さる。
途端、魔獣が頭を振り、苦悶の叫びを上げる様へ、
「──頭だ！　頭を狙え！」
ジークが叫ぶや、魔兵達がその怒濤の攻撃を一点に集中させた。剛魔の角が突き込まれ、

巌魔の岩のような拳に打ちすえられ、麗魔の刃が飛来し、黄牙獣(ザガン)が身を退かせたが、甲魔に逃げ場を塞がれ、ジークの剣が、アーシアの弾丸が、正確にその急所を狙う。
ついにたまらず、黄牙獣(ザガン)が跳んだ。山のような巨体が、信じがたい高さにまで躍り上がり、魔兵達を振り払ったのだ。すかさずアーシアが聖性を振り絞って武器に息吹きさせ、ほとんど同時にノヴィアが幻視の矢を放っている。
金色の輝きと、青い光の軌跡が、宙にいる黄牙獣(ザガン)の頭部に吸い込まれた。地響きを上げて着地した黄牙獣(ザガン)へ、風のごとく駆け寄せたジークが、真っ向から剣を振り下ろした。
黄牙獣(ザガン)が動かなくなった。ジークが素早く跳びのくや、巨大な顔が真っ二つになり、飴(あめ)色(いろ)の体液(たいえき)が溢(あふ)れ出した。その巨体(きょたい)が溶(と)け崩(くず)れ、魔獣(パロール)の中心にあった増殖器(ジェネレーター)も萎(しお)れてゆく。
アリスハートが喜び勇んでノヴィアの首にしがみつき、四種の魔兵が、ごうごうと凶暴(きょうぼう)な歓呼(かんこ)の声を上げた。アーシアは脱力(だつりょく)して岩場に腰を下ろし、手にした銀銃(ヘイリン)を見つめた。
ふと、ジークが、アーシアの前に立ち、
「お前がいてくれたお陰(かげ)で、安心してノヴィアを置いて二手に分かれられた」
途端(とたん)に、アーシアの胸の奥(おく)でどきりと何かが跳(は)ねた。
「強い聖性を感じた……やはり、お前の力か」
ジークが銀銃(ヘイリン)に目を向けたせいで、アーシアは赤く血がのぼる頬(ほお)を見られずに済(す)んだ。

「思い出しただけよ、自分の名前を」
ジークがアーシアに目を戻す。アーシアは、ぱっと顔を伏せ、
「〈銀の乙女〉から称号を授かるとき、色々な称号の中から〈清める者〉の名を……貴方の大事な女が、私の聖性を判断して、選んでくれたのよ……」
わざわざシーラのことを話題に出して、ジークの意識をそらせようとする。
「そうか……」
ジークが顔を虚空に向け、霧の彼方に追憶を見るように、目をそらした。
途端にアーシアは、妙に、寂しい気分に襲われたが、
「シーラに代わって感謝する……力と称号の正しい在り方を見つけてくれたことに」
急にまた真っ直ぐジークが見つめて来たせいで耳まで赤くなり、慌てて立ち上がって、
「い……急ぎましょう。風が、目的地が近いって言ってるわ」
くるりと、ジークに背を向けていた。

3　英霊召喚

魔兵を引き連れ、岩道を進むと、やがて広々とした場所に出ていた。

濃い霧が渦を巻き、ごうごうとうねり、堕気に満ちた風が吹き荒れている。
ジークが岩地の真ん中で立ち止まった。アーシアもノヴィアも息をのんで立ちすくみ、
「ばば、ば、化け物ぉっ！」
アリスハートが、大声を上げて、ノヴィアの肩にしがみついてきた。
巨大な、蛇にも似た、獣の化石――そうとしか言えぬものが、岩地一面に、広がっているのだ。気づけば足下の灰色の石が、じわりと赤い液体をにじませ、
「血の臭い……!?」
アーシアが慌てて地面の化け物から退いた。化け物の骨は、不気味な脈動を見せ、
「〈刻の竜頭〉の秘儀……」
ジークの鋭い呟きの声に、三人がはっとなった。いつの間にかジークの身に、戦いの烈気が沸騰し、その凄惨な気配に、三人が凝然と息をのむ。
ジークは、無造作に化け物を踏み越えながら、霧の向こうにあるものを鋭く見つめた。
それは、都市の屍であった。何重にも構えられていた壁も、立ち並んでいた塔も、巨大な聖堂も瓦解し、風雨の浸食にさらされ、滅びの淵に眠っている。
かつて力が吹き荒れた際に滅んだ都市の門の跡に、うずたかく積まれたものがあった。
大勢の屍である。その屍から流れ出る血が、地面の化け物へと吸い込まれてゆくのだ。

「クスカの騎士団か――」
仲間を裏切り、砦を破壊した者達の、それが末路であった。
「瘴気に冒され、互いに殺し合いを始めたのだ……」
ふいに、霧に覆われた廃墟の門から冷厳とした声が放たれ、
「一度、裏切ったせいで、今度は自分が裏切られるのではないかと恐怖し、それを瘴気が加速して同士討ちになり……今では、〈竜骸〉の上で秘儀の一部となっている」
銀に光る仮面を被った男が、霧の中から現れていた。
ずん！　ジークがシャベルを激しく地面に突き立てた。柄を回し、一瞬で剣を抜き放つ。
「いったいどれだけ多くの者を惑わすつもりだ――ドラクロワ」
男が仮面の奥で、かすかに笑った。刹那、ジークが凄まじい速さで走り寄せ、剣光を振るっている。俊敏に跳びのき、かわしたドラクロワの仮面に、ぴしりと、線が斜めに走った。〈惑いの面〉――幻術のための仮面が両断され、澄んだ音を立てて地面に転がる。
深い陰翳をやどした、白皙たる相貌が、冷酷な笑みをたたえ、
「もはや、誰かを惑わす事も無い……秘儀は、じきに成就する」
苛烈な意志をたたえた群青の瞳を、ジークに向け、告げていた。
二人の男の、あまりに苛烈な対峙に、気を呑まれていたアーシアとノヴィアが、はっと

我に返った。アーシアは武器を抜き、ノヴィアは杖を握って、宙に矢を幻視する。
かと思うと、背後に展開していた魔兵達が、おどろおどろしい喊声を上げて動いていた。
ジークの命令というよりも、怨みをこらえきれぬ様子で、ドラクロワの周囲を取り囲む。
何百という魔兵がひしめくにもかかわらず、ドラクロワには一向に動じた様子もなく、
「真実を知る用意は、出来たか……ジーク」
そう言って、マントの裏から、一冊の書を握った左手を、あらわしている。
ジークは、鋭く剣を構え、ドラクロワと、その書を睨み据え、言った。
「真実は、俺が全て葬る……お前が果たそうとしている秘儀も、外典も、全て」
魔兵達が、じりっ、と一斉に躍りかかる瞬間を待ち望むように身構えた、そのとき——
「真実も知らぬまま、出来るのか……ジーク」
にわかに、ドラクロワの左手の中で、漆黒の雷花が咲き乱れたかと思うと、
「ヴィクトール・ドラクロワが解き放つ！」
なんと書物がひとりでに開かれ、頁と頁の間から闇色をした稲妻が迸るではないか。
「英霊達よ！　九刻星の連なりの下、閃魔カドゥケウスとなりて我が敵に知らしめよ！」
黒い稲妻そのものが束となり、四匹の、翼を生やす巨大な蛇の輪郭となるや、
「水瓶座の陣！」

ドラクロワの言下——四匹の、黒い稲妻そのものたる蛇が、奔流のごとく前後左右に踊り狂い、逆に魔兵達に襲いかかっていた。ジークが弾かれたように跳びすさり、黒い稲妻を避けた。アーシアもノヴィアも、あまりの事に愕然として黒い稲妻が迸る様に見入り、
「な、なに、ジークじゃないの!? あの男が招いたの!? なにそれえっ!?」
アリスハートが、悲鳴じみた声でわめき散らす中、黒い稲妻の蛇どもは、宙を舞い飛び、いきなり何体もの魔兵達を一度に飲み込んだ。その蛇へ、厳魔が拳を振るい、剛魔が胸の槍で突き立てるが、たちまち蛇の腹から溢れ出す黒い稲妻に打ち砕かれた。稲妻は、甲魔の光の盾さえ吹き飛ばし、宙を舞う麗魔達を、一瞬で消し炭と化しめた。
「乙女座の陣!」
ジークが、銀剣を振りかざして叫ぶ。魔兵達がすぐさま包囲陣を敷いた。押し包もうとする魔兵達と、包囲を崩して躍り出ようとする稲妻の蛇とが、激しいせめぎ合いをみせた。
「魔兵ごときに、死の雷が乗り越えられるものか、ジーク!」
ドラクロワが叫ぶや、なんとその外典から、新たに二匹の蛇が現れ、左右に迸った。全身から黒い稲妻を吹き荒れさせ、包囲を厚くしようとしていた魔兵達を吹き飛ばした。かと思うと、更に三匹、頭上へと踊り狂い、宙で麗魔達を、貪るように食らってゆく。
今やドラクロワは、九匹の、黒い稲妻の蛇を従え、死の奔流を吹き荒れさせていた。



アーシアが慌てて銀銃を撃ち放ち、ノヴィアが金の矢を放って包囲陣を助けるが、あちこちで包囲が崩れ、黒い稲妻が炸裂し、魔兵達が嘆きの声を上げて砕け散っていった。

「狼男ぉっ！　危ないっ、危ないよっ！」

アリスハートが叫ぶ。左手を振りかざしていたジークに、黒い稲妻の蛇が躍りかかった。ジークは間一髪で転がりかわし、稲妻に肩や背を打たれながらも、歯を食いしばって立ち上がっている。そのジークを援護する余裕が、魔兵にも、アーシアにもノヴィアにも無い。九匹の荒れ狂う蛇に、逃げ惑い、あるいは敢然と挑んで玉砕し、追われ、食われた。

「逃げようよっ、逃げようよっ、無理だよ勝てないよぉっ！」

アリスハートがノヴィアの肩にしがみついて、わめく。

だがジークは、襲いかかる蛇を避けると、稲妻をかいくぐり、なんとドラクロワに向かって走り出している。恐ろしいほどの近さで死の奔流を避け、ドラクロワへと切迫した。

接近した状態で蛇が暴れれば、ドラクロワ自身が危うくなる。強力な武器を振るう者は、近づくことで倒せる――その戦場の道理は、しかし、一瞬で砕かれた。

なんと、ジークの背後から、一匹の蛇が何のためらいもなく躍りかかったではないか。

ジークが避け、蛇はそのままドラクロワの立つ場所に飛び込み、稲妻の嵐を巻き起こした。ジークが驚愕に目をみはった。ドラクロワが稲妻に包まれ、平然と佇んでいるのだ。

「なんだ、この稲妻は……」
ジークが、かつて無い驚きの声を漏らす。ドラクロワが冷然と微笑した。
「かつて、聖印によってもたらされた豊饒の地を守って戦った、英霊達の魂だ」
「――英霊達の魂!?」
「聖クレマチスが、戦いで死んだ九百人の英霊達の魂を招き、意志を持った稲妻と化しめ……そして外典の守護霊としたのだ。後世、〈招く者〉の原点となった秘儀だ……」
ドラクロワが、何かをジークに悟らせようとするような眼差しで告げた。
「英霊達が、外典を守り、人を試すのだ……聖クレマチスの遺志を、託せるかどうか」
「試す――?」
「心を消せ……そして受け入れろ……」
三年前――シーラが死んだあの時と同じことを、ドラクロワは口にしていた。
「理想を思い出せ……ジーク」
翳りを帯びるドラクロワのおもてを、ジークは、鋭く見つめ返した。
「忘れたことなどない……ドラクロワ」
そのとき、九匹の蛇が一斉に宙に舞い上がり、かっと大気を覆い尽くすほどの黒い稲妻を吹き荒れさせた。大地を魔兵の残骸が覆い、僅かに残った魔兵達もみなその体を打ち砕

かれ、嘆きの声を上げて震えている。アーシアもノヴィアも、かつて見たこともない圧倒的な力を前に呆然と立ちつくし、アリスハートがしきりに泣き叫んでいる。

「逃げようよぉっ。逃げなきゃ死んじゃうよぉっ。狼男ぉっ！　ジークぅっ！」

ジークは、稲妻をまとうドラクロワを前に、やがて、ゆっくりと両腕を広げた。

咄嗟に、アーシアの目に、それが剣を振りかぶり、捨て身で攻めるかに思われたが――

次の瞬間、ジークの手を、かつて滑り落ちたことの無い剣が、すっと離れるのだった。

剣は、そのまま宙を落下し、からんと乾いた音を立てて跳ね、転がっている。

あまりの事に、さすがのアリスハートが言葉を失った。

「降伏……か」

アーシアが、脱力して呟いた。あまりに呆気なかった。ジークの旅の結末も呆気なかったし、その様子を受け入れる自分も呆気なかった。それほど、圧倒的な敵だった。

その隣で、ノヴィアはただ呆然としている。絶大な信頼を寄せていたジークが目の前で剣を投げたのだ。あまりの出来事に、ただただ全身から力が抜けてゆくのだった。

両腕を左右に広げたジークの背を見つめ、三人の誰もが、これで終わりだと思った。

そして心のどこかで、ジークが、降伏によって、命だけは助かるような気がしていた。

かっと黒い稲妻が眼前に吹き荒れた。九匹の蛇のうちの一匹が、天から踊り狂うように

降りてきて、頭上からジークに襲いかかったのだ。

ノヴィアが目を見開き、絶叫した。そしてその叫びをかき消すように耳をつんざくような雷鳴が、幾重にも轟いた。アーシアが立ちすくみ、アリスハートが凝然と凍りついた。

続けざまだった。二匹目が降り、三匹目が躍りかかり、四匹目が襲った。

全ての声も思いも引き裂くように、死の雷がジークの身に降り注がれ、地面が抉れ、鳴動し、天からの巨大な鉄槌であるかのようにジークの姿を一瞬で消し尽くしていた。

突然、ノヴィアが泣き喚き、ドラクロワに向かって駆け出した。慌ててアーシアとアリスハートが追いかけ、背後から抱え込み、首筋にしがみつく。

「よくもジーク様を……！　よくも、よくも、よくもっ……！」

ノヴィアは猛然と宙を見据え、目の眩むような金色の輝きを放つ矢を、ドラクロワ目掛けて放った。そこへ五匹目が軌道を変え、幻視の矢を一瞬で弾き飛ばし、咄嗟にアーシアがノヴィアを抱えて逃げたそこに、頭から躍り込んで、轟然と死の雷を吹き荒れさせた。

圧倒的な力を前に、アリスハートが泣き喚き、ノヴィアが言葉にならぬ声を上げた。アーシアは、かつて兄が無惨に殺された時の無力さを再び味わい、呆然としていた。

「同じだ……何もかも同じ……」

一つだけ違うのは、そこで五匹目の蛇が、鎌首をもたげ、こちらを見たことだった。

ああ、今度は自分もか。アーシアはそう思った。途端、ジークの言葉が思い出された。
アーシアがいたから、安心してノヴィアを置いて行けた。そうジークは言った。敢然とした気持ちが湧いたのはそのときだった。ノヴィアを抱きかかえ、じりじりと退き、
「逃げるのよ……」
厳しく、言った。ノヴィアが腕の中でびくっとなる。アリスハートが目を見開いた。何としても——この少女と妖精だけでも生還させるのだ。アーシアは決然と銀銃を握りしめ、稲妻の蛇が、こちらを向いて首を揺らす様を見据えながら、逃げる機会を探った。
蛇が動いた。自分達にではない。背後へ、ジークがいた方へ襲いかかったのだ。瞬間——アーシアもノヴィアもアリスハートも逃げ出そうとして、思わず、その場にとどまり、
「何で……あそこに行くの。まるであそこに、まだ……」
まだ、ジークがいるみたいに——アーシアがそう言いかけて、はっとなった。
ノヴィアが、見ていたからだ。
「……〈見守る者〉……それが私の役目だと、ジーク様は言って下さった」
ノヴィアは、まるでジークに叱られたときのような顔で、ぽつんと呟いていた。
「なのに、ジーク様から目を逸らすなんて……」
声が熱を帯びる様子に、アーシアもアリスハートも身を強張らせた。

「まさか、ノヴィアちゃん……あの……あの稲妻の中に……」
ノヴィアは、涙を拭って、うなずいた。そして、じっと雷閃の向こう側を見つめ、
「ジーク様が……います」
はっきりと、言った。

ジークは、ただ目を閉じてそこに立っていた。
両腕を広げ、これまで何度となく打ちのめされてきた稲妻を、そのまま甘受したのだ。
すぐに分かったのは、この漆黒の稲妻が、怒りや敵意、怨み、攻撃する気持ちといった感情に反応して敵を灼き、吹き飛ばすということだった。かつて、聖クレマチスは、攻めてくる敵は撃退したが、決して自分から敵を攻めはしなかったという。それと同じだった。
だが、それだけでは、この稲妻を受け入れることは出来ない。恐怖や、不安、苛立ちといった感情にも感応し、ジークの体を灼いた。それらを越えると、今度はもっと深い部分へと、稲妻は感応してくる。後悔や、葛藤、懊悩など、自分自身の中でせめぎ合うものを狙ってくるのだ。そしてまた、心の根深い部分にある、虚栄心や嫉妬、増長や傲慢の感情をも探り出して、少しでも感応すれば、すかさず肉体に衝撃を与えてくる。
まるで、自分の中にある全ての負の感情、他人や自分を傷つける可能性のあるものが、

丸ごと、稲妻となって自分自身に襲いかかってくるようだった。

人の、心を、死をもって試し、導く——それが、この稲妻の役目だったのだ。

頭上から、七匹目の蛇が襲いかかり、完全に視界が黒い稲妻で埋め尽くされたそこに、ぐっと圧力が増していた。その圧力が、自分の中にある深い感情をも叩き出し、あらわにしてゆく。自分が抱く罪悪感、数え切れないほど犯した戦場での殺害の罪、自分が生きていることそのものの罪深さが、深淵のごとき恐怖を伴って、ジークの身を灼いた。

だがそれさえ受け入れ、乗り越えると、八匹目が降りてきた。今度は生きる喜びそのものが問われた。何のために生き、どこへ行こうとしているのか。何に喜びを感じ、どういう生き方が自分にとって真実であり最善であるか。自分の中に、その答えがある、という確信に、僅かでもためらいがあると、たちまち全身を激痛が襲った。

そしてその激痛に抗うように、込み上げてくる魂の叫びそのものが、稲妻の圧力を振り払った。全ての問いは、答えと一体だった。言葉にならない答えが、自分の中に満ち溢れ、自分を生かす原理となって、鮮明な、色彩のような表現で、胸に広がってゆく。

すると九匹目が舞い降り、これまでの全ての衝撃に層倍するものが襲いかかった。

それは死だった。お前に死ぬ覚悟があるか。そう訊いてきていた。それはぞっとするほど恐ろしかった。反射的に、思考を止めようとする自分を、稲妻は激しく責めた。

それは、自分がどのように生きるかということの全てをふくんだ問いだった。
いつか人は必ず死ぬ。そのことをどこまで受け入れているか。稲妻はそう問うた。
お前は人間として死ぬ。それをどこまで受け入れているか。
生あるものとして死ぬ。それをどこまで理解しているか。
お前は男として死ぬ。幼さを経験し、若さを経験したものとして死ぬ。
善であり悪であったものとして死ぬ。知識を持ち無知であったものとして死ぬ。
才能があり無能であったものとして死ぬ。賢く愚かであったものとして死ぬ。誇りを持ち恥ずべきものとして死ぬ。利己心を抱き、他者への愛を抱いたものとして死ぬ。
怒り喜ぶものとして死ぬ。悲しみ楽しむものとして死ぬ。恐怖し勇気あるものとして死ぬ。臆病であり果敢であるものとして死ぬ。満足を抱き、不満を抱くものとして死ぬ。
不屈であり諦めたものとして死ぬ。他者を愛し憎み死ぬ。敵を持ち友を持って死ぬ。親から生まれ世に育ったものとして死ぬ。信頼と不信を受けて死ぬ。尊敬と軽蔑を受けて死ぬ。成功と失敗のうちに死ぬ。希望と絶望のうちに死ぬ。
そして真実であり虚偽であるものとして死ぬ。全てのものが死の中で完結し問われる。
そのことをお前は受け入れ、そしてまた受け入れずに死ぬ。
過去も現在も未来も全てが、既に決定していることも決定していないことも、決定する

ことがないことも決定しようのないことも、死の中にある。
人の、そのような死を、お前は、受け入れているか。
人の、そのような生を、お前は、生きているか。
――是

ジークは、ただ、そう答えた。是……と。そうだ、と。その通りだ、と。それでいい、と。それだけだ、と。それゆえに、と。そうあるべきだ、と。ただ、是――と。
多くの死者を葬り、死に触れ続けてきたジークの、まさしく命をかけた答えであった。
そして――そこに、最後の衝撃が訪れていた。それは、目に見えぬ何かの意志が、直接、自分の中に入り込み、それまで無かった何かを、もたらそうとする衝撃であった。
――聖クレマチスの遺志!? ジークが、鋭く問うた。そして自分の中に訪れたそれが、まさしくそうであることを、告げていた。今が、真に試練の始まりの時であると。
ジークは、やがて、周囲から、完全に衝撃も圧力も消え去ったことを、知った。
ゆっくりと目を開いた。すぐ向こうにいる男の姿をみとめ、静かに、告げていた。
「真実を知る用意は出来た……ドラクロワ」

4　命と理想と

あれほど荒れ狂っていた稲妻が、禁忌の秘儀が記された一冊の書へと瞬く間に吸い込まれてゆく。最後の雷閃が消えると、書は、ドラクロワの手の上で、ひとりでに閉ざされた。

「ジークが……ジークが、いるよぉ」

アリスハートが泣きべそをかいた。アーシアもノヴィアも、信じられない思いだった。

ジークは、天が落ちてきたかのような稲妻の奔流を浴びてなお、そこにいた。

体中に傷を負っていたが、いずれも浅手であり、その姿は悠然として揺るぎなかった。

ノヴィアが、泣いた。〈銀の乙女〉ではなく、まだほんの少女としての顔で泣いていた。

「……あの時と、違った」

アーシアが呟いた。兄が死んだときとはまるで違った。ジークは降伏などしていなかった。ただ、すべきことをしただけだ――ジークの背は、そう告げていた。心の底から感謝したかった。この光景を見せてくれたことが、アーシアにとって何よりの救いだった。

ゆっくりと、ドラクロワが、書物をマントの裏に収めた。

「死の雷を乗り越えられねば、ここで、お前の命を、秘儀に用いる気でいた……。だが、

王の試練に赴いた今、お前の命は、より大きな歯車となった」
「命を、歯車と呼ぶのか」
ジークが、言った。烈気が消え、代わりに、ひどく澄んだ気配に満ちながら、
「理想のための命じゃない……。命のための理想のはずだ、ドラクロワ……」
「命の価値が変わるのだ……ジーク。理想が、真実によって生まれ変わるように」
「命の価値が届かない理想など、理想ではない。そんな真実は、葬られるべきだ」
「すぐに分かる……ジーク。これからお前は、その真実を見るのだから……」
ドラクロワが、右手を翻した。黒い靄が生じて漆黒の剣と化しめ、
「来るべき時において、多くの命が秘儀の歯車として回り出すのだ……。その時、お前が抵抗をせず、我が秘儀の要となるよう……今の内に、腕の一つも、斬らせてもらう」
酷薄に告げ、凍てつく冬の夜空を刃の形にしたかのような剣を、握りしめた。
「どちらの腕だ、ドラクロワ」
ジークは、すっと銀剣を再び拾い上げ、にわかに、戦いの気配をみなぎらせ、言った。
「この右腕か。それとも、お前が、聖印を刻んでくれた、この左腕か」
右腕は、騎士の称号と剣を与えられた、ジークとドラクロワの絆の証しであった。
左腕は、〈招く者〉の力を与えられた、ジークとドラクロワの理想の証しであった。

その、どちらを斬るのかと、ジークは問うていた。
ドラクロワは答えず、剣をゆっくりと構えた。
その途端、ジークの心臓が音を立てて激しく鼓動した。
——何だ!?　叫びを上げようとしたが、声にならなかった。まるで胸の中で何かが爆ぜたような衝撃があった。目をみはり、苦悶の声を零して、愕然と身を震わせた。
「王の試練が、始まる……。乗り越えられるか……ジーク」
ジークの身が、ぐらりと後方へ傾いだ。足を踏みしめて耐えるが、全身がわななき、気づけば、その場で、どっと膝をついている。
ドラクロワが、ジークの左腕を見た。籠手の下で、腕が著しい出血を起こしている。その腕全体に、爆発的な痛みが広がり、ジークは、かつて無い苦悶の声を上げるのだった。
「その左腕に、聖クレマチスの遺志が、あらわれようとしている……」
ドラクロワは、目を、ジークの左腕から、剣を握る右腕に、移し、
「殺人を正当化する聖咎の剣……それを握る方の腕が、よかろう」
すっと歩を進め、剣を掲げた。
「シーラを殺めた、その腕を……もらう」
刹那——ドラクロワへ、金の輝きが、宙を迅った。ノヴィアの幻視の矢だ。ドラクロワ

が、素早く飛来する矢を切り払う――が、矢は、方向を変えて刃を避け、あり得ぬ軌道を見せて、ドラクロワが咄嗟に庇った左腕を刺し貫いていた。

そのとき――ドラクロワの左手に、ふいに、おぼろとした輝きがともった。

二つの聖印が、ドラクロワの左手の甲と、手の平の、両面に、刻まれているのだ。

ドラクロワは、腕を矢に貫かれながらも、さして痛痒を感じた風もなく、

「〈見守る者〉か……。さすが、ジークの従士……強い魂を持っている」

凛と立つノヴィアと、おろおろと恐れ惑うアリスハートに、冷酷な眼差しを、向けた。

ノヴィアは、このときドラクロワよりも、自分に対して怒っていた。

ジークが黒い稲妻に襲われたとき、ジークの姿を見逃してしまったことに。ジークが降伏する姿など見たくない、まして死ぬ姿など絶対に見たくない――そういう思いが、目を閉ざさせたのだ。自分のこの視覚は何のためか。ノヴィアは自分を叱った。真実を見るためのものだ。なのに見たいものだけ見て、見たくないものは見ない。そんな態度は、もはや透視と幻視の力を持つ自分に許されはしない。それでもし真実を見逃してしまったら、せっかく自分を導いてくれているジークに言い訳のしようがないではないか。

そういう怒りが、ドラクロワへの恐怖を、僅かに上回っていた。だがドラクロワがすっとノヴィアに歩を進めるや、たちまちノヴィアに鋭い恐怖が襲いかかった。

「少女よ――それほど、その命を、我が秘儀に、捧げたいのか？」
ドラクロワの冷酷な笑みに、ノヴィアが、ぞっと凍りついた。
「やめろ……」
ジークが、痛みに震えながら、立ち上がろうとする。
そして――素早くドラクロワの後背へ回り込んだアーシアが、ぴたりと構えた右手の銀銃を通して、渾身の聖性を息吹きさせたのは、そのときであった。
轟音とともに青く澄み渡る輝きが奔り、ドラクロワが、その聖性の強さに目をみはった。
左手をかざすや、掌の上で、青ざめた輝きが激しく飛び散った。衝撃で腕を貫いていた矢が砕け散り、さすがのドラクロワが、左手を突き出したまま、何歩も後ずさっている。
「〈浄める者〉――そこまで、銀銃を使いこなすのか……」
ドラクロワの声音が、そこで消えた。なんと、急に苦しげな呻き声を漏らし、胸をつかみ、よろめいたではないか。アーシアの方が、呆然とするほどの激しい苦しみようだった。
かと思うと、ドラクロワの全身から、にわかに、目に見えぬ何かが溢れ出し、
「瘴気……!?」
アーシアが、愕然と叫んだ。とてつもない密度を持った瘴気を溢れさせながら、
「貴様……今、私に、何を見せた……」

ドラクロワが、アーシアには分からない、不思議なことを言った。
「幻術か……？　貴様……よもや……私が、シーラを……」
目が、ぎらりと、憤怒の光をあらわし、
「許さん……」
ドラクロワのマントが翻り、左手から、一条の黒い雷閃が走り、アーシアを襲った。
アーシアが悲鳴を上げて後ずさったが、気づけば傷一つ無い。咄嗟に銀銃を構え直したそのとき——右手が激しく震えだし、自分の顔へと武器を向けてゆくではないか。
左手で慌てて右手を押さえるが、手は別の生き物と化したように止まらない。手に、かすかな黒い火花が舞い散り、完全に右腕を支配していた。更には、右手に風が巻き、武器の内部に、虚無の弾丸を創り出してゆく。かちり、かちりと弾丸が込められる音が響き、
「死の雷が、貴様自身の敵意を、貴様に向ける……自滅せよ、哀れな〈銀の乙女〉よ」
ドラクロワが告げた。途端に、ノヴィアが幻視の矢を放っている。ドラクロワに向かってではなく、アーシアの手から武器を弾き飛ばそうとしたのだ。
そしてその瞬間、ジークが動いていた。全身の激痛を振り払って跳ね起き、戦場で最も有効な剣撃——心臓への刺突を、ドラクロワに向かって、振るったのであった。
ジークがこれほどまでに、苛烈にドラクロワの命を奪おうとしたことは、かつて無い。

矢が銀銃へ迫り、ジークの剣が素早くかわそうとするドラクロワへ迫る――そして轟音が響き渡った瞬間、ドラクロワの腹をジークの剣が貫き、切っ尖が、背へと飛び出ていた。

心臓は外していた。だが今初めて、ドラクロワの命へと刃を振るったジークの心に、言葉にならぬ衝撃があった。そのとき、どさっ、と何かが倒れる音が聞こえた。背後で、ノヴィアとアリスハートの、悲痛な叫びが上がった。

漆黒の剣が、元の靄となって消え、ドラクロワは自分から後ろへ下がり、銀の剣から、体を引き抜いてゆく。ずるっと音を立てて刃が抜け、血が溢れ出す腹を押さえながら後ずさるドラクロワを、ジークは全身の痛みと、心を襲う別の痛みに耐えながら、見つめた。

「外典の英霊達の守護を貫き……私の命に、届くか……」

ドラクロワが、凄惨に笑み、歯を食いしばる。その言葉の意味を、ジークは、理解していた。死の雷を受け入れたジークだけが、今や、外典の英霊が守るドラクロワの身を、傷つけることの出来る、唯一の存在となったのだ。

「私にとって……命と理想とは、同じ価値のものだ……」

ドラクロワが、血の気の失せた顔で、言った。

「かつて、私の理想のために……何万何千の兵の命が、犠牲になった……」

腹の傷から血を溢れさせながら、じりじりと、後方の、岩地の断崖へと、退こうとする。
「もう二度と、お前をどこにも行かせはしない……ドラクロワ」
ジークは、体と心を引き裂く痛みに襲われながら、更に、凄烈に、剣を刺突に構えた。
「お前が、自分の心を犠牲にして、多くの命の犠牲を求めるのなら……お前の命を、ここで、俺がもらう。俺がまだ……お前の友でいられるうちに」
途端、ドラクロワが、かすかに、笑みを浮かべた。それは、この三年間、何度か見てきた冷酷な笑みではなかった。ジークがよく知る、かつて何度も見た微笑が、そこにあった。
「お前が友でなくなるなどと……思ったことは、一度もない。過去も……これからも」
途端、ジークの心に激しい動揺が、生まれた。
「止めるな……ジーク」
「行くな……ドラクロワ。俺を置いて、行くな！」
ジークが、力を振り絞って剣を構え、ドラクロワの心臓に刃を突き込む、凄惨な一瞬へと、自らの全身全霊を駆り立てた、まさに、そのとき。
——ばさり、
と、頭上で何かがはためき、剣を構えるジークの眼前に白いものが舞い降りてきた。
「羽根——」

ジークが、愕然と目を上げたそこで――
霧を白く切り裂くように、一羽の白鳥が、悠然と、四つの翼をひるがえすのだった。

5　破滅から飛び立つもの

鳥は、ゆっくりと舞い降りた。
まるで、ドラクロワを庇うように、眩いばかりの純白の翼を、夢幻の柔らかさではためかせ、黒い宝石のような目に、剣を構えるジークの姿を映し、にわかに――その翼から、強い聖性が放たれ、ジークを襲っていた苦痛を、いっとき、やわらげるではないか。
そればかりか、荒れ狂うほどに痛みきっていた心が、鳥の眼差しと聖性によって、ふいに宥められ、戦いの気配が、急に溶け消えてゆく。
ジークが息をのみ、激しくわなないた。戦慄があった。このような心のやわらぎを、ジークは、今だかつて、ただ一人の者に対してしか、抱いたことがなかったからだ。
「まさか……」
ジークが、おずおずと、よろめくように、鳥へ歩み寄った。
ふと、鳥の首に、首飾りがあることに気づいた。十字型の紋章に、見覚えがあった。

ジークが呆然と立ちすくんだ。そのとき、鳥がふわりと宙を舞い上がり――

そして、その翼の後ろから、再び現れたドラクロワの姿に、愕然となった。

腹の傷から、血が止まっているのだ。青ざめた顔に、凄惨な笑みを取り戻し、

「お前が、死の雷を乗り越えたことで……ここの遺跡に眠る〈刻の竜頭〉に、お前と、お前が背負う無数の魂を捧げるという目論見は、破れた……」

そう告げるドラクロワと、まるでドラクロワを守護するかのように翼を広げる鳥を前にして、ジークは、凝然と立ちつくしている。

「だが、秘儀は、十分に試され……お前という、より大きな歯車を得た……」

すっとドラクロワが、後ろへ下がった。背後は、霧の立ちこめる崖である。

「待てっ。俺を――俺をまた、置いて行くのかっ！」

「先に行くだけだ……ジーク。……王の試練を越え、追いついて来い」

ドラクロワが、その身を、断崖へと躍らせた。ばさり、と鳥が飛翔した。ジークが激しくドラクロワを呼んだが、ドラクロワも鳥も、既に霧の彼方に、消え去っていた。

ノヴィアとアリスハートがはらはらと見守る中、アーシアが、うっすらと目蓋を開いた。

そのこめかみに、弾丸の走った痕が、切り傷のように残っている。

浅く血のにじむそこを、アーシアが、銀銃を握ったままの右手で、軽く撫でた。
「私……自分を撃とうとして……。ノヴィアちゃんが、助けてくれたの？」
銀銃を、矢に弾かれた衝撃が、右手に残っていた。だがノヴィアは、かぶりを振った。
ノヴィアの見守る目は、矢が一瞬遅れて、アーシアの武器を弾いたのを、鮮明に見ていた。
アーシアは、自分の力で、自分に向けられた武器を、逸らしたのだ。
「私が……？」
呆然と身を起こすアーシアに、ジークが、歩み寄って、
「憎しみを克服した証拠だ……。心を侵した死の雷に、お前の心が抵抗した」
「私の心が……抵抗した……。私は……」
「お前は勝った」
アーシアの心臓がとくんと跳ねた。ジークの言葉が総身にしみわたった。自分の中の虚無に勝ち、憎悪をもたらしたドラクロワに勝ったのだ。強い喜びが込み上げたそのとき、
「ジーク様!?」
ノヴィアが悲鳴を上げた。ジークが苦悶の声をもらし、よろめいたのだ。
「大丈夫だ……」
痛みで蒼白になりながら、ジークはかぶりを振る。その左腕が著しく出血していた。

「早くこれを、破壊しなければ……」
足下に広がる、脈打つ化け物を見やった。
「私がやるわ……」
アーシアが銀銃を手に立ち上がる。アリスハートが、辺り一面に広がる化け物を見て、
「でも、こんなに大きいよぉ。どうやって全部壊すのぉ」
するとジークは廃墟へと、顎をしゃくってみせ、
「中心の……心臓を壊せば、後は自然に崩壊するはずだ」
そうして、化け物が成長する地面を越えて、一行は、滅びに眠る都市へ入っていった。

建ち並んでいた塔も建物も、みな朽ち果て、寂寞の気配を、辺りに及ぼしている。壊れた建物にも、化け物が伸び広がり、廃墟に息づくその巨大な姿に、みな言葉少なになりながらも、やがて半ば瓦解した大聖堂へと入っていった。そこだけかろうじて破壊が見られぬ広間に踏み込むや――壁一面に描かれた、精緻にして壮大なる壁画に、
「ううわーっ！　すっごいよ、これぇーっ！」
アリスハートが仰天し、ノヴィアとアーシアが畏怖したように辺りを見渡して、
「……なんて、恐ろしい。……でも、なんて……悲しい」

「こ、これって……。確か、聖典の、浄化の篇にある光景よね……」
ジークは、剣を杖に、うなずいて、言った。
「終末の黙示だ……」
浄化を司る神が、一つの審判が下ったことを告げ、世界に終末をもたらす壁画であった。
神々が滅びを眺め、空は無数の悪意の象徴である怪物達に埋め尽くされている。
都市は黒い稲妻に打ち砕かれ、作物は腐り、人は闇の淵に転落し、奈落の底の獣達に貪り食われている。獣達には一つ一つ「貪欲」「怠惰」「欺瞞」「敵意」「傲慢」……と罪の名が記されており、人は果たしてこれほどまでに悪なのかと、見る者の胸を哀しくかき乱すほどに、それは凄惨な絵であった。そしてその絵を立体的に浮き上がらせるかのように、化け物が伸び広がり、脈打っているのだ。広間の中心では、巨大な木の瘤のようなものが生え、複雑な聖印がびっしりと刻まれて、青白い光に、明滅している。
「あっ、見て見て、これっ、これっ、これっ！」
アリスハートがそれを見つけたとき、そこにいる誰もが、咄嗟に息をのんでいた。
ジークは、かっと目を見開いたまま、微動だにせずそれを見つめた。
それは、白い、鳥の姿であった。圧倒的な滅びの光景の中を、ただ一羽、真っ直ぐに、新たな夜明けを目指して飛翔する、四つの翼を持つ白鳥の姿が、描かれていたのである。

翼には、それぞれ「希望」と「理想」、「友愛」と「信頼」と名が記されている。まさに、無数の悪業と罪の名から飛び立つ、儚くも力強い、四翼の飛翔であった。

（お願い――）

ジークの胸中に、かつてシーラが、最期に残した言葉が、鮮やかに甦った。

痛みとは違うものが、ジークを、きりきりと苛んでゆく。

「ああ……綺麗だねぇ……本当に綺麗だねぇ……」

アリスハートは、そう繰り返しながら、無心にその鳥を眺めている。

だがジークは、鳥の絵を見つめたまま、火を噛むように、言った。

「ドラクロワが、あのエインセルを招いたんだ……」

みなが愕然となった。ジークは、さっと鳥の絵から目を離し、反対側の壁に描かれた巨大な浄化の神へ歩み寄った。浄化というにはあまりに怪物じみた姿をした神だ。牙を剝いて人間を貪り、無数の手を伸ばして魂を奪い取っている。

「〈刻の竜頭〉の秘儀……」

秘儀の成就の果てに現れるものこそ、その神に違いなかった。その神の胸の部分に、異常があった。ぽっかりと円形に、壁の地肌が見え、そこにあったものが無くなっている。

「聖王の書状では、ここに〈三聖印〉の一つが刻まれていると書かれていた――」

〈三聖印〉――ドラクロワが集めようとしている、古い聖印の一つが、そこにあるはずだった。つと、ノヴィアが傍らに立ち、

「ドラクロワの手に……ムルドアで見たのとは違う聖印が、刻まれておりました」

そう、金の矢でドラクロワの腕を貫いたときに見たものを、ジークに、説明した。

「黙示の聖印――この世の破滅の、しるしだ……」

ジークが、呟いた。それが、この壁画からドラクロワに奪い去られた、聖印の名だった。

「アーシア、ノヴィア、これを破壊しろ」

ジークが鋭く命じた。アーシアもノヴィアも無言で従った。金の矢が放たれ、銀銃が轟音を放ち、聖印を刻まれた木の瘤のような岩を貫き、壁画ごと化け物の身を粉砕した。一帯に成長していたものもまた急激に枯れ果て、後には再び、廃墟の静寂ばかりが残った。

6　面影の向こうに

いよいよ英霊祭の賑わいが高まる一方、聖都の、クレア大聖堂の執務室では、今、聖王と賢老院の老人が、戦慄にも似た沈黙に支配されていた。

目の前の円卓には、各地の領主から届けられた祝いの手紙とともに――それとは違う物

が、運び込まれている。両手で持てる程度の大きさの、四角い箱である。
「これで……七つ目ですな。我らの放った密偵が、ことごとく……」
老人が恐怖に顔を歪ませる。聖王は、静かな顔で、箱に手を伸ばし、封を解いた。
「ムルドア聖堂だけでなく、他にも、あの男に協力する聖堂が、かなり、いるようだ」
箱は、意志を持つかのようにひとりでに開かれ、円卓の上に中身をさらした。
老人の口から、低く呻くような声が零れ出した。箱から現れたのは、男の首であった。
聖王が各地に放った者の一人――ジークに、クスカへの地図をもたらした密偵だった。
「破滅の聖印……」
聖王が呟いた。男の首の額に、霧の谷にあるはずの聖印の略図が、描かれている。
「これは、聖法庁を滅ぼすという、ドラクロワからの、宣戦布告である」
「宣戦布告――で……では、ドラクロワが攻めてくると？　いったい根拠は――」
「それを説明するわけにはいかぬ。だが、私には分かる。あの男が攻めてくると」
聖王が、常に無い切迫の声で、言い放った。
「勅令である。聖法軍の全軍をもって、かの反逆児を迎え討つ用意をせよ。賢老院の全員を、軍令顧問として派遣し、これ以上の聖堂の離反を、全力をもって防ぐのだ」
聖王は、老人に猶予を与えず、執務室から立ち去らせ、

「ついに来るか……、〈三聖印〉の最後の一つを求めて……ドラクロワよ」
厳しく呟き、法衣の上から、その胸に刻み込まれた聖印に、触れるのだった。

気づけば、底知れぬ闇に沈んでゆくところだった。
（殺したのか——俺が……）
闇の淵に近づくほどに、その思いが、ジークの心に、鋭い痛みを及ぼしてゆく。
かつて聖櫃の間で、ドラクロワを阻止しようとしたとき——シーラは、自分の剣に貫かれて死んだ。覚えているのは、剣を濡らす血の赤さ、恐ろしい真紅の色ばかり。そしてその剣を、自分は今も握り続けている。
（お願い——）
そう言い遺した彼女に、今も、問い続けている。お前が願うものは何だったのかと。
永遠に失われたその答えを、自分と同じように、ドラクロワも、求めているのだ。
闇に沈みながら、切々と死者の言葉を想っていると、ふと、闇の彼方ではばたくものが見えた。そして咄嗟に、言葉にならぬ声を張り上げていた。
浮き立つように舞う四つの翼を持つ白鳥を、下方から、巨大なものが、狙っているのだ。
鳥に危険を知らせようと、叫ぶジークに——そのとき鳥は、ひどく遠いところから、穏

やかな目を向けてきた。鳥の目は、まるで、その闇を甘受すると、告げているようだった。

飛翔する四つの翼へと、巨大な獣達のような闇が追いすがってゆく。闇の牙の群が、鳥に食いついた。貪り食った。みるまに羽根が雪のように舞い散り、鮮血が闇に噴き出す。

ジークの口から、獣の咆吼のごとき絶叫が迸り――

そこで、目が覚めていた。叫んだと思ったが、実際は、喉の奥で呻いた程度らしい。

ぼんやりとした視界に、横合いから、アーシアの不安げな顔が、入り込んできた。

「ここは……」

「巡礼者用の小屋。ノヴィアちゃんが見つけて、なんとか二人で貴方を運んだの」

積み重なっていた死者を葬り、霧の谷から出て間もなく、ジークは、ふいに歩調を乱したかと思うと、声もなくその場で倒れ伏し、意識を失ったのだという。

倒れたジークを、この小屋に運び込んでから、およそ一昼夜が経過していた。見れば、完全に武装を解かれた姿で、左腕には真新しい包帯が、綺麗に巻かれている。

「ノヴィアか……」

几帳面な巻き方で、誰が包帯を巻いたか、自然と分かった。

そのノヴィアとアリスハートの姿がないことについて、訊こうとしたとき――

突如として、身の毛もよだつほどの痛みが、ジークの左腕全体に爆ぜていた。

咄嗟に包帯を握りしめ、力任せに引きちぎり、慌てて押さえにかかるアーシアを振り払うようにして、ジークはこのかつて味わったことのない痛みの元凶を、見た。
それは、聖印であった。ジークの左腕に刻まれたそれが、なんと、皮膚を裂き、肉を抉り、骨を軋ませるようにして、更に、複雑精緻なものへと変貌しようとしているのだ。
「き、昨日の晩から……始まったの」
アーシアが狼狽した顔で告げた。あまりの痛みに、ジークは言葉一つ、発せないでいる。
昨夜――突如、ジークの身に爆発的な堕気が生じるや、聖印が変貌し始めたのだという。
「王の、試練か……」
ジークは、かろうじて、そう呟くや、いきなり、ベッドから脚を下ろしていた。
「ちょっと、動けるの!?」
アーシアが叫んだ。途端にジークがよろめき、膝をつく。慌てて追いすがるアーシアに、
「近くに……諜報院……探すよう、ノヴィアに……。聖王から……指示……」
「分かったから！　戻ってよ。ベッドに戻りなさいってば。ジークっ！」
押し戻そうとするアーシアの腕につかまり、また立ち上がろうとする。だが、到底、立てるものではなかった。痛みに目も耳も塞がる感覚に襲われ、そのまま横倒しになっている。
「頼む……」

もうろうとして言い、アーシアの胸の中でくずおれるようにして再び意識を失った。
アーシアは、苦労してジークの体をベッドに運び上げ、
「こんなに痛がってるのに……ベッドから降りるなんて……」
呆れるとも感嘆するともつかぬ声音を零し、冷水を絞った布で、そっとジークの額に浮いた汗を拭ってやった。腕の聖印はじわじわと変貌し、ジークの呼吸も荒い。ふいに、
「シーラ……」
ジークがかすかに目を見開き、アーシアを見ながら、囁いていた。ひどく切ない声音だった。哀しい眼差しだった。そしてジークは深い眠りに落ちるように、目を閉じた。
アーシアは、自分が息をのんでいることに気づき、そろそろと吐息した。
包帯を巻き直し、おずおずと、相手の目を覚まさないよう気を付けながら、シャツ越しにジークのしなやかな胸に手を当てた。大きく上下する胸の奥で、心臓が強く鳴っている。
手の下で鳴り響く男の鼓動が、そのまま、自分の鼓動をどきどきさせるような気がした。
自分の聖性で、苦痛を少しでもやわらげてやれないだろうか。シーラならば、そう出来たように——ふと、そんな風に思った。男の鼓動を手に感じながら、
「私が、シーラ・リヴィエールに似てるから、一緒に旅することを許してくれたの?」
ぽつんと、そんなことを訊いていた。

「それとも……」
その先は言葉にならなかった。いずれにせよ、ジークは答えない。ときおり眉根をひそめ、眠りの中でも苦痛に耐えているようだった。アーシアはジークの胸から手を滑らせ、
「貴方も、少し……兄さんに似てる」
壊れ物でも扱うような手付きで、ジークの左腕を、胸に抱きかかえた。
「シーラ・リヴィエールには……かなわないかもしれないけど」
アーシアは、ゆっくりと、自身にやどる聖性を発露し、ジークの左腕を宥め、その苦痛を少しでもやわらげてやれることを、祈った。

霧深い山岳の頂きに腰を下ろし、一心に目を凝らすノヴィアが、いた。
「まだだ……。千……いえ、もっと……千五百くらい」
そう告げるノヴィアの傍らで、アリスハートが指折り数え、
「すっごい数だよぉ。指一つが千として……もう、こんな、うわぁ」
「北からも南からも来てる……。今、どれくらいの数なの、アリスハート？」
「もう七万を越えちゃったよぉ。指を曲げたり伸ばしたり、うー混乱するぅ」
アリスハートがそれでも懸命になって折った指を保つ。

全て、軍勢の数である。今朝になって、突如、雲霞のごとく湧き出す軍勢を、ノヴィアの万里眼がいち早くとらえたのだ。彼方の丘では、既に大規模な幕舎が建てられている。

「色々な騎士団と一緒に、蛮族までいるわ……聖法庁じゃ、絶対にありえないことよ」

そのとき――ふいに、大軍の様子を見つめるノヴィアの視界に、それが現れていた。

「これって、あの……！」

愕然と立ち上がった。アリスハートが、好奇心と恐怖心がまぜこぜになった顔で、

「な……なになにっ。なんなの？　ねぇ、ノヴィアぁ、あたしにも教えてよぉっ」

「旗よ……。旗が揚がったの……。四つの翼を持つ鳥……それが描かれた、旗よ」

アリスハートがごくっと唾を飲み込んだ。先日、ジークが、あの四翼の白鳥はドラクロワによって招き出されたに違いないと言っていたのを思い出していた。

「じゃあ、その軍隊って、ドラクロワって男の……？」

「多分、間違いない……。ジーク様に、お伝えしなきゃ……」

急いで、小屋に戻った。その肩先で、アリスハートがしょんぼりと言った。

「大きな戦争になるのかなぁ。また、いーっぱい人が死ぬのかなぁ。嫌だなぁ」

ノヴィアも同じ気持ちだった。きっとジークもそうだ。そしてこの事態に対してどうすべきかを知っているのはジークだけだった。だがそのジークは今、昏睡の中にあった。

ノヴィアが小屋に戻ると、アーシアがジークの腕を抱え、
「私には、無理みたい……」
振り返ったその顔が、悲しさで歪んでいた。ノヴィアが駆け寄った。真っ赤だった。包帯も、アーシアの手も、ジークの左腕から零れる血に染まっている。ジークの顔一面、苦痛の汗が玉となって浮き、食いしばった歯の隙間から、苦悶の声が低く響いていた。
「せっかく生きてんのにぃ……お前ぇ、狼男ぉ、しっかりしろおっ」
アリスハートが、常になく、気遣わしげにジークの上を舞い飛ぶ。
「ジーク様は、何かおっしゃってませんでしたか？」
冷水に布をひたし、手早くあちこちの血を拭いながらノヴィアが訊く。
「諜報院を、ノヴィアちゃんに探してもらって、聖王の指示をもらえって。それで、頼むって言って……、意識が……」
「頼むって……ジーク様は、おっしゃったんですか？」
アーシアがうなずいた。ノヴィアは立ち上がって、辺りを見回し、やがて、
「……います。あの霧の谷で、何か調べている人がいます。きっとあれでしょう」
「どうするつもりなの、ノヴィアちゃん？」

「ジーク様のおっしゃった通り、聖王様からの指示を頂きます。それから……馬車か何かで、移動します。聖王様の指示に従って、ジーク様を運ぶんです」
「本気なの!? ノヴィアちゃん……、こんな状態のジークを……?」
「そうだよぉ。ここでじっとしてた方がいいよぉ。お医者を呼んでさぁ……」
だがノヴィアは、頑なな様子で、細い眉根をしかめて、
「だって、頼むって、ジーク様はおっしゃったんでしょう」
「ジークを死なせる気!?」
「聖王様からの指示をもらいに、私、行ってきます」
「待ちなさい!」
アーシアが厳しい顔で、ノヴィアの肩をつかむ。ノヴィアが、きっと見返した。
「ちょ、ちょっと二人ともぉ、やめようよぉ。こんな時に喧嘩しないでよぉっ」
慌ててアリスハートが間に割って入るが、二人は激しく睨み合いながら、
「ジークは正気な状態じゃないわ。戦える状態じゃないわ。動くことも出来ないのよ」
「それでも頼むって、おっしゃったんでしょう! きっと何か考えがあるんです!」
「考えどころか、ただ無茶してるだけだったらどうするの? ドラクロワとの過去のこともあるのよ。ただでさえ冷静でいられないのに、こんな状態で……」

「信じます！　過去に何があろうと、どんな状態だろうと信じます！」
「いつもジークが完璧だと思ってたら、貴女がジークを殺すことになるのよ！　だいたいジークを運んだとして、貴女に何が出来るの？　何をするっていうの？」
「〈見守る者〉が私の役目です！　ジーク様がそうおっしゃってくれたんです！」
ノヴィアが、小さな身を震わせて叫ぶ。
「私、何があっても、見守るって決めたんです。それしか出来ないのなら、出来ることを出来る限りやろうって。頑張るってそういうことだと思うから……」
きつく眉根をしかめた。途端に涙が溢れた。たちまち幼い顔になって泣いていた。
「ジーク様が稲妻に飲み込まれたとき……私、目を離したんです。戦っているジーク様から……。ジーク様が戦おうとしているなら、私、もう二度と目をそらしたくない」
アーシアの手に別の力がこもった。泣きながら震えるノヴィアを優しく引き寄せ、
「……私は、貴女を守りたい。ジークは私に、安心して貴女を任せられるって言ったわ」
手にこめた力は優しかったが、同時に、決然とした意志がこめられていた。
「貴女の言う通りにしましょう。ジークの願い通りに。でも……もしものときは、ジークよりも、貴女の命を優先する。いい？　その覚悟はある？」
自分にもこれほど厳しい事が言えるのかと、アーシア自身が驚いていた。

いざというときには、ジークを犠牲にしてでも生きろと言ったのだ。
ノヴィアはうなずく代わりに、泣きながらアーシアの裾を握りしめた。その手が不安に震えている。そして、その少女の背を撫でるアーシアの手もまた、かすかに震えていた。
かつて兄が、幼かったアーシアを励まし、そのくせ自分自身も震えていたように――
ふとアーシアは思った。このまま生きれば、自分はいつか死んだ兄の年齢を越えるのだと。かつて兄に守られていた自分が、今、この少女を守る側になろうとしている。役割が受け継がれ、新しい自分になる。それが、生きるということだった。
「みんな、一所懸命なんだよぉ。あんたのためにさぁ。だから頑張るんだよぉ」
アリスハートが、ジークの苦しげな寝顔を見つめて、そんな慰めの言葉を贈っていた。

7　王の道

広々とした丘に、軍勢が、大海のごとく集まってきていた。蒼く透き通る冬空の陽射しに甲冑が殺伐と輝き、休耕地に咲く花々を兵馬が踏み潰してゆく。
彼らは、聖法庁から離反した騎士団であった。聖法庁への叛逆に力を貸す地方領主の兵であった。そして蛮族と呼ばれ、聖法庁に帰順しない一族であった。

彼らは普段、互いに敵対し、利権を奪い合う間柄である。それが今や、たった一人の男が放った、「聖法庁・打倒」の檄文のもとで、同じ軍として集結しているのだった。

ふと、彼らの間で、ざわめきの波が起こった。馬上の男が、集結した軍勢を閲兵するように静かに通り過ぎてゆくのだ。長い銀髪に白皙たる顔立ち、群青の瞳に苛烈な意志をたたえ、男は小高い丘の上に馬を運び、そして、大地にひしめく軍勢を振り返った。

「ヴィクトール・ドラクロワ……」

あちこちで、その名が囁かれ、みな期待と畏怖を込めて、丘に立つ男を見つめている。

「聖法庁による、長い、抑圧と支配の時代は、終わりを告げた！」

ドラクロワが、天地に響く烈声を放った。

「これより独立と解放の時代が始まる。ここにいる、つわもの達の手によって！」

途端――兵達が剣や槍を振りかざし、歓呼の声を上げた。

「これは、聖戦である！」

ドラクロワの苛烈な宣言とともに、周囲で、幾つもの軍旗が、一斉に翻った。

四つの翼を持つ白鳥を模し、金銀で華麗に装飾された、紋章旗であった。

見たこともないほどに美しい旗に、兵達が感嘆の声を上げた。そして、これこそがドラクロワ軍の軍旗であると各軍令官が告げるや、歓呼の声は、爆発的なものとなった。

ドラクロワが、漆黒の剣を天に突き上げた。剣尖を、進むべき先へ向け、
「進軍！」
——進軍！　その言葉が、軍令を通して兵の間を、雷鳴のように迅り抜けた。
動いた。足音が、馬蹄の音が、瞬く間に、怒濤の轟きを起こしてゆく。かくして、ドラクロワの名の下に決起した軍勢は、続々と、凶暴な進軍を開始したのであった。

「えー……、ドラクロワは必ずや、聖法軍を最も脆弱化せしめる侵攻経路をとり、かつ秘儀を求め来る……、秘儀なる遺跡の都を守るべし……。意味、分かる？」
アーシアが、御者台で、パンをくわえながら言った。右手に手綱、左手に聖王からの新たな書状を持っている。書状の極秘を示す印など、まるで気にせず破った跡があった。
「言いたいことは分かるんですが……何を言ってるのか分かりません」
「いや、普通、それを分からないって言うんだけど……」
同じく御者台で地図をなぞるノヴィアの肩で、アリスハートが横やりを入れる。
「要するに、聖法庁の軍が、急に弱くなる場所を、ドラクロワが狙ってくるってことね。それでその途中に大事な秘儀があるから、守れってことでしょ」
「そんな場所、どこにも地図に書いてないんですが」

「いやぁ、普通、書いてないと思うなぁ」
「もう……見た方が早いわ」
ふてくされたようにノヴィアが地図から顔を上げ、遠くで移動する軍勢を見た。軍勢の行く手で、どこか遺跡のある都市に先回りすればいい――三人はそう結論した。結局、風に道を訊くアーシアも、万里眼を使うノヴィアも、地図などあって無きに等しいのだった。
昨日――ノヴィアが諜報院を見つけ、聖王からの書状を受け取るとともに、馬車を調達してもらっていた。馬ではなく四頭のロバを使って、のろのろ進んでいる。ジークの身にやどる堕気が馬を怯えさせるため、ロバしか使えないのだ。
幌の中には、ジークの武装やら、アーシアとノヴィアの荷物やらが雑然と散らばり、荷物の一つででもあるかのように――毛布にくるまれたジークが、横たわっている。
今は、痛みの波も収まっているのか、ジークの寝顔も穏やかだった。
ふいに、あっ、とノヴィアが声を上げた。アリスハートが、
「どしたの？　何か分かったの？」
「これ……聖法庁の軍隊が急に弱くなるところ……聖堂が集まるところです」
地図をたたみかけていたノヴィアが、愕然と言った。
「以前、ジーク様が、おっしゃってました。一番、軍を統率しにくい場所のこと……」

それは、戦場でジークが体で知った、聖法軍の弱点だった。聖堂は、聖印を特権化することで成り立っている。そのため複数の聖堂が近接する聖地では、自分達の聖印が他の聖堂に奪われるのではないかと、互いに疑心暗鬼になり、連合出来なくなるのだという。
だが、ノヴィアが真に驚愕したのは、もっと先のことだった。
「この、聖堂が幾つも集まってる場所の……中心にある都市を、見て下さい」
ノヴィアが地図を指さし――アリスハートもアーシアもその都市の名に驚いていた。
封都――イザーク。かつて聖クレマチスが多くの聖典を記し――外典イザーク書の名のもととなった都市である。それが、聖王の書状が示す、秘儀なる遺跡の都であった。
みな何やら不吉なものを感じて、黙然となった。アーシアが、ロバに鞭をくれた。
「急ぎましょう。何が始まるにせよ、始まる前に、ジークをつれていくのよ」
ジークはまだ目覚めない。一行はしんと不吉なものを抱きながら街道を進んでいった。

天地に広がる闇の中、一本の道だけが、あの四翼の鳥のように白く浮かび上がっている。
気づけばジークは、その道のりを苦痛を抱え、一心に歩いていた。左腕から流れる血が、点々と続いてゆく。剣も服も、靴も無い全くの裸体である。冷たい道を裸足で歩むつど、
（越えゆくがいい、試練を受ける者よ――王の試練とは、長き道のりそのもの）

天からとも地からともつかぬ声が、響き渡る。
これが現実であるわけもなく、かといって、全くの夢だとも言い切れぬ光景であった。
闇と道しかない光景を歩むうち、ふいに、左腕で凄まじい苦痛が爆ぜた。たまらず膝を屈し、道の上でのたうち回る。自分の人格を粉々に打ち砕くかのごとき苦痛とともに、突然、それまでとは違う声が、かけられていた。
「その痛みを、消して欲しいか……ジーク」
ジークは、息も止まる苦痛に這いつくばったまま、その男の声を聞いた。
「ドラクロワ……」
「痛みを消して欲しいか……」
思わず、うなずき返していた。途端——精神をずたずたに引き裂くかのような苦痛が、一瞬で消えたではないか。あまりの呆気なさに、呆然となって立ち上がり、声の主を探すが、そこにはただ天地に取り残された自分が、あるばかり。
ジークは恐るべき喪失感に襲われながら、左腕を見て、愕然となった。腕に刻まれていた聖印が消え去り、何もない素肌となっていたのだ。更には道のりに点々と残してきた血の跡まで消えて無くなっている。そのせいで、今や、この一本道で、いったい自分が、どちらから来て、どちらへ行こうとしていたのかさえ、分からなくなっていた。

「血は、苦痛とともにしか無いよ……ジーク」
ふいにまた声が響く。ジークは、じっと道を見据えた。やがて、
「痛みを戻して欲しいか……」
そう問いかけてくる声に対し、しんと静まる面立ちで、左腕を差し伸べていた。
「ああ。痛みを戻してくれ……」
苦痛が再び襲いかかった。腕から血が噴き出し、足下にしたたり、それまで残してきた血の道しるべが再び現れ——進むべき方向に、背を向けていたことを知ったのだった。
(人は、一本道でさえ迷う——むしろ、一本道こそが、最も複雑な迷宮なのだ——果たして進んでいるのか、後戻りしているのか——懊悩の果てに、生は刻まれる)
「お前も、これを越えたのか……ドラクロワ」
かつて聖櫃の間で外典を暴こうとして牢に入れられたドラクロワが、苦痛にのたうち回っていたのは、この試練を受けていたからなのだ。
(乗り越えるがいい——道のりの果てに、真実と、新たな力を授けよう)
「真実など……新たな力など……。俺はただ……そこに、あいつがいるから……」
ジークは歯を食いしばり、無限の苦痛を抱えながら、ただ歩み続けていった。

封都イザークを、赤く夕陽を受けながら、ドラクロワ軍が怒濤の勢いで包囲してゆく。

これに対し、聖法軍が、都市イザークに結集し、イザーク聖堂長が指揮を執った。城門を閉ざし、固い守りを見せ、にらみ合いの内に夜が過ぎ——朝陽が、死の始まりを告げた。

夜明けとともに、ドラクロワ軍が、城門に殺到した。城壁に梯子を立て、群がり登る。壁の上からは矢が雨のごとく降り注ぎ、鎧ごと肉体を溶かす酸が浴びせられた。

「第一軍、増殖器を出せ！　灰腕獣を先頭に、城壁を登って門を開け！」

ドラクロワが命じた。城門付近で稲妻が幾つも生じ、魔獣どもが出現した。人に似た格好だが、猪の顔を持ち、両腕に斧のごとき灰色の刃を生やした魔獣が、異様な速さで梯子を登り、城壁に躍り立つ。腕の斧で、城壁の兵達を甲冑ごと叩き斬り、都市内へ降りた。その後をドラクロワ軍が続き、ついに壁を乗り越え、内側から城門を開いた。

城門から、ドラクロワ軍の騎兵が突入した。駆け抜けざまに建物に火を放ち、人を斬り、叩き殺す。ドラクロワ軍も、魔獣と同じく、兵と市民を区別しない。殲滅戦闘——皆殺し戦術だった。美しい白亜の建物は、またたく間に血塗られていった。

「第二軍、第三軍、増殖器を出せ！　紅角獣を放ち、都市を制圧しろ！」

各所で、馬に似た魔獣どもが現れた。八つの脚で、逃げ惑う兵を踏み潰し、額に生えた紅い角が輝きを帯びるや、火球を放って、建物ごと人を吹き飛ばした。

迎え撃つ聖法軍は、このとき完全に分裂していた。イザーク聖堂の軍が、自分達の大事な秘儀にかかわるため、せっかくの味方に、ここには入るな、この道は通るな、この建物は見るな、といった場違いな禁止を出し、連携を失わせていたのである。
「この期に及んで、味方に対してさえ秘儀を守るか……、特権に溺れる者ども……」
ドラクロワが、凄惨な修羅場の中、馬を進めながら、嘲るように呟いた。
分裂する聖法軍が撃滅され、白亜の都市がたちまち蹂躙される中、市民には苦しみ叫び、救いを求める以外、なすすべとてない。ドラクロワ軍も魔獣も、兵と市民、男と女、老人と子供の区別さえつけず虐殺する、修羅の恍惚のうちにあった。

闇の中、白く浮かび上がる一本道を歩むジークのもとに、しきりに声が届いてくる。
(眠れる〈三聖印〉が目覚めるとき、かつて封じられた神が、再び姿を現す――)
ジークは、今やその声に対し、苦痛に耐えながら、烈しく声を放っていた。
「なぜ外典など遺した！　なぜ〈刻の竜頭〉の秘儀など遺した、聖クレマチス！」
(神の囁きがもたらした力の水脈を、変えるために――)
「――力の水脈？　いったいなんだ、それは」
(聖印――それが力の水脈を作り出し、人の魂の力を、神に流れ込ませるのだ――)



「聖印が……!?」
(神は、人の魂の力を食らうために、聖印を授けた——私はそれに気づき、神を封印したが、力の水脈は止められなかった——聖印を刻まれし者よ、そなたの力の一部もこれまで常に神に流れ込んでいたのだ——試練の果てに、そなたは水脈から解き放たれる)
「神は、いるのか……お前に、聖印を授けたという神は、この世にいるのか」
(神は、我が身とともに聖櫃の中にいる——形も姿もなく、ただ意志のみの存在が)
「意志のみの存在……？　そんなものが、いったい、何を求めている？」
(君臨——形と姿を手に入れ、この世の全てのものに対しても、他の神々に対しても、君臨者となり、絶対的な支配をもたらすこと)
「他の神々？　お前に聖印を与えたもの以外にも、神がいるのか」
(互いに絶対的な君臨者となるべく多くの神々が争っている——だが我が知るのは、アズライールと名のる神のみ——人の心に囁きかけ、人の心を支配する神)
「その、アズライールを滅ぼす方法が……〈刻の竜頭〉の秘儀だというのか」
(そうだ——人の命から魂を解放し、神を超える存在を作り出す)
「命から魂を解放する……？」
(人は命をもち、それゆえ罪を犯し、魂の力を失う——それゆえ滅びもまた救いの一つ——

――〈刻の竜頭〉は滅びの中より誕生し、そして神を食らう〉
「命を滅ぼし……怪物を造り出すことが、救いだというのか……」
ジークの中で、猛然と怒りが湧いた。命の価値をおとしめて神を超えたところで、何が得られるのか。魂を食われることから逃れるために、自ら命を食らうだけではないか。
「……俺が、あいつを止める。……そんな秘儀など、俺が葬ってみせる」
きりきりと歯を食いしばり、彼方に続く道を見据え、ジークは、歩んでいった。

8　真実を告げて

馬車の御者台で、アーシアがふと傍らのノヴィアの異変に気づいた。
ノヴィアの顔が真っ青だった。がたがたと震えだすや、慌てて口元を押さえている。
「どうしたの、ノヴィアちゃん！」
「しばらく進めば、山の反対側に……。峠を越えて……見えますから……」
間もなく峠を越え――その光景が現れた。都市イザークが、無数の黒煙を噴き上げ、この世の地獄と化しているのだ。すぐにアーシアの鋭敏な耳に、阿鼻叫喚の数々が聞こえ、
「ひどい……」

あまりの無惨さに愕然とし、思わず馬車を止めていた。途端、ノヴィアが御者台から降りた。倒れ込むようにして道沿いの草地に膝をつき、こらえきれず、嘔吐したのである。
「う……。あ、あんなっ、小さな、赤ん坊までぇっ！　やぁっ！　いやだぁっ！」
ノヴィアが泣き叫んだ。ほとんど悲鳴だった。この距離からでも、ノヴィアには戦場の様子がつぶさに目の当たりにされるのだ。アーシアが急いでノヴィアを追った。
馬車の中から、ひょいと顔を出したアリスハートも、あまりの光景に愕然となった。
「ままま、都市が燃えてるーっ！　な、なんなのっ、なんなの、これっ！」
ノヴィアが、アーシアの手を振り払い、息を荒らげて馬車に駆け寄った。
「ジーク様っ、ジーク様っ！　やめさせて下さい！　あれをやめさせて下さい！」
荷台にしがみついて泣き叫ぶノヴィアを、アーシアとアリスハートが慌てて宥め、
「こんなんじゃ……今さら、ジークが行っても……」
ノヴィアの肩を抱きながら、都市を振り返ったアーシアが、にわかに息をのみ、
「……なんで、ここに」
ノヴィアもアリスハートも、都市の上空を舞う白い四つの翼に、呆然となるのだった。
「なぜ……理想を抱くドラクロワや俺達を……アズライールは潰そうとしたんだ」

ジークが、道を歩みながら問う。声は、答えない。
「争いを無くし、みなを王にする……それは人間の理想だ。神は関係無いはずだ」
(真実を暴く者と、真実を葬る者の、二人の申し子が、囁くものを怯えさせたのだ――だがそのわけは、我が遺志を越えゆく者の原理――我には分からぬこと)
「ドラクロワは、神の囁きを聞いた……あいつは、心を冒されているのか？」
(真実を暴く者の心――そして真実を葬るそなたの心に、囁きが一つずつ)
「俺も……心に、囁かれたのか？　いつだ……。いったい、いつ……」
(その囁きがいかなるものか――我が遺志を越えゆく者の心ゆえ、我にも分からぬ)
「もし……俺も、ドラクロワも……囁かれ、支配されていたら……」
唐突に、全ては虚しい徒労――という囁きが、脳裏をよぎり、足が止まっていた。
この道を歩き続け、いったいどこに辿り着くというのか。辿り着いた先に、いったい何が待っているのか。ふいに何もかも分からなくなっていた。何もかもが虚しかった。
道の脇に広がる、奈落の闇に目がゆき、いっそ、ここから落ちてしまえば――という囁きが心に起きた途端、咄嗟に、右手で左腕を握りしめ、力の限り爪を押し立てていた。
ジークの口から絶叫が迸った。ぐらりと倒れかけ、激痛に喘ぎながら踏みとどまる。
「俺が、囁きに冒されるかどうか、試したな！　その程度のもので、諦めるものか！」

(我が遺志を越えゆく者よ——囁きに抗い、滅び以外に魂の解放があると信じられるか)

「聖法庁の始祖よ、俺達が一度でも囁くものを怯えさせたのなら！　今はまだ分からなくとも、答えは既に俺達の中にある！　俺が歩いているのはその答えを知るためだ！」

ジークは、この苦痛が無限に続くのも構わぬ覚悟で、その踏歩に渾身の力を込め、

「お前の力など必要ない。俺達は、俺達の道を、自分達で見つけてみせる！」

刹那、道の先が白く輝き、

(——今、試練を乗り越えん)

明らかな祝福の声とともに光が溢れ、瞬く間に闇を消し払った。ジークが瞠目し、

「聖クレマチス……。お前もまた、滅び以外の救いを求めて……」

光の向こうから複雑精緻な聖印の輝きが現れ、ジークの左腕へ奔流となって流れ込み、

(力の水脈から逃れし、新たなしるしを受け取り——勝利せよ、申し子よ)

その腕から、今こそ、一切の苦痛を消し去ったのだった。

黒煙が漂い、血臭がたちこめる中、イザーク聖堂長は既に兵達の手で殺されていた。

ドラクロワは、軍令を放つと、イザーク聖堂の中心たる白亜の塔へ入った。地下への階段を見つけ、単独で降りた。やがて辿り着いた闇の底に、息づくものの気配があった。

「〈刻の竜頭〉……聖クレマチスによって作られた、原初の〈竜骸〉よ。何度、お前と同じものを造り出そうとして、失敗を重ねてきたか……」

ぽつりと何かが地面で跳ね、赤く明滅する光が起こった。広間に、赤く巨大なものが浮かび上がり、あちこちで血の雫が跳ねていた。地上の流血が全てここに流れ込み、化け物が、全身で血を吸っているのだ。どくん——と床の一部が音を立て、脈動した。

「シーラよ……来ているか」

ドラクロワが、脈動する天井を仰いだ。左手の書が開かれ、漆黒の稲妻が迸り、ドラクロワの姿を守るように包み、四方に溢れ、明滅する巨大なものへと流れ込んでゆく。

「もうすぐだ。もうすぐ、会える。私も、お前も……ジークも、魂の解放を迎え……」

耳をつんざくような咆吼が轟き、徐々に——それが、身を起こしたのであった。

鳥が舞い降りてきた。アーシアとノヴィアとアリスハートが呆然とする前で、白い四つの翼を翻し、荷馬車の上に降り立った。——かと思うと、そのまま鳥は、幌をすり抜け、馬車の中へ、すっと姿を消している。

ノヴィアが馬車の中を見るが、そこは白い輝きに満ち、視覚が届かなかった。

「なんで……急に、鳥が来たのぉ……」

アリスハートの問いに誰も答えられない。アーシアも、ノヴィアも、馬車に駆け寄りつつ、翼が幌の入り口に翻る様子に、手を出してはいけないような思いに駆られていた。
「癒しの聖性……」
アーシアが、愕然と呟いた。幌の中は、今や強い聖性を放つ翼で、いっぱいだった。
そしてその翼に覆われるようにして、ジークが、ゆっくりと目を開いていた。

「シ、ト、ラ……」
ジークが、呼んだ。白い翼が辺りを覆っていた。その翼から放たれる聖性が、誰のものであるか、ジークには忘れようもなかった。
ジークは、おぼろげな意識のまま手を伸ばし、鳥の首に触れた。
そのとき——鳥の黒い宝石のような目に、何か違う光景が映っていることに気づいた。
それは、過去の光景だった。過去に起こった出来事を、鳥の目は今も見ているのだ。
そしてその光景を、今、ジークの目が、鳥の目を通して、見ていた。
ジークは、自分の心臓が、鼓動が激しく音を立てるのが分かった。
「まさか……それが、真実……」
言いかけたとき、ふわりと、鳥が翼を翻し、ジークから身を離した。

そのときの鳥の表情は、まるで、ジークに別れを告げに来たとでもいうようだった。これから行かねばならない場所へ行く前に、いっときジークに触れたかったというように。

ジークが、はっとなった。脳裏に、夢の中で、闇に、鳥が食われる光景が甦っていた。

「行くな！　シーラ！」

ジークが鳥の翼に手をかけた。ふいに、鳥がまた違う表情をあらわした。

それは信頼の眼差しだった。これから鳥が行く場所へ、ジークもまた辿り着くというような。そしてまた、ジークが、鳥を救ってくれるというようでもあった。

「俺を……待っていると言うのか」

刹那、鳥が輝いた。その翼が、光そのものとなって翻り、ジークの手も体もすり抜けてゆく。その中で、ジークは咄嗟に、何かをつかんでいた。輝ける翼が、馬車の幌をすり抜け、そして天空へと舞い上がっていった。ジークの手の中に、あるものを残して。

それは、十字型をした紋章であった。その紋章に刻まれた〈癒す者〉の称号の上に、ぽつりと、涙が落ちた。ジークは目を閉じ、悲しみと衝撃が去るのを待った。

そして再び目を開いたとき、そこに、決然とした戦士の顔があらわれていた。

光の翼が飛翔し去ってゆく様を、アーシアとノヴィアが呆然と見守っていると、

「封都イザークか……」
ジークが、幌から出て、言った。アーシアとノヴィアがはっと振り返り、
「お、狼男ぉっ、立って……立って大丈夫なのぉっ⁉」
アリスハートがジークの周囲を舞い飛んでわめいた。
ジークは小さくうなずき返し、アーシアとノヴィアを見やって、
「よく、連れてきてくれた」
いつもの淡々とした声で、礼を言った。途端に、ノヴィアが泣き顔になった。
「い、今……都市の様子を見ます」
気丈にも、鳥が飛翔していった方角——陥落したイザークの方へ、目を向けた。そこにドラクロワがいるはずだった。どんな無惨な光景を見ることになろうと、ドラクロワの居場所を見つけ、ジークに告げなければならない。そうノヴィアは信じた。
すると、ジークが、そっとその左手で、ノヴィアの目を覆った。
「見なくていい、ノヴィア」
優しくその視線を遮ってやりながら、ジークは、言った。
「お前が見るべきものは他にある。今それを、見なくていい。お前は、よくやった」
たちまちノヴィアがジークの手に顔を押しつけ、声を上げて泣いていた。

「ジーク様、怖かったです……とても怖かったです」
ジークはうなずき、アリスハートがノヴィアの肩に降りると、すっとその手を離した。
アリスハートが、ジークに代わって、ノヴィアの頰を優しく撫でる。
「〈刻の竜頭〉の秘儀が……回り出す」
ジークが、陥落する都市を見晴らして、呟いた。その言葉にアーシアが愕然となった。
「秘儀が……？　ここも滅ぶってこと？」
アーシアがジークから聞いた話では、最後に怪物は壮絶な爆発を起こし、一帯を不毛の地と化しめている。だがジークは、小さくかぶりを振った。
「あの鳥が……それを防ぐために、飛んで行った」
そのとき、アリスハートが、驚愕の叫びを放った。
「わーっ！　見て見て、あれっ、塔が揺れて……なな、なんか出てきた!!っ！」
ジークが鋭く見据え、アーシアがはっと都市の方を振り返る。
ノヴィアもまたおずおずと目を見開き、それを見ていた。
なんと、都市の中心に建つ塔の底から、赤黒く脈打つものが地面を突き破り、激しく塔を崩落させたのであった。それは、かつてそこにあった塔よりも高く、骨格を剝き出しに、都市から遠く離れたジーク達にも聞こえるような、凄絶なる咆吼を上げたのだった。

「鳥が……！」
　アーシアが叫んだ。塔から現れた怪物は、光り輝く鳥に向かって首を伸ばし、かっと無数の牙を剝いたのだ。その巨大な顎が、鳥を、ひと呑みに食らった。
　ジークが、手に握った紋章を強く握りしめた。その目が、凄烈な怒りをためて、遥か彼方の怪物を睨み据えていた。

「〈竜骸〉のままでは堕気を無限に吸収し、爆発するだけだ……」
　怪物の足下では、漆黒の稲妻に包まれたドラクロワが、囁くように呟いている。
「聖性に満ちたエインセル、すなわち〈竜精〉と一つになって初めて、〈竜体〉となり、堕気の暴発を封じ……新たな段階に入るのだ……。シーラ……我が〈竜精〉よ……」
　にわかに、怪物が、歓喜の咆吼を上げた。
　誰の目にも明らかな異変が起こった。怪物が、光り輝きながら変貌したのだ。
　口は爬虫類のごとく牙を剝きながら、鼻から上が女性を思わせる流麗なものに変わった。黒い四つの目が宝石のように輝き、髪の代わりに幾重にも水晶の柱が連なる。体は、女性のしなやかさと爬虫類の形状とが相半ばし、全身に水晶の柱を垂れ、陽光を虹のようにきらめかせた。そして――その背に、突如として都市を覆うかのごとき巨大な、光り輝く、

四つの翼が生え広がったのだった。

怪物が巨大な翼を翻した。地上の建物を踏みしだいて、天空へと飛び上がった。脚は鳥類のそれに酷似し、まるで白く輝く鳥が、天に飛翔したかのようであった。その怪物の飛翔とともに、ドラクロワ軍も、破壊し尽くされた都市から、移動を開始している。

それらの様子を、離れた場所から、ジーク達はただ見送るしかなかった。

「まだだ……まだ間に合う」

ジークが、天空の彼方に飛び去る怪物を見据え、そこにいるはずの男に向かって言った。

あの鳥は、怪物が爆発することを察して、自らその身を捧げたのだ。そしてそのことを、ある一つの真実とともに告げるため、鳥は、ジークのもとに舞い降りたのだった。

ドラクロワと、あの怪物を止める――ジークの全身に、その決意が溢れかえった。あの鳥を救い出す。シーラの魂から生まれた、あのエインセルを解放し、葬るのだ。

アーシアやノヴィア達が、真摯な顔でジークを見守る中、

「今度こそ……決着をつける」

ジークは、紋章を握りしめ、敢然と告げていた。

第五章　混沌の軍勢

「友というだけでは、駄目か」
その男は、言った。
「お前が何者で、私が何者であるか。ただ友である……それだけでは駄目か、ジーク」

1　王の座

崩壊した都市から南の農村で、ジーク達は、巡礼者用の宿を借りていた。
ジークは、王の試練による疲労の回復につとめる一方、また別の力が満ちるのを感じていた。王の試練から覚醒してすぐには無かった感覚である。試練を越えて一昼夜経ち、ようやく、やどった力が発揮され始めているようだった。
(――なぜ、神はそもそも、俺達を、潰そうとした……？)
いつしかジークは、その問いを何度も心の中で繰り返していた。

かつて、大敗を喫したとき——王弟は、神の囁きに従って、ドラクロワやジークを罠に陥れたという。ジーク達の理想が、神と呼ばれる強大な存在を、恐れさせたらしい。だが、神は理想の何を恐れたのか——？　答えは出なかった。村に来て二日目の夜。ジークは、体の調子を試すために、村はずれの丘まで歩き、そこで天を見上げ、佇んだ。

「俺達が、神に囁かれたこと……」

それが二つ目の謎であり、そしてその答えは既に、解かれ始めている。

ただ、ジーク自身が、その答えを、信じることが出来ずにいた。

アズライールという目に見えぬ存在は、人に囁き、心を支配するという。そしてジークは、最後に鳥を見たとき、鳥の目に、自分達が受けた囁きの正体を——真実を、見いだしていたのだ。だがそれは、ジークにとってあまりに信じがたいことだった。

「本当に……そうなのか。俺が……こうあって欲しいと思っているだけではないのか」

分からなかった。自分の心が、これほどまでに操作されることがあるのかと思うと、愕然となる。自分の感情でさえ、誰かに操られた結果であるとしたら——

「俺も、ドラクロワも……神に操られているだけなのか？」

断じてそう思いたくなかった。これまでの苦しみも喜びも、理想や絆への思いも、自分のものだ。その点では、ドラクロワもまたジークと同じ気持ちで、神に抗っているのだ。

そのとき、突如として風が吹き荒れた。四方から、心に直接響く、嘆きの声が迫る。黒黒としたものの群が、大地を覆い尽くして猛然と這い寄る様を、ジークは静かに見つめた。イザークで虐殺された何十万という大量の死者の、憎悪と怨みに満ちた魂の群であった。
「お前達を葬らず……残してきてしまった。許してくれ……」
詫びながらも、ジークはそのとき、深く確信していた。
人はこのように己の魂を、意志を持っている。全てが、神と呼ばれる存在に支配されているわけではない。ジークのその思いに応ずるように、天地に、憎悪と嘆きが荒れ狂った。
怒濤のごとき堕気に、左腕が反応し、肉も骨も、目に見えぬものに食いちぎられるかのような痛みが走る。が、間もなく、痛みは溶けるように消え、ジーク自身が驚いていた。
「聖クレマチス……。王の試練を越えた力か……」
幾十万もの慟哭が、爆発的な奔流となってジークの身に躍り込んで来た。
刹那、包帯越しに、左腕の聖印が、紅く輝いた。それはまさしく、闇の中で死者を招く灯明だった。紅い輝きとともに、ジークの全身に力がみなぎり、渦巻く死者の声の真っ只中にあるにもかかわらず、手にも足にも生気が溢れてくる。
「弔われざる者達よ……その憎念、俺が引き受ける」
ジークは、無数の堕気を受け入れながら、敢然と告げた。腰帯にかけていた十字型の紋

章を手に取り、祈るように、左手に握りしめた。そのまま、拳を高々と掲げ、

「俺達に、本当の真実を与えてくれ……シーラ」

轟々と渦巻く死の颪の中心で、腕の聖印が、さらに強く、紅い輝きをともした。

英霊祭の賑わいは、一転して戦争の昂奮に変わった。聖都から出陣する騎士・兵士達を、市民が歓呼の声を上げて見送っている。その様子を、一人の老人が馬に乗って冷静に見回っていた。老人はやがてクレア大聖堂に戻り、執務室にいる聖王に報告しに参上した。

「ご命令通り、市民の様子を見て参りました。戦意は昂揚し、こたびの戦いに肯定的です。市民までもが、ドラクロワに呼応することは、ないでしょう」

「各聖堂長の様子は、どうか」

「それが……多くの聖堂がドラクロワに寝返っているため、お互い、疑心暗鬼になっております。マグノリア大聖堂などは完全不戦を表明し、〈銀の乙女〉は戦いには参加しないと……。かつて王弟のもとで多数の聖堂が結託し、ドラクロワを陥れたときとは、まるで逆の有様で」

「三年前、既に何もかもが定まり、今へ、つながっているのであろうよ……。かつて聖櫃の間で、弟王がドラクロワとともに外典を閲覧したとき……、神の囁きによって」

「神の囁き……ですか？　私にはいまだに、よく分かりませぬで……」
老人が困ったように言う。聖王の頬に、かすかな微笑がやどった。聖王の周りで、この老人ほど、権力に興味を示さず、自分の役割に一生懸命になる者はいなかったからだ。
「フォード……我が従弟よ、そなたがおらねば、私は王としての孤独に疲れ果て、とっくに、ドラクロワか弟王のどちらかに、王座を譲っていただろう……」
老人は恐縮したような、喜ぶような、妙に、少年っぽい表情になった。
「私は単に、争いが大きくならぬことを望むだけの小心者でして……」
評価された途端、しどろもどろになる老人に、聖王は多大なる信頼を寄せて言った。
「こたびの戦いで、あらゆる聖堂が団結すれば、たとえドラクロワが強大な秘儀を有していても、そうそう負けはせぬ……。だが聖堂同士、今や連携を失っておるのが現実だ」
「は……。裏切りがあっては……幾ら、数で優っていても、ろくに戦えませぬで」
「もし一致団結が不可能な場合、ある策をもって、ドラクロワと戦わねばならぬ」
そして、その策を、聖王は静かに語った。たちまち老人は蒼白となった。
「ま……まさか、そのような……！」
「もはやそれしかあるまい……。確実に、軍令を操作せよ」
聖王は、どこか、重いものを老人に背負わせてしまうことを詫びるような目になった。

　老人は言葉もない。込み上げてくる吐き気をこらえるように一礼し、蒼惶と退室した。

　聖法軍は、ドラクロワ軍を迎え撃つべく集結し、そして、ものの見事に分裂した。

　防衛拠点が、聖地の集中する地域にあるせいだった。現地の聖堂が、部外者を拒絶し、砦にさえ入れようとしないのだ。一方、他の軍は、陣地を確保せねば自分達の命が危ない。ばらばらに陣が張られ、軍令官は、報告すべき相手の居場所が分からず混乱した。

　またこれまで幾つも聖堂がドラクロワに寝返っているため、互いに裏切りを恐れ、味方同士で戦いかねない険悪な雰囲気であった。そんな状況を、聖王の従弟である老人は、なんとかしようとしたが努力は虚しく、全軍から自分勝手な不平不満ばかりが返ってくる。

　そうしてイザークが瓦解してから三日後――ドラクロワ軍が接近し、決戦を控えたその日、老人は、防衛拠点から南西に下った村にある、巡礼者用の宿を、訪れていた。

「聖王様の策を使うしかない……聖法軍は、砕けたガラスだ。拾う者の手さえ傷つける」

　老人の溜息まじりの声が、暖炉の火の音とともに、小屋の中にひっそりと響く。

　暖炉にかけられた鍋から、腹の虫を刺激するような匂いが漂い、窓の外の木々に実る真っ赤なリンゴが夕陽に輝き、とても大規模な戦争が始まるとは思えぬのどかさだった。

「ただ、聖王様の策が、果たして正しいのかどうか……わしには、分からぬ」

「苦肉の撤退戦術だ。決して正しいわけではない。だが勇気ある決断には違いない」
鋭く、淡々とした男の声が応えた。賢老院たる老人に対し、本来ならば決して許されぬ口の利き方である。だが老人は、むしろ男を頼るように見つめた。
「黒印騎士団……ジーク・ヴァールハイト」
数か月前には、賢老院の前で頭を垂れていた男である。だが老人は、今や聖法庁の中で、ジークだけが、唯一まともにドラクロワに拮抗していることを見抜いていた。
そのとき、ノヴィアが、シチューの入った椀を二つ運んで来て、
「朝から何もお食べになってないと伺ってましたので。どうぞ、召し上がって下さい」
「ノヴィアが、昨日の晩から煮込んでるシチューだからねぇ、美味しいよぉ」
そこへ、薪を拾ってきた娘――アーシアが、ずかずかと入り込み、老人に一瞥をくれ、
「あら、お客さんなのね。いらっしゃい。寒くないかしら。今、火をくべるわね」
銀銃で撃ち折ってきたナナカマドの枝を、鼻歌交じりに暖炉に放り込んでゆく。
「黒き騎士よ、聖法庁の秘事について話しているのだぞ。人払いを……」
「俺の従士だ。気にする必要はない」
淡々と返すジークに、さすがの老人は呆れた。ふと良い香りに誘われてシチューを見た。
途端――蒼白となって震え上がっている。そのシチューたるや、どろどろの緑色に、赤黒

いものやら黄色いものやらが、あぶくを立てて浮かぶ、とても口に入れる物とも思えぬしろものだったのだ。思わずのけぞるが、平然と食らうジークに、またもや愕然となった。
「賢老院たる者が、見た目に惑わされ、真実を逃すこともないだろう」
ジークが老人を見もせず言う。老人は、恐る恐るシチューを口に運び、いきなり極上の味わいが口いっぱいに広がるのへ瞠目した。朝から全軍の不平不満にまみれ、食事も喉を通らなかった事が嘘のように豊穣な味を貪り、腹の底から癒されるような快感にひたった。
「ううむ……これで、見てくれさえ良ければ、宮廷料理人としても通じように……」
あっという間に平らげ、老人が唸る。そして、ふとジークを見つめ、
「いや、このような事を言っている時点で、見た目に惑わされているわけだの」
老顔を少年のように照れさせた。だがアリスハートとアーシアが、それに賛同した。
「本当、ノヴィアの料理って食べるのに勇気がいるのよぉ。見た目さえ良ければねぇ」
「せっかく作り始めは普通なのに、出来上がりがこうなっちゃうのが不思議」
「だ……だって、こうした方が美味しいって思うと、つい……」
ノヴィアが顔を赤くしてうつむく。老人は目を丸くしつつも、彼女らの裏表のない賑わいに妙に安心し、惨憺たる気分が晴れゆく。その老人に、ジークが、静かに、言った。
「戦禍を防げず、破局に至ったことを悔やむ気持ちは、今は忘れた方が良い。俺達は一個

の兵力だが、あんたは軍略を左右する力を背負っている……フォード卿」
途端に、老人の顔が、みるみる引き締まった。
「策に合わせ、俺も動く。神の囁きではなく、己の真実として」
「……そなたの言葉、確かに聖王様に伝えよう」
老人がうなずき、立ち上がった。小屋を出ようとして、ふと足を止めて振り返った。
「実は現在、次期聖王の選定会議が聖法庁で始まっておる。わしは今日、お主に会って、お主こそが聖王にふさわしい男と思うたのだが……お主の気持ちはどうだ？」
いきなりそんなことを言った。小屋にいるノヴィアとアリスハートが目を丸くし、アーシアが暖炉に薪をくべながら、ぽかんと口を開いた。一方、ジークは淡々と返している。
「今の聖王の勢力を結集させるのが、あんたの仕事だ。俺の後ろ盾になることじゃない」
老人は、むしろ完全に感じ入ったように、拳を胸にあてて一礼している。それから残りの三人にも、いちいち目礼し、アーシアは首を傾げ、ノヴィアはおたまを手に、お辞儀を返し、アリスハートは、ぽかんと宙に浮き、馬車に乗り込む老人を見送った。
「はぁ……すっごい丁寧な人だねぇ。あたし達、何か、したっけぇ……」
「ジーク様が連れて来られたあの方……よっぽど、お腹が空いていたんですね」
「どういう人なの、あのお爺さん。なんだか綺麗な馬車に乗ってたよ」

「賢老院の一員だ。聖王の、従弟にあたる」
ジークが言うや、みな、呆然となった。アリスハートが、
「じ、じゃあ、さっき、狼男が、聖王にって言ってたのは、冗談じゃなかったの？」
「冗談だろう」
あっさりとジークは言う。アリスハートは、ふぅん、と呟き、あっけらかんと、
「狼男が、聖王かぁ。きっと、それでもシャベル担いでるんだろうねぇ、この男」
アーシアもノヴィアも吹き出し、たちまち三人の笑いがさんざめいた。
ジークは静かに立ち上がり、窓の外の、暮れゆく谷を眺めやった。
「聖王の座……。俺達が、棄てるために、求めたもの……。理想のために……」
心のひどく深い場所にあるものを、確かめるように、呟いていた。

2　魔軍出陣

フォードが心の活力を取り戻し、ジークのもとを去った翌日の朝――クレア大聖堂の執務室にいる聖王の、水色の目が、ふと、天井へと、あらぬ方を見やった。
「来たか……〈刻の竜頭〉……力の水脈を乱すものよ……」

そのとき、聖都ロタールの上空では、昇りゆく曙光とともに、あの、封都イザークから飛び立った、巨大な四翼を持つ怪物が、にわかに雲上より舞い降りてきたのであった。
翼を翻して宙を降り、轟然と、クレア大聖堂の天蓋に降り立った。衝撃で天蓋に亀裂が走り、窓が割れ、尖塔が怪物にぶつかって折れ砕ける。
怪物が、爬虫類のごとき顎をかっと開き、天地を震撼とさせる巨大な咆吼を放った。
その声に驚いて街路に出た市民が呆然となるのをよそに、怪物は、咆吼を上げ続けた。
ふいに翼から白いものが舞い降りた。水晶のかけらだ。それがクレア大聖堂の屋根の上に降り積もってゆく。かと思うと、そこから新たな水晶が殖え広がり、クレア大聖堂はみるみる水晶に覆われ、怪物ともども巨大な一個の、水晶の繭と化していった。
曙光がその繭を染め、さながら金色の炎に包まれるようであり、人々は、その息をのむような美しさから目が離せなくなった。そして——にわかに水晶が、四方に向かって生え広がった。さながら、宙を迅る、透明な刃の群だ。水晶は、たちまち、ぽかんとする人々の胸へ、腹へ、背へと、吸い込まれるようにして肉体を貫いていった。
早朝ゆえに、クレア大聖堂を囲む城壁の門は、全て閉ざされている。その壁の内側は、美しい水晶の刃が乱れ交う、阿鼻叫喚の地獄と化した。そして、門の外側にいる者達には何が起こったか分からぬまま、やがて騒ぎがぴたりとやんだ。

クレア大聖堂は、今や死の静寂に満たされた。水晶も動きを止め、鮮やかな赤い色に染まっていった。血だ。皆殺しにした人々の血を、蛭のように、水晶が吸っているのだ。

クレア大聖堂は、間もなく、人血によって赤々と輝く水晶の繭の中に、没した。

その聖堂の中を、ただ一人、聖王だけが水晶を寄せつけずに歩み、王座の間に入った。

「来るがいい……〈三聖印〉の最後の一つを求めて。ドラクロワよ……」

聖法庁の象徴たる聖王の座で呟いた。その彼方で、今まさに、戦いが始められていた。

四翼の鳥の紋章旗が、朝陽を受け、血風に翻った。

ドラクロワ軍が、魔獣の群とともに、防衛拠点に押し寄せてきたのだ。聖法軍は、悪夢のような軍勢を、果敢に迎え撃ったが、連携せず、別々に防衛するのでは、一丸となるドラクロワ軍を押し返せない。混乱が広がる中、にわかに明確な意志をもって動く者がいた。

聖王の従弟の老人である。老人は、実に、前夜から、聖王の策を実行に移していた。

そして今、老人は、聖王に忠誠を誓う、選ばれた聖堂の軍勢に、撤退を命じたのだった。

防衛拠点では、今しも、ドラクロワ軍との激しい戦いが繰り広げられている。

にもかかわらず、老人は、防衛拠点に残る聖法軍を置き去りにし、兵数の三分の一近くに、撤退を命じたのだ。老人の周到な用意と、確実な伝令によって、何千何万もの軍勢が、

戦場から離脱する。残りの軍勢は、自分達が置き去りにされたなどと知りようもない。
味方を犠牲にした、撤退戦術――それが、聖王が老人に託した策だった。信頼出来る精鋭を戦場から離脱させ、後は全て見殺しにする。そして万全の態勢で敵を迎え撃つ。
分裂する聖法軍にとって、もはやそれ以外に、ドラクロワ軍と拮抗する方法は無かった。
離脱した兵達は、一刻も早く聖都に集結すべく、疾風のごとく駆け抜けてゆく。その内の一団――数千の騎兵が疾駆していると、ふいに左右の森から異様なものが続々と現れた。
猪に似た顔を持つ魔獣の群――腕に斧のごとき刃を生やした灰腕獣であった。その魔獣どもが行く手に躍り込み、腕の斧で、騎兵を馬ごとなぎ倒した。
慌てて魔獣を撃破しようとする騎兵に向かって、今度は森から、四翼の鳥の旗とともに、槍兵が雪崩れてきた。矢が降り注がれ、槍が襲いかかる。完全な待ち伏せだった。
騎兵は、機動力を奪われ、魔獣の群に迫られ、たちまち恐慌に陥った。そのとき――
ずどん！　森が揺れ動くかのような音が、魔獣どもの背後で響き渡った。
魔獣どもが、猛烈な唸り声を上げて振り返る。騎兵や、攻め寄せる槍兵までもが、道の真ん中で、大きなシャベルを突き立てる、一人の男の姿に、ぽかんとなった。
「ジーク・ヴァールハイトが解き放つ！」
男が叫んだ。にわかにその手に握られたシャベルに、白熱する雷花が咲き乱れた。

クレア大聖堂は、今や死の静寂に満たされた。水晶も動きを止め、鮮やかな赤い色に染まっていった。血だ。皆殺しにした人々の血を、蛭のように、水晶が吸っているのだ。

クレア大聖堂は、間もなく、人血によって赤々と輝く水晶の繭の中に、没した。

その聖堂の中を、ただ一人、聖王だけが水晶を寄せつけずに歩み、王座の間に入った。

「来るがいい……〈三聖印〉の最後の一つを求めて。ドラクロワよ……」

聖法庁の象徴たる聖王の座で呟いた。その彼方で、今まさに、戦いが始められていた。

四翼の鳥の紋章旗が、朝陽を受け、血風に翻った。

ドラクロワ軍が、魔獣の群とともに、防衛拠点に押し寄せてきたのだ。聖法軍は、悪夢のような軍勢を、果敢に迎え撃ったが、連携せず、別々に防衛するのでは、一丸となるドラクロワ軍を押し返せない。混乱が広がる中、にわかに明確な意志をもって動く者がいた。

聖王の従弟の老人である。老人は、実に、前夜から、聖王の策を実行に移していた。

そして今、老人は、聖王に忠誠を誓う、選ばれた聖堂の軍勢に、撤退を命じたのだった。

防衛拠点では、今しも、ドラクロワ軍との激しい戦いが繰り広げられている。

にもかかわらず、老人は、防衛拠点に残る聖法軍を置き去りにし、兵数の三分の一近くに、撤退を命じたのだ。老人の周到な用意と、確実な伝令によって、何千何万もの軍勢が、

戦場から離脱する。残りの軍勢は、自分達が置き去りにされたなどと知りようもない。
味方を犠牲にした、撤退戦術——それが、聖王が老人に託した策だった。信頼出来る精鋭を戦場から離脱させ、後は全て見殺しにする。そして万全の態勢で敵を迎え撃つ。分裂する聖法軍にとって、もはやそれ以外に、ドラクロワ軍と拮抗する方法は無かった。
離脱した兵達は、一刻も早く聖都に集結すべく、疾風のごとく駆け抜けてゆく。その内の一団——数千の騎兵が疾駆していると、ふいに左右の森から異様なものが続々と現れた。猪に似た顔を持つ魔獣の群——腕に斧のごとき刃を生やした灰腕獣であった。その魔獣どもが行く手に躍り込み、腕の斧で、騎兵を馬ごとなぎ倒した。
慌てて魔獣を撃破しようとする騎兵に向かって、今度は森から、四翼の鳥の旗とともに、槍兵が雪崩れてきた。矢が降り注がれ、槍が襲いかかる。完全な待ち伏せだった。
騎兵は、機動力を奪われ、魔獣の群に迫られ、たちまち恐慌に陥った。そのとき——
ずどん！　森が揺れ動くかのような音が、魔獣どもの背後で響き渡った。
魔獣どもが、猛烈な唸り声を上げて振り返る。騎兵や、攻め寄せる槍兵までもが、道の真ん中で、大きなシャベルを突き立てる、一人の男の姿に、ぽかんとなった。
「ジーク・ヴァールハイトが解き放つ！」
男が叫んだ。にわかにその手に握られたシャベルに、白熱する雷花が咲き乱れた。

シャベルが水銀のように溶けて散り、中から現れた剣を、男――ジークが、握りしめる。
水銀の輝きが、両手に剣を握る人型のトカゲのごとき凄魔と化した。数は十六体。かっと牙を剝き、美味な獲物とばかりに魔獣に殺到し、閃きしか見えぬ迅さで剣を振るった。
魔獣どもを斬り屠る凄魔達の背後で、ジークは、更に雷花をまとう左手を地面に叩きつけた。人とエビを混ぜ合わせたような尖魔が横隊を組んで現れ、腹から生やす巨大な弩弓から尖った鉄片を撃ち放ち、槍兵達を、ばたばたとなぎ倒す。
「黒い騎士が現れたぞっ！　増殖器を出せっ！　三体とも全部だっ！」
兵が叫んだ――刹那、立て続けに轟音が起こり、増殖器が二つ、いきなり荷台の上で吹き飛んだ。愕然となる兵達に、アーシアが走り寄せた。両手の銀銃を撃ちまくり、木々を粉砕し、軍旗を撃ち抜く。兵達がその破壊力の凄まじさに慌てて陣を乱した。
一方、道の反対側の森では、金の矢が、木々を避け、あり得ぬ軌道を見せてじぐざぐに迅り、兵達の運ぶ増殖器を貫いた。木陰から、肩にアリスハートを乗せたノヴィアが現れ、
「沢山の矢が……見えます」
言うや、百本近い矢が飛来した。まさか一人の少女が現した幻視の矢だとは思わぬ兵達は、新たな軍勢が来たと思い狼狽した。それを今度は騎兵が攻め立て、瞬く間に撃滅する。
「黒き騎士……〈招く者〉――ただ一人の、軍団……フォード様の仰有った通りだ」

騎兵の一人が、賛嘆の顔でジークに馬を寄せる。ジークは鋭く、言った。
「急げ。ドラクロワは、既に聖王の策を読んでいる。フォード卿に注意しろと伝えろ」
すると騎兵は、馬にも乗らぬジークが、彼らの長であるかのように、敬礼した。
「我ら聖堂騎士団、至急、聖都に帰還します。貴方は――」
「俺は、この辺りの魔獣を全滅させてから、聖都に向かう。行け」
言うや、騎兵達が次々にジークに敬礼し、再び奔流となって疾駆し去る。
「アーシア。生き残った馬に乗って東に進み、増殖器を破壊してくれ」
「良いけど……私一人で?」
「こ、こいつらと一緒に行け。みんな馬より速く走れる」
ジークが顎をしゃくる。十六体の、血まみれの凄魔達が、一斉にアーシアを向いた。
「心配するな。これでも、みんな昔は、気の好いヤツらだった……」
目を点にして凍りつくアーシアに、なんとジークはそんなことを言った。
そこへ、兵馬が去って、ようやく道を渡ってきたノヴィアとアリスハートが来た。
「時間が無い。聖都への道を塞ぐ十三体の増殖器を、手分けして破壊する。ノヴィアはこの道を北東へ歩け。付近に三体ある。アーシアは四体だ。敵の伏兵に気を付けろ」
「十三って……。三とか四とか、狼男ってば、よくそんなこと分かるわねぇ」

目を丸くするアリスハートに、ジークは、剣で肩をとんとんと叩き、
「お前も、死の雷を乗り越え、王の試練を受ければ、分かるようになる」
「あ、あたしぃ？　無理だって、死んじゃうって」
「お前なら、あの試練を、簡単に乗り越えそうな気がしたんだが……」
「じょ、冗談言わないのぉっ。それより、ノヴィア一人で行くのぉ？」
「こいつらを、ノヴィアの配下に置く。ノヴィア、標的を見定め、掃討して来い」
ノヴィアは、はい、と素直にうなずき、尖魔達に向かって、ぺこりと頭を下げた。
すると百を超す尖魔達が、みな、ぺこっとノヴィアに向かって頭を下げるではないか。
一方、アーシアの周囲には、凄魔達が集まり、じっと言葉を待つような素振りでいる。
「うう……わ、分かったわよっ。みんなっ、私について来なさいっ」
銀銃を振りかざすや、凄魔達も剣を掲げ、咆吼を上げて流血の酸鼻を求めた。その凶悪さに涙目になりつつも、アーシアは口を引き結び、敢然と凄魔達を引き連れるのだった。
「増殖器を破壊したら道の分岐点に来い。お前達は西へ退避。俺は東の聖都へ行く」
「私も、聖都に行きます」
ノヴィアが屹然と言い、アーシアも、敵兵がつなぎっぱなしにしていた馬にまたがり、
「私もよ、ジーク。もし一人だけ行っても、馬で追いかけるわよ」

「うーん、危ないと思うんだけどなぁ……どうしても行くのぉ？」
珍しくアリスハートがジークを代弁した。だがアーシアもノヴィアも一歩も退かぬ。
なんと魔兵達まで、彼女達の味方をするように、こぞってジークの挙動を窺っていた。
「マグノリア大聖堂は不戦を表明し、〈銀の乙女〉は戦線から撤退した。お前達も――」
「戦いの広がりを防ぐための働きは許されているわ。今頃、大勢の〈銀の乙女〉が自分達の意志で聖都に残っているはずよ。〈銀の乙女〉を馬鹿にしないで、ジーク」
馬上のアーシアが、今や、凄魔達を完全に率いる形になって、ジークに反論する。
「私にだってまだ何か出来るはずよ。私、家族も仲間もみんな失って、里の秘密を教えられて……自分が何なのかさえ分からなくなってた。大事な銀銃の使い方さえ間違ってた」
胸に手を当て、切とした目でジークを見た。里が聖印をその胸に刻み込んだことも、兄の死も、激しい復讐の念も、今は心の底で綺麗に溶け、葬られている。大事なことは自分が何者であるべきか、手にした銀銃とともに、了解しているということだった。
「ドラクロワが何をしようとしてるのか、私には分からない。でも、起きてしまった戦いから逃げ出したくないし、この銀銃に、正しい使い道を……戦う力を持たない人達を、守らせてあげたい。そして出来ることなら、貴方を少しでも、助けたいの」
これほどまでに素直な言葉がアーシアの口から出てくることに、アリスハートが驚いて

目を丸くしていると、ノヴィアもまた、つとジークに身を寄せ、
「ジーク様は、昔、力を使いこなせず、目が塞がり盲目となっていた私に、見ることを―
―そのための勇気を、教えて下さいました。どうか、最後まで見守らせて下さい」
アーシアと同じように、参戦ではなく、己の戦いの決意を、表明していた。
「良いだろう。ただし……一つだけ、条件がある」
ジークが、ぼそっと言った。ノヴィアは、その条件を、はっきり理解しているように、
「はい、必ず守ります」
大きな声で返した。アーシアもまた、にっこり笑い、颯爽と銀銃を胸に当て、
「貴方に、私の墓を掘るような真似は、させないわ……ジーク」
まるで、騎士が王に忠誠を誓うかのように、言ったものだ。
ひゅん。ジークの剣尖が、鋭く宙を裂いた。
「一刻も早く増殖器を破壊しろ。聖都への道を開き、予定地点で合流する。行け！」
言下、アーシアとノヴィアのそれぞれが、託された魔兵を率い――出陣していった。

3　聖都死戦

聖都に戻った老人は、巨大な水晶の繭と化したクレア大聖堂に愕然となった。
「何だ、あれは!……ク、クレア大聖堂に、何が起こったのだ!」
聖王の安否を確かめようとするが、聖堂を守る壁門が内側から閉ざされ、中に入ることも出来ないという。予想外の事態に困惑する老人を、無理やり立ち返らせる報告が飛んだ。なんと敵勢が迫っているという。防衛拠点が陥ちたのではない。ドラクロワ軍が二手に分かれ、一方は防衛拠点を侵攻し、もう一方は迂回して聖都に進行したのだ。
「聖王様の策が無ければ、とっくに攻め込まれていたか……」
そこへ、離脱した兵の進路に、敵の伏兵あり、との報告が来た。なんと、聖王の策をドラクロワが読んだのだ。離脱した兵の合流が遅れれば、門を閉ざし、間に合わなかった者達をも見殺しにするしかない。老人は、咄嗟に、その光景を覚悟したが、
「黒き騎士だ!　黒き騎士が、我らのために、聖都への道を開いて下さっている!」
到着した騎士達が叫ぶや、老人は思わず、涙を零しかけた。あのジークが聖王の策を理解し、戦ってくれている。そう思うだけで老人の身に、気力がみなぎった。

「黒き騎士よ！　我にも……我にもこの苦難を乗り越える勇気を与えたまえ！」

防衛拠点では、各所の砦で四翼の鳥の軍旗が揚がり、聖法軍の残党が、魔獣どもに貪り食われ、ドラクロワ軍に掃討されていた。各部隊から勝報が届き、防衛拠点の崩壊を確信したドラクロワは、すぐさま聖都に先行する軍勢と合流する旨を告げた。

「これより、聖都を陥とす！」

ドラクロワが宣言するや、ひしめく軍勢が、血まみれの武器を掲げて斉唱した。軍勢が、怒濤の進軍を開始し、その背後には、破壊された建物と、積み重なる屍ばかりが残された。

アーシアは鋭い耳で、ノヴィアはその視覚で、伏兵を探り出した。そしてアーシアは馬を駆って猛然と、ノヴィアは忍び寄る影のように、それぞれ魔兵を率いて伏兵に迫る。目的は増殖器の破壊だが、相手は少数で敵地に潜入する命知らずの兵達である。威嚇など通用しない者が大勢いた。銀銃が轟き、凄魔が殺戮の剣舞を見せ、幻視の矢が迅り、尖魔がなぎ払っても、絶望的な雄叫びを上げて向かって来る。時に魔獣が招き出されたが、増殖器さえ破壊すれば、歩兵など魔兵の敵ではない。

「ひぇええええ、なんで……なんで、みんな、逃げないのよぉ……死にたいのぉぉ」

アリスハートが泣きわめく。ノヴィアは、顔を青ざめさせながら、無謀に突撃しては尖魔になぎ倒される兵達の死を見届けた。アーシアも敵を脅して追い払いつつ、向かってくる者達には容赦なく凄魔を放って屠らせ、そしてまた、自分も敵を撃った。

単純に、やらねばやられるというものではない。まさしく狂気と人間性の衝突だった。

ドラクロワ軍の命知らずの伏兵は、都市を蹂躙し、兵も市民も区別せず老人子供も虐殺してきた者達である。ぎらぎらした快楽に陥り、血に酔い続ける事が彼らの救いだった。

戦争は、万能ではない人間の、原初からの行いである。みなが違う意志や感情を剝き出しにして戦うのだ。そこで自分の正当性が崩れれば、他の無数の意志や感情に心を引き裂かれ、修羅の狂気をやどすか、強い自己不信から自分を殺すしかなくなる。

そして虐殺こそ、人間の獣性であり、自らの正当性を崩し、狂気への扉を開く鍵だった。

凄魔に斬り屠られ、尖魔に撃ち倒される彼らは、もはや己の狂気に殺されたに等しい。

アーシアもノヴィアも必死だった。恐怖や悲憤で、自分が必要以上に猛然とならぬよう、凜として戦う。そして、それが出来なければ——殺戮の光景に狂うのは、自分達だった。

やがて、アーシアもノヴィアも、与えられた任務を、懸命に果たしていた。

兵馬の奔流が無事、聖都へ流れるのをよそに、二人とも決然として合流地点へ向かう途中で、互いに、ばったり出くわした。アーシアもノヴィアも黙って見つめ合い——ほっと

微笑み合った。まるで何年も旅した末に、再会したような笑顔だった。魔兵を率い、敵を倒してなお、互いに変わらぬ相手と自分を見いだした、痛烈な喜びがあった。
「急ごう。きっとジークは、もう合流地点にいるわ」
アーシアがノヴィアを馬上に誘う。アリスハートが言った。
「いくら狼男でも、こんなに早く来てるかなぁ。あのぐねぐねをノヴィアが三つ、アーシアさんが四つ潰してる間に、狼男は六つだよ。幾ら軍団を招き出しても、無理よぉ」
だがアーシアもノヴィアも、微笑している。馬の後ろを、百を超す魔兵達が走ってついてくる。間もなく、悠然と立つジークの姿が見え、アリスハートはつくづく呆れ返った。
「二人とも来たか。案外、早かったな」
ジークは、至って余裕である。だがノヴィアが目敏く、出血するその左腕を見やった。
「ジーク様……お腕を。私の聖性で、宥めます」
ジークの左腕に、馬上のノヴィアが触れ、凄まじい力がみなぎっている様に驚いた。
「まるで……火に触っているようです」
思わず顔色を窺うが、ジークに、苦しむ様子はない。一方、アーシアがその様子を眺め、
「ふぅん……。いけるんじゃない?」
不思議なことを言った。ジークとノヴィアが、何のことかと目を向ける。

「貴方だって、たまには騎士らしくしたいでしょう、ジーク？」
アーシアは、ふくみ笑いをしながら、言ったものだった。

離脱した軍勢を、ぎりぎりで集結し終え、聖都は、城門を閉ざした。
老人が呟く。そこへドラクロワ軍の第一波が襲いかかってきた。
「黒き騎士は、間に合わなんだか……」
兵の集結が間に合ったことを神とジークに感謝しつつ、老人が防備の指揮を執る。徹底守戦である。聖都に閉じこもり、今日の戦いには間に合わなかった辺境の軍勢の到着を待つ。そしてドラクロワ軍を、聖都の内と外から挟み撃つ。それまで守りに守るのだ。
一方、ドラクロワ軍は一挙怒濤に攻め陥とす構えである。矢を放ち、石を落とし、煮えたぎった油をかけても怯みもせず、まるで殖えすぎたネズミの群のごとき猛攻だった。
だが、かつて歴史上、何度となく、こういう戦いはあった。
聖都は、八重の城壁に守られた、巨大な城塞都市である。決して一朝一夕で破れるものではない。壁一つ越えるだけでも、何日もかかるはずだった。
そんな聖法軍側の信頼を、やがて、根こそぎ揺るがすようなものが、現れた。
防衛拠点を突破したドラクロワ軍のもう一方の軍勢とともに、何十頭もの八本脚の馬ー

――紅角獣が、城壁に迫り、一斉に紅い角を輝かせ、火球を放ったのだ。爆音が次々に轟き、
「第一壁の西面、は、破損！　い、いえ……損壊！」
軍令官が、悲鳴のような声を上げた。老人は、咄嗟に言葉もなかった。
壁の崩壊に驚く間もなく、魔獣とドラクロワ軍が侵入してきた。
聖法軍の精鋭は、市民を守るべく奮戦したが、ドラクロワ軍は巨大な楔と化して突撃し、建物を焼き払い、防護柵を乗り越え、瞬く間に第二壁に迫った。
間もなく、第二壁で、損壊数か所という悪夢のごとき報告が飛んだ。
老人は、悔しさに歯を食いしばって馬を駆りながら、敵の侵攻地点へ向かう所だった。
「第三壁からは簡単には破れぬ！　侵入した者達を、壁の上と左右から押し潰せ！」
事実、第三壁から内側の壁は、聖印を刻まれた柱によって石と鉄の堅固さを何倍にも強めている。紅角獣の火球をもってしても破壊はならず、ドラクロワ軍は勢い、門をこじ開けようと群がった。そこへ左右から聖法軍が攻め、魔獣を油と酸で食い止める。
「増殖器を発動させよ！　透影獣を放て！」
そのとき、戦場に馬を躍り込ませたドラクロワが、苛烈に命じた。
すぐさま、門のそばで肉色の柱が稲妻を迸らせ――そして、何かが宙を動いた。
壁をかさかさと音が走り、かと思うと、壁上の兵の頸が、急に血を噴いて倒れた。

その血だまりを、目に見えぬものが踏み、壁上の兵を次々に狩り殺してゆく。
門の守備が急に乱れた隙をつき、梯子を次々に立てかけ、ドラクロワ軍が殺到した。
ようやく老人が、第六壁に立って、ドラクロワ軍の侵攻をその目で見たとき、既に敵は、第四壁に迫ろうとするところであった。
「もはや一歩たりとも入れるな！　我らの後ろには百万の市民がおるのだ！」
老人が必死の形相で叫ぶ。だがそれを嘲笑うように、各所で増殖器が稲妻を発し、魔獣が都市中に溢れかえった。更には、何体もの増殖器が一か所に集められ、白熱する稲妻とともに一つの固まりと化すや、にわかに巨大なものが現れたのだった。
「兵を左右に分けて道を作れ！　竜脚獣を出す！」
ドラクロワの命令とともに、その巨大なものが轟然と立ち上がり、突進した。
それは、馬の下半身と、人の上半身を合わせたような魔獣であった。左腕から巨大な剣を生やし、青黒い岩のごとき体は甲冑を着た騎士を思わせ、矢も酸にも微動だにしない。
その巨大な剣が、城門に向かって突き込まれた。鉄の扉が一撃でへこみ、二撃目で鋲が弾け飛び、三撃目で剣先が突き破って、門を粉々に破壊した。
巨大な竜脚獣が、門に身をこすらせながら、ぬうっと入ってきた。ドラクロワ軍と魔獣の群が、殺戮の暴風雨となって侵攻し、聖都は、八つの壁の半分までを破られたのだった。

4　英霊達の炎

聖都に向かって、今、一騎の馬が駆けていた。正確には一騎ではなく、一頭の馬に、なんと三人の人間が乗っている。アーシアを先頭に、ジーク、ノヴィアの順である。ノヴィアの胸元に潜り込んだアリスハートを入れれば四人だった。もはや曲乗りといっていい。
「馬に乗るのは、六年ぶりだ」
ジークがぽつんと言った。アーシアとノヴィアの聖性が、ジークの強い堕気を中和し、馬を怯えさせないのだ。これを思いついたアーシアは、手綱を握りながら得意満面である。
「良い考えでしょ。ちょっと狭いし、馬もそんなに早く走れないけど、歩くより早いわ」
ジークは、風を切る感覚に目を細め、まんざらでもなさそうだ。
ノヴィアはといえば、ジークの腰に手を回し、かつてない密着に顔を真っ赤にしている。
そしてその後ろを、凄魔と尖魔が、走ってついて来るのだった。
「アーシア、道沿いに行かなくていい。お前の方向感覚で聖都へ向かえ」
「……私、そんなに、馬に乗るのが、上手くないんだけど」
ジークの突然の指示に、アーシアが困惑した。ジークは脇から右手を伸ばした。

「俺が、手綱を握る」
左手に剣を握ったまま、悠然と言った。アリスハートが目を丸くして、
「ちょっと、狼男……もしかして、浮かれてない？」
肩越しに振り返ったジークの口元に、あるかなしかの微笑が、かすかに浮かんでいた。
「乗馬は、昔から得意だった」
ノヴィアとアリスハートが絶句するのをよそに、ジークは前を向いて手綱を握った。
「方角を示せ。俺が、駆る」
アーシアを、その右腕で、抱きすくめる形になった。アーシアが、びくっとなって手綱を放し、ノヴィアに劣らぬほど頬にかっと血を昇らせ、わめいた。
「あ……あっちっ、進むべき道は、あっちよ」
ジークが手綱を繰り、馬腹を蹴った。馬に進路を変えさせ、たちまち道を外れ、木々の間に突入した。なだらかな丘を登っていたのは、ほんの僅かな間である。
「ちょ……そんな、急に、触んないでよっ。ジークっ」
アーシアの焦ったような声が、にわかに悲鳴に変わった。ほとんど絶叫だった。
崖が現れるや、ジークが、何の躊躇も無く馬を躍り込ませたのだ。アーシアとノヴィアとアリスハートの甲高い悲鳴が、宙に響き渡り、風に乗って長く尾を引いた。

ジークは絶妙に手綱をさばき、馬を駆り立て、挑ませ、僅かな足場を確保させ、崖下の川に飛び込ませた。盛大な水しぶきと、難路を踏破した馬の歓喜のいななきが上がった。
「良い馬だ……。アーシア、道を示せ」
先頭で一番の恐怖を味わったアーシアが、馬首にしがみついたまま震える指で道を示す。
即座にジークは馬を駆り、まっしぐらに道を駆け抜けていった。

ドラクロワ軍は、ついに第五壁の門を撃ち破った。第六壁の上で声を振り絞って兵を駆り立てる老人のすぐ前に、竜脚獣がぬっと立ち、剣を振りかざす。老人が、叫んだ。
「殺すがいい！　聖法庁を怨むならば、わしを殺せ！　だが市民には手を出すな！　聞いておるか、ドラクロワ！　頼む、武器を持たぬ者を殺さんでくれ！」
叫びは虚しく争乱にかき消され、巨大な剣が振り下ろされるかに見えたそのとき、竜脚獣が動きを止め、地響きを立てて、あらぬ方を向いていた。
老人も、街路に現れた者の姿をみとめ——その総身に震えが走った。
ジークが、馬に乗って現れたのだ。ジークが聖都の南門に到着し、呼びかけるや、老人から言いつかっていた兵が、すぐに門を開いてくれたのである。
「うわーっ、でっかい、でっかい、でかすぎるってぇっ！」

アリスハートが、場違いなまでに明るいわめき声を上げた。

「こいつは、俺がやる。お前達は、増殖器を片づけろ」

言いつつ、ジークが馬を降りた。慌ててノヴィアも降りる。アリスハートがわめいた。

「ちょっと、無茶だって！　あの霧の谷の時よりもっとでかいよ、こいつっ！」

「雑魚だ。心配ない」

ジークの短い返答とともに、アーシアが颯爽と馬上で銀銃を抜き、ノヴィアは宝杖を握りしめた。その二人の女性を守るようにして、凄魔が円陣を、尖魔が方陣を組む。

ジークの剣尖が鋭く空を切った。それを合図に、アーシアとノヴィアがそれぞれ魔兵を率いて、荒れ狂う殺戮の嵐へと出陣してゆく。

竜脚獣が、ジークに向かって突進してきた。そのとき既にジークは雷花をまとう左手を地面に叩きつけている。魔獣の巨大な剣が振り下ろされ、ジークを叩き潰すかに見えた刹那、稲妻から現れた巌魔達が、真っ向から巨大な剣をつかみ止めたではないか。

更に、巌魔達が一斉に竜脚獣の脚の一つに取り付くや、その巨体を、横倒しに投げ転がしたのだった。竜脚獣が轟音を上げて横転し、壁の上の老人が悲鳴を上げた。

竜脚獣がすぐさま立ち上がり、暴れ狂った。その剣を縦横に振るって建物を破壊し、壁を砕き、周囲で動く者を区別無く叩き潰し、さすがの巌魔が弾き飛ばされる。

その竜脚獣の放つ猛烈な瘴気に呼応して、ジークの左腕に咲き乱れる雷花が、にわかに一変した。紅い、燃えるような稲妻が、左腕全体に満ち溢れたのだ。

「聖クレマチスよ、虐殺された何十万もの魂のために……この力、試させてもらうぞ」

ジークがかっと目を見開いた。紅い雷花をまとう左手を高く掲げ、

「ジーク・ヴァールハイトが招く！」

その手を地面に叩きつけるや、紅蓮の稲妻が猛然と噴き上がった。

「九刻星の連なりの下、神魔サナトスとなりて我が敵を鏖せ！」

稲妻の奔流から現れたものに、老人も両軍も、竜脚獣でさえも、驚愕に凍りついていた。

それは、全身に紅蓮の稲妻をまとう、青い巨人であった。背は竜脚獣の倍も高く、全身に金色に輝く紋様を浮かばせている。仮面のごとき顔には紅い二つの眼を持ち、鼻も唇も無く、剝き出しで並ぶ歯の一つ一つに、無数の罪の名が記されていた。

「ひぃえええ……な、な、なに、あのでかさぁ。雲まで届くんじゃないのぉ」

アリスハートが文字通り仰天する。一方、ノヴィアとアーシアが、巨人の放つ凄まじいばかり鏖殺の意志に、ぞっと総毛立っていた。

竜脚獣が、自分よりも遥かに大きな巨人へ突進し、腕の剣を真っ向から突き込んだ。

その剣を、巨人が、両手でつかみとめた。竜脚獣が慌てて剣を引こうとするが、巨人は

離さない。それどころか、巨人が手に力をこめるや、剣が、根本から折れ砕けていた。

たちまち竜脚獣が悲鳴を上げて後ずさる。巨人は砕けた剣を、竜脚獣の脚に突き立て、地に縫い止めてしまった。竜脚獣が、都市中に響き渡るほどの絶叫を上げた。

巨人が、竜脚獣に顔を寄せ、口を開き、いきなり首元から食らっていた。その様を見る者は、もはや声さえない。頭部を丸ごと食われた竜脚獣の血が、雨のように降り注いだ。

「やれ——神魔よ。嘆きを込め、自らの弔いのために」

ジークが鋭く命じた。いまやジークもまた容赦の無い、怒りの眼差しになっている。

巨人は、竜脚獣の頭を噛み砕きながら、両手を組み、高々と掲げた。

そして組んだ拳を、鉄槌のごとく地面に叩きつけるや、大地に衝撃が走り、地中から紅蓮の稲妻が吹き荒れ、魔獣やドラクロワ軍を、一挙に真下から撃ち滅ぼしたのだった。

さすがのドラクロワ軍がたじろぐ一方、聖法軍も、殺戮の凄まじさに呆然となっている。

「攻め返せ！　この機を逃すな！」

ジークの叫びに、老人も聖法軍も慌てて我に返り、ドラクロワ軍の撃退に転じた。そのとき——壁に凄まじい衝撃が走り、老人が愕然と倒れ込む。軍令官が絶叫を上げた。

「せ、西門を……黒い蛇のようなものが、突破しました！　ド……ドラクロワです！」

老人が瞠目した。ジークはすぐさま、魔兵を率いて、西門へ向かっている。竜脚獣はいわば囮だったのだ。ジークや老人が囮に引きつけられている内に、ドラクロワは、自ら軍を率いて、別の場所から都市の中枢へと侵攻したのだった。

西門では、黒い稲妻そのものである蛇が、聖法軍を蹴散らしていた。

イザーク書にやどる、英霊達の化身——その九頭の蛇が招き出されている中心に、ドラクロワがいるはずだった。ジークは戦いの烈気をみなぎらせて駆け寄せた。

ふいに、蛇が一頭、猛然と宙を奔って襲いかかってきた。たちまちジークの周囲で、巌魔が、黒い稲妻に灼かれて砕け散った。ジークが立ち止まり、黒い稲妻が浴びせられるのを静かに受け入れた。試練を越えた今、もはや稲妻がジークを灼くことはなかった。

巌魔を滅ぼしたその蛇を、巨人がゆっくりとつかんだ。黒い稲妻が吹き荒れるが、巨人はジークと同じように、微動だにしない。

「英霊達の魂——何百年もの間、外典にやどりつづけた束縛、解き放ってやれ」

ジークが凄烈に命じた。巨人が、蛇の胴をつかみ、おもむろに左右に引き千切った。

心に直接響く絶叫が起こり、蛇の身が稲妻の断片となって雲散霧消した。

かっと大気に怒りが満ちた。門の周囲で荒れ狂っていた残り八頭の蛇が、鎌首をもたげ、一斉に、飛びかかってきた。巨人の全身を、稲妻の蛇が牙を立て、絡みつく。

怒れる稲妻が、辺り一帯に吹き荒れ、ジークの行方を遮る。
「試練は越えた！　聖クレマチスの遺志さえ、乗り越えるために！」
ジークは剣を一閃して稲妻を振り払い、再び疾走している。
「ドラクロワ！」
叫びを上げて稲妻の嵐の中心に躍り込んだそこに――別のものが、ジークを待っていた。
かつての絆を分かち、ジークの長い長い旅の始まりを告げた書――
それが、打ち砕かれた西門の前で、頁と頁の間から激しく稲妻を迸らせながら宙に浮き、開かれた頁をジークに向けていたのである。
ジークは、その頁に記された、聖印の紋様を、静かに見つめた。それが、〈刻の竜頭〉の秘儀の最初の段階――〈竜骸〉を発動させるものであることは、すぐに分かった。
ジークから、ドラクロワという親友を奪い、シーラという女性を奪ったものが、今、目の前にあった。その書に向かって、ジークは静かに歩んだ。歩むうちに、その書に対する怒りが自分の中で溶けていった。悲しみが溶けていった。試練を越えた果てにあるものを、ただ無心で見つめ、ジークは、宙に浮かぶ書の前に立った。
「外典イザーク――」
静かに、その名を呼んだ。まるで古い知人を呼ぶようだった。

転瞬、透明な風のように、手にした聖咎の剣を凄烈に振り抜いていた。
外典イザーク書が、真横に両断され、噴き出す稲妻の中で苦悶に震えた。
それは、あたかも、なぜ自分を滅ぼすのか、と問うているようだった。自分こそが聖法庁の秘儀を司り、聖クレマチスの遺志をもたらすものであるというのに——と。
剣が、更に縦に迅った。書は十字に裂かれ、全ての頁がばらばらになって宙に舞った。
同時に、巨人が両手を組み、蛇の群へ打ち下ろしている。紅い稲妻が、蛇どもを引き裂くとともに、周囲に舞い乱れる無数の頁が、にわかに、黒い炎を上げて、燃え上がった。
「聖法庁の原理は、俺が葬る。眠れ……英霊達とともに」
ジークの周囲で、長い旅の始まりを告げた書が、黒い炎の吹雪と化し、消えていった。

5　死の至聖所

第六壁の門を破ったドラクロワ軍は、第七壁に迫りながら、建物に火を放ち、市民を標的にした獰猛な殺戮の喜びに狂い、見境なく剣を振るった。魔獣どもが殺到し、炎が広がる中、第七壁の門が破壊され、瞬く間に最後の壁へと押し寄せる。
聖法軍の苦闘も虚しく、ついに最後の壁の門が破壊された。ドラクロワを先頭に、兵達

が門の内側へ踏み入る。そしてそこに広がる水晶の森に、兵達が、ぽかんとなった。
刹那、水晶が目覚めた。入ってきた者達に向かって迅り、水晶に貫かれた者達が絶叫した。ただ一人、ドラクロワだけが水晶に狙われず、一部の魔獣だけをつれて歩んでゆく。
水晶は、爆発的な勢いで門から溢れ出し、誰彼かまわず刺し貫き、たちまち阿鼻叫喚の騒ぎとなった。水晶はドラクロワ軍も聖法軍も、まるで区別せずに襲いかかってくる。
そこへ突然、門の前で爆発が起こり、水晶を粉々に吹き飛ばした。ジークが、砲魔達――右腕に砲身を生やす魔兵を招き出し、水晶の群に向かって火球を浴びせかけたのだ。
その背後では、ドラクロワ軍や魔獣に対し、巨人が、紅い稲妻を放って撃滅している。
「いったい……クレア大聖堂に、何が起こったのだ」
老人が、馬に乗って駆けつけ、ジークの背に、すがるような声をかけた。
「外典の秘儀が成就しようとしている……。俺は、中に入ったドラクロワを追う」
ジークはそう言って、不安げな老人に、顎をしゃくってみせた。
「こいつらを、あんたの配下に置く。俺がこの門を閉めたら、絶対に開くな」
うっそりと振り向く砲魔達に、恐れおののきつつも、老人は、なんとか承知した。
「頼んだぞ……。ドラクロワに対抗できる者は、もはやお主しかおらぬのだ……」
そこへ馬上のアーシアが、凄魔達を率いて駆けつけてきた。ついで、ノヴィアがアリス

ハートを胸に抱き、尖魔達を従えてやって来る。
「お前達は、フォード卿と共に、敵を撃退しろ。俺は、ドラクロワと決着をつける」
ジークが言うや、途端にアーシアとノヴィアが、悲痛な面持ちでジークを見つめた。
「……あんたは絶対、ドラクロワよりも強いよ、ジーク」
半ば背を向けかけたジークに、そう声をかけたのは、アリスハートだった。
「ドラクロワって人は、幻を使ったり仮面をかぶったり、色々な人に化けるじゃん。それって自分を消しちゃうってことだよ。そんな人に、あんたが負けるはずないよぉ」
ジークが、静かに見返すのへ、アリスハートは眉をよせ、唇を尖らせ、言った。
「あんたは一生懸命あんたでいいいようとして、色々、乗り越えてきた人だよ。だから最後まで乗り越えるのやめちゃ駄目だよぉ、ジーク。絶対、勝てるから」
ふと、ジークが、そこで、奇妙な表情になった。
「死の雷も、王の試練も……お前なら、簡単に乗り越えられたろうな」
それはアリスハートの目に奇妙と見えただけで、実際は微笑ったのかもしれなかった。
「……行って、ジーク。後は任せて。貴方が帰ってくるまでに全部、片づけておくわ」
アーシアが、決然と言った。ノヴィアもひたとジークを見つめ、
「見守っております、ジーク様。どんなことがあっても見守っております」

ジークはうなずき、白外套を翻した。水晶の生え広がりが砲火に堰き止められた一瞬の隙をつき、門の中へ風のように走り込んだ。その後を巨人が従い、その巨大な手が、抑えきれず大声でジークの名を叫ぶアーシアとノヴィアの目の前で、門を閉ざしていた。

門の内側に入った途端、水晶がぴたりと生長を止めた。ジークは咄嗟に剣を引いた。左手から血が零れたが、水晶はその血を吸わず、紅い雫が、表面を滑り落ちてゆく。

水晶が動いた。きしきしと音を立ててジークの周囲から離れ、頭上を覆ったのだ。

ジークが、驚きに目をみはった。水晶が回廊を造り出し、聖堂への道を示していた。

それればかりか、水晶を通して差し込む光が、何倍にも強く降り注ぐように感じられるや、見る間に左腕の出血が止まったではないか。ジークは、剣を握る手でその腕に触れ、

籠手の下で、腕に巻き付けた十字型の紋章の存在を、強く感じた。

「シーラ……」

回廊を見据え、駆け抜けた。ふと背後で、大量の赤黒い液体が降り注いだ。なんと、聖堂の上の巨大な繭から、幾つもの黒い水晶の刃が伸び、巨人の胸を貫いているではないか。

「俺以外……拒むつもりか」

ジークが呟く。同時に、巨人が右拳を激しく繭に叩きつけた。紅い稲妻が、黒い水晶を

打ち砕き、繭を崩壊させ、中から抜け殻と化した、あの四翼の怪物の体が、落下した。
巨大な水晶の骸が地に落ちて砕け散り、辺り一面に白い波濤のごとき破片をばらまいた。
続いて巨人が、どうっと膝をつく。その身から流れる赤黒い血を、水晶が吸うことはなかったが、巨人はすぐには立ち上がれないようであった。
ジークは巨人をそこで待機させ、真に単身となって、聖堂へ走り込んでいった。

水晶の咲き乱れる王座の間に、男が、長靴の底を高々と打ち鳴らした。
「来たか、〈三聖印〉の最後の一つを求めて。叛逆者――ヴィクトール・ドラクロワ」
聖王の声が、聖王の座から飛んだ。ドラクロワが、冷酷な笑みを浮かべ、無言で右手を翻し、漆黒の剣を現す。聖王もまた、立ち上がって同じように右手を翻した。するとその手に金の輝きが生じ、黄金の剣を化しめて握りしめ――鋭く、問うた。
「そなたは、自分の意志でここに来たか？　それとも神の囁きに導かれたか？」
ドラクロワは答えない。冷笑しつつも、両目に憤怒をやどし、聖王を見据えている。
「ドラクロワよ……神が囁くのは、人がそれを望むからだ。自分が何をしたか何をしようとしていたか、全てを忘れ、人はただ神の囁きに従い、恐怖も罪悪感も神に預ける……」
「霊神アズライールは、そうして貴様のように、聖法庁の秘儀にかかわる者を飼い慣らし

てきたのだ。そして人々を家畜のように増やしては争いによって死なせ、実った魂を刈り取らせてきた。聖クレマチスは、人々に豊饒の地を与えるために神を求めたが、やがて神の悪虐に気づき、神を倒すための秘儀を、外典に記したのだ」
「聖クレマチス自身が神を否定したというのか」
「そうだ、聖王よ。貴様ら聖法庁の者が、うすうす感づきながらも、常に目をつぶってきたことだ。私は、聖クレマチスの遺志と真実の果てに、私自身の意志で理想を実現する」
「ドラクロワよ……そなたもまた、囁かれているに過ぎぬ。我が神は、そう告げている。一度でも神の囁きを受ければ、心は支配され、全ては、神の囁きに導かれてゆく……」
聖王は、そう言いながら王座を降り、黄金の剣を構えた。
「黙れ、支配の揺りかごに眠る王よ！　その眠れる命、我が秘儀に捧げるがいい！」
今や同じ高さに立つ聖王へと、ドラクロワが、悽愴の眼差しで、迫っていった。
水晶が連なり生える聖堂の回廊を、走り抜けるジークの行く手で、何かが蠢いた。
ジークは足を止め、得体の知れぬ危機を察し、反射的に後方へ宙を跳んでいる。
途端に、それまでいた場所で水晶が砕け散った。着地と同時に、剣を横になぎ払うや、何もないはずの空間に火花が散り、鉄でも叩いたような感触が手に走っていた。

「……透影獣か」

周囲で蠢く目に見えぬものの正体を定めるや、すかさず、雷花をまとう左手を、回廊の床に叩きつけ、四つの巨きな爪を生やした甲魔の群を招き出している。

「乙女座の陣！」

剣をかざすジークの言下、甲魔が爪を展開し、一斉に青い輝きの壁を作り上げた。

魔獣が宙を疾り、甲魔に弾かれ、その姿が、一瞬、青い輝きの中に浮かび上がった。

巨大な蚤のような姿である。きっ、と声を上げ、退く魔獣へ、甲魔が追いすがる。相手に攻めさせ、位置を確かめるや、魔獣を抱きすくめるように包囲したのだ。

「押し潰せ」

ジークが鋭く命じ、甲魔が互いに近づき合った。逃げ場を失った魔獣どもは一体また一体と、青黒い液体を飛び散らせて圧潰し、透明化していた姿を現していった。

魔獣が全て潰れ、くずおれたそのときである。突然、また別のものが襲いかかっていた。

ジークに向かってではない。上下から生え伸びる水晶の刃が、光の盾ごと甲魔を次々に貫いたのだ。甲魔が嘆きの声を上げ、黒い液体と化し、ジークの影に染み込んでゆく。

「良いだろう……。決着を付けよう……ドラクロワ、シーラ……俺達だけで」

ジークは、鋭く行方を見据え、再び、走り出していた。

「これは聖法庁に対する私の叛逆ではない。聖法庁の原理に対する、人の叛逆と知れ！」
ドラクロワの苛烈な叫びは、激しい圧力となって、聖王の心身を圧迫するかに見えた。
迫り来るドラクロワの剣を、聖王が、辛くも打ち払い、しのぎ、そしてある一瞬――聖王が、かっと目を見開き、渾身の力を込め、剣尖を真っ直ぐドラクロワに突き込んだ。
一条の光となって迅る剣尖に、ドラクロワが、その左手をかざした。〈三聖印〉の、「原罪」と「破滅」のしるしの、二つまでもが、掌と甲に、刻まれた左手である。
その左手の掌に、触れるか触れないかというところで、剣尖が、ぴたりと止まった。目に見えぬ力が、みしみしと剣を圧し、聖王は、剣を引き戻すことさえ出来なくなった。
「試練を越えようとも、神の囁きを越えねば、ただ滅びゆき……また何度でも、神の原理が、この大陸を支配するのみ……このような事態は、かつて幾らでもあった……」
聖王が、言った。途端、その手の剣に亀裂が走った。刃身の半ばまでが砕け、無数のきらめきが飛び散る中、漆黒の刃が、聖王の胴を、存分になぎ払っていた。
「越えよ……」
聖王が呻くように最後の声を発した。体をほとんど両断され、水晶の咲く床に倒れた。
「眠れ、王よ。全てを解放し、神を滅ぼすために……その王のしるしを、もらう」

ドラクロワが、聖士の法衣を切り裂いた。聖王のその胸に、聖印が、刻まれている。漆黒の剣を消し、右手をかざした。すると、〈三聖印〉の最後の一つは、光の紋様となって浮き上がり、激しい音を立ててドラクロワの掌中へと吸い込まれていったのだった。

6　神の囁き

ジークが広間へ踏み込むや、静寂の中に、韻々と足音が響き渡った。

聖王の屍の向こうで——王座に座る男が、到着したジークを、冷厳と見つめている。

その聖王の座に向かって、ジークは真っ直ぐに歩んだ。そのジークの中で、かつて抱いた夢が、長い時を経て、ふいにそこに実現したかのような思いが、強く湧いていた。

ドラクロワが栄えある聖王の座につくとき——騎士となったジークが歩み寄り、永遠の忠誠を誓う。王座を棄てるために王座につき、剣を棄てるために剣を握る、その王と騎士を、争いを無くすことを願う女が、優しく見守っている。

それが、三人の絆が、最も深く結ばれる瞬間のはずだった。一人だけでは心の奥底の思いを実現出来なかった自分達が、互いに出会ったことで無限の可能性を得たのだ。三人が揃ったとき、世界は変わりゆくと信じた。理想の実現という苦難も、三人であれば乗り越

えられると信じた。いったい――どれだけの思いをかけて、抱いた夢だろうか。
夢の亡骸が胸によみがえり、そんなものでも、熱く胸を焦がすのかとジークは思った。
歩みゆくジークの目に、いつしか涙が浮かび、静かに頬を流れ落ちていった。
その足が、騎士が王の威光を讃え、ひざまずくべき場所で、止まった。
「王座を求めるのは、それを棄てるためだと、お前は言った」
ジークは、ひざまずく代わりに、王座に座る男へ、見果てぬ眼差しを向けている。
「全ての者を王にするとお前は言った。争いを無くすために敵をも救うとお前は言った」
その目を閉じ、そして開いた。涙は消え失せ、かつての夢もまた胸の奥に沈み込んだ。
「今のお前は、ただ滅ぼしているだけだ。人を、滅ぼしているだけだ」
「滅びの先に、新たな理想がある……ジーク。我々を支配する神が、命を持たぬ大いなる存在であれば、我々もまたそのように自分達を変え、神に匹敵すべきだ」
「命を否定して、俺達に、何が残る」
「生も死も超えた、永遠の存在になれる。命があり死があるせいで、人は、豊饒の地を奪い合い、特権を貪り、そして神の支配を求める……。人が、永遠の平和と平等を得るために……命から魂を解放する」
「戦場で、自分から命を絶つ兵達を、お前も大勢、見てきただろう。お前は、それと同じ

だ。心を失い、力の重さだけに頼り……そして命の重さに耐えられなくなった」
「戦場の自殺兵こそ、死もまた救いである証拠だ。禁じられた自殺者の埋葬を多く行ったお前なら分かるだろう。命という重力から解放されるとき、魂は遥か高みへ昇りゆく」
「俺とお前がこうして話しているのも命があるからだ。俺とお前が出会えたのも命があったからだ。俺という命は、お前という命のお陰で、救われたんだ」
「魂が出会ったのだ……ジーク。その命……秘儀に捧げ、永遠に語り合おう」
ドラクロワは、ゆっくりとその右手を掲げ、掌に刻まれた最後の聖印を明らかにした。
「お前という歯車を迎え、秘儀が成就する。お前の魂が〈刻の竜頭〉に捧げられるとき、〈招く者〉という名の灯火に招かれて、あらゆる魂がお前のもとに集まるのだ。今こそ、シーラが願った永遠の絆を実現し、世に理想をもたらすときだ、ジーク」
「俺はただお前の友として、お前を止めに来た。それがシーラが俺に願ったことだ。彼女ほど命を救おうとした者はいない。彼女の魂も、お前の秘儀も、俺が葬る」
「彼女の願いを問い、そして剣を向け合う……今の私達二人には、それもよかろう」
ドラクロワが、冷厳と王座から立ち上がり、右手を翻して漆黒の剣を現し、言った。
「ムルドア遺跡の、原罪の壁画の兄弟を覚えているか、ジーク。彼らは、神々の屍から生まれた、この世で最初の女を、奪い合っているのだそうだ。果たして彼らのうち、どちら

の子孫が人類の始まりとなったか……神話の謎を二人で解いてみるか、ジーク」

転瞬――ジークは、身を翻し、剣をすぐ横へと振るっている。にわかに宙に火花が乱れ散り、漆黒の剣を手に迫っていたドラクロワが現れ、素早く跳びしさるではないか。

「もう幻術は効かない……ドラクロワ。お前の行方を、もう決して見失いはしない」

鋭く告げるジークの背後で、王座にいたドラクロワの幻が、ふっと消えた。

ドラクロワが苛烈に笑んだ。水晶の花々を踏みしだき、二人、ただ刃の呼吸に合わせ、しずしずと歩を寄せた。十歩の隔たりを越え、九歩に入り、八歩の境を過ぎ、七歩の距離に至ったとき、にわかに二人の剣が、一方は銀の、他方は漆黒の、剣光を閃かせた。

刃と刃の間に激しく火花が散り、薄暗い広間を赤々と灯した。その輝きと剣撃の響みが消え去らぬ内に、二合三合と刃を衝撃き合わす。まるで二つの対となる影が乱舞するように、剣閃と火花が水晶の花園にきらめき、悽愴の音が鳴り響く。そしてひときわ高らかな音を立て、白外套を翻し、青ざめたマントを舞わせ、互いに再び距離を取ったとき――

突然、水晶の柱が、二人を遮るかのように幾重にも伸び、ジークとドラクロワに更に距離を取らせたのだった。水晶が生えたのは一か所ではなかった。広間中――いや聖堂中で生長し、床を穿ち、壁を崩し、伸び広がってゆく。

「秘儀が成就を迎えようとしている……。〈竜骸〉と〈竜精〉が融合して〈竜体〉となり



……それが〈竜繭〉と化して、〈竜人〉を降臨させ――〈竜界〉を現す……」
轟音を上げて、広間の天井が崩れ落ちてきた。ジークが身を転じてそれを避け、
「〈刻の竜頭〉の真の姿が現れるぞ！　貴様が彼女を殺めた場所だ――ジーク！」
そう叫ぶドラクロワの姿が、倒れ来る瓦礫の向こうに隠れ去った。崩壊が収まったとき、ジークは瓦礫の上で息をのみ、水晶によって床に穿たれた、大きな穴を見つめていた。
「聖櫃の間……」
途端、手の中で、聖咎の剣が、にわかに重くなった。手が、力をこめてその重みを握りしめた。ジークは、歯を食いしばり、暗い深淵へと身を躍らせた。

水晶の柱を伝って穴を降り、ジークは、しんと冷えた碧の石の床に、着地した。
回廊であった。石が、碧の光を放ち、仄かに辺りを照らしている。回廊を進み、広間に出ると、澄んだ水の薫りがした。広間の中央に、泉が掘り抜かれているのだ。
その広間こそ、聖櫃の間と呼ばれる、代々の聖王の廟墓であった。聖水がたたえられた泉に、棺が沈められているのだ。泉の中央には、聖クレマチスの棺――すなわち聖櫃が沈んでいる。そしてそれを中心に、十二個の、代々の聖王の棺が囲み、安置されていた。
そして、もう一つ――何の装飾もない棺が、中央からやや離れた場所に沈められ、天井

から伸びた巨大な水晶の柱が、棺を暴くように、幾重にも突き刺さっているのだった。
その有様に、ジークは、悲しみが肺腑に溢れたように深く吐息した。
「シーラの墓を暴いて……棺を、こんな所に、運んでいたのか」
長靴の音が広間に鳴り響いた。ドラクロワが泉の縁に立ち、冷厳と微笑していた。
「聖水によって、遺体を生前の姿のままとどめる聖葬……聖王にしか許されぬ弔いだ。今日という日まで、彼女は美しいまま、ここで眠り続けていた……」
すっと漆黒の剣を掲げ、その柄を、両手で握りしめた。両手に刻まれた三つの聖印の輝きが、漆黒の剣に写し込まれ、刃の上で、一つに重なり合ってゆく。
「〈三聖印〉が一つとなって聖櫃を開く鍵となり……神を食らう」
ジークの左腕が、漆黒の剣に反応し、紅い輝きを帯びる。そのとき更に、泉の底の聖櫃が、激しく鳴動していた。泉が激しく波立ち、ジークを得体の知れない戦慄が襲った。
「聖葬とは、そもそも聖クレマチスが、神を自分ごと聖櫃に封印するためのものだ」
だが神は、封印されてなお多くの者に囁きかけて争乱を起こさせ、大陸中に存在する聖印を通して人の魂の力を貪り続けた——そう告げるドラクロワの剣が、突如、鳴動した。
「〈三聖印〉とは、力の水脈を逆転させ、神を食らう、〈刻の竜頭〉の牙だ！」
ドラクロワが高らかに告げた。そのときである。ジークの中で、急激に膨れ上がるもの

があった。それは疑問だった。なぜ、神は自分達を潰そうとしたのか。そしてまたそれは答えだった。自分達が神に囁かれたものの答え——あの鳥が自分に教えてくれた真実が。
それらの疑問と答えが一つのものとなって、恐るべき危機感と化し、ジークの胸中で爆発した。動いた。体が勝手にドラクロワに向かって走り出していた。剣技には使わぬはずの左手を剣の柄に添え、握りしめた。凄まじい堕気が剣に伝わり、剣の聖印が、みしみしと形を変えてゆく。刃に仄白い炎のごとき輝きが浮かび、かつてない力で斬り込んだ。
とてつもない音が響き渡り、衝撃がジークの全身を貫いた。渾身を込めて振り下ろした剣が、漆黒の剣に、激烈に弾き返されたのだ。漆黒の刃に、黄金色の聖印が輝き、ものの見事に、剣風が、ジークの腹をなぎ払っていた。
ジークが迅速に跳び退る。腹を、鎧ごと斬り割られ、どっと血が溢れ出した。急激に力が抜け、剣を杖にして膝をつくのをこらえた。銀剣の聖印は今なお、形を変えゆき、剣全体が、これまでにない重さを生じ、構えることも出来なかった。
ドラクロワが、更に迫り、無造作に剣を振り下ろした。咄嗟に左腕の籠手で受けるや、凄まじい衝撃が来た。籠手が、絶望的な音とともに亀裂を走らせ、粉々に砕け散った。
苦痛に呻きながらも、ジークは、力を振り絞って身を翻し、転げながら退いている。
ドラクロワも追わなかった。ジークが、震えながらなお立つ様を、冷厳と眺めている。

がらん。音を立てて籠手の破片が、ジークの腕から落ちた。籠手の下で、腕に巻いていた紋章がこぼれ落ち、ジークの左手が、無意識に、その紋章を握った。
ふいに、ジークが目を見開いた。紋章から、かすかな聖性が放たれるのを感じていた。
「お前が、命を否定するのは……お前が、神に囁かれたからだ……ドラクロワ」
そのジークの傷から、血が引いてゆく。まるで握りしめた紋章が、傷を癒すようだった。
そしてその紋章を通して、ジークは、一つの答えが、真実であることを、確信していた。
「シーラだ……。この場所でシーラが死んだとき……俺達は、神に囁かれた」
その右手では、剣が、徐々に聖印の形を整え、新たな貌を現そうとしている。
「そう。お前が……囁かれたんだ、ドラクロワ。俺は——シーラに守られていた」
ドラクロワが、憤怒の光を目にやどし、ジークを睨み据えた。
「この期に及んで、戯れ言をほざくかっ、ジーク！」
ドラクロワが叫び、剣尖を構え、迫った。そのとき、満身創痍となって身動きも出来ぬかに見えたジークが銀剣を素早く持ち直し、ドラクロワと同じ構えで走ったではないか。
互いに左手をかざし合いながら剣を突き込んだ。一方の左手が激しく火花を散らして剣尖を見事に止めた。他方の左手は凄絶な力のみなぎる剣尖に、激しく貫かれた。
ドラクロワが、驚愕に目をみはった。その左手が銀剣に貫かれたのだ。しかもジークの、

籠手を失ったはずの、素肌の左手が、漆黒の剣を受け止めているではないか。
いや、正しくは、それはジークの手ではない。ジークが手にした、十字型の紋章である。
「〈癒す者〉……」
ドラクロワが、紋章に刻まれた称号をみとめ、咄嗟に口にしたとき――
「シーラを殺したのは、俺じゃない」
ジークが、紋章の向こうで、鋭く、告げた。
「お前なんだ……ドラクロワ」

ドラクロワが、弾かれたように退いた。剣の切っ尖が左手から抜け、夥しい鮮血が、宙に弧を描き、床にしたたった。刹那、十字型の紋章から、にわかに聖性が放たれ、ジークとドラクロワの脳裏に、い、い、い、かつての光景を激しく呼び覚ましていた。
かつて――
ドラクロワが、この聖櫃の間で、初めて外典を手にしたとき。漆黒の稲妻が吹き荒れる中、ジークは、ドラクロワが手にした聖咎の剣を、辛くも弾き落とした。そしてジークが、剣を取り戻したと思った途端――ドラクロワがぶつかってきたのだ。
そこでジークは、ドラクロワを跳ねのけながらも、瘴気に冒され、意識がもうろうとし、

再び、剣を取り落としていた。その剣を、ドラクロワが、拾った。
「お前の置き手紙を読んだとき、シーラは、お前が去ることを悲しんだのではない」
瘴気に冒され、激しい怒りと悲しみのしたたる眼差しで、ドラクロワは、言った。
「シーラは、お前に置いて行かれたことが、悲しかったのだ……」
ジークが目をみはった。ドラクロワの顔が、激しい悲憤に、歪んでいた。
「お前もシーラも、所詮、私のもとを去る……みな、私を置いて、去っていく。かつて私が、ラクロワ聖堂を守り、裏切った者達を許したにもかかわらず、みな去っていったように……。だがお前だけは許せない。お前が、シーラを連れて去ることだけは……」
俺はもう、どこへも行きはしない——ジークが叫んだ。同時にドラクロワが振るった剣が迫り、呆然とするジークの胸に突き込まれるかに見えた。そのとき、ジークの目の前に、蜂蜜色の髪が視界いっぱいに広がった。走り込んできた女が、両手を広げてドラクロワに向かって立ち塞がり、その、悲憤のままに振るわれた剣に、貫かれたのだ。
「お願い——」
女は、言った。剣を突き込んだドラクロワの目を、真っ直ぐに見つめていた。
ドラクロワは、咄嗟に、女の身から剣を引き抜いた。そのまま、女の背後にいるジークへと、剣を振りかざそうとしたのである。いつか去るのならば、二人とも、ここで消えて

しまえばいい。自分の意志で断ち切れるのなら、いっそその方が――
　そしてその瞬間、女の身から聖性が放たれ、瘴気を吹き飛ばしたのだ。ジークは倒れ伏し、ドラクロワは剣を取り落とし、激しい目眩と頭痛に、ひざまずいて呻いた。
「また三人で――」
　女の掠れ声が、再び、ドラクロワに顔を上げさせた。なんと女はまだそこに立ち、胸から血を溢れさせ、こちらを見つめていた。その切々とした眼差しが、ドラクロワに恐るべき過ちを悟らせた。女はただ絆を求めていた。決して去ろうとはせず、むしろこの女が、崩壊しかけていた絆を強く結び止めていたのだ。ドラクロワが言葉にならぬ声を上げた。
　女の身がくずおれ、慌てて抱きとめた。女の血が手も膝もたちまち濡らしてゆき、
（お前ではない――）
　ふいに、ドラクロワの脳裏に、囁きが、響いた。
（その女を殺したのは、お前ではない）
　悲痛にわななくドラクロワの目が、強い希望の光をやどしたとき、心が、脳裏に囁く声の支配を、完全に受け入れていた。瘴気が再びドラクロワの身に流れ込み、
「ジークか……」
　ぎらぎらとした光を、その両目が、放った。

「ジークが、殺したのか……」

女の亡骸を抱きながら、ドラクロワが呟いた。そうだ――と脳裏に囁く声は、言った。

ドラクロワが、獣じみた呻き声を零しながら、よろめいた。

ふいに、その身から、激しい瘴気が噴き出した。以前――クスカで、アーシアが撃った際に、ドラクロワの身から噴き出した瘴気の理由を、ジークは今、完全に理解していた。

霊神アズライールが、瘴気を通して、ドラクロワの心を冒していたのだ。そしてまたジークもその瘴気を通して、ドラクロワの言葉に、呪縛されてしまっていたのだ。

ドラクロワが、ジークを見た。白皙たる顔が、耐え難い悲痛に、歪みきっている。

「シーラが……死んでしまった」

まるで、たった今、彼女が死んでしまったような口振りだった。

「私が……彼女を、殺してしまった……」

慟哭の声音だった。一滴として涙さえ出ぬ、絶望的な悲しみがドラクロワを襲っていた。

貫かれた血まみれの左手を、震えながら漆黒の剣の柄へ添え――聖櫃を、見た。

そのドラクロワの前に、ジークが、静かな面持ちで、立ちはだかった。

「よせ、ドラクロワ……」

「神が、私に彼女を殺させたのだ。私が支配されやすくなるよう、神が囁いたのだ。いずれ去ってゆく者ならば殺せと……そしてその後で、私は殺していないと囁いたのだ」

にわかに、慟哭の顔が、凄まじい憤怒の色を帯びた。

「これは私の、神に対する復讐だ！　止めるなジーク！」

叫び狂うドラクロワを、ジークが剣を一閃させて退かせる。ドラクロワは、かっと目を見開いて、素早く脇へ跳び、転瞬、その漆黒の剣を、空を焦がす勢いで投げ放っていた。

咄嗟に、ジークが打ち弾こうとして、剣を振るうが、虚しく空を切った。

「神を食らえ！　〈三聖印〉――〈刻の竜頭〉の牙よ！」

漆黒の剣が、黄金色の聖印の輝きを帯びて真っ直ぐに宙を迅り、泉の底に沈む聖櫃を貫いた。巨大な水柱が轟然と上がる様を、ジークが愕然と見つめた。剣を受けた聖櫃が光り輝くや、粉々に砕け散ったのだ。激しい水しぶきとともに、たちまち辺りに瘴気が漂い――黄金色の屍衣に身を包んだ、一人の男が、水底から現れていた。

男の傍らには、漆黒の剣が、宙に、浮かんでいる。

男が、濡れた長い黒髪を垂らし、青ざめた顔を上げ、水色の目を開いた。

聖法庁の歴史が始まったときから、そこに眠っていた男――神をやどすことで大陸に聖印をもたらし、聖法庁の祖となった聖クレマチスその人であった。

その聖クレマチスの肉体で、止まっていた時が、動き出した。瞬く間に、肉も骨も風化し、崩れ去ってゆく。かと思うと、いきなりその体が木っ端微塵に吹き飛んだ。体内にやどっていたものが猛然と躍り出し、放たれたのだ。その、聖クレマチスの肉体を打ち砕いて放たれたものが、宙に浮かぶ漆黒の剣へと怒濤のごとき勢いで吸い込まれてゆき――今度は、巨大な水晶の柱に、ぴしりと亀裂が生じ、爆発したように砕け散っていた。
辺り一面、透明な水晶の破片が舞い散る中、すっと、白い手が伸びた。
細い、白花石細工のような指が、宙に浮く漆黒の剣の柄に絡まり――握ったのである。
水晶の雨の降る中、女が、剣を手に、まるで幽明の存在のように水面に立っていた。
「シーラ……」
ジークが、呆然と、その女の名を、口にした。

女が、水面に波紋を残し、歩み来た。頭の後ろで束ねた長い蜂蜜色の髪、ほっそりとしたおもて、黒い葬衣に、〈銀の乙女〉の紋章が記された白い飾布をまとっている。その二つの翡翠の目は優しく透徹として、目に映るもの全てを清め、癒すように思われた。
女が、水面から床へと、濡れた靴を運び、ドラクロワの前に立った。
輝くばかりの微笑みを浮かべて、ドラクロワを見つめている。

ドラクロワが、歓喜と――哀切に震える手で、女の頬に、触れようとしたとき。
女が、優しいとさえいえる動作で、ドラクロワの胸に、剣を突き込んでいた。
ドラクロワの背で、マントを破って生える漆黒の刃に、ジークが愕然と言葉にならぬ声を迸らせた。咄嗟に駆け寄り、女に斬りかかっていた。
女が、ジークの剣をよけ、跳んだ。いや――飛んだ。ドラクロワの胸から剣を引き抜きながら、鳥のように後方へ宙を舞い、ふわりと、再び水面の上に立ったのだ。
どっ、とドラクロワが膝を突いた。傷が血潮を噴き出し、みるみる顔が青ざめ、
「私は、〈刻の竜頭〉に――シーラに、自分の命を捧げることを恐れはしない……」
だが、差し伸べようとするジークの手を、強い意志を込めて振り払っている。
「俺には、あれが、シーラには見えない」
ジークが、押し殺した声で、言った。そのとき、女が、唇を、そっと開き、
「ドラクロワ……」
呼んだ。二度と聞くはずがないと思っていた声だった。
「シーラ……」
ドラクロワが、少年が泣くような顔になった。膝を震わせ、立とうとした。途端に呼吸が乱れ、大きく胸が膨み、大量の血を吐き出した。ジークが悲痛な顔でその身を支えた。

「ジークよ……私を……シーラのもとに、つれていってくれ。そして、ともに……」
ドラクロワが、言った。そのとき、女の微笑が、みるみる凄惨なものとなり、
《シーラではない――》
かつて聞いたこともない、男とも、女ともつかぬ幾重にも響く濁声で――それが言った。
《アズライール――それが、我が名だ》

ドラクロワが、凄まじい衝撃に凍りついた。ジークも、咄嗟に言葉を失っている。
にわかに、ドラクロワの両手に刻まれた聖印が、黄金色の輝きとなって浮かび上がり――ばらばらに飛散した。ドラクロワが呻いた。両手がずたずただった。
《もはや、その聖印は必要なかろう――賭けには、わたしが勝った》
「賭け……だと、なぜ、貴様……」
ドラクロワが、喘ぎながら、切れ切れに言った。
《聖クレマチスとの賭けだ――彼がわたしを滅ぼそうとしたとき、わたしと彼は激しくせめぎ合った――結果、彼は秘儀を完成させられず、私を聖櫃に封じ、秘儀の完成を後世に遺した――だがそのとき私は彼に一つの囁きを施したのだ――秘儀は完成した、と》
女が、凄惨な魔笑を浮かべて告げた。ジークとドラクロワが、ともに愕然となった。

《秘儀の完成こそ彼の願いだった——囁くのは、たやすかった——未完成なままの秘儀は、ただわたしを聖櫃から解放し、形の無いわたしに、やどるべき体を与えるだけだ——そうしてわたしは、彼の生まれ変わりが、未完成なままの秘儀を用いる日を待った——》

ドラクロワが、震えながら息をのんだ。ジークが瞠目し、

「生まれ変わりだと……」

《その男は聖クレマチスの転生者だ——お前や、この女も、彼の弟子達の転生者だ》

女が、ジークに、そろりと目を移し、唇を吊り上げた。

《前世で固い絆に結ばれていたお前達が、互いに争い合うさまは、実に心地よかった》

女が美貌を歪ませ、醜く笑った。その醜悪な笑みをシーラの顔が浮かべていることに、ジークもドラクロワも、大切なものが目の前で汚される恐るべき不快感と怒りにまみれた。

「おのれ……」

ドラクロワが呻いた。途端、女が哄笑を放った。ただの笑いではない。直接心に響き、精神を引き裂く、凄惨な笑いが迸ったのだ。ドラクロワとジークが、ともに呻いた。

《聖クレマチスの転生者よ——お前が命を否定したとき、わたしは勝利した——唯一、お前達にあって私に無いものが、命だ——お前は、自分も人も救われるすべを願っていた——全てを無に帰すことで全てが救われるという囁きを、お前はたやすく受け入れた》

女が哄笑した。その刃に浮かび上がる黄金色の聖印が、強く輝いた。
《わたしという君臨者を受け入れるがいい――人よ、弱きものよ》
その剣から、黄金色のきらめきが広がり、瞬く間に周囲を閉ざした。
まるで黄金の海の中に沈みゆくかのような光景に、ジークが鋭く目を走らせると――ふいに、ドラクロワの血まみれの右手が、ジークの籠手を失った左腕を、つかんだ。
「秘儀……、完成……させろ……」
「ドラクロワ!?」
「ジーク……、お前が……、理想……守った」
ドラクロワが喘いで言った。その顔色が白く、血の気を失った死相を浮かべている。
ジークもまた必死にうなずき、女の哄笑が響き渡る中、ドラクロワの言葉を聞いた。
「〈竜鍵〉から、〈竜人〉が……刻を逆巻かせ、甦り……〈竜界〉を、現す……」
ドラクロワが、喘いだ。それが最後の呼吸と知るような、懸命の動作だった。
「〈竜界〉の中、刻は止まり、永遠……人が、神に……だがアズライールは、滅ばず……ただ秘儀の、一部に……聖クレマチスの遺志……刻を、進ませろ……未来に……」
ジークの腕をつかむ手が、一瞬だけ、強く力をこめた。
「い、の、ち……」

掠れた声が、耳元で、かすかに、そう告げていた。腕の中で、ドラクロワの体が、急に重くなった。その手が、ジークの左腕から離れ、だらんと垂れた。ジークは総毛立つほどの悲しみに襲われた。きつく目を閉じて、命が消えた友の身を、強く抱きしめた。

7　王となる日

女が、ジークの背に向かって、哄笑を放った。
《望み通り、命から解き放たれたその魂――二度と生まれ変わらぬよう食らってやる》
ジークが、ゆっくりとドラクロワの体を横たえ、立ち上がった。
その身に凄烈な戦いの気配をみなぎらせ、鋭い眼差しで、女を振り返った。途端、爆発的な哄笑が女の全身から迸り、ジークの心身を引き裂くように響き渡った。
女が、ふわりと飛んだ。魔笑を浮かべ、聖印が明滅する黒い刃を、なぎ払ってきた。
銀剣で受けるや、鉄槌を体の中心に受けたような衝撃が走った。体が真後ろにすっ飛び、黄金のきらめきの中に叩きつけられた。哄笑が襲いかかり、囁きが流れ込んでくる。
《もうお前一人しかいない――生き延びても孤独が待っているだけだ――お前も魂を解放するがいい――お前達の魂は永遠に一つになる――わたしの中で永遠に》

ジークは、歯を食いしばって起上がり、言った。

「ドラクロワが……俺に、秘儀を完成させろと、言った。俺が、理想を守ったと……」

その手の中で、再び剣の聖印が形を変え、刃や柄へも及び、白熱の輝きを帯びてゆく。

「ドラクロワが、命と、言ってくれた……」

ジークは今や、剣を構えもせず、かつて死の雷を乗り越えたように、哄笑を受け入れている。哄笑が消え――女が凄まじい形相になった。泉の水面が黒く染まり、巨大な影となって女の足下で渦を巻く。それがにわかに巨大な人の輪郭と化し、傲然と立ち上がった。

「聖印をもたらした、君臨者……なぜ、お前は、理想を抱く俺達を、潰そうとした」

ジークが、その渦巻く影を見上げ、問うた。たちまち、それまでに層倍する哄笑が、渦巻く影から放たれたが、ジークはそれさえも受け入れ、静かに、言った。

「俺達の理想が……秘儀を完成させるからだ。聖クレマチスの遺志を越えて」

刹那、ジークの籠手を失った左腕に、眩い雷花が咲き乱れた。高々と掲げた腕の聖印が紅く輝き、稲妻を真紅に染め上げる。そして、握った紋章ごと、その左手を、

「ジーク・ヴァールハイトが招く！」

叫びざま地面に叩きつけた。紅い稲妻が噴き出し、颶風が轟くや、

「神魔サナトスよ！　九刻星の連なりの下、我が敵を塞せ！」

突如、黄金色の海が、激しい衝撃に揺れ、その一角が引き裂かれた。そこから、ぬうっと、あの、青い巨人が、空間をこじあけ、かっと口を開いて、這い込んできた。
「何十万もの魂――お前が欲しがっていたものだ！　存分に味わえ！」
青い巨人が、渦巻く影に迫り、その首をつかんだ。渦巻く影が、猛然と巨人の首をしめかえす。かと思うと、巨人が、拳を振り上げ、凄まじい勢いで相手に叩きつけた。紅蓮の稲妻が噴き出し、渦巻く影を引き裂いた。哄笑が消え――凄絶な咆吼が上がった。
女が、凄まじい形相で、水面を蹴った。ジークに向かって鳥のごとく宙を舞い、剣を掲げ、一挙に振り下ろしてきた。ジークもまた振り返り、かっと目を見開いて、
「命が――俺達の理想が、お前を葬る、唯一の手段だ！」
白銀の聖印が輝く刃を、烈閃させた。女にではない。女がなぎ払ってきた漆黒の剣そのものにであった。高らかな音色とともに、銀の輝きが、黒い刃身を真っ向から迅り抜けた。
女が、ジークの背後に、ふわりと降り立った。身を翻した途端、その漆黒の刃が、半ばから砕け、三つの聖印が砕け散り、宙に霧散した。転瞬、ジークが振り返り、
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
白熱する雷花の咲き乱れる左手を、握っていた紋章ごと、女の胸に叩きつけていた。
眩い稲妻が女の身を奔り、翡翠の目が見開かれた。蜂蜜色の髪がほどけて激しくなびき、

女にやどったものが、一瞬にしてジークの左手の力で引きずり出される。天地に悲鳴が迸り、女の足下から影が消え失せた。渦巻く影が、完全に女とのつながりを失い、にわかに絶望の咆吼を上げる中――女の手から、砕けた剣の柄が、落ちた。

くずおれる女の背を、ジークの腕が柔らかく抱きとめた。ふと、女がジークを見た。驚いたような目だった。そして輝くような微笑を浮かべ、二度と聞くはずの無い声で、

「ジーク……」

そう呼んだ。更に唇が動き、声も無く何かを告げた。すぐにその目蓋が閉じられ、幻のような一瞬が過ぎた。気づけば彼女は、もうずっと昔に息を止めた冷たい体をしている。

十字型の紋章が、ジークの左手で、かすかな音を立てて、揺れていた。

巨人が、怒りの声を上げて、かっと口を開き、渦巻く影の首に食らいついた。

渦巻く影が輪郭を失い――突如、無数の刃に変貌し、巨人の全身を貫いた。だが巨人は逆に渦巻く影を抱きすくめ、にわかにその身が膨れ、紅蓮の稲妻を噴き出し始めた。

刹那、巨人の身が凄まじい爆発を起こし、渦巻く影ごと粉々に吹き飛んだ。

咄嗟に、ジークが女の亡骸を抱いたまま身を伏せたが、たちまち爆発の奔流に呑み込まれ、目の前が真っ赤になり、そしてすぐに、暗転した。

ジークが再び目を開いたとき——そこは闇だった。右手に、剣が仄かな輝きを帯びているが、天地さえ定かではなく、自分が立っているのか横たわっているのかさえ分からない。

ふいに、闇に漂うジークのもとへ、アズライールの声が、届いてきた。

《わたしを滅ぼせはしない——わたしが滅べば、大陸は荒野に戻る——新たな王よ》

「王だと……」

《そうだ、王よ——そなたの望む世界を叶えるがいい——その力をお前に与えよう——その代価として、わたしは人々の魂をもらう》

突然、ジークは悟った。その声は、自分の中から、直接、聞こえてきているのであった。

「そうはいかない……お前は、俺が葬る」

途端に、魂を引き裂くかのような哄笑が、ジークの総身の内部で、響き渡った。

《わたしをやどしたまま聖櫃に入るか——聖クレマチスのように——だがわたしを永遠に封じ込めるものなど、どこにも存在しない——いずれ私は必ず、封印を破る》

「そう……永遠に。お前は自分では世界に影響を与えられない、形のない存在だ。だから人に力を与え、多くの収穫と破滅をもたらし、君臨する以外に存在しようがないんだ」

《そうだ、わたしは君臨する——わたしがいるから聖印も存在する——聖印とは、お前達の魂の力を解放する手段——その力を司るわたしをやどしたお前こそが——王だ》

「違う。全ての人が、王になる。そして、まつろわぬお前を、俺が救い――葬る」

刹那、その左腕に、紅蓮の稲妻が輝き、闇の中に天地を創り上げた。地面が、稲妻の輝きに赤く染まり、今はっきりと、地に立っていることを、明らかにしたのであった。

「俺達が王座を求めるとしたら、それは、王座を棄てるためだ――アズライール」

《わたしの力を棄てるか――お前が棄てたところで、わたしは他の者へやどるだけだ》

「棄てはしない……。お前もまた、エインセルと同じだ。どこへも行くことが出来ず、存在し続けるために、人という巨大な存在にすがりよってきた、まつろわぬ存在だ」

《人を巨大な存在というか――ちっぽけな人を――矮小な存在を》

「そんな囁きは、俺には効かない。人はお前よりも遥かに巨大だ。人は生まれ、死に、子孫を受け継がせ……遥かな時間を超えて続いてゆく。だからこそお前は俺達にすがりつき、そして君臨しようとしてきた」

《何を――何をする気だ、王よ――わたしのやどり主よ――わたしを――》

「〈刻の竜頭〉は、刻を逆巻かせ、そして止めた――お前という存在を封じる用意は、既に出来ている……。永遠に、お前を封じる用意が」

途端、アズライールが激しくもがくような思念が全身に溢れかえった。

「刻を進ませる。命が、魂を生み出し……そして、未来を作り出す。無数の魂を食らって

きたアズライールよ、今度は、俺達という無数に続く命に、お前が食われる番だ」
すっとジークが、紅蓮の雷花が咲き乱れる左手を、高々と掲げた。
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
烈声とともに、その手を握っていた紋章ごと自分の胸に叩きつけていた。
「大いなる意志よ！　世界の原理の下、霊神アズライールとなりて我が同胞にやどれ！」
ジークの全身を紅蓮の稲妻が迸り抜けるや、その身から、目に見えぬ意志そのものが闇に引きずり出され、巨大なものに呑み込まれるようにして、いずこともない彼方へ引き寄せられ、四散してゆく。天地に轟くような絶叫を上げてアズライールが必死に抵抗するが、今や秘儀に用いられた無数の死者の魂がアズライールという存在を完全にとらえていた。
「滅びえぬものよ、滅んでは生まれゆく無数の命にやどり、全人類を墓標としろ！」
叫びとともに闇が砕け散り、天地に勃然とまばゆい光が広がった。その光に、ジークは瞬く間に呑み込まれ、やがてその視界も、残りの五感も、完全に失うのだった。

ひどく長い、輝ける空白の彼方に、ジークは、暖かな風の香りを、嗅いでいた。
明るい陽射しに、目を細め、目の前の光景を眺めた。目の前を、自分が良く知る丘が、若草色の草原が風に揺れ、蒼く澄んだ空が見渡すばかりに広がっている。

これが、〈刻の竜頭〉の断片がもたらしたものであることは、すぐに分かった。刻を止め、永遠をもたらす〈竜界〉のかけらが、今いっとき自分にこの光景を見せているのだ。
ふと、すぐ近くの草原で、黒衣に身を包んだ女が、一人、佇んでいるのに気づいた。
女は、翡翠の目をこちらに向け、ほどいた長い蜂蜜色の髪を風になびかせ、黒衣をそよがせながら、微笑っている。ジークは眩しげに女を見つめ、歩み寄った。
「最後に伝えたかった……」
女が、言った。最後にジークの腕に倒れたとき、声もなく、唇だけで告げた言葉——
「貴方とドラクロワに出会えて……本当に良かった」
ジークは、哀しみも嘆きも、見果てぬ思いも全て、風に溶け、消えてゆくのを感じた。
さわさわと草が鳴っている。丘の遥か彼方で、蒼天を雲が流れた。
女を抱きしめ、永遠にこの場にいたいという痛切な思いもまた、やがて風に消えた。
「……俺もだ。俺達三人……出会えて、良かった。俺達三人だから、ここまで来れた」
ただ残った安らぎの気持ちを込めて、ジークは、告げていた。
「ありがとう……ジーク」
女が、本当に嬉しそうな微笑を浮かべた。そして、風になびく髪をかき上げ、そっと後ずさり、柔らかに踵を返し、ジークの前から、歩み去っていった。

ジークも追わず、ただじっと、女が去るのを見届けた。女の姿が遠ざかり、どれほど歩んでも辿り着けぬ場所へと向かう寸前、ふと、女がこちらを振り返った。

風のそよぐ音だけが聞こえる中、女の、そっと囁く声が、聞こえた。

「貴方に出会えて……本当に良かった」

そして、風の向こうから眩い光が広がり、女の姿を、消し去っていった。

やけに澄んだ水の音がした。ジークは、ふと、自分が横たわっていることに気づいた。

そこは、闇の中でもなければ、風渡る草原でもない、聖櫃の間である。

咄嗟に体が言うことをきかず、ジークは、目だけを動かして、辺りを見た。

聖櫃の破片が飛び散り、泉から水が溢れ、倒れた自分の体を濡らしている。生え広がっていた水晶もまた、きしきしと音を立てて砕け、まるで氷のように溶け消えていった。

右手に、銀剣の感触と、左手に、あの十字型の紋章の感触が、あった。

ジークは、横たわったまま、仄かに輝く天井を見つめ、誰にともなく、呟いた。

「俺一人……。俺だけが、生き残った……」

その事実が、溢れる泉の水とともに、冷たく心をひたしてゆき、再び、目を閉じかけたとき——かつん、と長靴が床を鳴らす音が、広間に響いていた。

ジークは、はっと目を見開いて、僅かに首を動かし、足音のした方を、向いた。
「命は続いてゆくと言ったのは、お前ではないか……ジーク」
そこに、男が佇み、言った。起き上がって、数歩も歩けば手が届く距離だ。
なのに、不思議なことに、ジークは急に、指一本、動かせなくなっていた。
「刻の断片が、僅かに残っていたらしい……私も、本来、既に存在していないのだろう」
まるで独り言のような口振りだった。ふと、ジークを見る目が、切とした光を帯びた。
「さきほど……シーラに会ったよ。少しだけ、刻がすれ違ったのだ。私は彼女に、罪を償うにはどうしたら良いかと訊いたよ。そうしたら、彼女は、人を許せと答えた。無限に人を許せば、いつか自分自身も許される日が来るだろうと……。彼女らしい答えだった。いつかまたこの世に生まれることがあるならば……そのように生きたいものだ」
ドラクロワが、口元に、小さな微笑を浮かべ、言った。
「そして再び……また何度でも、お前という友と、巡り会いたい」
時空の断片がかすかに重なり合っているだけで、これは幻のようなものだった。だがたとえ幻でも、それは何にも増して魂のやどる幻——真実の言葉としてジークの心に届いた。
俺もだ。俺も、何度でもお前と出会いたい。ジークは心の中で叫んだ。お前がどんな存在だって構わない。お前が王でも罪人でも何の違いもない。敵でも味方でもどちらでもい

い。お前はただお前であるだけで、俺の友だ。永遠の友だ。
果たしてその叫びが届いたものか、ドラクロワはまた微笑し、
「お前が、理想を生き延びさせ……私を救ってくれた……」
ふいに、その声が聞き取れなくなった。ジークはふいに体が動くことに気づいた。
「まだ、理想の実現は遠い……」
跳ね起きるジークに、その言葉が最後に届き——ドラクロワの姿が幽然と霞み消えた。
「俺が抱く！　お前の理想を俺が抱き続ける！　お前との絆をずっと……！」
ジークの叫びが広間にこだましたとき、ドラクロワの姿は、もう、どこにもなかった。

ジークは、ゆっくりと、立ち上がった。そして、広間の片隅で、男と女の遺体が、折り重なって倒れているのを見た。ずしりと、胸に重い悲しみが生じた。右手の剣も、左手の紋章も、ひどく重かった。そして、その重みを、しっかりと支えるものがあった。
それは希望であり理想であった。友愛であり信頼であった。それら心の四翼がある限り、たとえどれほど大きな悲しみも、受け入れることが出来る。そう思った。
そのときである。突然、回廊で足音と声が騒々しく響いた。それが女と、少女と、妖精のものであることが分かると、ジークは妙に憮然としたような照れたような顔になった。

「それに、あいつらが、いる……か」
ぽつっと呟いた途端、三人が、一斉に広間に飛び込んで来た。
「何よその傷っ、有様っ、戦いは命を捨てるためのものじゃないんでしょっ！」
「ジーク様！　ジーク様！　良かったジーク様！」
「いやぁ狼男も、またずい分こっぴどくやられたねぇ。でも良かったねぇ生きててぇ」
怒り、泣き、笑い、かしましいことこの上なく騒ぐのだった。間もなく、それよりは遥かにもの静かな、聖王の従弟である老人がやって来た。それへ、ジークが、声をかけた。
「ドラクロワ軍は、どうした」
「壊滅し……今、鎮圧に当たっております。貴方様と、貴方様の従士達のお陰で……」
老人は、うやうやしく言った。そして、広間の向こうで、重なり合うようにして息絶えている男と女を、痛ましげな目で見た。老人の目に、ふつふつと涙が浮かんでいた。
「聖王様も、王座の間で……。王の役目をようやく終えた、安らかな死に顔じゃった」
そして、つと、ジークを見つめ、静かにひざまずき、頭を垂れた。
「ジーク・ヴァールハイト……次代の聖王となるべき御方よ」
さすがのアーシアとノヴィアとアリスハートが、呆気に取られて黙り込む。
「それは違う、フォード卿」

老人が顔を上げた。三人が、急に真面目な顔になって、ジークを見る。
「みなが、王になった」
ジークが、言った。そのおもてに、老人、アーシア、ノヴィア、アリスハートが、揃って面食らうくらいに、はっきりとした微笑が、浮かんでいた。



Epilogue　聖史。追憶、そして旅立ち

それでも友と呼ぶだろう。
多くの罪を犯し、多くの人に、憎悪と哀しみをもたらしたとしても。

聖印暦七九五年一月　聖法庁への大規模な叛乱が鎮圧され、復興の準備が始まる。

その罪を赦すのではなく、その罪を共に背負いたい。
かつて喜び合い、哀しみを分かち合ったのと、全く同じように、背負いたい。

聖印暦七九五年二月　聖法庁において合議始まる。その中にジークの名が見られる。

「いやぁ、いったい、いつ終わるんだろうねぇ……」
妖精が呆れたように言った。砦に積み重なる死者を片端から葬る男は、憮然として、

「十日で終わらせる」
シャベルを片手に、断言した。途端に、女と少女が、がっくりとなって、
「アリスハート、余計なこと言ったら駄目だって。またジーク、無茶するんだから」
「あの、ジーク様……まだお怪我も治ってないのですから、あまりご無理をなさらずに」
「無理じゃない」
男が言って、シャベルを握る手に力を込めた。

聖印暦七九五年四月　聖王廃止の議題紛糾。前聖王の一族が、率先して合意する。
聖印暦七九五年五月　一部の者が、独自に聖王を立てんと武力行使するも、解散す。
黒印騎士団の名が囁かれ、武力を廃した合議が続けられる。

「アーシア。俺が手綱を握ろう」
馬上で男が言った。男の前後に座る女と少女、少女の肩に乗る妖精が、男を制止するが、
「大丈夫だ。無茶はしない」
男が手綱を握って間もなく、天地に、女と少女と妖精の悲鳴が、響き渡っていた。

聖印暦七九五年六月　アーシア・リンスレット、女性初の聖師士の位階を得る。
　　　　　　　　　　ノヴィア・エルヴァーシャ、聖道女の位階の昇格を称えられる。

「俺は用事がある。先に宿に行っていろ」
　聖都に着くなり、男が言った。女と少女が揃って何か言いかけたが、結局、男が、復旧の進む城壁の門をくぐり、丘へ登ってゆくのを、黙って見送った。
「狼男ったら、必ず一人で行くのよねぇ。まだ好きなのかなぁ……あの女のこと」
「単に挨拶に行くだけよ。ジークは死者の声を聞くけど、取り憑かれたりはしないの」
「ジーク様、自分にとってお姉さんみたいな人って言ってたもの。そんなんじゃないわ」
　女と少女が、口々に言って、妖精を圧倒させる。それから、二人して、丘の方を眺め、
「かなわないかも知れないけど、でも、かなわないなんて、絶対思わないから」
「私は今の立場で十分だけど……でも、貴女に近づいて……そして越えたい」
　言いつつも、なんとなく、彼女が、どこからかそんな自分達を見て微笑んでいるような気がしてしまうのだった。それを振り払うように、にわかに、女と少女が、
「頑張れ、私っ」

二人揃って、同時に自分に向かって激励を送るや、
「頑張りますっ」
同じく、自分で答えるのだ。その様子に、妖精が呆れたように、しみじみと呟いた。
「二人頑張るちゃんが、二人に増えたよ……」

聖印暦七九五年八月　賢老院に代わり、師族以外の者をふくめた師士議会が発足。

ジークは、丘に眠る女の墓標と、その隣の、無銘の墓標の前で、足を止めていた。
無銘であるのは、男へ怨みを抱く者が、墓を暴いてしまわぬための処置だ。いつか、その罪が、歴史の中でのみ語られるようになった時、改めてその碑銘が刻まれるだろう。
「聖法庁の連中は相変わらずだが……少しずつ、俺達が望んでいた方へ、進んでいる」
身を屈め、十字型の紋章を、女の新たな墓標に施された象嵌の孔に、はめ込んだ。
「形見として持っていたかったが……俺らしくないと、あいつらがうるさくてな」
〈銀の乙女〉の墓に必ずある、紋章を収める孔とはいえ、余りにぴたりとはまるのへ、
「……お前も、そうした方が良いと思ってるのか」
憮然として、言ったものだ。それから、ふと、かすかな、傍目にはそれと分からぬよう

な微笑が浮かんだ。つと立ち上がり、二つの墓標を前にして、そっと、囁いた。
「理想は、生き続ける……いつか、俺が剣を棄て、そして死んだ後も、ずっと……」

聖印暦七九五年九月　師士議会により、聖法庁の要職が刷新される。武力闘争に発展しかけるもこれを抑制。「聖王廃止」協議は続けられる。

「ねぇ、これからどうすんのぉ」
「黒印騎士団として任務を果たす」
淡々とジークが返す。今回の戦いで聖法庁から流出した多くの秘儀が、各地でいつ悪用されるとも分からなかった。また、全人類の中に飛散したアズライールが、復活するとしたら、それは「ただ一人の王」になろうとする者の下でだ。流出した秘儀が、その事態をいつ招くとも限らない。それを防ぐためにも、新たに訪れた、独立と調停の時代の使者として、各地を巡察し、理想と現実の天秤の動きを見守るのだ。そして——
「まだ、多くの戦死者が、打ち棄てられたままになっている」
それだけでも、ジークが旅に出る、十分な理由に、なるのだった。
「ふぅん。何だか大変そうねぇ。それで、アーシアとノヴィアは、どうすんのぉ」

「私は師士として、各地の巡察の義務があるの。私の旅に、この男がついてくるのよ」
「はいはい、アーシアも大変だね。ノヴィアは……？」
「私、ジーク様の従士だもの。位は昇っても関係ないわ」
「ま、そう言うと思ったけどね。あたしはノヴィアの友達だからね。一緒に行くよ」
アリスハートが言って、ふわりと、ノヴィアの肩に舞い降りた。
ジークを先頭に、アーシア、ノヴィア、アリスハートの一行は、淀みなく道を進み、やがて聖都ロタールを遠く離れ、新たな旅路の向こうへと歩を進ませていった。

聖印暦七九六年一月　聖王の座が撤去され、聖王制度は名実ともに廃止された……

「生まれ変わっても、またお互い、出会えると思うか？」
かつて男は、言った。自分が首を傾げる隣で、女が微笑んで、答えたものだった。
「もう、出会ってるわ。きっと、何度もね」
——と。

後書き

二千三年、元旦――
窓の外に舞う淡雪、右手に甘酒、徹夜明けの初日の出、しみじみと思いにふけり、この後書きを書く、今日も夜なべ。
初めましての方も、お久しぶりですの方も、こんにちは、冲方です。
今、こうして一足早く、長編が書き上がった一方、ゲーム制作は今頃が佳境・この世の地獄、はたまた桃源郷、大晦日に出社する者を決める血の出るようなジャンケン大会――
この文章が活字となり、本となり、世に届けられる頃には、きっと全てが「良き思ひ出」となっている事でありましょう。

さて、昨年夏、『ドラゴンマガジン』誌上に突如として登場した謎の墓掘り人ジーク・ヴァールハイト――皆様のご愛顧のお陰様を持ちまして、ここに長編刊行の運びと相成りました。ジーク、ノヴィア、アリスハートに代わり、心より感謝申し上げます。ヤツらの

真っ直ぐで一途なところが、僕は大好きです。

この長編では、新たにアーシアという元気な女の子が登場するとともに、ついに、ジークの過去が明かされます。ジークとシーラとドラクロワ――この三人の間に、果たして何があったのか――？　そしてジークとドラクロワの決着は？　書けども書けども、出るわ出るわ無尽の泉のごとく、彼らの過去と現在が織りなす物語に、気づけば当初の予定の二百四十頁を超え、三百八十頁を超える作品となりました。

増えてしまった頁に関し、一言も「削れ」と言わなかった担当のシバッチユイユイ氏、ならびに編集諸氏に、深く深く頭を下げつつ、感謝申し上げます。

思えば、この物語が最初に話し合われたのは、まさしく二千一年の暮れ。この一年間、本当に色々な事がありました。

『ドラゴンマガジン』誌上で連載を読まれた方は既にご存じの通り、この『カオス レギオン』は、連載真っ只中で、いきなり株式会社カプコンから同タイトルのゲーム制作が発表されるという、普通やらないことをやった、やってしまった、希有な物語であります。

メディアミックスが盛んな昨今とはいえ、これほど時限爆弾じみた事を仕掛けるとは、さすが富士見、さすがカプコン。はっきり言って、僕がびびりました。

しかも、これは、かつて無い形でのタイアップであると、言っていいでしょう。

なにしろ、ど真ん中に『カオス レギオン』という世界があり、後は、小説とゲーム、それぞれが、それぞれの特徴を生かし、登場人物や物語の枠組みを広げるという事を、猛烈フルスイングで成し遂げた、空前のタイトルなのであります。

とにかく、小説の執筆と、ゲームの制作が、全く同時期に行われたわけです。

小説には小説のアイディアがあり、ゲームにはゲームのスタイルがある――そして、その小説側のアイディアがゲームに反映され、ゲーム側のスタイルが小説に活きる。

まるで、一つの山岳を、全く違う方角から登るように――互いに独立していながら、踏みしめている世界は同じであるという、かつて無い体験を、僕はしました。

単純な、パラレルワールドと、解釈する事も出来るでしょう。けれどもそうと言うには、あまりに小説とゲームが、複雑に絡み合うことになったのです。

小説では出来ない描写が、ゲームでは物の見事に、迫力の画面・音楽となって現れる。

そしてゲームでは出来ない描写が、小説では文章の一行一行の中に叩き込まれてゆく。

また、小説が小説であるゆえに、ゲームとは違う解釈も生まれます。

それはゲームがゲームであるゆえに、小説とは違う解釈が生まれるのと同じ事でしょう。

同じ部分と、違う部分の、その二つの部分が、踏みしめた世界を大きく広げる、強い原

動力になるのだと、僕は、思っております。

小説もゲームも、それぞれ完成したものとして、皆さんの元に届きます。何倍も、楽しめるものとして。かつて『AKIRA』や『ナウシカ』が、漫画とアニメの二つの媒体にまたがってやった事に、近い事を、小説とゲームの二つの媒体でやろうとしたようにも思います。ノベライズ、ゲーム化、といった言葉が、気づけばどこかに置き忘れられるほど、それぞれが、それぞれの物語を生み出しました。それが『カオス レギオン』なのです。

一年前──全ては手探り状態で、一寸先は闇でした。その中で、僕にとって確かだったものは、ジークという男の抱くものであり、ノヴィアやアリスハートの心でありました。

彼らが、踏みしめて歩む道のりこそ、全てだったのです。

その道のりが、ここに、一つの決着点を迎えました。

むろん、ジーク達は、これからも歩み続けてゆくでしょう。

僕の、次の第一歩が、ジーク達とともにあることを願いつつ──

ここに、ひとまずの、完結であります。

最後になりましたが、ここで、謝辞を述べさせて頂きます。
激忙の中、素晴らしい絵で、ぐんぐん『カオス レギオン』の世界を広げて下さった、結賀さとるさん、本当にありがとうございました。ぜひこの次も……（どきどき）。
会うたびにヘアスタイルが変わる、常に心に新風を、担当のシバッチユイユイ氏こと柴田維さん、度重なる御助言ありがとうございます。いつか冲方に子孫が生まれたら「維」と名付けるつもりでいるほど感謝しております。
数々の天然ボケを発揮し、多くのアイディアの源となってくれた奥さん、ありがとう。
水面下で企画をがっしり支えて下さった郡司さん、本当にありがとうございました。
この企画に魂を賭ける、カプコンの小野プロデューサー、窪田プランナー、制作スタッフの皆様、そして広報の芥川さん、いつも楽しく刺激的な打ち合わせ、ありがとうございました。ゲームの仕上がりを、心から楽しみにしております。
そして誰よりも、連載中のジーク達を愛してくれた、皆様へ――

心から、ありがとうございます。
これからも、どうぞ宜しく、お願い申し上げます。

冲方 丁　二千三年　元日

富士見ファンタジア文庫

カオス レギオン

聖戦魔軍篇

平成15年2月25日　初版発行
平成15年6月30日　四版発行

著者——冲方（うぶかた）　丁（とう）

発行者——小川　洋

発行所——富士見書房
〒102-8144
東京都千代田区富士見1-12-14
電話　営業　03(3238)8531
　　　編集　03(3238)8585
振替　00170-5-86044

印刷所——旭印刷
製本所——本間製本
落丁乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに明記してあります
2003 Fujimishobo, Printed in Japan
ISBN4-8291-1495-9 C0193